

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県鳥取市気高町

下坂本清合遺跡Ⅰ

2016

鳥取県教育委員会

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県鳥取市気高町

下坂本清合遺跡Ⅰ

2016

鳥取県教育委員会

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXI

『下坂本清合遺跡Ⅰ』 正誤表

	誤	正
写真図版一覧	図版35 2. 36・163流路B-B'ライン北半土層断面	図版35 2. 36・163流路B-B'ライン北半部土層断面
写真図版一覧	図版38 3. 掘立柱建物3（180ピット）出土遺物	図版38 3. 掘立柱建物3（140ピット）出土遺物
写真図版一覧	図版40 1. 4 耕作出土遺物	図版40 1. 4 耕作痕出土遺物
11 頁 26 行目	因幡国府気多郡	因幡国気多郡
51 頁 6・7 行目	Po5 白磁皿で、	Po5 は白磁碗で、
52 頁 2 行目	2 9 擬似畦畔	2 9 擬似畦畔
85 頁 15 行目	18流路でも3点出土しており（W37）、	18流路でも4点出土しており（W16～19）、
86 頁 34行目	土師器坏（Po38）と同様の	土師器坏（Po28）と同様の
図版 40	1. 4 耕作出土遺物	1. 4 耕作痕出土遺物



1 調査区遠景（南から）



2 調査区遠景（西から）



序

山陰自動車道は鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする、延長 380 キロメートルの自動車専用道路であり、国土交通省により整備が進められているところです。

鳥取県内の事業区間である「鳥取西道路」は、鳥取市本高から同市青谷町青谷を結ぶ延長 19.3 キロメートルの区間であり、その改築事業に伴う事前の発掘調査を平成 20 年度から当教育委員会が実施しています。平成 21 年度からは、財団法人鳥取県教育文化財団（平成 25 年度から公益財団法人に移行）に現地での発掘調査や出土遺物等の整理作業、報告書作成を委託して調査を進めているところです。

今回報告する下坂本清合遺跡の調査では、これまで調査の手があまり入っていなかった鳥取市気高町の河内川流域において、平安時代から鎌倉時代、江戸時代を中心とした人々の営みの様子を確認することができました。土器や木製品など、当時の人々の生活を生き生きと伝える遺物が多くみつかっており、この地域の歴史を語る上で欠かすことのできない貴重な発見となりました。

さらに発掘調査の成果は現地説明会を開催するなど、地元を中心として多くの方々に紹介してまいりました。このような取り組みは、先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することとして、現在に生きる私たちの重要な責務と考えております。

本書をまとめるに当たり、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所並びに地元関係者の方々には、一方ならぬ御助言、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成 28 年 3 月

鳥取県教育委員会

教育長 山本仁志

例 言

- 1 本書は、一般国道9号（鳥取西道路）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から委託を受け、平成25（2013）年度に実施した^{しもさかもとせいこう}下坂本清合遺跡2区の発掘調査報告書である。
- 2 下坂本清合遺跡2区の所在地は、鳥取市気高町下坂本字黒田1535-1、1535-2、1536、1537である。平成25年度の調査面積は8,230㎡で、現地での発掘調査は、平成25年5月に着手し、平成25年12月に終了した。調査記録と出土遺物の整理作業、報告書の編集は、現地調査終了後引き続き平成27年12月まで行った。
- 3 本調査の略号は「下坂本清合遺跡13」とし、成果品などはこの名称でまとめている。また、出土品などの注記には「下サカ13」の略号を使用した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、公益財団法人鳥取県教育文化財団（以下、財団）に委託し、財団調査室 第二工区担当の大野哲二、家塚英詞、長戸満男、横山 聖（平成25年6月から）が担当した。
- 5 発掘調査に際し、国際文化財（株）・サンイン技術コンサルタント（株）共同企業体の支援を受けた。
- 6 遺跡での掘削作業、記録作成と測量作業は、財団の指示のもと、国際文化財（株）・サンイン技術コンサルタント（株）共同企業体が行った。
- 7 調査で作成した図面の再編集、出土遺物の整理作業や記録作成は、財団の大野と整理作業員が行った。
- 8 遺物の写真撮影は、財団の家塚が行った。
- 9 本書の執筆は、第5章を除き、財団の大野、家塚、横山、片岡啓介（平成26年度担当）が分担し、編集は大野が行った。
- 10 自然科学分析のうち、大型植物遺体同定は（株）古環境研究所に、漆器の樹種同定及び漆膜分析は（株）パレオ・ラボにそれぞれ委託し、漆器の保存処理は（株）吉田生物研究所に委託した。自然科学分析の結果については、論旨に影響しない範囲で成果報告書の語句等を財団で加筆修正し、第5章に掲載した。
- 11 木簡及び墨書土器の赤外線写真撮影及び積読については、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の渡辺晃宏、馬場基、山本崇、桑田訓也、山本祥隆、藤井裕之、中村一郎の諸氏に、獣骨の鑑定については鳥取大学農学部共同獣医学科の保坂善真准教授（平成25年度当時）に御指導、御協力いただいた。
- 12 本調査に係る記録類や出土遺物は、全て台帳等に登録して収納しており、随時検索できる状態で鳥取県埋蔵文化財センターに保管している。
- 13 現地調査、報告書の作成にあたって、下記の方々・機関から、様々な御指導、御助言、御支援を賜った。記して感謝申し上げます（敬称略）。

大平 茂、高橋照彦、村田泰輔

国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、公益財団法人大阪府文化財センター、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、鳥取市教育委員会、公益財団法人鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター、瑞穂地区自治会、下坂本地区公民館

凡 例

- 1 本書に記載された測量成果については、世界測地系に基づいている。図中のX・Y座標は国土座標第V系によるものであり、m単位で表記している。また、平面図の方位は座標北を示している。
- 2 標高は海拔標高で示した。
- 3 本報告書に使用した地図は、国土地理院発行（1/25,000 地形図）を縮小、加筆したものである。また第2図に使用した地図は、測量法第43条に基づく複製承認を得て鳥取市都市計画図を複製し、縮小、加筆したものである（承認番号平成27年6月15日付け鳥取市指令受都第63号）。
- 4 本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色帖』に基づき、土の色相、明度及び彩度を判定したものである。地層観察用畦の観察面はシートで被覆するなどして、湿った状態を保つように留意した。
- 5 遺構平面図や断面図の縮尺は統一していないが、挿図ごとにスケールバーと縮尺を示している。
- 6 本書に掲載した遺物には、「掲載番号」として通し番号を付けた。本文に示した遺物番号や、挿図と図版に記載した遺物番号については、特に注記のない限り「掲載番号」である。また、現地調査時には遺物の取り上げ単位ごとに「取上番号」を付しており、「掲載番号」と「取上番号」との対照関係については、観察表（第9表）に記載している。
- 7 遺物実測図の縮尺については、陶器、土器、木器、石器を1/4とし、磁器を1/3、銅銭を1/1、木簡を1/2で示した。また、遺物実測図の断面は、須恵器を黒塗り、それ以外のものは白抜きで示した。
- 8 本書第6章第1節をはじめ掲載遺物の観察所見の記載については、以下の文献を主な参考としている。

清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社

牧本哲雄 1999 「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店

巽淳一郎他 1983 『伯耆国庁跡発掘調査概報（第5・6次）』倉吉市教育委員会

岡田裕之・八峠 興 2014 「鳥取における古代から中世前期の土器編年－須恵器と回転台土師器を基に－」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』鳥取県埋蔵文化財センター

目 次

序・例言・凡例	
第1章 調査の経緯と経過	(大野) 1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査体制	4
第2章 遺跡の位置と環境	(横山、片岡) 7
第1節 位置と地理的環境	7
第2節 歴史的環境	9
第3章 調査の方法	(大野) 13
第1節 調査地の地区割	13
第2節 発掘調査と記録の方法	14
第4章 調査の成果	16
第1節 調査の概要	(大野) 16
第2節 調査区内の土層堆積状況	(家塚) 16
第3節 第1遺構面の遺構	(大野、家塚) 48
第4節 第2遺構面の調査	(大野、家塚) 64
第5節 第3遺構面の調査	(大野、家塚) 86
第6節 3面下河川性堆積	(大野) 108
第7節 遺構外出土遺物	(大野) 115
第5章 自然科学分析の結果	128
第1節 下坂本清合遺跡出土漆器の樹種同定	((株)パレオ・ラボ) 128
第2節 下坂本清合遺跡出土漆器の漆膜分析	((株)パレオ・ラボ) 132
第3節 下坂本清合遺跡における自然科学分析(大型植物遺体分析)	((株)古環境研究所) 146
第6章 総括	(大野) 151
第1節 鳥取県東部における平安時代中期から中世前期の土師器について	151
第2節 下坂本遺跡2区の調査における成果と課題	161
遺物観察表・写真図版・報告書抄録	

挿図一覧

- 第1図 鳥取西道路線図と調査地の関係
- 第2図 調査地の地区割り
- 第3図 遺跡の位置
- 第4図 遺跡周辺地形図 (S=1/50,000)
- 第5図 周辺遺跡分布 (S=1/50,000)
- 第6図 調査区割り模式図
- 第7図 下坂本清合遺跡2区グリッド配置図
- 第8図 調査区内トレンチ及び側溝配置図
- 第9図 東西トレンチ土層断面図 (1)
- 第10図 東西トレンチ土層断面図 (2)
- 第11図 東西トレンチ土層註記 (1)
- 第12図 東西トレンチ土層註記 (2)
- 第13図 東西トレンチ土層註記 (3)
- 第14図 北壁土層断面図 (1)
- 第15図 北壁土層断面図 (2)
- 第16図 北壁土層註記 (1)
- 第17図 北壁土層註記 (2)
- 第18図 北壁土層註記 (3)
- 第19図 南壁土層断面図 (1)
- 第20図 南壁土層断面図 (2)
- 第21図 南壁土層註記 (1)
- 第22図 南壁土層註記 (2)
- 第23図 南壁土層註記 (3)
- 第24図 西壁土層断面図 (1)
- 第25図 西壁土層断面図 (2)
- 第26図 西壁土層註記 (1)
- 第27図 西壁土層註記 (2)
- 第28図 第1遺構面全体図
- 第29図 2耕作痕、29擬似畦畔 平面図
- 第30図 2耕作痕、29擬似畦畔 断面図
- 第31図 2耕作痕 出土遺物
- 第32図 169溝 平面・断面図
- 第33図 18流路 遺物出土状況見通し図
- 第34図 18流路 平面図
- 第35図 18・36・163流路 土層断面図
- 第36図 18流路 出土遺物 (1)
- 第37図 18流路 出土遺物 (2)
- 第38図 18流路 出土遺物 (3)
- 第39図 18流路 出土遺物 (4)
- 第40図 第2遺構面全体図
- 第41図 掘立柱建物1・2及び周辺ピット 平面、断面図
- 第42図 掘立柱建物1・2及び周辺ピット 個別平面、断面図
- 第43図 掘立柱建物1～3 出土遺物
- 第44図 掘立柱建物3・4ピット 個別平面、断面図
- 第45図 掘立柱建物3・4 平面、断面図
- 第46図 掘立柱建物5 平面、断面図
- 第47図 掘立柱建物5ピット 個別平面、断面図
- 第48図 掘立柱建物5 (105ピット) 出土遺物
- 第49図 掘立柱建物5周辺ピット 平面、断面図
- 第50図 柵列1及び周辺ピット 平面、断面図
- 第51図 柵列1ピット 個別平面、断面図及び81ピット出土遺物
- 第52図 柵列1周辺ピット 平面、断面図 (1)
- 第53図 柵列1周辺ピット 平面、断面図 (2)
- 第54図 90土坑 平面、断面図
- 第55図 36流路 平面図
- 第56図 36流路 遺物出土状況見通し図
- 第57図 104集石 平面、断面図
- 第58図 36・163流路 土層断面図
- 第59図 36流路 出土遺物 (1)
- 第60図 36流路 出土遺物 (2)
- 第61図 第3遺構面全体図
- 第62図 掘立柱建物6及び主要ピット 平面、断面図及び出土遺物
- 第63図 4耕作痕 平面、断面図
- 第64図 4耕作痕 出土遺物
- 第65図 1炭化物範囲 平面、断面図
- 第66図 1炭化物範囲 出土遺物
- 第67図 3・175炭化物範囲 平面、断面図
- 第68図 133落ち込み 平面、断面図
- 第69図 133落ち込み 出土遺物
- 第70図 131・136・147・152・162土坑 平面、断面図
- 第71図 147・152土坑 出土遺物
- 第72図 164・170土坑 平面、断面図
- 第73図 165溝 平面、断面図
- 第74図 135流路 平面図
- 第75図 135流路 出土遺物
- 第76図 135流路 断面図
- 第77図 163流路 平面図
- 第78図 163流路 遺物出土状況見通し図
- 第79図 163流路 出土遺物 (1)
- 第80図 163流路 出土遺物 (2)
- 第81図 163流路 出土遺物 (3)
- 第82図 163流路 出土遺物 (4)
- 第83図 163流路 出土遺物 (5)
- 第84図 調査区内自然流路の変遷
- 第85図 河川性堆積内 出土遺物 (1)
- 第86図 河川性堆積内 出土遺物 (2)
- 第87図 河川性堆積内 出土遺物 (3)
- 第88図 調査終了後地形測量及び下層確認用トレンチ位置図
- 第89図 第1・2遺構面検出中 出土遺物
- 第90図 第3遺構面検出中 出土遺物

- 第 91 図 表土及び攪乱土 出土遺物
- 第 92 図 下坂本清合遺跡出土漆器の光学顕微鏡写真
- 第 93 図 漆器塗膜の赤外分光スペクトル (1)
- 第 94 図 漆器塗膜の赤外分光スペクトル (2)
- 第 95 図 漆製品の塗膜構造(a)と反射電子像(b)(1)
- 第 96 図 漆製品の塗膜構造(a)と反射電子像(b)(2)
- 第 97 図 漆製品の塗膜構造(a)と反射電子像(b)(3)
- 第 98 図 漆製品の塗膜構造(a)と反射電子像(b)(4)
- 第 99 図 漆製品の塗膜構造(a)と反射電子像(b)(5)
- 第 100 図 漆製品の塗膜構造(a)と反射電子像(b)(6)
- 第 101 図 漆製品の塗膜構造(a)と反射電子像(b)(7)

- 第 102 図 下坂本清合遺跡の種実
- 第 103 図 鳥取県東部における 10～13 世紀の土師器
坏の変遷
- 第 104 図 鳥取県東部における 10～13 世紀の土師器
皿の変遷
- 第 105 図 鳥取県東部における 10～13 世紀の甕・鍋
の変遷
- 第 106 図 下坂本清合遺跡 2 区 遺構内出土土師器
坏・皿 時期別対応図
- 第 107 図 下坂本清合遺跡 2 区の土地利用変遷

挿表一覧

- 第 1 表 18 流路 出土主要獣骨一覧
- 第 2 表 掘立柱建物 1・2 及び周辺ピット一覧
- 第 3 表 掘立柱建物 3・4 ピット一覧
- 第 4 表 掘立柱建物 5 及び周辺ピット一覧
- 第 5 表 柵列 1 及び周辺ピット一覧
- 第 6 表 36 流路 出土主要獣骨一覧
- 第 7 表 掘立柱建物 6 及び周辺ピット一覧
- 第 8 表 163 流路 出土主要獣骨一覧
- 第 9 表-1 土器観察表 (1)
- 第 9 表-2 土器観察表 (2)
- 第 9 表-3 土器観察表 (3)
- 第 9 表-4 土器観察表 (4)
- 第 9 表-5 土器観察表 (5)
- 第 9 表-6 土器観察表 (6)
- 第 9 表-7 土器観察表 (7)
- 第 9 表-8 漆器観察表

- 第 9 表-9 石器観察表
- 第 9 表-10 金属器観察表
- 第 9 表-11 木器観察表
- 第 10 表 下坂本清合遺跡出土漆器の器種別樹種同定
結果
- 第 11 表 下坂本清合遺跡出土漆器の樹種同定結果一覧
- 第 12 表 塗膜分析対象一覧
- 第 13 表 生漆の赤外吸収位置とその強度
- 第 14 表 赤色塗膜層の X 線分析結果 (mass%)
- 第 15 表 塗膜分析結果
- 第 16 表 下坂本清合遺跡における炭化種実同定結果
- 第 17 表 下坂本清合遺跡イネ炭化果実計測値
- 第 18 表 下坂本清合遺跡イネの粒形と大きさ
- 第 19 表 鳥取県東部における 10 世紀～13 世紀の土
器編年比較

巻頭図版一覧

- 1 調査区遠景 (南から)
- 2 調査区遠景 (西から)
- 3 18・36 流路出土漆器

文中写真一覧

- 写真 1 現地説明会 (遺構説明)
- 写真 2 現地説明会 (遺物説明)
- 写真 3 かく乱流路検出状況 (南西から)
- 写真 4 板組暗渠
- 写真 5 圃場整備以前水路
- 写真 6 作業風景 (北側溝掘削)
- 写真 7 作業風景 (南側溝掘削)
- 写真 8 作業風景 (高所作業車による撮影)
- 写真 9 作業風景 (西側溝掘削)
- 写真 10 作業風景 (ラジコンヘリによる撮影)
- 写真 11 作業風景 (2 耕作痕検出)
- 写真 12 作業風景 (36 流路漆器写真撮影)
- 写真 13 作業風景 (36 流路掘削)

写真図版一覧

- 図版 1 1. 調査前航空写真撮影 (南から)
2. 第3遺構面完掘状況航空写真撮影(南から)
- 図版 2 1. 東西トレンチ土層断面 (1)
(Y=-23,630 ~ -23,660 間 南西から)
2. 東西トレンチ土層断面 (2)
(Y=-23,610 ~ -23,630 間 南西から)
- 図版 3 1. 東西トレンチ土層断面 (3)
(Y=-23,590 ~ -23,600 間 南西から)
2. 東西トレンチ土層断面 (4)
(Y=-23,570 ~ -23,590 間 南西から)
- 図版 4 1. 東西トレンチ土層断面 (5)
(Y=-23,570 ~ -23,550 間 南西から)
2. 北壁土層断面 (1)
(Y=-23,620 ~ -23,650 間 南西から)
- 図版 5 1. 北壁土層断面 (2)
(Y=-23,600 ~ -23,620 間 南西から)
2. 北壁土層断面 (3)
(Y=-23,580 ~ -23,600 間 南西から)
- 図版 6 1. 北壁土層断面 (4)
(Y=-23,560 ~ -23,580 間 南西から)
2. 北壁土層断面 (5)
(Y=-23,540 ~ -23,560 間 南西から)
- 図版 7 1. 南壁土層断面 (1)
(Y=-23,640 ~ -23,655 間 北西から)
2. 南壁土層断面 (2)
(Y=-23,620 ~ -23,640 間 北西から)
- 図版 8 1. 南壁土層断面 (3)
(Y=-23,600 ~ -23,620 間 北西から)
2. 南壁土層断面 (4)
(Y=-23,580 ~ -23,600 間 北西から)
- 図版 9 1. 南壁土層断面 (5)
(Y=-23,560 ~ -23,580 間 北西から)
2. 西壁土層断面 (1)
(X=-55,300 ~ -55,322 間 南から)
- 図版 10 1. 西壁土層断面 (2)
(X=-55,280 ~ -55,300 間 南から)
2. 西壁土層断面 (3)
(X=-55,255 ~ -55,280 間 南から)
- 図版 11 1. 調査区南西部 表土除去後遺構検出状況
(29 畦畔 西から)
2. 調査区南東部 表土除去後遺構検出状況
(18 流路 南東から)
- 図版 12 1. 調査区北西部 2 耕作痕完掘状況 (西
から)
2. 調査区南西部 2 耕作痕、29 畦畔完掘
状況 (西から)
- 図版 13 1. 西壁 29 疑似畦畔土層断面 (東から)
2. 169 溝完掘状況 (南西から)
3. 169 溝土層断面 (南西から)
- 図版 14 1. 18 流路、36 流路完掘状況 (南西から)
2. 18 流路、36 流路、163 流路土層断面 (東
から)
- 図版 15 1. 18 流路 土器 (Po16 ~ 18) 出土状況 (北
西から)
2. 18 流路 漆器 (W 1) 出土状況 (北から)
3. 18 流路 漆器 (W 2) 出土状況 (南から)
4. 18 流路 漆器 (W 5) 出土状況 (南から)
5. 18 流路 木製品 (W17) 出土状況 (南西
から)
6. 18 流路 木製品 (W22) 出土状況 (北西
から)
7. 18 流路 木製品 (W23) 出土状況 (北東
から)
8. 18 流路 木製品 (W24) 出土状況 (西か
ら)
- 図版 16 1. 18 流路 獣骨 (B 1) 出土状況 (北から)
2. 18 流路 獣骨 (B 2) 出土状況 (北西から)
3. 18 流路 獣骨 (B 3) 出土状況 (南から)
4. 18 流路 獣骨 (B 5) 出土状況 (南西から)
5. 18 流路 獣骨 (B 6) 出土状況 (北東から)
6. 18 流路 獣骨 (B 7) 出土状況 (南西から)
7. 18 流路 獣骨 (B 8) 出土状況 (北東から)
8. 18 流路 獣骨 (B 9) 出土状況 (南から)
- 図版 17 1. 掘立柱建物 1・2 (上空から)
2. 23 ピット遺物出土状況 (北東から)
3. 23 ピット土層断面 (南東から)
4. 27 ピット土層断面 (北東から)
5. 28 ピット根石検出状況 (南東から)
- 図版 18 1. 掘立柱建物 3・4 (上空から)
2. 掘立柱建物 5 (北西から)

- 図版 19 1. 140 ピット土層断面 (東から)
2. 140 ピット遺物出土状況 (東から)
3. 93 ピット土層断面 (南東から)
4. 105 ピット土層断面 (南東から)
5. 99 ピット土層断面 (南から)
6. 111 ピット土層断面 (南東から)
7. 113 ピット土層断面 (南から)
8. 115 ピット土層断面 (南から)
- 図版 20 1. 柵列 1 (上空から)
2. 47 ピット土層断面 (南から)
3. 117 ピット土層断面 (南東から)
4. 73 ピット土層断面 (南から)
5. 85 ピット土層断面 (東から)
- 図版 21 1. 90 土坑完掘状況 (北から)
2. 90 土坑土層断面 (北東から)
3. 第 2 遺構面掘立柱建物 (上空から)
- 図版 22 1. 36 流路完掘状況 (南西から)
2. 36 流路漆器 (W33) 出土状況 (北から)
3. 36 流路漆器 (W28) 出土状況 (西から)
4. 36 流路漆器 (W35) 出土状況 (北から)
5. 36 流路漆器 (W32) 出土状況 (北西から)
- 図版 23 1. 36 流路漆器 (W36) 出土状況 (北西から)
2. 36 流路舟形 (W40) 出土状況 (南東から)
3. 36 流路人形 (W38) 出土状況 (南東から)
4. 36 流路獣骨 (B14) 出土状況 (西から)
5. 104 集石検出状況 (北から)
- 図版 24 1. 掘立柱建物 6 及び周辺ピット (上空から)
2. 141 ピット土層断面 (南から)
3. 142 ピット土層断面 (北東から)
- 図版 25 1. 4 耕作痕全体 (上空から)
2. 4 耕作痕土層断面 A-A' ライン (東から)
3. 4 耕作痕土層断面 C-C' ライン (南東から)
- 図版 26 1. 1 炭化物範囲 (南東から)
2. 1 炭化物範囲完掘状況 (南東から)
3. 1 炭化物範囲土層断面 A-A' ライン
(南西から)
- 図版 27 1. 3 炭化物範囲 (南東から)
2. 3 炭化物範囲近景 (南東から)
3. 3 炭化物範囲土層断面 (南東から)
- 図版 28 1. 175 炭化物範囲検出状況 (南西から)
2. 175 炭化物範囲完掘状況 (南西から)
3. 175 炭化物範囲土層断面 (南西から)
- 図版 29 1. 133 落ち込み検出状況 (北東から)
2. 133 落ち込み土層断面 (南東から)
3. 133 落ち込み完掘状況 (北東から)
- 図版 30 1. 131 土坑完掘状況 (南西から)
2. 131 土坑炭化物検出状況 (南西から)
3. 131 土坑土層断面南東半 (南西から)
- 図版 31 1. 136 土坑完掘状況 (南西から)
2. 147 土坑完掘状況 (南から)
3. 147 土坑土層断面 (南から)
- 図版 32 1. 162・164・152 土坑、165 溝完掘状況 (上空から)
2. 152 土坑土層断面 (南西から)
- 図版 33 1. 162 土坑土層断面 (北から)
2. 164 土坑土層断面 (南から)
3. 165 溝土層断面 (南西から)
- 図版 34 1. 170 土坑完掘状況 (南東から)
2. 170 土坑土層断面 (南東から)
3. 135 流路完掘状況 (南西から)
- 図版 35 1. 163 流路完掘状況 (南西から)
2. 36・163 流路 B-B' ライン北半土層断面
(西から)
- 図版 36 1. 163 流路 (W43) 桶底出土状況 (南から)
2. 163 流路下駄 (W44) 出土状況
3. 163 流路弓 (W46) 出土状況 (南東から)
4. 163 流路獣骨 (B15) 出土状況 (東から)
5. 163 流路人形 (W48) 出土状況 (北西から)
6. 163 流路土師器鍋 (Po95) 出土状況 (南
西から)
- 図版 37 1. 2 耕作痕出土遺物
2. 18 流路出土遺物 (1)
3. 18 流路出土遺物 (2)
4. 18 流路出土遺物 (3)
- 図版 38 1. 18 流路出土遺物 (4)
2. 掘立柱建物 1 (23 ピット) 出土遺物
3. 掘立柱建物 3 (180 ピット) 出土遺物
4. 柵列 1 周辺ピット群 (81 ピット) 出土
遺物
- 図版 39 1. 36 流路出土遺物
- 図版 40 1. 4 耕作出土遺物
2. 1 炭化物範囲出土遺物
3. 133 落ち込み出土遺物
4. 147 土坑出土遺物
5. 135 流路出土遺物
- 図版 41 1. 163 流路出土遺物 (1)

- 2. 163 流路出土遺物 (2)
- 図版 42 1. 163 流路出土遺物 (3)
- 図版 43 1. 163 流路出土遺物 (4)
- 図版 44 1. 163 流路出土遺物 (5)
- 図版 45 1. 遺構内出土遺物
- 2. 163・178 流路河床出土遺物
- 図版 46 1. 178 流路、180 流路河床出土遺物
- 2. 179・180 流路出土遺物
- 図版 47 1. 181 流路、178～181 流路河床出土遺物
- 図版 48 1. 河川性堆積層内出土墨書土器
- 2. 河川性堆積内出土遺物 (1)
- 図版 49 1. 河川性堆積内出土遺物 (2)
- 図版 50 1. 河川性堆積内出土遺物 (3)
- 図版 51 1. 河川性堆積内出土遺物 (4)
- 2. 第1・2 遺構面検出中出土遺物
- 図版 52 1. 第3 遺構面検出中出土遺物
- 図版 53 1. 遺構外出土遺物 (1)
- 2. 遺構外出土遺物 (2)
- 図版 54 1. 遺構外出土遺物 (3)
- 2. 土玉・土錘
- 3. 砥石・硯
- 図版 55 1. 18 流路出土漆器 (1)
- 図版 56 1. 18 流路出土漆器 (2)

- 図版 57 1. 18 流路出土漆器 (3)
- 図版 58 1. 18 流路出土漆器 (4)
- 図版 59 1. 18 流路出土漆器 (5)
- 図版 60 1. 18 流路出土漆器 (6)
- 図版 61 1. 36 流路出土漆器 (1)
- 図版 62 1. 36 流路出土漆器 (2)
- 図版 63 1. 36 流路出土漆器 (3)
- 図版 64 1. 36 流路出土漆器 (4)
- 図版 65 1. 163 流路出土漆器
- 2. 河川性堆積内出土遺物 (緑釉陶器)
- 図版 66 1. 18 流路出土木製品 (1)
- 図版 67 1. 18 流路出土木製品 (2)
- 2. 掘立柱建物5 (105 ピット) 出土木製品
- 図版 67 3. 36 流路出土木製品 (1)
- 図版 68 1. 36 流路出土木製品 (2)
- 2. 163 流路出土木製品 (1)
- 図版 69 1. 163 流路出土木製品 (2)
- 2. 表土及び攪乱出土木製品
- 図版 70 1. 履物
- 図版 71 1. 羽子板状木製品
- 図版 72 1. 底板
- 2. 斎串
- 3. 部材

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

一般国道9号（鳥取西道路）改築工事に伴い、鳥取市気高町の宝木谷と瑞穂谷によって形成された谷底平野に所在する下坂本清合遺跡2区の発掘調査を平成25年度に実施した。

山陰地方では、観光、物流などの地域活性化をめざした幹線道路ネットワークの形成、交通渋滞の解消及び緩和、災害時の緊急輸送路確保等を目的とし、中国横断自動車道姫路鳥取線や山陰自動車道等の国土開発幹線道路の整備が進められている。鳥取市本高と鳥取市青谷町青谷を結ぶ全長19.3kmの鳥取西道路もその一環として、山陰自動車道の一部となる事業である。

鳥取西道路の計画地内には多くの遺跡が存在していることから、道路建設に先立って、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所（以下、国土交通省）、鳥取県教育委員会、鳥取市教育委員会により埋蔵文化財の取扱いについて協議がもたれ、まず、計画地内に存在する遺跡の状況を把握する必要性が確認された。これを受け、平成17年度からは、計画地内の踏査による分布調査や鳥取市教育委員会による試掘調査が逐次行われ調査結果に基づき道路事業と埋蔵文化財保護との調整が図られている。

本遺跡が所在する下坂本地区の道路計画地内においては、事前の踏査等により土器の散布が確認されており、平成23年度には、鳥取市教育委員会によって計画地内にある遺跡の範囲、内容を確認するための試掘調査が行われた。

その結果、中世の遺構や遺物が確認され、事業地内に遺跡が存在することが明らかとなった^(註1)。この取扱いについて再度、国土交通省、鳥取県教育委員会、鳥取市教育委員会で協議した結果、道路



第1図 鳥取西道路線図と調査地の関係

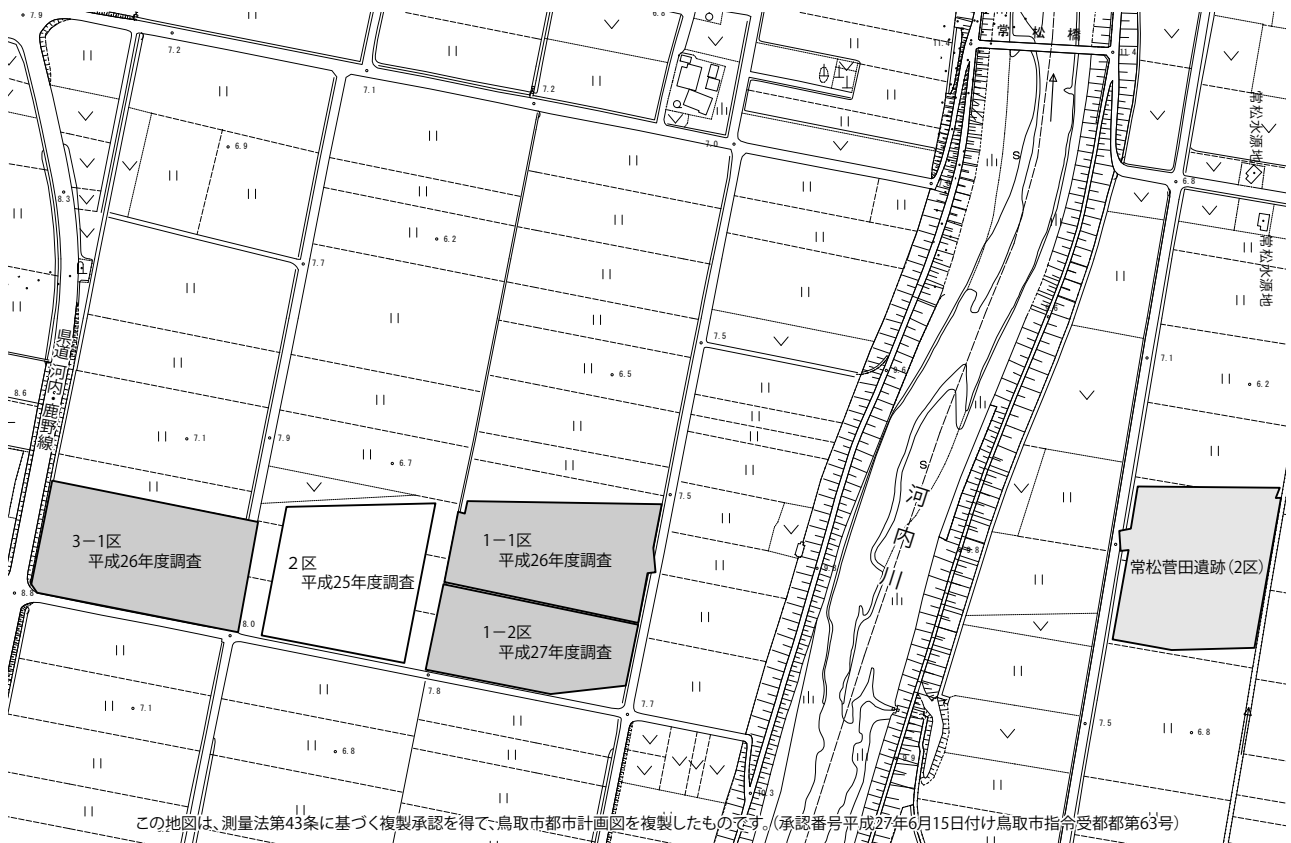
盛土部分となる約 24,000㎡を対象として記録保存のための発掘調査を実施することになり、鳥取県教育委員会が国土交通省の委託を受けて、平成 25 年度に調査対象のうち 8,230㎡（2 区）、平成 26 年度に 10,550㎡（1 - 1 区 5,350㎡、3 - 1 区 5,200㎡）、平成 27 年度に 4,837㎡（1 - 2 区）の発掘調査を実施した。発掘調査にあたっては、現場での発掘作業、出土遺物の整理作業、および発掘調査報告書の作成を公益財団法人鳥取県教育文化財団（以下、財団）に再委託した。また、財団が発掘調査を行う中で、現地での発掘作業、調査記録作業等については、国際文化財株式会社・サンイン技術コンサルタント株式会社共同企業体に埋蔵文化財発掘調査支援業務を委託した。

第2節 調査の経過

下坂本清合遺跡 2 区の調査は、平成 25 年 4 月 15 日に基準点測量及び水準点測量に着手し、4 月 19 日に調査前全景写真撮影、4 月 30 日から重機による表土掘削作業を開始し、5 月 7 日から人力による包含層掘削作業に着手した。

人力掘削にあたっては、まず調査区四周（東壁・南壁・西壁・北壁）と調査区を縦断、横断する公共座標 X = -55,300 軸（東西トレンチ）及び Y = -23,600 軸（南北トレンチ）に沿う形でトレンチを設定し（第 8 図）これを先行して掘り下げ、土層断面によって調査区内の堆積状況の把握に努めた。調査区内は、ほぼ全域にわたって昭和 57 年から平成 5 年にかけて実施されたほ場整備によって大規模な削平を受けており、旧地形の高低によってはほ場整備前の耕作土が残存する箇所と地形が削平されてしまった箇所が混在する状況であった。

これらの造成土、耕作土等を重機により除去したところで、調査区西半部で耕作関連遺構（2 耕作



第2図 調査地の地区割り

痕、29畦畔)を、東半部で自然流路跡(18流路:東半部自然流路第3段階)を検出した。出土遺物から、どちらも中世以降の所産と判断し、これらを第1遺構面とした。同じく東半部において検出した、掘立柱建物5棟及び柵列1を含むピット群については、第1遺構面とほぼ同一面での検出であったが、29畦畔下より検出されたピット(27ピット)の存在や、ピット内より出土した遺物から、これらは2耕作痕や29畦畔より古い時期の遺構群であると判断し、第2遺構面に伴う遺構と認識して調査を行った。こうしたことから全体写真は、第1・2遺構面を一括して8月29日に撮影した。

続く第3遺構面においては、調査区西半部分に広がる木炭等を多量に含む層(北壁39~42層:第14・15図、南壁85層:第20図)の下面で検出した4耕作痕や掘立柱建物6を含むピット群などとともに、東半部で自然流路第1段階(163流路)を調査し、10月18日に全体写真撮影を実施した。

調査区東半分で検出した三段階の変遷をみせる自然流路(18・36・163流路)では、流路内から40点以上の漆器(椀・小皿)をはじめとして土師器・下駄などの生活用具、人形・舟形などの木製祭祀具が出土し、河川北岸で検出した畠や水田、掘立柱建物などと合せて当時の集落の具体相を明らかにするものとなった。こうした時期に当たる10月19日に現地説明会を行い、84名の参加者を得た。

第3遺構面より下層については、あらかじめトレンチの土層観察により幾筋もの自然流路が段階的に埋没した河川性堆積層であることを確認していたが、同層中より弥生土器や須恵器が出土していたことから、163流路西岸にあたる調査区西半部について重機と人力を併用しつつ、同層中の遺構等人為的な痕跡の有無を確認するための調査を10月21日より行った。その結果、4本の自然流路(176~179流路)を検出し、埋土中より弥生時代~古代の土器が出土したものの、人為的な遺構は確認されなかった。出土した土器も磨滅したものが多く、自然流路の上流から流されてきたものと考えられることから、調査区内は、該期には幾度も流れを変えつつ河川が流れており、人が積極的に関与した土地ではなかったものと判断した。そのため当報告書ではこの面を遺構面として捉えず、「3面下河川性堆積」と呼称している。

その後重機による掘削を調査区全体について進め、全面砂礫層が露出した状態まで掘削し、3面下層に遺構が存在しないことを確認した。最後に、163流路の最も深い部分に当たる西側部分(第88図)で更に約1.5m掘り下げ、下層の状況を確認したところ、標高4.1mまで河川性堆積である砂礫層が続いており、3面下河川性堆積の状況がより下層にまで続いていることを確認した。11月30日には最終的な掘削後状況の全面写真撮影を行い、12月4日に測量を終え、現地での作業を終了した。



写真1 現地説明会（遺構説明）



写真2 現地説明会（遺物説明）

【註】

- 1) 加川 崇ほか2013『平成二十四(2012)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市教育委員会

第3節 調査体制

発掘調査および報告書作成は以下の体制で行った。

平成25年度

○鳥取県教育委員会

教育長 横濱 純一
鳥取県教育委員会事務局文化財課
課長 上山 憲二
歴史遺産室長 北浦 弘人
課長補佐兼主幹 土山 和俊
歴史遺産室 文化財主事
岡野 雅則

○公益財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 井上 善弘
事務局長 石本 富正
事務職員 岡田美津子
植木 智子（兼調査室事務職員）

調査室

室長 松井 潔（鳥取県教育委員会から派遣）
次長兼総務企画課長
中川 眞一
総務係長 川村 悟（鳥取県教育委員会から派遣）
主事 福島 亘（鳥取県教育委員会から派遣）
事務職員 福田早由里
調査企画設計係長 玉木 秀幸（鳥取県教育委員会から派遣）
文化財主事 横山 聖（6月30日まで：鳥取県教育委員会から派遣）
片岡 啓介（6月1日から：鳥取県教育委員会から派遣）

第二工区担当

主幹 野口 良也（鳥取県教育委員会から派遣）
（下坂本地区）
副主幹 大野 哲二（鳥取県教育委員会から派遣）
文化財主事 家塚 英詞（鳥取県教育委員会から派遣）
長戸 満男（財団法人京都市埋蔵文化財研究所から出向）
横山 聖（7月1日から：鳥取県教育委員会から派遣）

○発掘調査支援業者

国際文化財株式会社・サンイン技術コンサルタント株式会社共同企業体
現場代理人 飯田 英樹

副現場代理人	中村真起夫
支援調査員	安村 健
	東園千輝男
	関 美男
調査補助員	西野 順二（8月16日まで）
	江藤 敦（8月19日から）
	辻本 彩
	諸熊 和彦
	大橋 忠昭
	塚口 成之
	荒木 健二

平成26年度（報告書作成業務）

○鳥取県教育委員会

教育長	山本 仁志
鳥取県教育委員会事務局文化財課	
課長	木本 美喜
歴史遺産室長	松井 潔
課長補佐兼主幹	土山 和俊
歴史遺産室 文化財主事兼係長	
	野口 良也
歴史遺産室 文化財主事	
	岡野 雅則

○公益財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長	井上 善弘（6月30日まで）
	野村 勇二（7月1日から）
事務局長	石本 富正
副主幹	岡田美津子
調査室	
室長	北浦 弘人（鳥取県教育委員会から派遣）
次長兼総務企画課長	
	中川 眞一（4月30日まで）
（兼総務企画課長）	民木 一美（5月1日から）
総務係長	川村 悟（鳥取県教育委員会から派遣）
主事	福島 亘（鳥取県教育委員会から派遣）
事務職員	田中絵里子（兼事務局事務職員）
調査企画設計係長	玉木 秀幸（鳥取県教育委員会から派遣）
文化財主事	浅井 達也（鳥取県教育委員会から派遣）

第二工区担当

主 幹	西川 徹 (鳥取県教育委員会から派遣)
副 主 幹	大野 哲二 (鳥取県教育委員会から派遣)
文化財主事	家塚 英詞 (鳥取県教育委員会から派遣)
	横山 聖 (5月30日まで：鳥取県教育委員会から派遣)
	片岡 啓介 (鳥取県教育委員会から派遣)
	谷岡 能史 (6月1日から：鳥取県教育委員会から派遣)

平成 27 年度 (報告書作成業務)

○鳥取県教育委員会

教育長	山本 仁志
鳥取県教育委員会事務局文化財課	
課 長	木本 美喜
歴史遺産室長	松井 潔
課長補佐	土山 和俊
歴史遺産室 文化財主事兼係長	野口 良也
歴史遺産室 文化財主事	北 浩明

○公益財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長	野村 勇二
事務局長	石本 富正 (6月30日まで)
	畑中 弘子 (7月1日から)
副 主 幹	岡田美津子
調査室	
室 長	北浦 弘人 (鳥取県教育委員会から派遣)
次 長	民木 一美
総務係長	川村 悟 (鳥取県教育委員会から派遣)
主 事	西村あかね (鳥取県教育委員会から派遣)
事務職員	田中絵里子 (兼事務局事務職員)
調査企画設計係長	玉木 秀幸 (鳥取県教育委員会から派遣)
文化財主事	浅井 達也 (鳥取県教育委員会から派遣)
副 主 幹	大野 哲二 (鳥取県教育委員会から派遣)
文化財主事	家塚 英詞 (鳥取県教育委員会から派遣)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境

下坂本清合遺跡は、鳥取県鳥取市気高町下坂本字黒田に所在する。鳥取県は中国地方北東部に位置し、東は兵庫県、西は島根県、南は岡山県、南西部は広島県に接している。東西約100km、南北約40kmと東西に長く、総面積は約3,500km²を測る（第3図）。平成27年2月末現在、約57万2千人の人々が暮らしているが、都道府県人口においては全国最小である。旧国名では東部を因幡国、中西部を伯耆国と呼称していた。鳥取市は県内東部にある県庁所在地で、平成27年2月末現在の人口は約19万3千人であり、山陰地方の中核都市として機能している。また鳥取砂丘に代表されるように、自然豊かで風光明媚な観光都市でもある。東は岩美郡、南は八頭郡、西は東伯郡といった郡部と接しており、北は日本海に臨む。なお、兵庫県および岡山県とは直接県境を接している。

下坂本清合遺跡が所在する鳥取市気高町は市域西部に位置し、西は因幡国最西端の鳥取市青谷町、南は中国山地の支脈である鷲峰山（標高約920.6m）を擁する鳥取市鹿野町に接する。平成16年11月の鳥取市との合併以前は、青谷町、鹿野町とともに気高郡に属し、気高町と称していた。

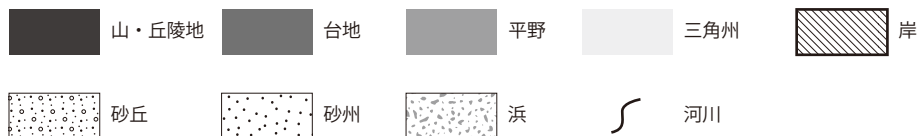
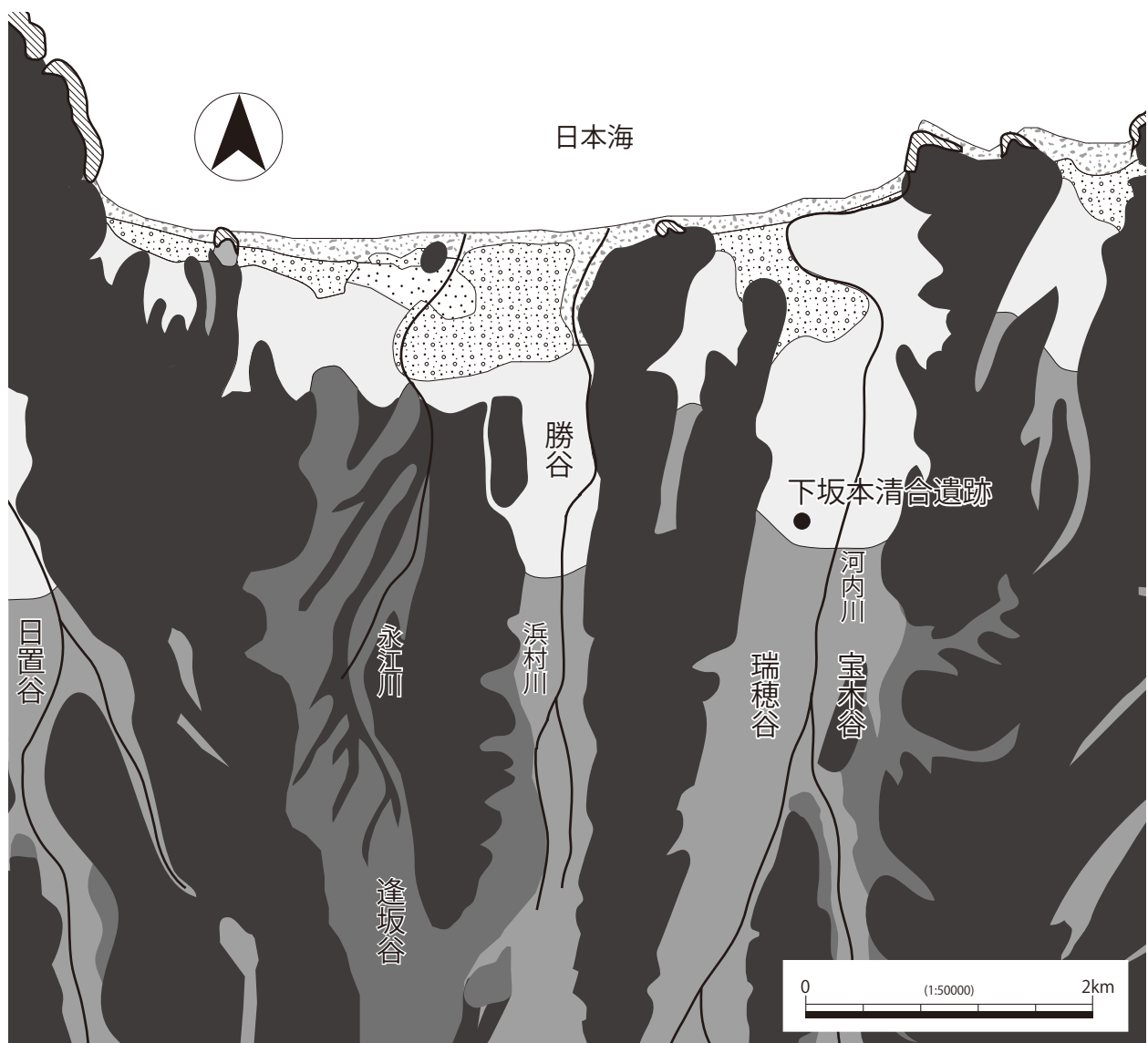
気高町周辺には、中国山地から派生する丘陵によって西から逢坂谷、勝谷、宝木・瑞穂谷が形成されている（第4図）。本遺跡が所在するのは、このうち宝木・瑞穂谷である。それらの谷は鷲峰山に水源を発す河内川により、古くから浸食されてきた。河内川は第四紀沖積世中葉までは逢坂谷を流下していたが、時代とともに流れを勝谷へと変え、現在は宝木谷・瑞穂谷を通り、日本海へ流入している。逢坂谷と勝谷には往時の河岸段丘が残っており、逢坂谷の段丘は低地との比高差が約2～10mで、その上に大山ローム（伯耆大山火山灰）を載せ、飯里集落以北まで発達している。一方、勝谷の段丘



第3図 遺跡の位置

は沖積低地面との比高差が約1～3mで、逢坂谷の低地面と同位にあり、この谷の中ほどで特に顕著に残っている。なお、宝木谷と瑞穂谷においては、段丘の発達は見られない。

気高町内の沖積平野を北流する河川の河口付近に発達した海岸砂丘の一つである宝木砂丘は、河内川の河口に形成されたものである。本来河内川の河口付近は、後氷期まで海進の影響で溺れ谷であったが、その後、河内川が運搬した土砂が日本海の沿岸流と卓越風によって河川が湾付近に堆積し、宝木砂丘が形成された。その内陸側、河川の堆積作用が弱く、日光池などの潟湖が形成されており、当地の水分環境を特色付けている。本遺跡は、河内川西岸の谷底平野に立地しており、現在遺跡周辺には水田等耕作地が広がっている。なお、河内川を挟んだ東側の谷底平野には、本遺跡と同様に鳥取西道路の改築工事で発掘調査が実施され、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が検出された常松菅田遺跡が所在する。



第4図 遺跡周辺地形図 (S=1/50,000)

第2節 歴史的環境

【旧石器・縄文時代】

日本海に臨む鳥取市気高町の西部に位置する八束水砂丘地で、黒曜石およびチャート製有舌尖頭器が出土しており、気高郡域では最古の遺物と目されている。

縄文時代に入ると、鳥取市鹿野町の柄杓目遺跡（141、以下遺跡後ろの番号はいずれも第5図内番号に対応）で早期の押型文土器が、また鳥取市青谷町の蔵内上長谷第2遺跡（17）で前期の縄文土器が出土している。

中期の出土遺物としては、鳥取市気高町の浜村砂丘にある短尾遺跡（52）において出土した当該期の土器などが挙げられる。

後期においては、鳥取市気高町山宮茶山畑遺跡（36）において、当該期の土器が確認されている。晩期では、鳥取市気高町の山宮笹尾遺跡（35）で落とし穴や炉跡などの遺構を検出しており、また遺物として、当該期の土器片、黒曜石やサヌカイト製石鏃、蛇紋岩製首飾りなどが出土している。鳥取市青谷町大坪イカウ松遺跡（7）、大坪大縄手遺跡（8）においても土器などが出土している。

そのほか、鳥取市鹿野町の寺内廃寺（72）で石鏃、石斧、磨石が確認されているほか、出土地等の詳細は不明であるが、浜村砂丘では石鏃や石匙などが、また高江、奥沢見で打製石器、下光元、宝木高浜で磨製石器、殿で凹石が出土している。以上のように、遺構の検出例は少ないものの、遺物出土例は表面採集を中心として海岸部や逢坂谷、宝木谷、瑞穂谷など各地で報告されている。

【弥生時代】

弥生時代中期から後期にかけては、逢坂谷を北流する永江川中流域に分布する遺跡から、竪穴建物跡や貯蔵穴、方形周溝墓、土壙墓などの遺構が検出されている。具体的には、会下・郡家遺跡（27）において五角形プランをもつ竪穴建物跡や10数棟の竪穴建物跡が検出され、これに南接する陸逢遺跡（28）や南に所在する上原遺跡（41）から木棺墓が検出されている。三王尻遺跡（33）では竪穴建物跡と土坑を検出している。

鳥取市青谷町の東部、日置谷に分布する遺跡でも、竪穴建物跡や貯蔵穴などの集落跡が検出されている。青谷町大口第1・第2・第3遺跡（11）では、後期から古墳時代にかけての竪穴建物跡や土坑墓、また多数の貯蔵穴、墳墓などが検出されている。カマヤ遺跡（14）では、後期から奈良時代にかけての竪穴建物跡や古墳などが検出されている。

遺物の出土例としては、鳥取市気高町の短尾遺跡で、土器や石斧、石錘、石庖丁、石鏃、磨製石剣などの石器、奥沢見においても土器や石斧、石錘、石鏃、さらに宝木高浜や宿で土器、下光元で石庖丁が報告されている。

鳥取市青谷町には、弥生人の脳をはじめとして、人骨や多種多様な獣骨、また多量の木製品などの有機質遺物を良好な保存状態で確認したことで知られる国指定史跡の青谷上寺地遺跡が所在する。遺跡は勝部谷と日置谷の合流部に位置し、弥生時代当時は潟湖のほとりの微高地上に立地する。眼前の日本海を通じて中国や朝鮮半島、または日本各地との交流を示唆する遺物が多数出土していることから、日本海沿岸地域における交易拠点の一つとして機能していたことがうかがわれる。遺跡は古墳時代前期以降集落としては衰退し、水田域化していく。



- 1 下坂本清合遺跡 2 阿古山古墳群 3 阿古山22号墳 4 青谷横木遺跡 5 養郷小丸山城跡 6 養郷古墳群 7 大坪イカウ松遺跡 8 大坪大縄手遺跡
 9 大坪岸ノ上遺跡 10 大口古墳群 11 大口第1~3遺跡 12 早牛山城跡 13 早牛古墳群 14 カマヤ遺跡 15 山根式田城跡 16 蔵内古墳群
 17 蔵内上長谷第2遺跡 18 河原高座城跡 19 八束水古墳群 20 八束水7号墳 21 姫路城跡 22 姫路所在遺跡 23 下原古墳群 24 会下城跡
 25 会下古墳群 26 会下遺跡 27 会下・郡家遺跡 28 睦逢遺跡 29 睦逢古墳群 30 睦逢11号墳 31 郡家遺跡 32 郡家古墳群 33 三王尻遺跡
 34 山宮古墳群(東支群) 35 山宮笹尾遺跡 36 山宮茶山畑遺跡 37 篠尾柵跡 38 山宮古墳群(西支群) 39 山宮阿弥陀森遺跡 40 上原西遺跡
 41 上原遺跡 42 上原南遺跡 43 上原古墳群 44 飯山城跡 45 飯里古墳群 46 殿古墳群 47 殿15号墳 48 殿25号墳 49 風情城跡 50 殿遺跡
 51 北短尾遺跡 52 短尾遺跡 53 八幡第2遺跡 54 谷奥所在遺跡 55 谷奥古墳群 56 谷奥1号墳 57 勝見古墳群 58 勝見15号墳 59 勝見17号墳
 60 勝山城跡 61 乙亥正屋敷廻遺跡 62 重山古墳群 63 藤山城跡 64 岡木古墳群 65 木梨遺跡 66 観音山城跡 67 西中園古墳群 68 西中園8号墳
 69 中園遺跡 70 宮片宮谷遺跡 71 寺内古墳群 72 寺内廃寺 73 亀井茲矩之墓 74 田仲古墳群 75 寺内京南遺跡 76 馬池古墳群
 77 今市馬池所在遺物出土地1 78 今市馬池所在遺物出土地2 79 今市所在中世墓 80 譲伝寺庭園跡 81 下石城跡 82 西浜遺跡 83 浜村城跡
 84 浜村古墳群 85 梶掛遺跡 86 梶掛古墳群 87 乙亥正大角遺跡 88 日光長谷遺跡 89 岡井谷所在中世墓 90 宮方遺跡 91 神越谷古墳群
 92 今市地才山所在城跡 93 櫛ヶ脇城跡 94 日光古墳群 95 矢口陣屋跡 96 西山古墳群 97 西山1号墳 98 下坂本古墳群 99 下坂本遺跡
 100 下坂本岩谷遺跡 101 下坂本城跡 102 二本木古墳群 103 二本木7号墳 104 重高古墳群 105 重高4号墳 106 重高5号墳 107 漆谷横穴
 108 土居古墳群 109 丸山城跡 110 宿古墳群 111 酒津古墳群 112 湊山砦跡 113 水尻横穴墓群 114 不明(城跡) 115 宝木古墳群
 116 宝木1号墳 117 宝木16号墳 118 富古城跡 119 常松第1遺跡 120 常松1号墳 121 常松菅田遺跡 122 常松大谷遺跡 123 堤知光城跡
 124 下光元古墳群 125 上光古墳群 126 上光10号墳 127 夏ヶ谷遺跡 128 下光元第1遺跡 129 下光元第2遺跡 130 大杉城跡 131 狭間遺跡
 132 弥平衛山城跡 133 上光第1遺跡 134 戸島遺跡 135 馬場遺跡 136 上垣城跡 137 灰谷遺跡 138 駒ヶ坪城跡 139 宿第1遺跡 140 宿第2遺跡
 141 柄杓目遺跡 142 鹿野城跡

第5図 周辺遺跡分布 (S=1/50,000)

【古墳時代】

気高町とその周辺地域で450基を超える古墳が確認されており、丘陵裾部や尾根上に多数分布している。

前期の古墳として、鳥取市気高町では二本木7号墳(103)が調査され、長方形を呈する方墳を検出している。溝からは、古墳時代前期の土師器が出土している。この古墳は方形周溝墓の可能性も指摘されており、鳥取県内の古墳の発生を考える上で貴重である。西方の鳥取市青谷町においては、大口古墳群(10)等が挙げられる。

中期になると古墳の数は増加し、勝見谷や宝木谷の丘陵上を中心に築かれるようになる。この時期を代表する古墳として、鳥取市気高町勝見15号墳(58)、17号墳(59)があり、前者では「妻波型」と呼ばれる鳥取県中部で多用された特徴的なV字状石枕を伴う箱式石棺が検出されている。

大型の古墳としては、鳥取市気高町内最大の前方後方墳である、西山1号墳(97)がまず挙げられる。下坂本集落の西側尾根部を利用して作られ、全長47mを測る。そのほか八東水7号墳(20)、重高4号墳(105)、5号墳(106)、宝木1号墳(116)、16号墳(117)、上光10号墳(126)などの前方後円墳が挙げられる。

後期には、主に平野部に面した丘陵の尾根部に群集墳が形成される。鳥取市気高町の逢坂谷山裾部に形成された古墳群は、横穴式石室を有する古墳群であり、そのうちの谷奥1号墳(56)では、須恵器や銅鏡、金環、直刀の装具、銅鏡、馬鐸など多彩な副葬品が出土している。

逢坂谷を北流する永江川の東側丘陵上に分布する山宮古墳群(34)の山宮14号墳においては、横穴式石室の袖石に線刻壁画が確認されている。鳥取市西部にあたる気高町域および青谷町域には、この他にも線刻壁画を有する古墳として、阿古山古墳群(2)の阿古山22号墳(県指定史跡)や睦逢古墳群(29)の睦逢11号墳(市指定史跡)、殿古墳群(46)の殿15号墳(市指定史跡)、25号墳(市指定史跡)が知られている。このほか、重高古墳群に含まれる漆谷横穴(107)においても、綾杉文の線刻が確認されている。

【古代】

律令体制下の気高町域は因幡国府気多郡に属する。『和名抄』によれば、気多郡は大原、坂本、口沼、勝見、大坂、日置、勝部の7郷で構成され、郡内の日本海沿岸部を官道である「山陰道」が通過する流通の要所であった。

平成25年度から3年間にわたり調査が行われた鳥取市青谷町の青谷横木遺跡(4)では、山陰道の可能性が指摘される道路遺構が検出された。出土遺物として、「因幡国気多郡日置郷」という地名が初めて確認された木簡や、出挙の返納に関する木簡、また人形、馬形、斎串など大量の木製祭祀具が出土した。これらの様相から、律令体制下の地方の行政や祭祀に関わる重要拠点であったことが推察されている。遺跡近傍からは、大坪イカウ松遺跡で人形、馬形、斎串などの大量の木製祭祀具が、またカマヤ遺跡からは土馬が出土している。

気高町逢坂谷中央の段丘上に位置する上原遺跡(41)では、大型の掘立柱建物跡群が検出されている。規格性の高い建物配列から官衙的性格が窺われ、気多郡衙に比定されている。出土遺物としては、「郡」、「大領」などと墨書された須恵器のほか、転用硯、鞆羽口、多くの瓦類などがある。瓦については、気多郡の郡寺と推定される鳥取市鹿野町寺内廃寺出土例と同範関係にあることが知られている。

上原遺跡の北方に位置する山宮阿弥陀森遺跡（39）では、約1町半四方の溝状遺構が検出され、その付近の土坑から「郡家一」、「中」、「智」などの墨書土器が出土している。また鍛冶工房跡も検出され、上原西遺跡（40）で確認された高床倉庫跡なども併せ、逢坂谷には、郡衙関連と目される遺跡が集中しているといえる。

この他、宝木谷に所在する戸島遺跡（134）から掘立柱建物や柵列などが検出されており、複郭をもつ掘立柱建物の存在や時期が逢坂谷の郡衙関連の遺跡群と併行することなどから、この遺跡の性格について「気高郡成立以前の評制施行段階の評衙政庁」、「気高郡衙の出先機関」、「気高郡坂本郷の郷衙政庁」の3つの想定がなされている。また東に隣接する馬場遺跡（135）からは、奈良時代から平安時代にかけての大型掘立柱建物群や総柱礎石建物などが検出され、「馬」と書かれた墨書土器が出土していることなどから、戸島遺跡に関連した公的機関であると考えられている。戸島遺跡の北方に位置する狭間遺跡（131）についても、掘立柱建物や井戸などが検出されており、戸島遺跡との関連性が指摘されている。

【中世・近世】

鎌倉時代の発掘調査例としては、気高町の会下・郡家遺跡で掘立柱建物跡が検出され、中国産・朝鮮産の陶磁器類などが出土している。室町時代に至り、観応の擾乱（1350～52）後、山名時氏が因幡を平定し、1363年に因幡守護となり、その後200年間にわたって山名氏が因幡国を治めることになる。

戦国時代には、尼子氏・毛利氏との勢力争いや羽柴秀吉の因幡進出などを背景として、気高町域の要所に20を超える山城が築かれることとなる。寛政7年（1795年）に著された『因幡誌』には、宝木谷に所在する富吉城（118）や下坂本城（101）、勝谷に所在する勝山城（60）などの山城の姿が描かれているが、今日においても堀切や曲輪などの城郭遺構が良好に残されている。その他、中世・近世の遺構としては、気高町上原南遺跡や馬場遺跡において掘立柱建物跡が、また北短尾遺跡（51）で塚などが発掘調査によって検出されている。

天正10（1582）年、亀井茲矩が鹿野城（142）に入城、気多郡を領し、新田開発のため池の干拓・用水路の開削などを行っている。元和元年（1615）年に亀井氏が石見津和野藩に移封されたのち、気高郡域は32万石鳥取藩の一部となり、幕末に至る。

【主要参考文献】

気高町教育委員会 1977『気高町誌』鳥取県気高郡気高町

気高町教育委員会 1995『気高町内城館跡調査報告書』

鳥取県埋蔵文化財センター 1986『鳥取県の古墳』

鳥取県埋蔵文化財センター 1987『弥生時代の鳥取県』鳥取県教育文化財団

鳥取県埋蔵文化財センター 1988『鳥取県埋蔵文化財シリーズ3 旧石器・縄文時代の鳥取県』

鳥取県埋蔵文化財センター 1989『鳥取県埋蔵文化財シリーズ4 歴史時代の鳥取県』鳥取県教育文化財団

内藤正中ほか 1997『鳥取県の歴史』山川出版社

山中敏文ほか 2003『上原遺跡群発掘調査報告書－古代因幡国気多郡衙想定地－』気高町教育委員会

第3章 調査の方法

第1節 調査地の地区割

調査区割の方法と名称

当財団では、調査の標準化をはかるため、遺跡、遺構の位置表示、遺物の取り上げ等に使用する調査区割り（グリッド）を以下の通りに定め、調査を行っている。

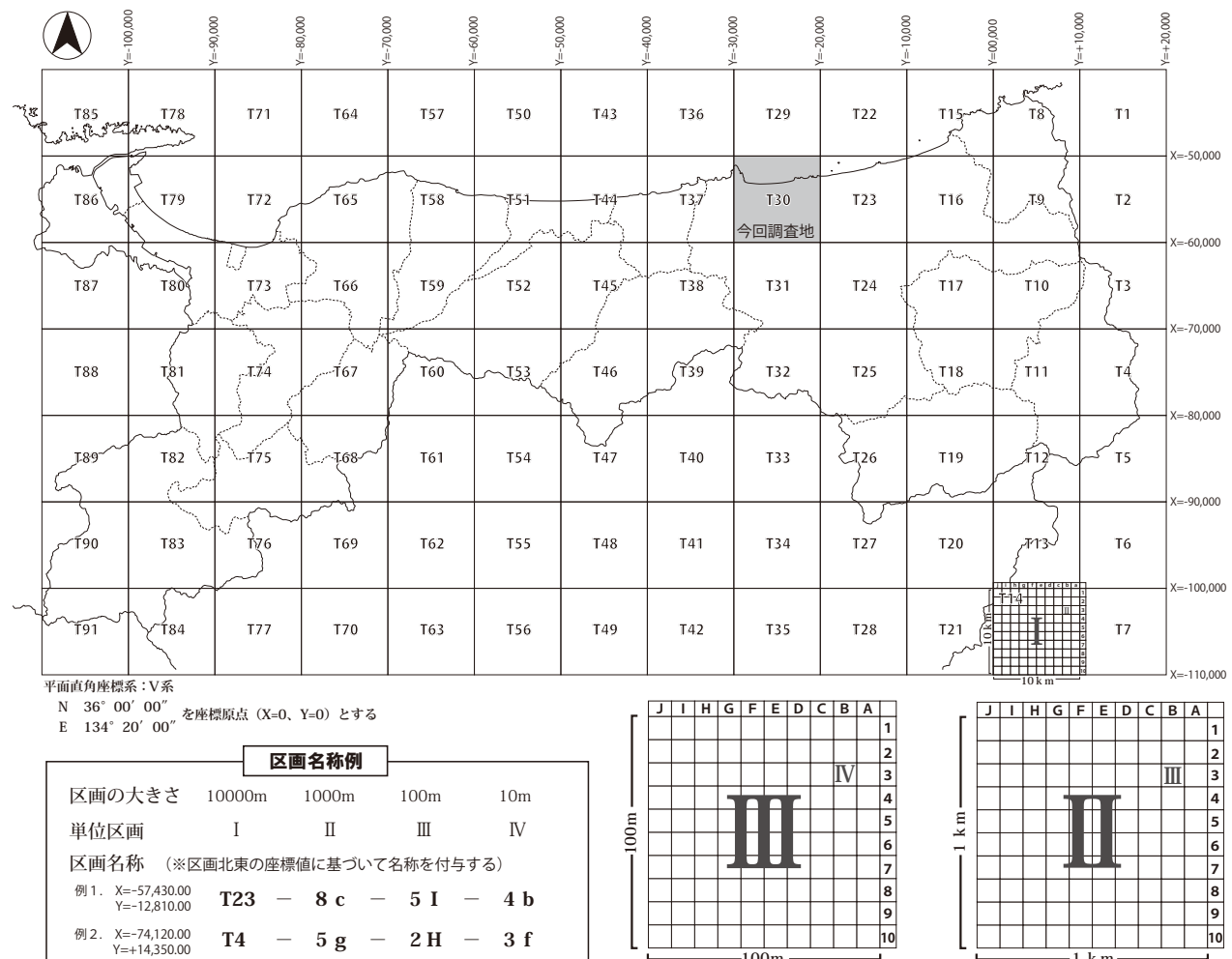
遺跡、遺構の位置は平面直角座標系の第V系（世界測地系）に基づいて10mを単位とした方眼の交点に杭を設置した。グリッドの名称は、第6図のように表している。

第I区画：鳥取県の全域に設定した大区画である。10,000m×10,000mで、1～91の区画を設け北東隅からT1～91の記号を付した。

第II区画：第I区画の1区画内を100等分した区画である。1,000×1,000mを第II区画の1区画とし南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、各区画を1a～10jと呼称した。

第III区画：第II区画を100等分した区画である。100m×100mを第III区画の1区画とし、南北軸に1～10、東西軸にA～Jを付し、各区画を1A～10Jと呼称した。

第IV区画：第III区画を100等分した区画である。10m×10mを第IV区画の1区画とし、南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、各区画を1a～10jと呼称した。



第6図 調査区割り模式図

第2節 発掘調査と記録の方法

発掘調査対象と調査区名

下坂本清合遺跡では、鳥取西道路建設に伴い瑞穂ハーフIC（仮称）部分に加え、2ヶ所の橋脚及び気高青谷トンネル出口部分（盛土）の工事が計画されており、それぞれ発掘調査対象となっている。そのうち瑞穂ハーフIC（仮称）の盛土施工部分を東から1～3区に分け、平成25年度はそのうちの中央部分の2区を調査した（第2図）。

遺構番号と遺構種類の呼称

鳥取県教育委員会が財団法人鳥取県教育文化財団に委託した鳥取西道路関連の発掘調査では、検出順に遺構番号を付与することを基本方針としている。遺構名称は、遺構番号の後ろに検出された遺構の種別を組み合わせることで1土坑、2溝のようになるが、種別については、調査が進む中で変更されることもある。一方で、一度付与された遺構番号については不変であり、本書においても調査時に付与した遺構番号を用いて報告を行っている。ただし、現地調査時に遺構番号を付したものについても、調査の結果、攪乱や自然地形であることが明らかとなった場合、欠番とした。

図面記録および写真撮影

現地での記録作業は、支援業者の調査員と測量士が監理者の指示・確認を受けながら行った。

図面記録に関しては、平断面図はトータルステーションを用いた測量と写真計測を、対象遺構や壁面の状況によって使い分けている。作成した図面は、監理者の確認後に、現地での一次記録である〈素図〉として管理し、最終的には情報をデジタルデータとして整理・統合し、〈編集図〉を作成した。成果品としての編集図は、主にベクトルデータで構成され、イラストレーターCS4以上での再編集が可能な形で保存（ai形式）している。

写真の撮影は、撮影対象、範囲、アングル、使用機材等に関する発掘調査監理者の指示をもとに支援調査員が行った。撮影用機材としては、中型（6×7判）一眼レフカメラ、小型（35mm判）一眼レフカメラ、デジタル一眼レフカメラ（センサーサイズAPS-C以上、有効画素数1220万画素以上）を併用し、対象によって機材を適宜選択しながら行った。また、中判・小型一眼レフカメラに使用したフィルムは、富士フィルム社 プロビア100F（リバーサル）、富士フィルム社 ネオパン100ACROS（黑白フィルム）である。

デジタル一眼レフカメラによる撮影はRAW・JPEG形式の同時保存により行った。また、デジタル一眼レフカメラによる撮影は、写真撮影を行う全ての対象に対して行うとともに、撮影対象や日付などの撮影内容を記載した写真ラベルも合わせて撮影している。

出土遺物の取り上げ

遺物の取り上げには、鳥取県教育文化財団調査室が用意した遺物カードを使用した。取上番号は通し番号とし、遺物カードに記載された項目に基づいて遺物取上台帳を作成し、出土した遺物を取り上げ、管理した。遺物カードの記載項目・内容は以下のとおりである。

遺 跡 名 「下坂本清合遺跡13」と記載。「13」は2013年度に調査を実施したことを示す。

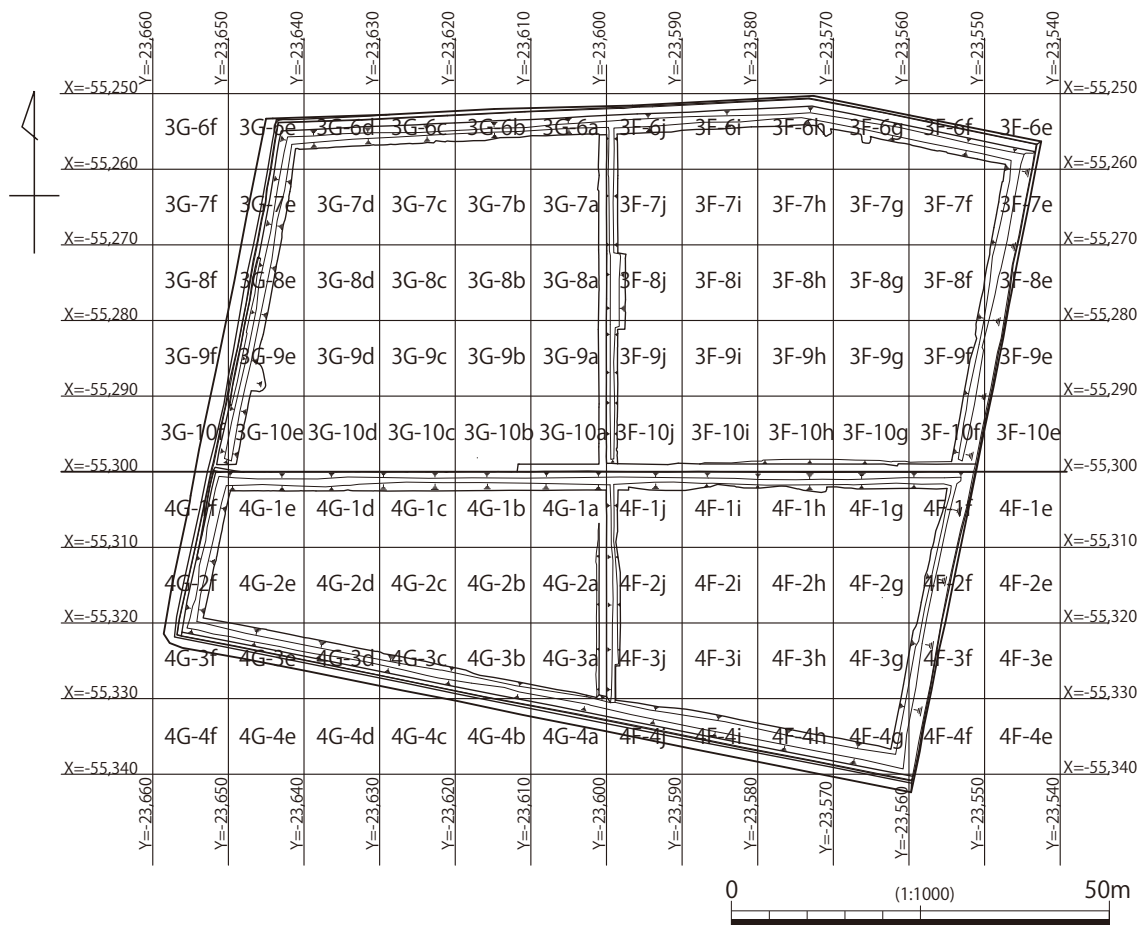
地 区 名 遺物の取り上げは、前節で示した第I～IV区画で構成される地区割りに則った、10m×10mのグリッド（第7図）を基本として記載した。

層 位 名 遺物か帰属する包含層や遺構内に堆積した層位の番号ないし名称を記載した。

- 遺構名 遺物が帰属する遺構の名称を記載した。
- 取上 No. 取り上げ順に通し番号を記載した。
- 出土年月日 検出日ではなく、取り上げ日を記載した。
- 図面 遺物の出土状況が記録された図面の有無と図面のスケールを記載した。
- 備考 特記事項を記載した。
- 時代・時期 取り上げた遺物の帰属時期を記載するが、この度の調査では記載を省略した。
- 種別 土器や鉄器など素材によって大別される遺物の種別を記載した。
- その他 取上時に座標値が記録されたものについては、遺物カードのメモ欄に座標値を記載した。

出土遺物の整理

- 出土遺物については、取上げ後、調査事務所に持ち帰って、以下のような整理作業を行っている。
- 土器、土製品、石器 調査終了後に洗浄、接合、注記（マーキング）、復元、実測を行った。器種、形状が判明ないし復元できる個体を実測の対象とした。
- 木製品 調査終了後に洗浄、実測を行った。器種や用途、または、特徴的な加工が施されているものを実測の対象とした。
- 金属製品 調査終了後、近年のものと判断されるものを除き実測を行った。
- 写真撮影 以上の出土遺物を対象に、撮影対象に応じて大判（4×5判）、中判（6×7判）及びデジタル一眼レフカメラ（センサーサイズ フルサイズ）で撮影を行った。
- 保管 図面、写真の記録類、出土遺物はすべて台帳に登録して収納作業を行なった。



第7図 下坂本清合遺跡2区グリッド配置図

第4章 調査の成果

第1節 調査の概要

今回の調査において、遺構面を3面検出した。これらは大きくは調査区南東部分を北東方向に流れる自然流路と自然流路北岸部に展開する遺構群それぞれの変遷として捉えることができる。

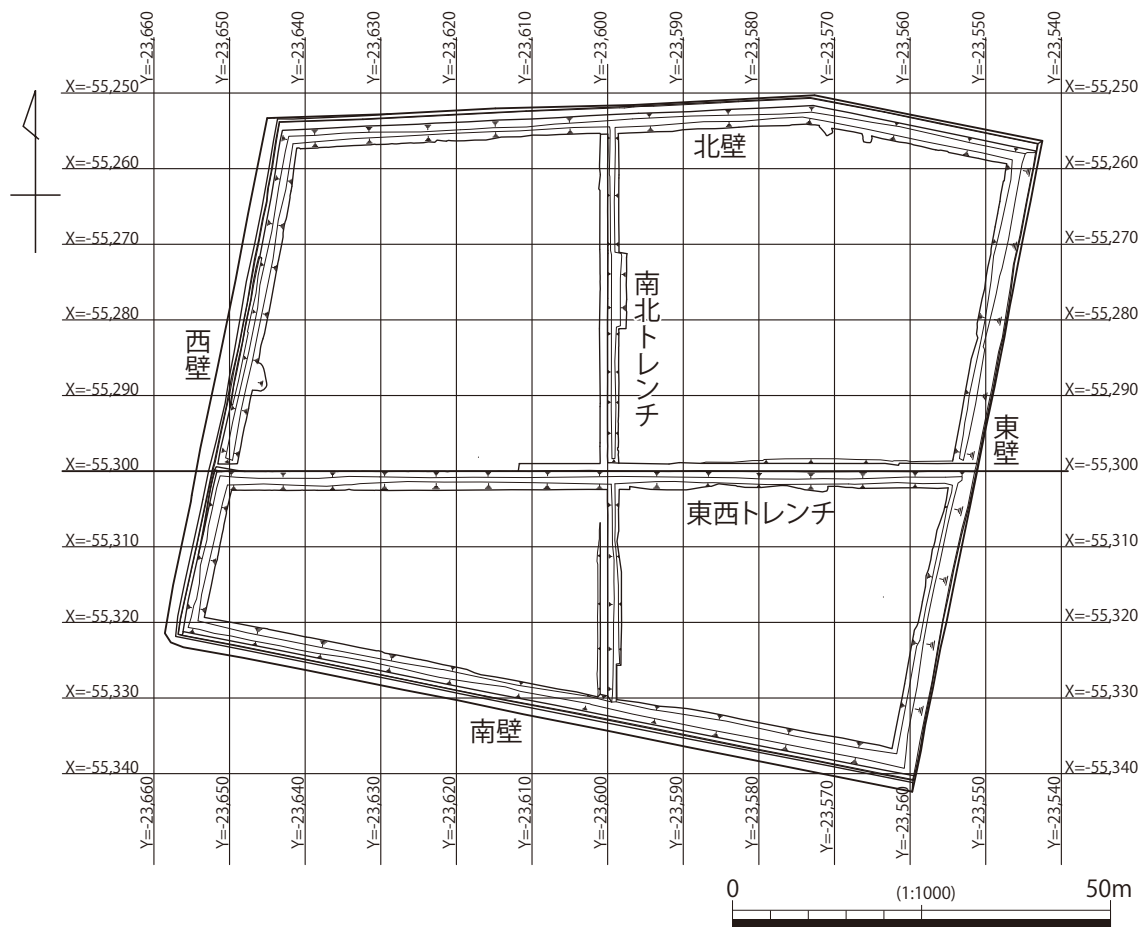
調査区南東部の自然流路は、163流路（第3遺構面）→36流路（第2遺構面）→18流路（第1遺構面）と変遷する。36流路では岸部に杭が打ち込まれるなど、人の積極的な関与が認められたが、最終段階の18流路の段階では河川が埋没し低湿地に遷移していた状況が確認できた。またそれぞれの段階で埋土中より土器や木製品など豊富な遺物が出土している。

この自然流路の北岸は、現代の圃場整備により著しく削平を受けていたものの、畝や水田として利用されていた状況が明らかとなった。また、第2遺構面では流路に沿って掘立柱建物跡が確認された。

第2節 調査区内の土層堆積状況

(1) 東西トレンチの土層堆積状況（第9～13図、図版2～4）

調査区中心からやや南寄りを、東西方向に通過する X=-55,300 軸の南側に沿って、土層断面観察と排水を兼ねたトレンチを掘削し、これを東西トレンチと呼称した。ここでは東西トレンチの土層観



第8図 調査区内トレンチ及び側溝配置図

察結果を記載する。

東西トレンチの掘削開始面は、重機を用いた表土掘削停止面であり、第1～第2遺構面とはほぼ同一である。4層は第1遺構面（第28図）で検出した2耕作痕作土に相当する。西端の $Y=-23,640 \sim -23,650$ 間に堆積する73・74層は第2遺構面（第40図）で検出した135流路の埋土であり、74層下面が第3遺構面に相当する。第3遺構面以下は河川性の自然堆積層である。以降、土層の堆積状況から推定される地形の変遷について記述する。

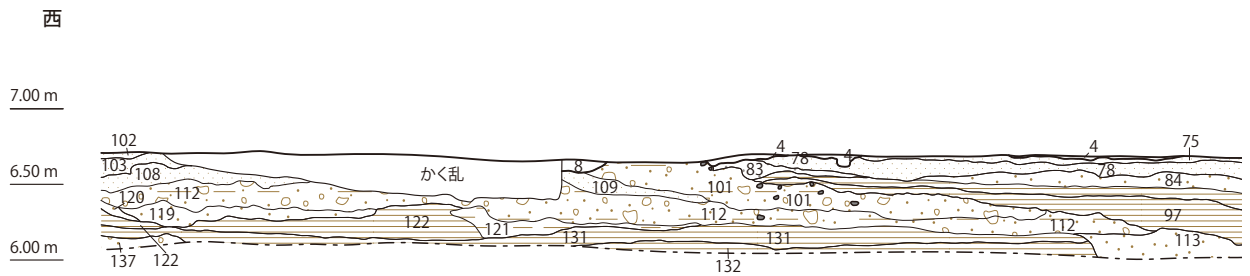
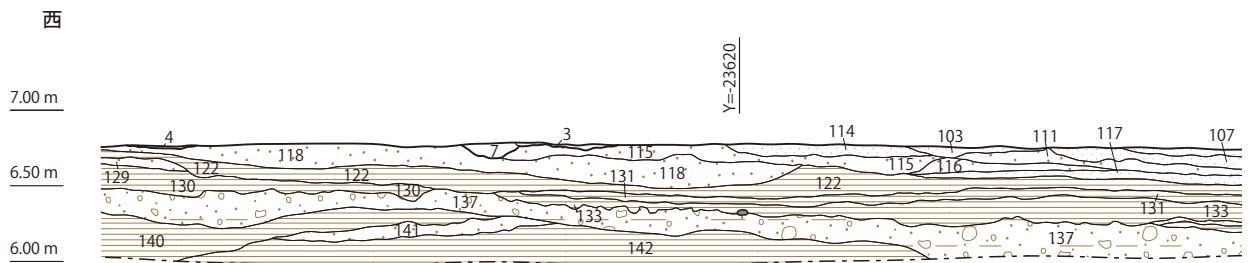
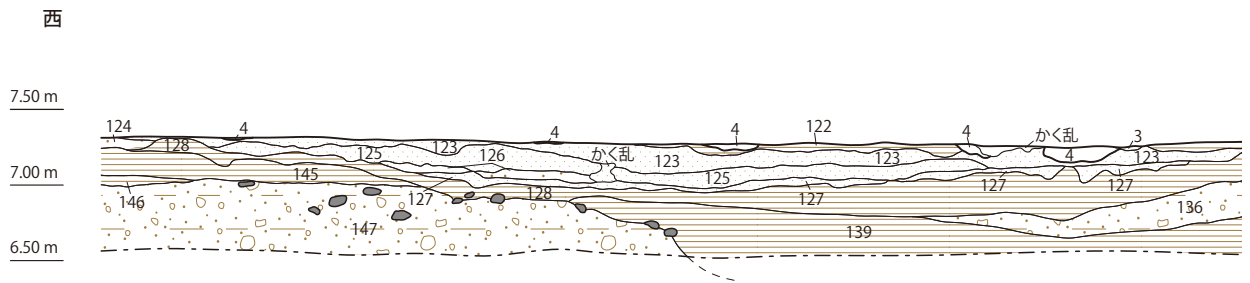
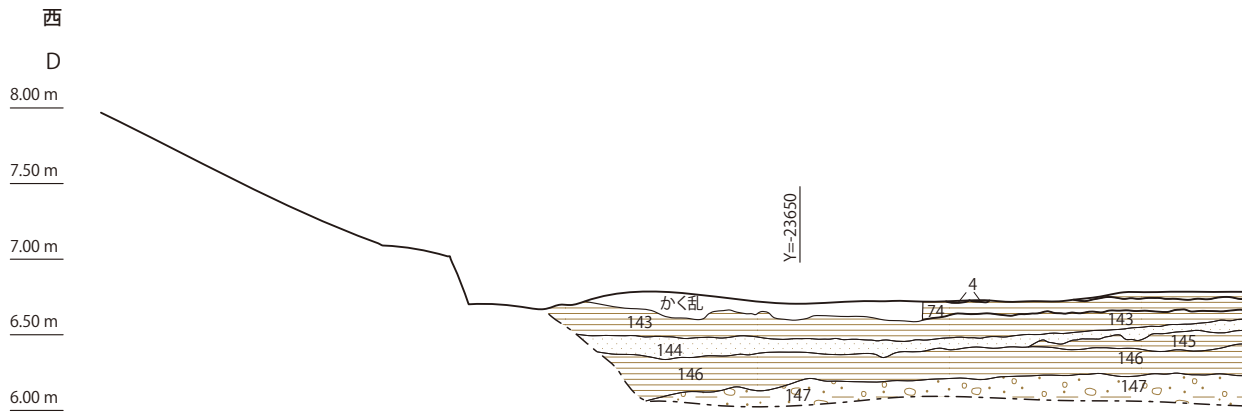
東西トレンチの西端部、 $Y=-23,630$ 以西に堆積する147層は土層断面の最下層にあたる。147層は、直径2～10cm大の円礫と粗砂からなる砂礫層であり、178流路（第84図）の河床に当たる。上面は $Y=-23,640$ から西へ向かって緩やかに傾斜している。上部に堆積する146・145層は細砂とシルトの細かな水平ラミナが形成されることから、流速の弱い環境が推定される。その上層の144層ではラミナが確認できず、さらに上層の143層では再びラミナが形成されるが、擾乱が確認されることから、178流路が低湿地的環境へと推移したと推定される。その上層として135流路の埋土である74層が堆積している。178流路の窪地状の地形に流れ込んだ水流による埋積物であり、135流路は178流路と一連の堆積とも理解できる。

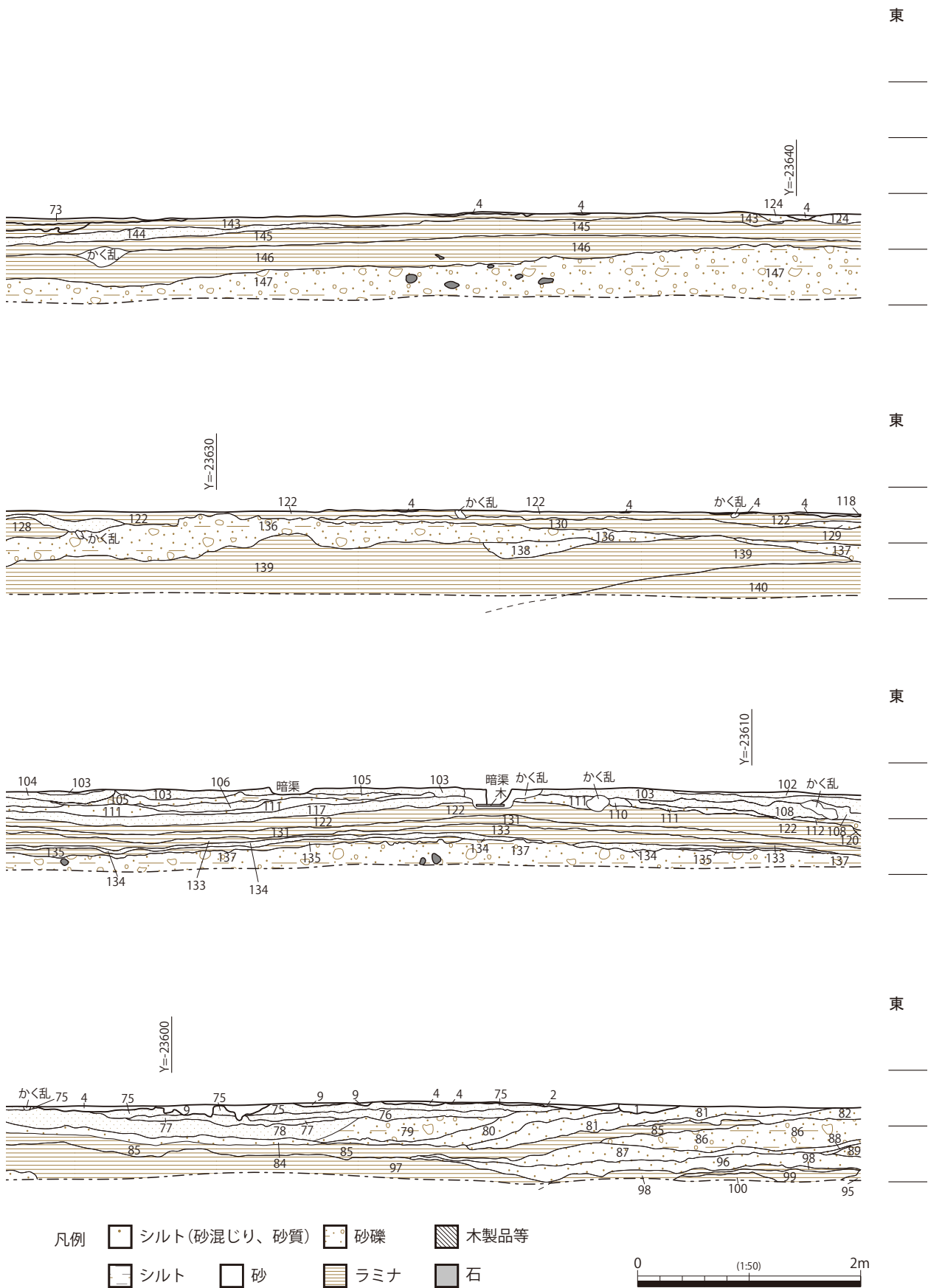
178流路の河床礫である147層は、東端で急な落ち込みを示す。この落ち込みは147層を浸食する水流によって形成されたと考えられ、これを179流路（第84図）と呼称する。179流路の河床面は、断面図では図化していないが、最深部で標高5.6m前後に達する。河床は178流路と同様の砂礫であり、その上に礫混じりの粗砂、中砂と重なり、水平ラミナを形成する細砂の142～138層が堆積する。

179流路の堆積層である138・139層を浸食して136層が、139～142層を浸食して137層が堆積する。いずれも粗砂を主体とする砂礫である。これらの砂礫層を河床とする流路を180流路（第84図）と呼称する。東側の137層のほうに礫の含有率が高く、堆積する標高も低いことから、180流路の中心が137層寄りであったことが推測できる。136・137層いずれも淘汰が悪く、その直上にラミナを形成する細砂層が堆積する。また136・137層ともに179流路の河床を浸食するまでに至らないことから、180流路は179流路の流速が弱まり埋積作用が進んだ時期に、洪水等の突発的イベントによって流速が増したことによって生じた流路とも考えられる。

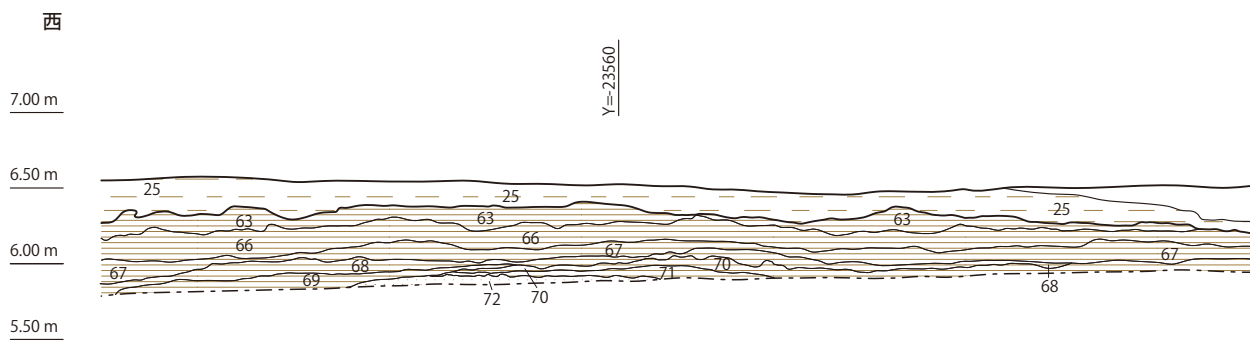
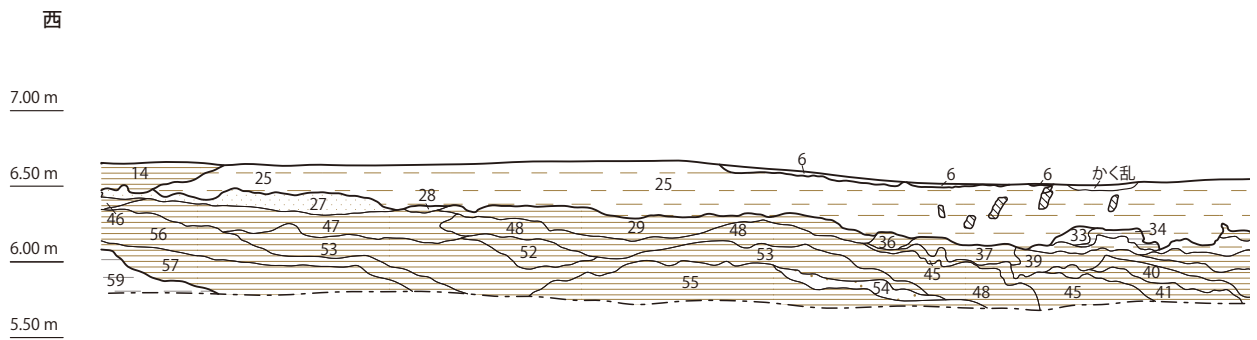
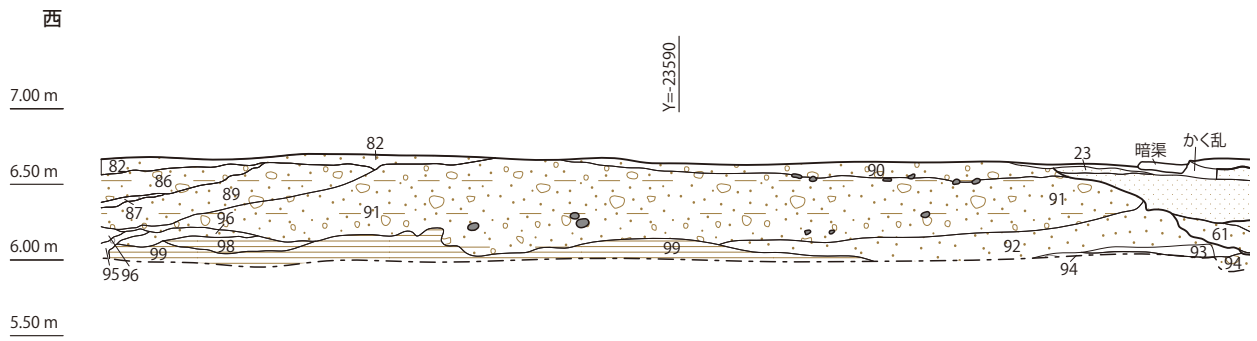
180流路の堆積層である119～122・131・132層を浸食して、112・113層が堆積する。いずれも砂礫層であり、これらの層を河床とする流路を181流路（第84図）と呼称する。180流路の河床礫と同様に淘汰が悪いことから、洪水等のイベントによって運ばれてきた可能性が考えられる。97～100層はラミナを形成する砂層であり、流速が弱くなり、埋積が進んだ後、これらを浸食して粗砂層の94層、シルト層の93層、砂層の92層が順次堆積する。94層は角礫が混じることから洪水等によるものと考えられ、92層は粗砂からシルトへのグレーディングが確認できる。さらに92・96・98・99層を浸食して砂礫の91層が堆積する。東から西へ傾斜する斜行堆積をなし、これに覆い被さるように西へ向かって堆積が進む。この堆積状況はデルタの前置性堆積を示しており、前述した94～92層から連続するデルタ堆積物（三角州）と考えられる。

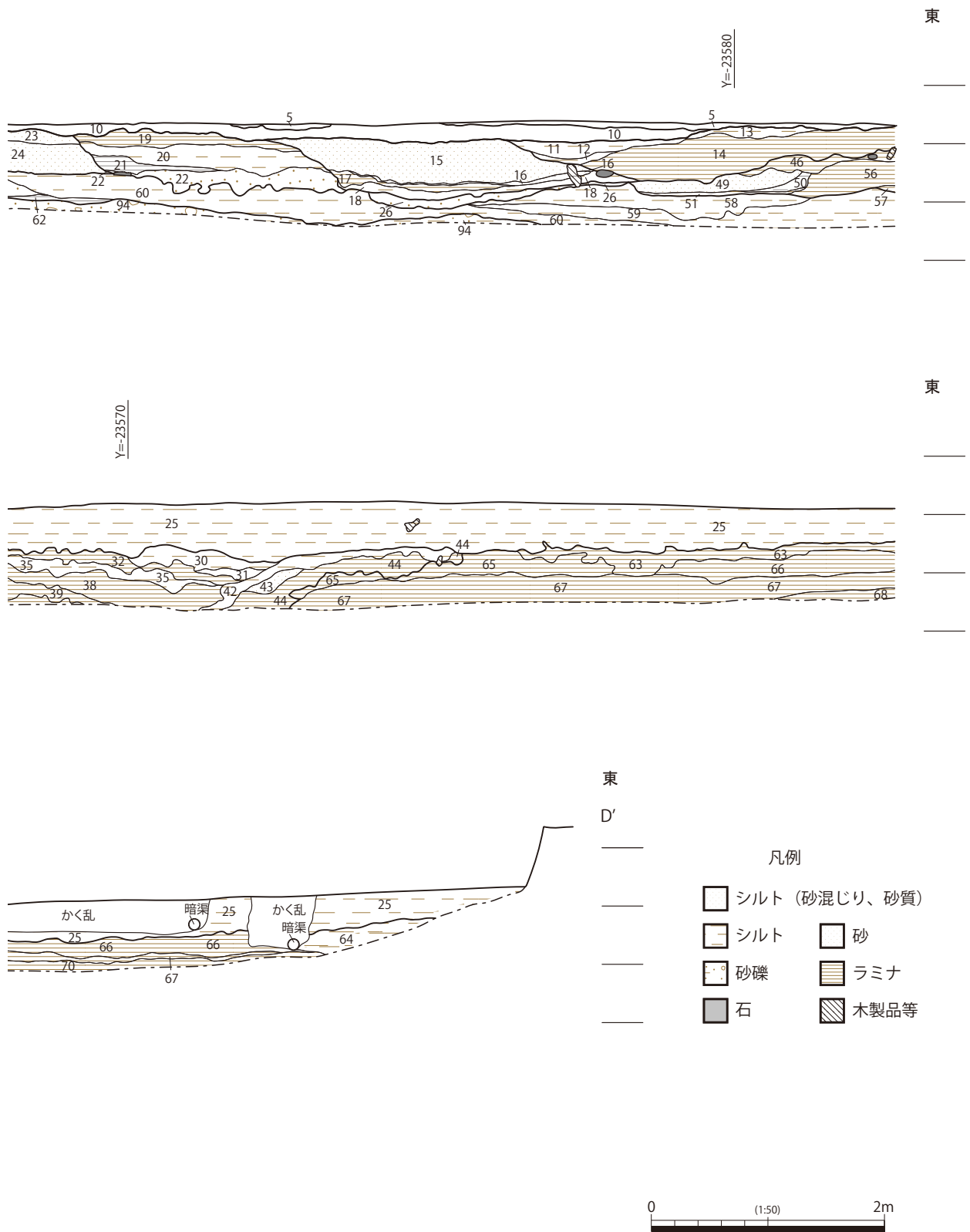
181流路内のデルタ堆積物の東側を浸食するのが第3遺構面として調査した163流路（第77図）である。163流路は調査区南壁の中央から北東方向へ、調査区東壁の中央に向かって流れる。断面図では図化していないが西岸が深く、 $Y=-23,575$ 付近が標高5.2m前後の最深部である。そこから東へ向かってなだらかに上がる。東西トレンチでは東岸に至っていない。河床は円礫を主体とし、礫混じ





第9図 東西トレンチ土層断面図 (1)





第10図 東西トレンチ土層断面図 (2)

	1	2.5Y 4/2 暗灰黄色 粗砂～シルト
	2	2.5Y 4/1 黄灰色 細砂混じりシルト
	3	10YR 3/1 黒褐色 細砂混じりシルト φ10mmの炭化物微量含。灰黄褐色(10YR 6/2)シルトブロックが混じる。
	4	10YR 2/2 黒褐色 シルト 細砂斑状に混じる。φ1～3cmの円礫混じる。粘性中。圃場整備土の削り残し？
	5	5Y 4/1 灰色 砂質シルト φ5～20mm大の礫が5%混じる。粗砂多く混じる。酸化著しい。高師小僧顕著。作土か。
	6	7.5Y 5/1 灰色 砂質シルト φ1cm大の礫が5%混じる。作土か。
	7	2.5GY 6/1 オリーブ灰色 シルト混じり細砂 灰色(5Y 6/1)のシルトブロック多く混じる。上層からの攪拌の影響と見られる。
	8	2.5Y 4/2 暗灰黄色 砂質シルト φ1～4cmの礫が混じる。
	9	2.5Y 4/1 黄灰色 灰色細砂斑状に混じる。
	10	5Y 4/1 灰色 砂質シルト φ5～20mm大の礫が5%混じる。粗砂混じるが1層より少ない。酸化著しい。高師小僧顕著。東端にヨシの遺体が纏まる。
かく乱流路 (新)	11	5Y 4/1 灰色 シルト φ5～10mm大の礫1%混じる。粗砂のラミナ挟在。植物遺体挟在。高師小僧顕著。泥炭層。
	12	5Y 3/1 オリーブ黒色 粘性シルト φ10mm大の円礫、西寄りに5%混じる。高師小僧顕著。泥炭層。
	13	2.5Y 4/1 黄灰色 粘性シルト 細砂のラミナが乱れ、斑状になる。高師小僧顕著。泥炭層。
	14	7.5Y 4/1 灰色 粘性シルトと粗砂・細砂の互層 ラミナが乱れる。
かく乱流路 (中)	15	5Y 4/1 灰色 砂質シルト φ5～10mm大の礫が15%混じる。粗砂のラミナ挟在。固く締まる。植物遺体挟在。高師小僧顕著。
	16	5Y 3/2 オリーブ黒色 粘性シルト 砂が混じらない。
	17	2.5GY 4/1 オリーブ灰色 細砂とシルトのラミナ 西端に粗砂が堆積する。
かく乱流路 (古)	18	7.5Y 3/1 オリーブ黒色 粘性シルト 生痕あり。植物遺体挟在。泥炭層。
	19	2.5Y 4/1 黄灰色 粘性シルト 白色シルトと細砂、植物遺体のラミナ挟在。高師小僧顕著。
	20	5Y 3/1 オリーブ黒色 粘性シルト 白色シルトと細砂のラミナが19層よりも多く挟在。植物遺体を多く挟在。高師小僧顕著。泥炭層。
	21	7.5Y 3/1 オリーブ黒色 粘性シルト 細砂のラミナ挟在。植物遺体を多く挟在。泥炭層。
	22	2.5Y 5/4 黄褐色(酸化) 粗砂～細砂 グレーディング。下部にφ10mm大の礫、植物遺体が挟在する。φ10～15cm大の不定形なシルトブロックが混じる。下層の混入物か。
18 流路	23	2.5Y 4/2 暗灰黄色 砂質シルト 固く締まる。高師小僧顕著。
	24	7.5Y 4/1 灰色 砂質シルト 固く締まる。高師小僧顕著。
	25	7.5Y 4/1 灰色 シルト φ10～20mm大の礫5%混じる。白色シルトブロックが不規則に混じる。高師小僧顕著。地割れ顕著。
36 流路	26	2.5GY 5/1 オリーブ灰色 粗砂
	27	7.5Y 4/1 灰色 砂質シルト φ10～20mm大の礫5%混じる。粗砂・白色シルトブロックが25層よりも多く混じる。
	28	7.5Y 3/1 オリーブ黒色 砂質シルト 細砂のラミナ乱れる。高師小僧顕著。
	29	5Y 4/1 灰色 砂質シルト 細砂とシルトのラミナ挟在、乱れる。植物遺体挟在。高師小僧顕著
	30	7.5Y 4/1 灰色 シルト 植物遺体挟在。生痕あり。高師小僧顕著。
	31	7.5Y 4/1 灰色 シルト 極細砂混じる。植物遺体挟在。高師小僧、30層より少ない。
	32	7.5Y 4/1 灰色 中砂・細砂・シルトのラミナ 砂主体。ラミナに乱れあり。
	33	7.5Y 4/1 灰色 シルト 植物遺体挟在。生痕あり。
	34	2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色 細砂とシルトのラミナ 細砂主体。
	35	7.5Y 4/1 灰色 シルト 植物遺体挟在。生痕あり。
	36	2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色 細砂とシルトのラミナ 砂優勢。ラミナに乱れあり。植物遺体挟在。生痕あり。
	37	7.5Y 3/1 オリーブ黒色 シルトと細砂のラミナ 上位はシルト主体。植物遺体多く挟在。泥炭層。
	38	7.5Y 3/1 オリーブ黒色 シルトと細砂のラミナ シルト主体。植物遺体多く挟在。高師小僧顕著。
	39	2.5GY 3/1 暗オリーブ灰色 細砂とシルトのラミナ ラミナに乱れあり。植物遺体挟在。
	40	5GY 6/1 オリーブ灰色 中砂と細砂のラミナ
	41	2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色 シルト 植物遺体のラミナ挟在。
	42	7.5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト 植物遺体多く挟在。高師小僧顕著。
	43	7.5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト 植物遺体多く挟在。
	44	5Y 4/1 灰色 細砂とシルトのラミナ 砂主体。ラミナに乱れあり。植物遺体挟在。
	45	2.5GY 3/1 暗オリーブ灰色 細砂とシルトのラミナ 細砂主体。シルト中に植物遺体挟在。
	46	7.5Y 3/2 オリーブ黒色 シルト 細砂ラミナ挟在。φ5cm大の円礫1点混じる。植物遺体挟在。
	47	5Y 4/1 灰色 砂質シルト 細砂ラミナ挟在、乱れる。φ1～5cm大の角礫3%混じる。植物遺体挟在。高師小僧顕著。
	48	5Y 3/2 オリーブ黒色 粗砂・細砂・シルトのラミナ 砂優勢。ラミナに乱れあり。植物遺体挟在。
	49	5Y 3/1 オリーブ黒色 細砂混じり粘性シルト 樹枝等の植物遺体多く挟在。
	50	7.5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト 植物遺体挟在。
	51	5GY 2/1 オリーブ黒色 シルトと細砂のラミナ。植物遺体挟在。
52	5Y 3/1 オリーブ黒色 砂質シルトと細砂のラミナ シルトやや優勢。ラミナに乱れあり。植物遺体挟在。	
53	5Y 3/1 オリーブ黒色 粘性シルト 細砂ラミナ挟在。生痕あり。	
54	5G 5/1 緑灰色 粗砂	
55	5Y 4/1, 7.5Y 4/1 灰色 シルトと細砂のラミナ シルトと細砂互角。ラミナに乱れあり。植物遺体挟在。下面に多量の植物遺体(ヨシ・樹枝)が堆積する。	
56	5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト 細砂のラミナ挟在、乱れあり。樹枝等の植物遺体挟在。	
57	5Y 3/2 オリーブ黒色 シルトと細砂のラミナ シルトやや優勢。樹枝等の植物遺体多量に挟在。	

第11図 東西トレンチ土層註記(1)

- 163 流路
- 58 7.5Y 3/1 オリーブ黒色 粘性シルト 樹枝等の植物遺体挟在。泥炭層。
 - 59 5Y 4/1 灰色シルト 樹枝等の植物遺体多量に挟在。
 - 60 7.5Y 4/1 灰色シルト 樹枝等の植物遺体多量に挟在。生痕あり。泥炭層。
 - 61 5GY 5/1 オリーブ灰色 粗砂 φ1~2cm大の礫・シルトブロック混じる。
 - 62 7.5Y 5/1 灰色 細砂とシルトのラミナ φ2cm大の礫5%混じる。植物遺体挟在。
 - 63 7.5Y 4/1 灰色シルトと細砂のラミナシルト主体。ラミナに乱れあり。生痕あり。植物遺体挟在。高師小僧顕著。
 - 64 7.5Y4/1 灰色シルト 植物遺体挟在。高師小僧顕著。
 - 65 5Y 4/1 灰色シルト 白色シルトあるいは極細砂のラミナ挟在。植物遺体挟在。
 - 66 5Y4/1 灰色シルト 白色シルトあるいは極細砂のラミナ挟在。樹枝等の植物遺体多量に挟在。高師小僧顕著。
 - 67 2.5Y3/1 黒褐色シルト・細砂・植物遺体のラミナシルト主体。樹枝等の大型の植物遺体多量に挟在。泥炭層。
 - 68 10Y 5/1 灰色 細砂とシルトのラミナ 細砂主体。樹枝等の大型の植物遺体挟在。
 - 69 10Y 5/1 灰色 細砂・シルト・植物遺体のラミナ 細砂やや優勢。樹枝等の大型の植物遺体挟在。
 - 70 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 細砂と植物遺体のラミナ 炭粒が混じる。
 - 71 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 細砂・シルト・植物遺体のラミナ 細砂主体。炭片が混じる。
 - 72 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 細砂混じりシルト 植物遺体挟在。
- 135 流路
- 73 10YR 7/1 灰白色シルト ラミナの見られる細砂。ブロック状に混じる。ラミナは横方向。φ2~3cmの礫少量混じる。細砂~粗砂斑状に混じる。高師小僧多。
 - 74 2.5Y 6/4 にぶい黄色 細砂とシルトのラミナ 細砂主体。
 - 75 N 6/ 灰色 砂質シルト 高師小僧認められる。シルトブロックが混じる。
 - 76 10BG 6/1 青灰色 砂混じりシルト
 - 77 10BG 6/1 青灰色シルト~細砂 φ2~3cm大の礫が微量混じる。
 - 78 N 6/ 灰色 粗砂~シルト
 - 79 2.5Y 5/3 黄褐色 礫混じり粗砂
 - 80 5BG 5/1 青灰色 粗砂~シルト
 - 81 2.5Y 5/2 暗灰黄色(酸化) 粗砂 φ1~2cm大の礫が40%混じる。
 - 82 2.5Y 5/2 暗灰黄色(酸化)シルト混じり細砂
 - 83 N 7/ 灰色シルト~細砂
 - 84 N 6/ 灰色シルト混じり細砂 高師小僧少量認められる。
 - 85 N 6/ 灰色 細砂混じりシルト ラミナ有。
 - 86 2.5Y 6/3 にぶい黄色(酸化) 粗砂 φ1~2cm大の礫が40%混じる。
 - 87 2.5Y 5/4 黄褐色(酸化) 粗砂 φ5~10mm大の礫・シルトブロック混じる。シルトブロックは88層由来か。
 - 88 7.5Y 5/1 灰色 砂混じりシルト
 - 89 2.5Y 6/4 にぶい黄色(酸化) 粗砂 φ1~2cm大の礫20%混じる。淘汰悪いが、西へ向かって粒子が細くなる。
 - 90 2.5Y 5/2 暗灰黄色(酸化) 砂質シルト 粗砂・細砂のラミナ挟在。
 - 91 2.5Y 5/4 黄褐色(酸化) 粗砂 φ1~10cm大の礫が不規則に混じる。
 - 92 10G 5/1 緑灰色 粗砂~シルト グレーディング。
 - 93 7.5Y 5/1 灰色シルト
 - 94 5G 5/1 緑灰色 粗砂 φ1cm大の角礫が混じる。
 - 95 5B 6/1 青灰色 粗砂 φ1~2cm大の礫が混じる。下層からの噴出か。
 - 96 5GY 5/1 オリーブ灰色シルト混じり細砂
 - 97 N 6/ 灰色 細砂~粗砂 ラミナ横位・斜位に走る。同色のシルト混じる。φ0.5cmの炭化物が微量混じる。
 - 98 5GY 5/1 オリーブ灰色 細砂とシルトのラミナ
 - 99 2.5GY 5/1 オリーブ灰色シルトと極細砂のラミナ 炭化物が混じる。固く締まる。
 - 100 N 7/ 灰白色 中砂 ラミナ状に堆積。
 - 101 N 7/ 灰白色 礫混じり粗砂
 - 102 7.5Y 6/1 灰色シルト~粗砂 a層で攪拌された層。高師小僧顕著。
 - 103 7.5Y 5/1 灰色 粗砂~シルト φ1~3cmの円礫が微量混じる。
 - 104 2.5GY 6/1 オリーブ灰色シルト~細砂 高師小僧多。φ1cm以下の炭化物微量に混じる。
 - 105 2.5Y 5/3 黄褐色 礫混じり粗砂 オリーブ灰色(2.5GY 6/1)シルトブロックが混じる。小規模な土石流か?103・104層は当層を母材とした耕土?
 - 106 10G 5/1 緑灰色 砂混じりシルト 111層由来の細砂及び105層由来の礫が混じる。105層堆積時に111層を侵食した痕跡?
 - 107 2.5GY 6/1 オリーブ灰色 砂混じりシルト 111層由来の細砂が混じる。
 - 108 5B 6/1 青灰色 粗砂混じりシルト 高師小僧有。
 - 109 7.5Y 6/1 灰色 粗砂~シルト
 - 110 5B 6/1 青灰色 粗砂混シルト 111層中のシルトブロックとして捉えるか。
 - 111 N 6/ 灰色 細砂シルト少量混。ラミナ見られない。
 - 112 2.5Y 6/3 にぶい黄色 礫混じり粗砂 東に向かってφ1~3cmの円礫が多くなる。
 - 113 N 7/ 灰白色 粗砂 灰色(N 6/)シルトブロックとφ1~3cm大の礫が混じる。
 - 114 7.5Y 6/1 灰色シルト~細砂 高師小僧多く見られる。
 - 115 N 6/ 灰色 細砂 上層からの影響と考えられるシルトブロック中量混。
 - 116 N 6/ 灰色 細砂 粒子は均一だがラミナ不明瞭。

第12図 東西トレンチ土層註記(2)

- 117 N 6/ 灰色 細砂混じりシルト 高師小僧が少ないが認められる。
- 118 N 6/ 灰色 細砂 ϕ 1~3mmの炭化物多含。上半部にシルトブロック混ぜ込みが少量認められる。
- 119 N 6/ 灰色 細砂 同色のシルト斑状に混じる。
- 120 N 6/ 灰色 細砂
- 121 N 6/ 灰色 シルト 細砂斑状に混じる。
- 122 N 6/ 灰色 細砂 ラミナ認められる。
- 123 N 6/ 灰色 シルト~細砂 高師小僧が上部に多く見られる。 ϕ 1~5mmの炭化物含む。
- 124 N 6/ 灰色 細砂 褐灰色(10YR4/1)シルトが斑状に混じる。高師小僧見られる。
- 125 N 6/ 灰色 シルト~細砂 粘性比較的高く、白色シルト少量混入する。
- 126 N 6/ 灰色 細砂~シルト 細砂にシルトが斑状に少量混入。
- 127 N 6/ 灰色 シルト~細砂 シルトに細砂が斑状に混入。
- 128 N 6/ 灰色 細砂 下半部に黒色のラミナが顕著。
- 129 N 6/ 灰色 細砂 主体となる砂が122層と130層の半々になり混じる。
- 130 N 6/ 灰色 細砂 ラミナ明瞭。
- 131 N 6/ 灰色 細砂 シルトブロック斑状に混じり、ラミナ認められる。
- 132 5BG 5/1 青灰色 細砂~シルト 細砂とシルトの互層でラミナ形成。 ϕ 1~3cmの炭化物が混じる。
- 133 N 6/ 灰色 細砂 ラミナ有。横位のラミナ。
- 134 10GY 5/1 緑灰色 砂質シルト
- 135 N 6/ 灰色 細砂 ラミナ有。
- 136 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 礫混じり中砂 ϕ 2~3cm大の垂円礫が50%混じる。細砂とシルトのラミナ挟在。
- 137 N 6/ 灰色 粗砂~礫
- 138 N 6/ 灰色 細砂 ϕ 1~3cmの礫が混じる。
- 139 N 6/ 灰色 細砂 ラミナ顕著。
- 140 N 6/ 灰色 細砂 ラミナ有。 ϕ 1cm以下の小礫、下半部に少量混。
- 141 N 6/ 灰色 細砂 ϕ 1cm以下の小礫が混じる。
- 142 N 6/ 灰色 細砂~礫 ラミナ有。
- 143 5Y 5/1 灰色 砂質シルトと細砂のラミナ 砂質シルト主体。ラミナに擾乱あり。
- 144 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 砂混じりシルト ラミナ見られず。
- 145 N 6/ 灰色 細砂~シルト 細砂とシルトが互層状にラミナを形成。
- 146 5GY 5/1 オリーブ灰色 細砂とシルトの互層 ラミナ形成。
- 147 10YR 4/2 灰黄褐色 砂礫 粗砂と ϕ 2~15cmの垂円礫で構成

第13図 東西トレンチ土層註記(3)

りの粗砂、中砂、細砂、シルトの順に堆積する。標高6m前後はシルトと細砂のラミナが形成され、樹枝等の大量の植物遺体を挟在する。

163流路の河床が標高6.3m前後まで埋積すると、163流路の最深部をなぞるように36流路(第55図)が埋積物を浸食する。36流路は砂とシルトのラミナであり、緩やかな水流であったことがうかがえる。しかし起伏が多く、単位も複雑であることから、水流の勢いが一律でなかったことが想定される。多く認められるラミナの乱れは、生物による擾乱と推定される。また、流路に沿った杭列が検出されていることから、人間によって流れが制御されていた様子がうかがえる。

36流路の流れが収まり、163流路の川幅を24・25層のシルトが覆い尽くす段階を、18流路(第34図)と呼称する。18流路を埋積するシルト中には礫や偽礫が混入し、乾裂(地割れ痕)が認められる。河川跡が低湿地に遷移し、植物が繁茂した環境が想定される。

18流路の埋没後も、かく乱流路と呼称する水路(第10図11~22層)を掘削することによって水流が管理されたことがうかがえる。かく乱流路は少なくとも3段階の変遷があり、西から東へと移動している。農業用水に利用されていたが、洪水等によってその水路も埋没し、近代以降、一帯は新たな区割りによる水田へと変遷する。



写真3 かく乱流路検出状況(南西から)

(2) 北壁の土層堆積状況 (第14～18図、図版4～6)

重機による表土の掘削後、調査区の北縁から1m南側に控えを取り、幅2mの排水溝を掘削した。第14・15図に示した断面図では標高6.7m前後を通る一点鎖線以上は重機による表土掘削停止面までを、一点鎖線以下は排水溝の北側法面見通しを合成している。

調査区を含む瑞穂地区の平野一帯は、昭和57年度から平成5年度にかけて大規模な圃場整備事業が行われている。この時の圃場整備に伴う地盤の改変は、旧耕土を残す範囲もあれば、地山である河川性堆積層に及ぶ範囲もあった。中央から東半部にかけての標高が低い範囲には客土が盛られている(2～4層)。調査区内は表土掘削を行う以前に、圃場整備後の作土の大半があらかじめ除去されていた。このため、北壁断面では圃場整備後の作土がほとんど現れず、西端の1層を残すのみである。Y=-23,550以東で、圃場整備時客土の3層上面から深く掘り込まれた暗渠は、調査区の東縁に沿って南北に伸び、最下部に塩ビ管が埋設されている。東西方向に25m間隔で平行に、浅く埋設された陶管の暗渠が、この塩ビ管暗渠に接続する。圃場整備以前の暗渠の形態は素掘りの溝内に円礫を詰めたもの、溝内に丸太を横たえて円礫を被せたものが確認できた。Y=-23,598付近に埋設された暗渠は素掘りの溝に足場板状の杉板が箱組みされたものである。これは昭和20年頃の戦時中に資材が不足した折に埋設されたものらしい^(註1)。Y=-23,620に現れる4～8層は圃場整備直前まで使われていた用水路であり、先述の板組の暗渠と並行して南北方向に伸長する。これらの圃場整備以前の暗渠等が掘りこまれる9～23層が圃場整備以前の耕土であり、その下面を第1遺構面として調査した。2耕作痕等を検出した。

32～38層の灰色系砂質シルトは、基盤となる河川性堆積層の土壌化作用が進んだものとみられ、木炭粒・木炭片が混入する。これらの層に被覆される面を第2遺構面とし、ピット群等を検出した。Y=-23,603～-23,615の範囲に堆積する35層の上面では遺構を検出していないが、その下面で検出した43層は木炭片が多量に混入する特徴的な人為層であり、43層に類似する39～42層を含めた層に被覆される面を第3遺構面とした。第3遺構面では1・3炭化物範囲、4耕作痕等を検出した。

第3遺構面以下は河川性堆積物によって形成され、遺構は検出できなかった。以下、河川性堆積の変遷を順に追って記載する。

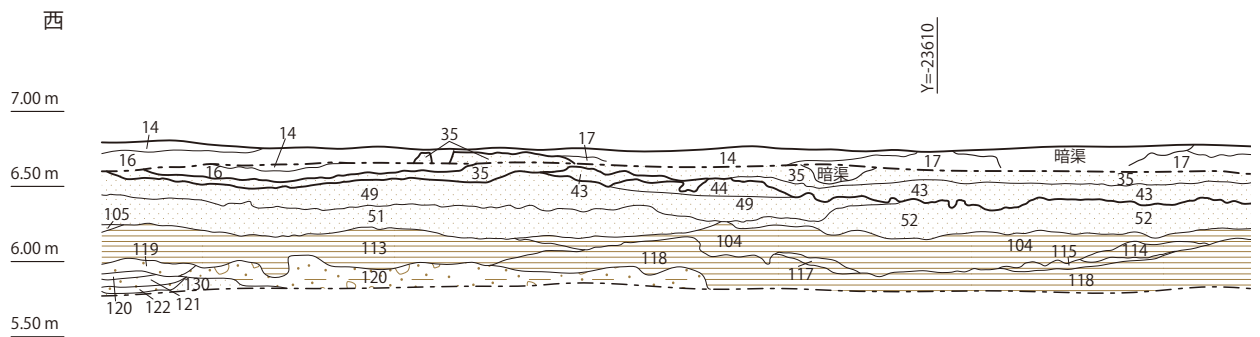
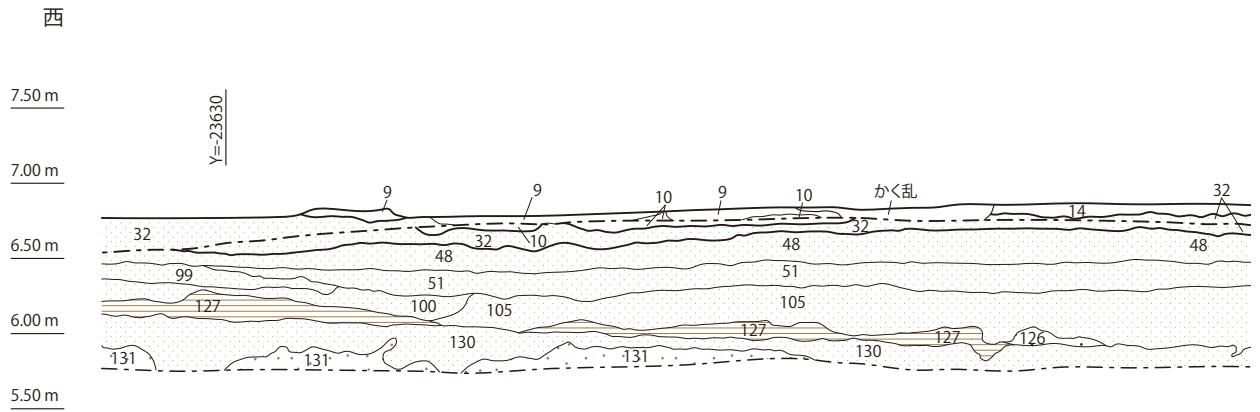
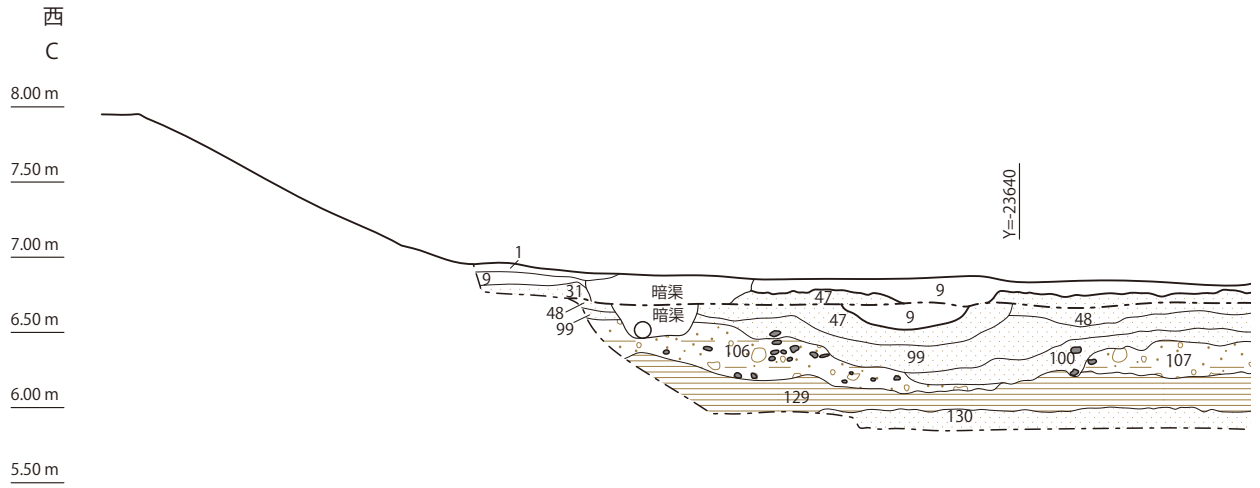
北壁断面の最下層は、断面図中央のY=-23,577～-23,606の範囲に現れる砂礫の132層である。東から西へ緩やかに傾斜し、この傾斜に沿って淘汰のよい径の砂と礫が堆積する。東端は他の河川によ

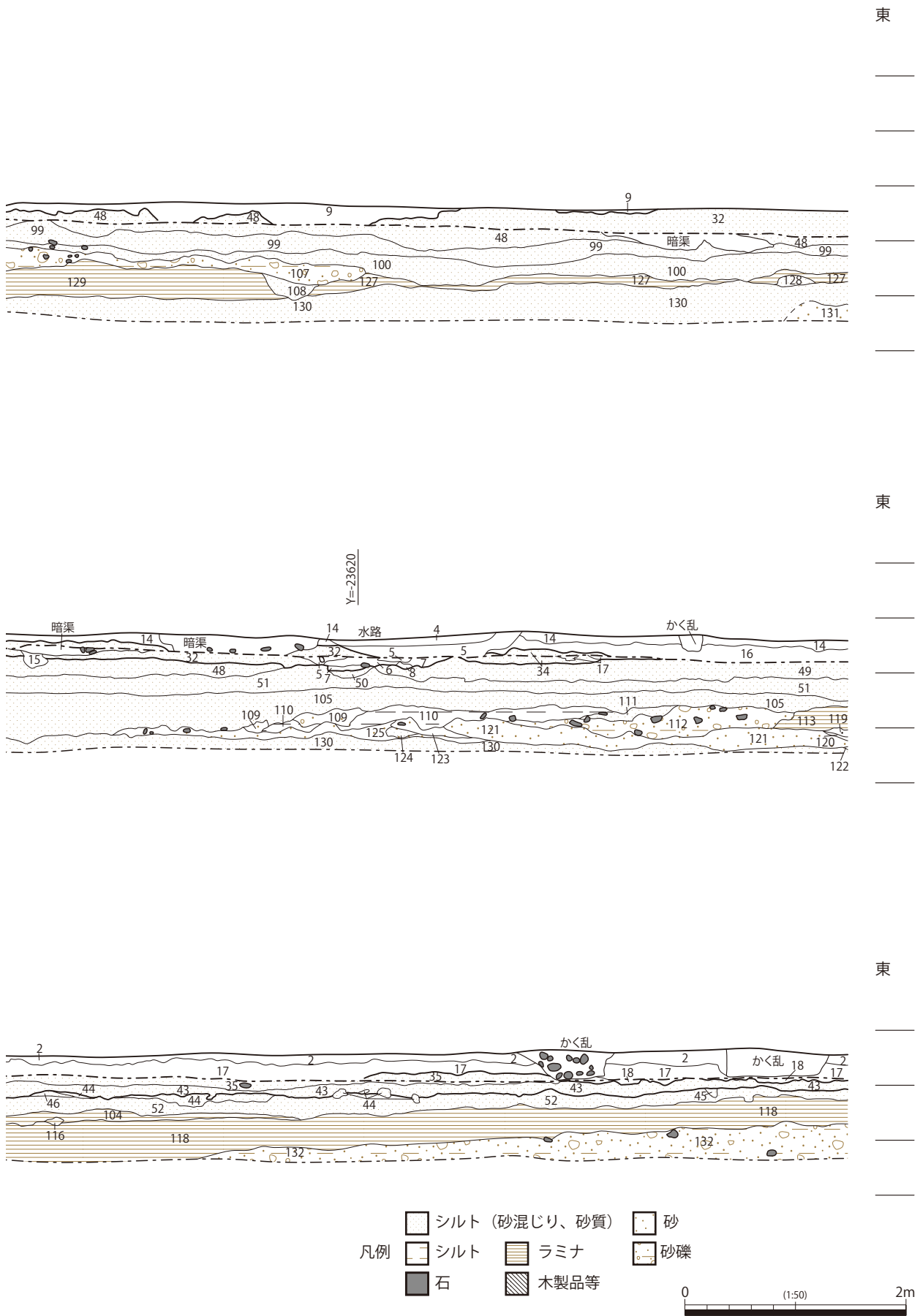


写真4 板組暗渠

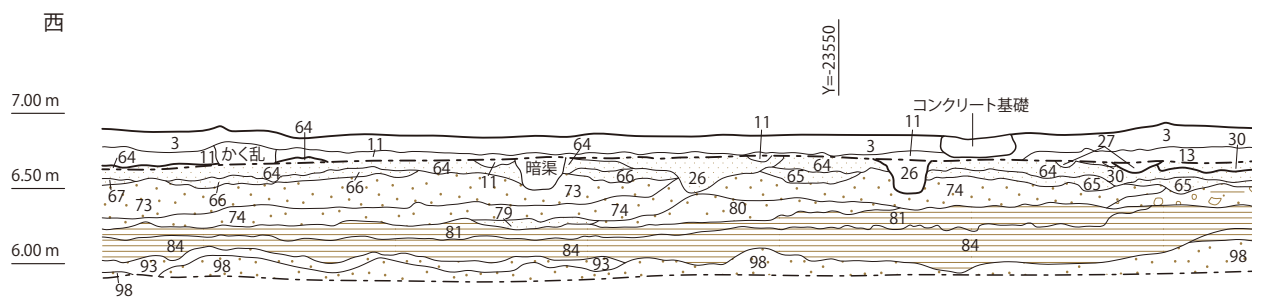
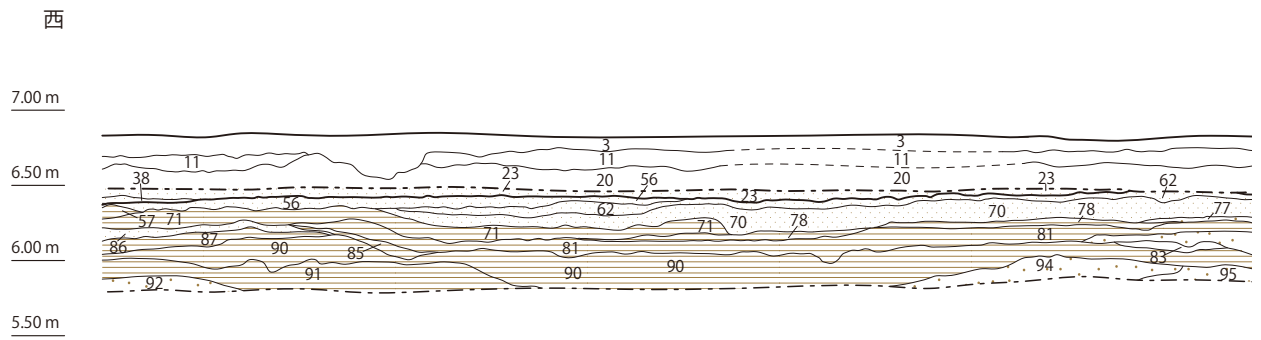
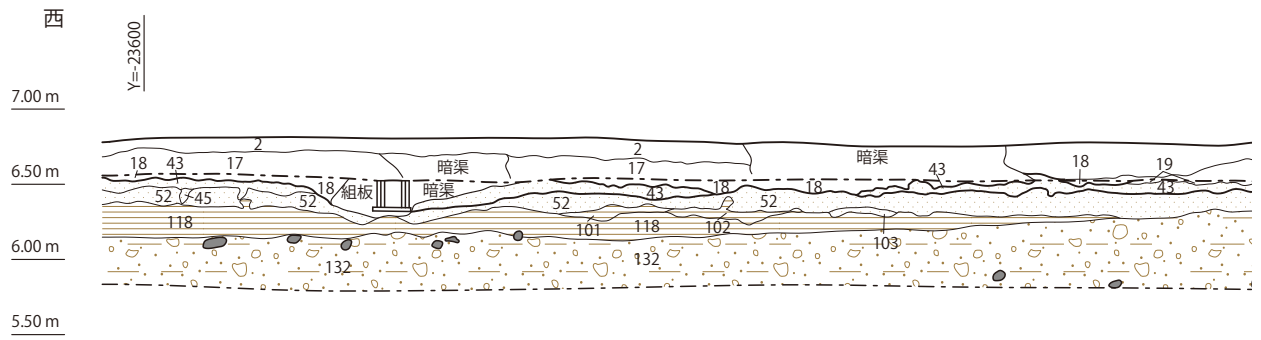


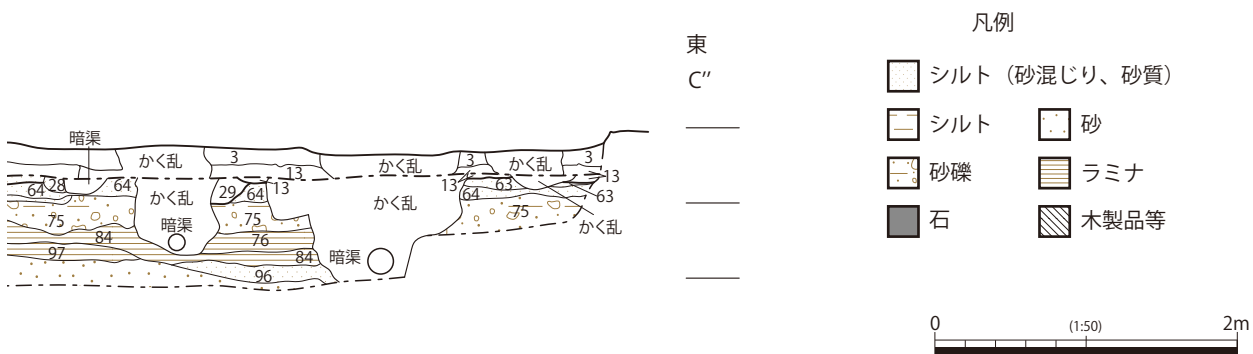
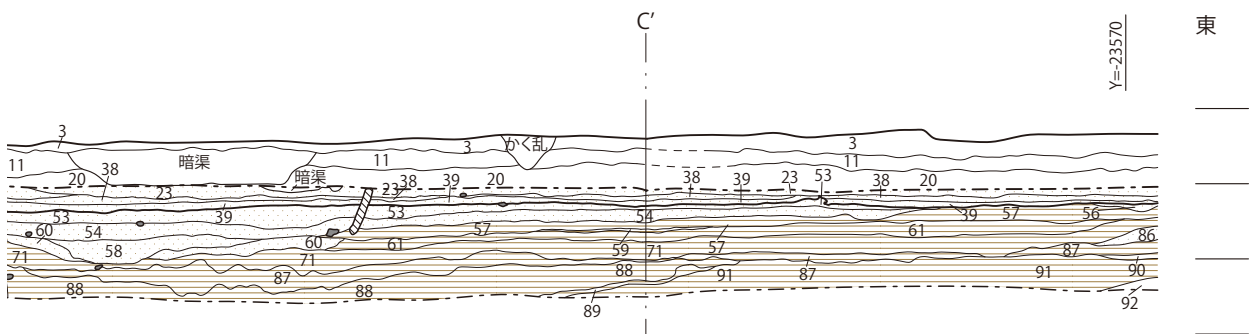
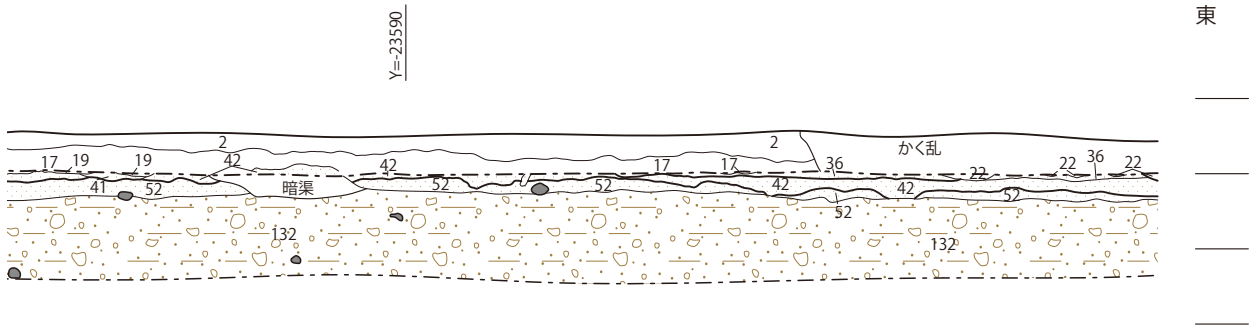
写真5 圃場整備以前水路





第14図 北壁土層断面図(1)





- 凡例
- シルト (砂混じり、砂質)
 - シルト
 - 砂礫
 - 石
 - 砂
 - ラミナ
 - 木製品等



第15図 北壁土層断面図(2)

- 1 2.5Y 4/1 黄灰色 砂混じりシルト φ1~3cm大の礫が5%混じる。
現代の植物遺体が多量に混入。圃場整備後の作土
- 2 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細砂混じりシルト φ1~5cm大の礫が5%混じる。
現代の植物の根が多量に混じる。圃場整備時の客土
- 3 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂混じりシルト シルトブロックが混じる。現代の植物毛根が多量に混じる。
高師小僧顕著。圃場整備時の客土
- 4 2.5Y 4/2 暗灰黄色 シルト 現代の植物の根を多量に含む。高師小僧あり。圃場整備時の客土
- 5 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂混じりシルト 下層由来のシルトブロック、φ5cm大の垂円礫混じる。ビニール片混じる。
圃場整備直前の水路埋土
- 6 5YR 4/8 赤褐色 礫~細砂 ラミナあり。圃場整備直前の水路埋土
- 7 10Y 4/1 灰色 砂混じりシルト 下層のシルトの巻きあがり。下部に粗砂が入る。圃場整備直前の水路埋土
- 8 2.5Y 4/1 黄灰色 砂混じりシルト φ5cm大の垂円礫が混じる。圃場整備直前の水路埋土
- 9 7.5Y 4/1 灰色 シルト 上半部は削平されている。圃場整備以前の作土
- 10 5Y 4/1 灰色 砂混じりシルト 圃場整備以前の作土
- 11 2.5Y 5/1 黄灰色 砂混じりシルト φ1~5cm大の礫が1%混じる。高師小僧顕著 圃場整備以前の作土
- 12 2.5Y 4/1 黄灰色 粗砂混じりシルト 11層のシルトに68・74層起源の粗砂が混じる。圃場整備以前の作土
- 13 5Y 4/1 灰色 シルト 下層を母材とするシルト質細砂が攪拌されて混じりあう。
φ3mm大の炭化物粒がわずかに混じる。高師小僧顕著。圃場整備以前の作土
- 14 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂混じりシルト φ1~3cm大の礫5%混じる。
16層に比べて締まり悪い。高師小僧顕著。圃場整備以前の作土
- 15 N 3/ 暗灰色 細砂混じりシルト 下層起源の砂質シルトブロックが40%混じる。圃場整備以前の作土
- 16 2.5Y 3/2 黒褐色 砂混じりシルト φ1~3cm大の礫5%混じる。
粘性あり。固く締まる。高師小僧顕著。圃場整備以前の作土
- 17 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細砂混じりシルト 現代の植物の根が混じる。高師小僧顕著。圃場整備前の作土か
- 18 7.5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト 白色のシルトブロックが多く混じる。炭片が多く混じる。高師小僧顕著。
- 19 2.5Y 3/2 黒褐色 砂混じりシルト φ3cm大の垂円礫が10%混じる。φ5mm大の炭粒が混じる。
- 20 2.5Y 3/1 黒褐色 シルト 粘性強い。φ1~5mm大の炭粒が混じる。
- 21 2.5Y 3/2 黒褐色 細砂混じりシルト 粘性強い。φ5mm大の炭粒が混じる。20層に似る。
- 22 2.5Y 3/2 黒褐色 細砂混じりシルト φ0.5~1cm大の礫が混じる。
- 23 2.5Y 4/2 暗灰黄色 砂混じりシルト φ1~5cm大の垂円礫が5%混じる。高師小僧顕著。
- 24 5Y 5/2 灰オリーブ色 礫混じり粗砂~中砂 シルトと細砂のラミナ挟在。
下部の粗砂中に植物遺体が多量に挟在。25層と一連の洪水堆積か
- 25 2.5Y 4/1 黄灰色 砂礫 粗砂中にφ1~15cm大の垂円礫・垂角礫が30%混じる。24層と一連の洪水堆積か。
- 186ピット 26 2.5GY 2/1 黒色 砂混じりシルト φ1mm大の炭化物粒が混じる。高師小僧が見られる。東側が186ピット埋土
- 185ピット 27 5Y 4/1 灰色 砂質シルト 5/6図-29層起源のシルト質細砂が斑状に混じる。東側が185ピット埋土
- 28 7.5Y 4/1 灰色 シルト質細砂 φ1cm大の細砂が斑状に混じる。
- 181ピット 29 2.5GY 2/1 黒色 シルト 64層に似た細砂~シルトブロックが混じる。東側が181ピット埋土
- 30 7.5Y 6/2 灰オリーブ色 細砂~シルト
- 31 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質シルト シルトブロックが不規則に混じる。高師小僧顕著。
- 32 5Y 7/2 灰白色 砂質シルト 細砂が多量に混じる。高師小僧顕著。
- 33 2.5Y 5/2 暗黄灰色 砂質シルト 細砂が斑状に混じる。固く締まる。高師小僧顕著。
- 34 2.5Y 6/2 灰黄色 砂質シルト 細砂が斑状に混じる。φ1~2mm大の炭粒が混じる。高師小僧顕著。
- 35 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質シルト φ0.5~1cm大の炭片が混じる。高師小僧顕著。
- 36 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂混じりシルト φ3~10cm大の垂円礫が20%混じる。φ2mm大の炭粒が混じる。
- 37 2.5Y 4/1 黄灰色 砂質シルト φ1~3cm大の垂角礫が5%混じる。
- 38 5Y 5/1 灰色 砂質シルト φ1~2cm大の垂角礫が1%混じる。
- 39 5Y 4/1 灰色 砂質シルト φ5mm大の炭粒がわずかに混じる。高師小僧顕著。40層と同一か。
- 40 2.5Y 5/1 黄灰色 砂混じりシルト φ2cm大の垂円礫が5%混じる。
φ2~5mm大の炭粒が混じる。39層と同一か。
- 41 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質シルト φ1~5mm大の炭粒が多く混じる。
- 42 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細砂混じりシルト 下層起源の砂質シルトが細かい斑状に混じる。
φ1~2cm大の炭粒が混じる。
- 43 2.5Y 4/2 暗灰黄色 砂質シルト 下層起源の砂質シルトブロックが斑状に40%混じる。
炭片が多量に混じる。高師小僧顕著。
- 44 5Y 4/1 灰色 砂質シルト 下層起源の細砂が細かい斑状に混じる。
- 45 7.5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト 生痕による擾乱あり。
- 46 2.5Y 6/2 灰黄色 砂質シルト φ0.5~1cm大の灰色シルトが斑状に40%混じる。生痕か。
- 47 2.5Y 6/1 黄灰色 シルト~細砂 48層と特徴は同じだが、高師小僧が円弧を描くように引き延ばされる。
- 48 2.5Y 6/2 灰黄色 細砂混じりシルト φ2~3mm大の炭粒がわずかに混じる。
49層の西半と同質。高師小僧顕著。
- 49 2.5Y 6/3 にぶい黄色 砂質シルト 東半は砂質、西半はシルト質。高師小僧顕著。
- 50 7.5Y 6/1 灰色 細砂混じりシルト 51層に似る。51層が還元化したものか。

第16図 北壁土層註記(1)

- 51 7.5Y 5/1 灰色 細砂混じりシルト ϕ 1~2cm大の礫がまばらに混じる。
- 52 7.5Y 5/1 灰色 砂質シルト ϕ 5mm未満大の炭粒が混じる。細砂が細かい斑状に混じる。53層と同一か。
- 53 7.5Y 4/1 灰色 砂質シルト ϕ 1~10mm大の炭粒が39層よりも多く、1%混じる。
高師小僧顕著。52層と同一か。
- 54 2.5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト 53層よりも明るい。 ϕ 5mm大の炭粒がわずかに混じる。高師小僧顕著。
- 55 7.5Y 4/1 灰色 砂質シルト 53層よりも明るい。54層よりも細砂量が多い。高師小僧顕著。
- 56 5Y 4/1 灰色 砂混じりシルト ϕ 0.5~1cm大の礫が1%4混じる。
 ϕ 5mm大の炭粒が1%混じる。高師小僧顕著。
- 57 5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト 細砂と有機物のラミナを挟在するが、乱れあり。生痕あり。
- 58 5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト ϕ 5mm大の炭粒が混じる。植物遺体多く挟在。
- 59 7.5Y 4/1 灰色 シルト ϕ 1mm大の炭粒がわずかに混じる。有機物のラミナ挟在。高師小僧顕著。
- 60 5Y 5/1 灰色 細砂混じりシルト 高師小僧顕著。
- 61 5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト 細砂と有機物のラミナを挟在するが、乱れあり。生痕あり。高師小僧顕著。
- 62 5Y 4/1 灰色 砂質シルト ϕ 5mm大の炭粒がわずかに混じる。高師小僧顕著。
- 63 5Y 5/2 灰オリーブ色 シルト混じり細砂 64層に似るが、砂質主体。
- 64 7.5GY 4/1 暗緑灰色 シルト 粗砂・礫が混じる。
- 65 5Y 4/2 灰オリーブ色 シルト~粗砂 74層を母材とする。
- 66 5Y 4/2 灰オリーブ色 シルト混じり粗砂 礫が少量混じる。高師小僧が見られる。73層を母材とする。
- 67 5Y 4/4 暗オリーブ色 シルト混じり粗砂 暗青色(5BG 4/1)のシルトが混じる。73・74層を母材とする。
- 68 5Y 4/4 暗オリーブ色 シルト混じり粗砂 暗緑灰色(10GY 4/1)のシルトが混じる。74層を母材とする。
- 69 5GY 4/1 暗緑灰色 シルト~粗砂 62層に比して砂質強い。 ϕ 1mm大の炭化物粒が微量に混じる。
- 70 5Y 4/1 灰色 砂質シルト ϕ 1~5mm大の炭粒がわずかに混じる。
62層よりも細砂が多く混じるが、高師小僧は少ない。
- 71 5Y 4/1 灰色 砂質シルト 細砂の細かいラミナ挟在するが、乱れあり。
上部にいくほどシルト質になる。70層よりも高師小僧が少ない。
- 72 10GY 5/1 緑灰色 細砂 70、77層に比して粒子が粗い。
- 73 5Y 4/4 暗オリーブ色 礫混じり粗砂~シルト
- 74 5Y 5/3 灰オリーブ色 粗砂 シルトがブロック状に混じる。 ϕ 1~2cm大の礫が混じる。
- 75 7.5Y 5/2 灰オリーブ色 礫~粗砂
- 76 7.5Y 5/1 灰 極細砂とシルトのラミナ
- 77 5BG 5/1 青灰色 細砂 70、72層に比して粒子が細かい。
- 78 5Y 4/1 灰色 細砂とシルトのラミナ ラミナに乱れあり。
- 79 5BG 4/1 暗青灰色 シルト混じり細砂 ϕ 3~5cm大のシルトブロックが混じる。
- 80 10BG 5/1 青灰色 中砂~細砂 上部に74層起源の粗砂が斑状に混じる。
- 81 5Y 4/1 灰色 シルト 細砂のラミナ挟在するが、乱れあり。
- 82 10BG 5/1 青灰色 細砂 上部に81層(シルト)の影響と考えられる、 ϕ 1~2cm大のシルトブロックが少量混じる。
- 83 10BG 4/1 暗青灰色 細砂混じりシルト 81層のシルトと80層の細砂が混ざりあった層。
80層堆積時に81層が削られたもの。
- 84 10BG 5/1 青灰色 粗砂~シルト 粗砂・中砂・細砂・シルトが互層状に堆積。
ラミナ明瞭。2~3回のイベントにより形成。
- 85 3Y 5/1 灰色 細砂と中砂のラミナ 植物遺体挟在。
- 86 5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト ϕ 5mm大の炭粒がわずかに混じる。
- 87 5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト 細砂の細かいラミナ挟在。 ϕ 1~10mm大の炭粒が1%混じる。
- 88 7.5Y 5/1 灰色 細砂とシルトのラミナ 細砂主体。植物遺体挟在。
- 89 7.5Y 5/1 灰色 細砂とシルトのラミナ 植物遺体を多量に挟在。
- 90 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 中砂 上部に細砂のラミナ挟在。
- 91 7.5Y 5/1 灰色 細砂 下部に粗砂のラミナ挟在。
- 92 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 粗砂 ϕ 0.5~2cm大の垂円礫が混じる。
- 93 10BG 5/1 青灰色 粗砂混じりシルト 上層(84層)の影響による粗砂が斑状に混じる。
- 94 10BG 5/1 青灰色 粗砂 ラミナ不明瞭。
- 95 10BG 5/1 青灰色 礫混じり粗砂
- 96 10BG 4/1 暗青灰色 粗砂混じりシルト ϕ 1~3mm大の炭化物が多く混じる。
- 97 2.5GY 6/1 オリーブ灰色 粗砂・中砂・細砂のラミナ 東側は細砂優勢。
- 98 10BG 5/1 青灰色 粗砂 ラミナ不明瞭。下層の影響と考えられる、 ϕ 1cm程度の円礫が微量に混じる。
- 99 7.5Y 5/1 灰色 砂質シルト ϕ 3~5mm大の炭粒がわずかに混じる。植物遺体の腐植痕顕著。
- 100 10BG 5/1 青灰色 シルト~細砂 99層に比して砂が多く混じる。
105.127層起源の砂が斑状に混じる。 ϕ 1mm未満大の炭化物が微量に混じる。

第17図 北壁土層註記(2)

- 101 7.5Y 4/1 灰色 中砂～細砂・シルトのラミナ 生痕あり。
- 102 7.5Y 4/1 灰色 細砂とシルトのラミナ 細砂主体。ラミナに乱れあり。
- 103 7.5Y 5/1 灰色 細砂混じりシルト
- 104 7.5Y 5/1 灰色 細砂混じりシルト 炭粒がわずかに混じる。細砂がラミナ状に挟在するが、生痕等により乱れる。
- 105 5GY 5/1 オリーブ灰色 砂質シルト ϕ 2～5cm大の垂円礫が5%混じる。
- 106 2.5Y 5/3 黄褐色 砂礫 ϕ 1～10cm大の角礫・垂角礫・垂円礫が不規則に混ざる。礫:砂 = 8 : 2
- 107 10BG 5/1 青灰色 礫～シルト ϕ 1～4cm大の礫が多量に混じる。
所々に灰色(N 4/)の粘質土が混じる。106層と一連だが、シルト質は106層に比して多い。
- 108 N 5/ 灰色 シルト～細砂 129層起源の細砂及び107層起源の礫・シルトが混じりあう。
- 109 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 砂礫 粗砂と、 ϕ 1～5cm大の円礫・垂円礫と、シルトブロックの混合。
- 110 5Y 4/1 灰色 シルト きめ細かく、粘性強い。
- 111 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 粗砂混じりシルト ϕ 5～10cm大の垂円礫が10%混じる。
- 112 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 砂礫 粗砂と、 ϕ 1～10cm大の垂円礫・垂角礫の混合。
- 113 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 砂混じりシルト ϕ 1～3cm大の円礫が5%混じる。
中砂～細砂がラミナ状に挟在するが、乱れあり。
- 114 5Y 5/1 灰色 シルトと細砂のラミナ シルト優勢。ラミナに乱れあり。生痕あり。
- 115 7.5Y 5/1 灰色 中砂とシルトのラミナ 中砂主体。
- 116 5Y 5/1 灰色 シルト 細砂とシルトブロックが不規則に混じる。杭の抜き取り痕あるいは生痕か
- 117 5Y 4/1 灰色 シルトと細砂のラミナ シルト主体。
- 118 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 シルトと細砂の細かいラミナ 細砂主体。炭粒がわずかに混じる。
- 119 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 粗砂～中砂
- 120 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 砂礫 ϕ 1～10cm大の円礫が主体で、隙間を粗砂～中砂が埋める。河床
- 121 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 中砂
- 122 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 粗砂
- 123 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 粗砂
- 124 5Y 5/1 灰色 粗砂混じりシルト
- 125 7.5Y 5/1 灰色 粗砂 シルトブロックが不規則に20%混じる。
- 126 5GY 5/1 灰色 粗砂 ϕ 1～5cm大の礫が10%混じる。
- 127 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 細砂 ラミナあり。 ϕ 0.5～1cm大の礫が1%混じる。
- 128 N 5/ 灰色 シルト～細砂 ϕ 1～2cm大の小礫が混じる。 ϕ 5mm大の炭化物が混じる。
- 129 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 細砂ラミナ
- 130 N 6/ 灰色 細砂～シルト ϕ 1mm大程度の炭化物が混じる。淘汰悪い。
- 131 N 6/ 灰色 細砂 ϕ 0.5～1cm大の小礫が混じる。ラミナ不明瞭。
- 132 10GY 5/1 緑灰色 粗砂と円礫の混ざり ϕ 1～10cm大の円礫を主体とする。河床

第 18 図 北壁土層註記 (3)

で浸食されている。断面図では連続性を示していないが、上層として 131～127 層が順次堆積したと推定される。細砂の 127 層の堆積後、流速が強まり、粗砂と中砂を主体とする 126～119 層が堆積する。その後、流速は弱まり、ラミナを形成する 118～113 層が堆積する。その後、再び流速が強まり、淘汰の悪い砂礫を含む 118～106 層が堆積する。105～99 層の堆積はラミナに擾乱が見られ、湿地化が進んだものと推定される。

132 層の東端は急角度で東へ落ち込んでいる。これは東西トレンチ断面で記載した 181 流路 (第 84 図) による浸食と推察される。発掘調査による掘削では河床面に達していないが、98・95～92 層は粗砂であり、河床に比較的近いものと推定される。

その上層は 76 層まで細砂とシルトのラミナが形成される。北壁断面東端から Y=-23,561 までの範囲に堆積する 75～73 層は砂礫であり、その上に堆積する 64 層までの粗砂は、東西トレンチで確認した、181 流路内のデルタ堆積物の連続と考えられる。デルタ堆積物と 132 層に挟まれた範囲は細砂とシルトの埋積が進み、湿地化したものと推測される。56 層より上層は第 2・3 遺構面の人間の活動に伴う土壌化層と考えられる。



写真 6 作業風景 (北側溝掘削)

(3) 南壁の土層堆積状況 (第 19～23 図、図版 7～9)

重機による表土の掘削後、調査区の南縁から 0.5m 北側に控えを取り、幅 2.5m の排水溝を掘削した。第 19・20 図に示した断面図では標高 6.8m 前後を通る一点鎖線以上は重機による表土掘削停止面までを、一点鎖線以下は排水溝の南側法面見通しを合成している。

北壁断面で触れた、昭和末～平成初頭にかけて行われた圃場整備事業によって、標高 6.9～7m 位の深度まで掘削が行われ、客土が盛られている。このときの掘削は、東端の $Y=-23,560$ から西 $-23,584\text{m}$ までは、基盤の河川性堆積物である砂礫層に及んでいる。

$Y=-23,620$ 以西の客土 (3 層) より下には、11・20・21 層といった黒色系のシルトが堆積している。上層の 11 層は比較的粘性が高く、圃場整備直前の水田作土と推定される。20 層以下についてもそれ以前の水田作土と考える。

東半側の $Y=-23,584 \sim -23,611$ の範囲では、客土 (2 層) より下は、6・7・15・16 層といった黄灰色系のシルトが堆積する。これらの層も圃場整備以前の水田作土とみられる。西半の作土と色調が異なるのは、作土の起源となった基盤層の性質によるものと推定される。

中央の $Y=-23,612 \sim -23,621$ の範囲はラミナが形成され、流路が存在していたことを示している。東西トレンチ断面でも触れた、下層の 163・36 及び近代～近世の所産と考えられるかく乱水路から一貫した水の通り道であることがうかがえる。

調査では 10・12～19・21 層の下面を第 1・2 遺構面とした。この遺構面を被覆する土層からは、検出した遺構の時代に帰属する遺物を含んでいたが、現代の作土層と、調査対象とした時代の遺物包含層とを区別することができなかった。

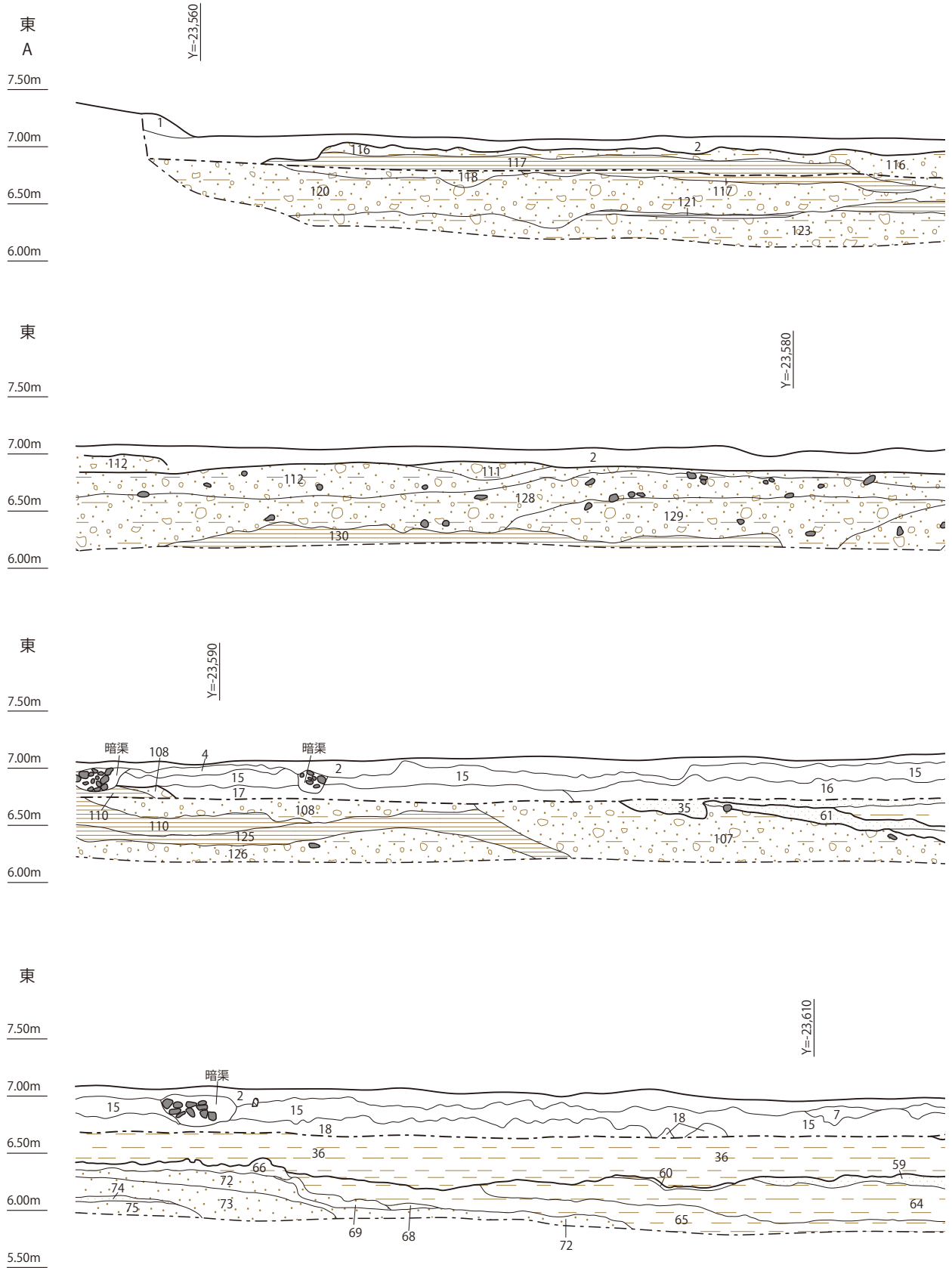
西半部の $Y=-23,631 \sim -23,644$ の範囲で、標高 6.5m の高さに木炭片や炭化物粒が混じる特徴的なシルトの 85 層が薄く堆積する。北壁断面で示した木炭片が多量に混入する 43 層と同様の、人間活動によって形成された層とみることができ、85 層の下面を第 3 遺構面とした。 $Y=-23,640$ 付近で検出した 1 炭化物範囲は 85 層に含まれる。86 層以下は河川性の自然堆積である。以下、河川の変遷を順に追って記載する。

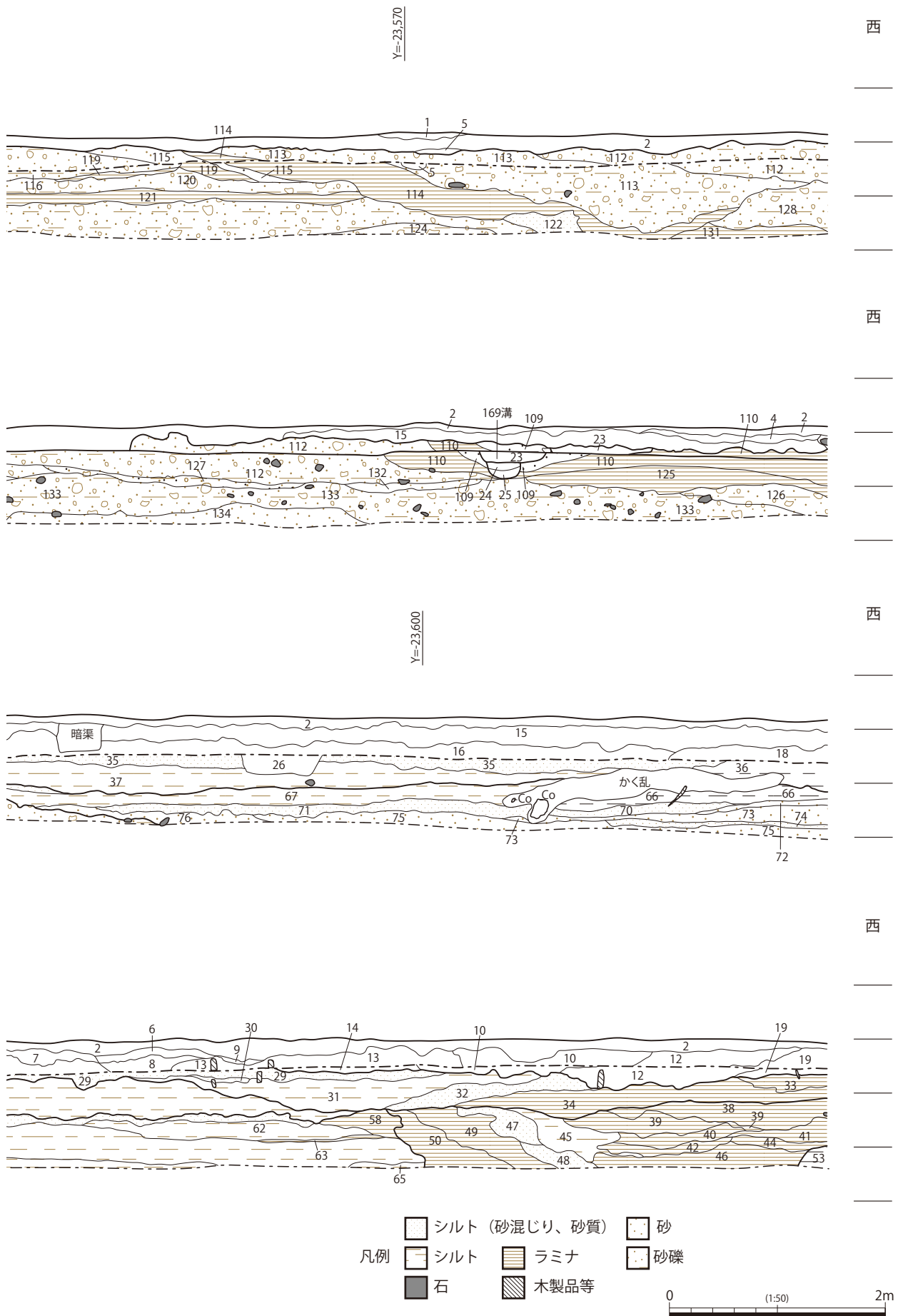
東半部の 107～131 層は砂礫層である。ラミナを形成する細砂・中砂の層を挟在しており、複数の河床の累積と見られる。西側の 107 層は第 3 遺構面 163 流路の河床面となっている。調査範囲ではもっとも古い時代の堆積物と考えられる。層位は厳密に特定できないが、120 あるいは 123 層相当の層 (第 84 図礫層①) から 7 世紀後半の須恵器片 (第 85 図 Po103) が出土しており、当該砂礫層は、7 世紀以降の堆積物と判断できる。

西半部の $Y=-23,622$ 以西に堆積する 105 層と 106 層は、東西トレンチで記載した 179 流路 (第 84 図) の河床と考えられる。98 層以下が 179 流路の埋積物であり、それらの上面を浸食して堆積する砂礫の 97 層は 176 流路 (第 84 図) である。176 流路は調査区の南西隅を東西方向にかすめて流れていたと考えられる。96～88 層が 176 流路の埋積物に相当する。

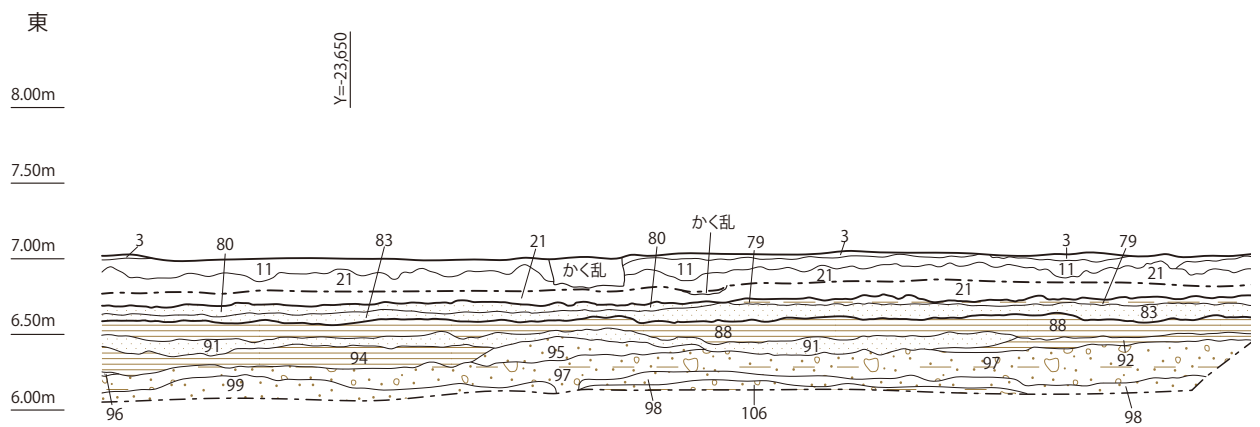
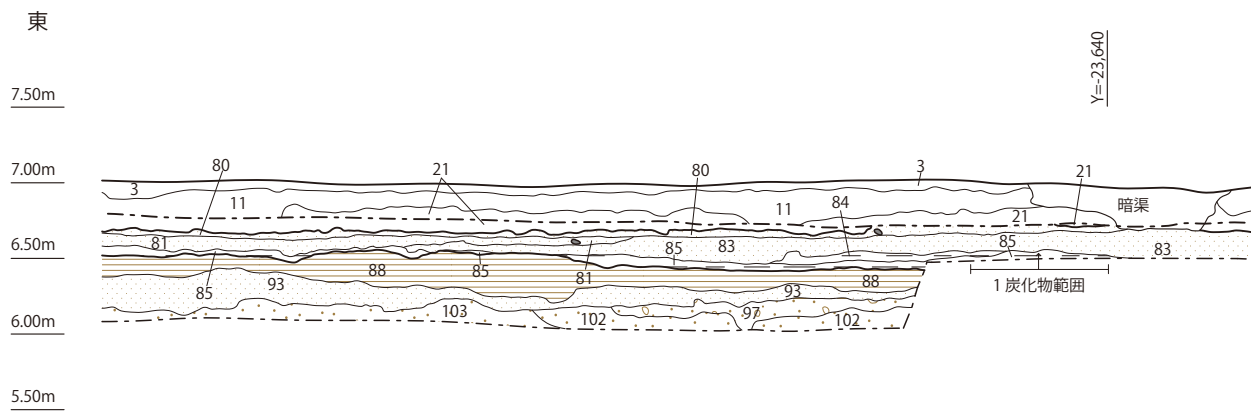
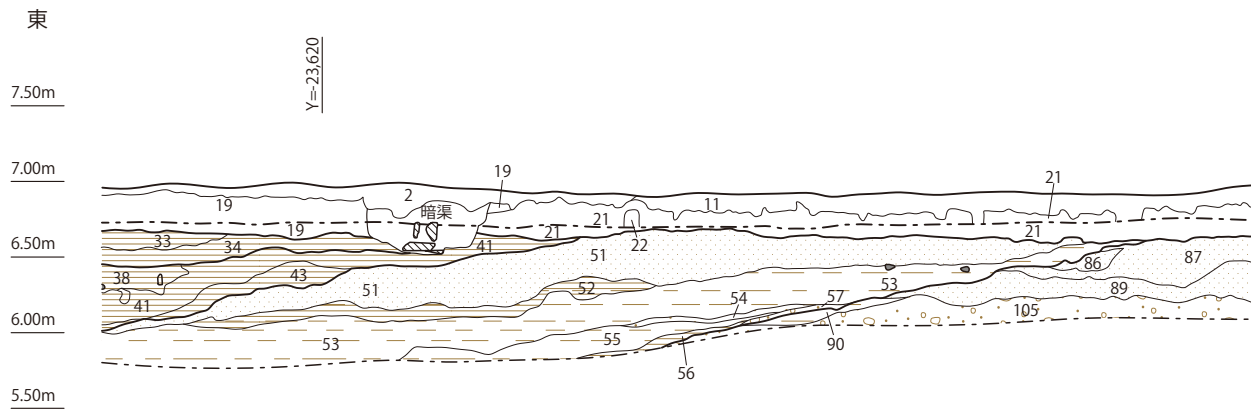
$Y=-23,625$ 付近で 105 層上面が東に傾斜し、89・87 層が埋積するが、これは東西トレンチ断面で記載した 181 流路 (第 84 図) と連続するものと推定される。

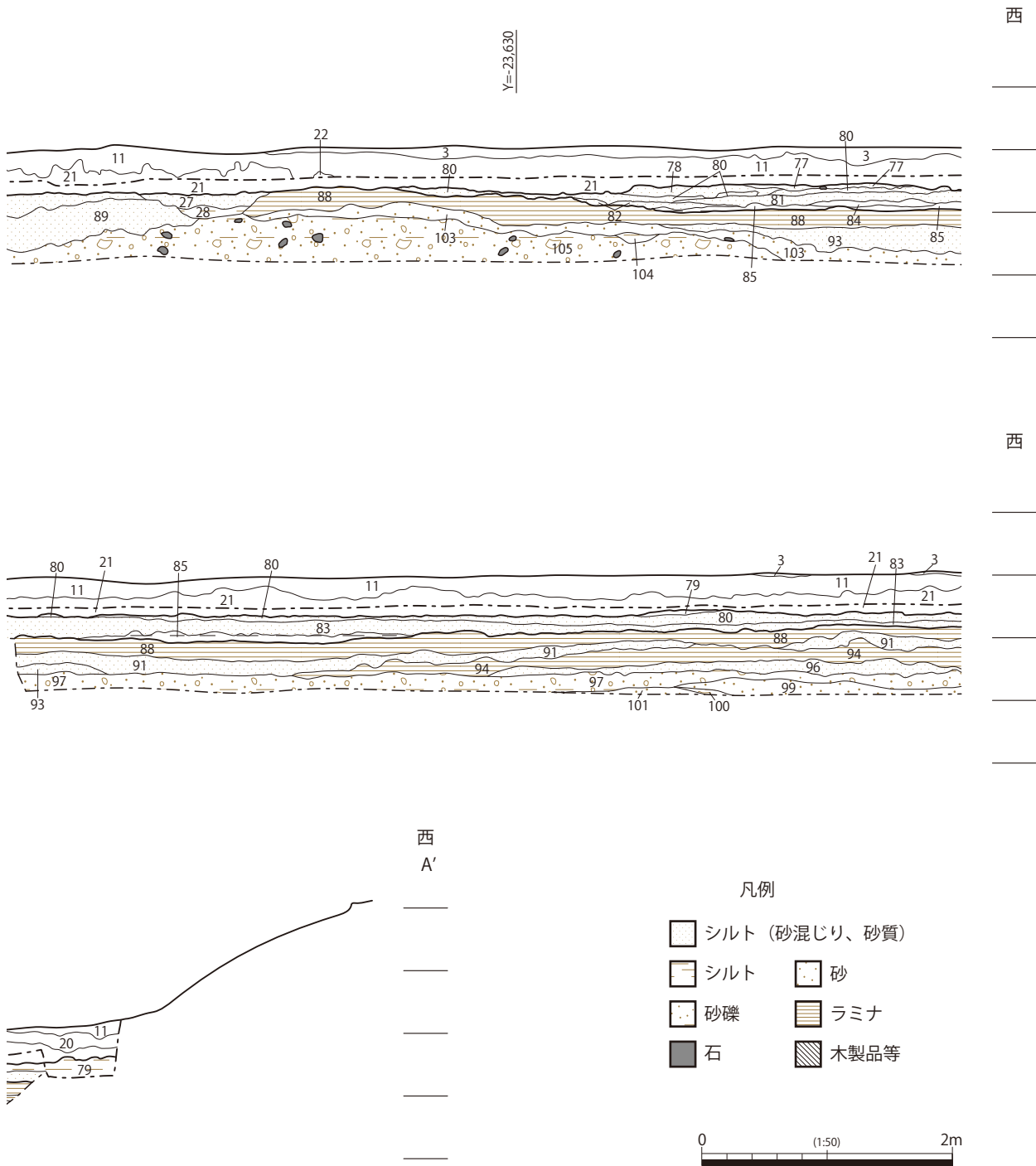
$Y=-23,625$ から東へ、181 河川埋積物を浸食して流れるのが 163 流路であり、東岸側は $Y=-23,595$ 付近で礫層 107 層を浸食する。76 層から 51 層までが 163 流路の埋積物であり、東西トレンチ断面と同様に、多量の植物遺体を挟在する。中央の $Y=-23,617$ 付近で 36 流路に浸食され、38～50 層のラ





第19図 南壁土層断面図(1)





第20図 南壁土層断面図(2)

- 1 2.5Y 5/3 黄褐色 礫混じりシルト φ1~2cm大の亜円礫が10%混じる。圃場整備後の現代の作土
- 2 2.5Y 5/1 黄灰色 礫・砂混じりシルト φ1~5cm大の亜円礫が10%混じる。圃場整備後の客土
- 3 10YR 5/1 褐灰色 シルト 現代作土
- 4 10YR 5/6 黄褐色 砂礫 粗砂中にφ1~3cm大の亜角礫が40%混じる。淘汰が悪い。
- 5 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂混じりシルト 粘性強い。圃場整備以前の作土か
- 6 2.5Y 5/1 黄灰色 シルト φ1~5cm大の亜角礫が5%混じる。高師小僧顕著。圃場整備以前の作土
- 7 2.5Y 4/1 黄灰色 砂質シルト 高師小僧顕著。圃場整備以前の作土
- 8 5Y 7/2 灰白色 粗砂と中砂のラミナ シルトのラミナ挟在。9層の同時異層か。流路か
- 9 5Y 7/2 灰白色 細砂とシルトのラミナ 8層の同時異層か。
- 10 2.5Y 4/2 暗灰黄色 中~細砂 シルトのラミナが挟在する。水路か
- 11 2.5Y 3/2 黒褐色 シルト 粘性強い。高師小僧顕著。圃場整備以前の作土
- 12 5Y 4/1 灰色 シルト~中砂のラミナ ラミナに乱れあり。粗砂層が挟在する。
- 13 5Y 5/1 灰色 砂質シルト 高師小僧顕著。14層と同一か。
- 14 5Y 5/1 灰色 粗砂混じり砂質シルト 高師小僧顕著。13層と同一か。
- 15 2.5Y 5/1 黄灰色 砂混じりシルト φ5mm大の礫粒が10%混じる。高師小僧顕著。
- 16 2.5Y 4/2 暗灰黄色 礫混じりシルト φ1cm大の角礫が5%混じる。高師小僧顕著。
- 17 2.5Y 4/1 黄灰色 礫混じりシルト φ1~5cm大の亜円礫・亜角礫が40%混じる。
- 18 5Y 1/3 オリーブ黒色 砂混じりシルト 灰オリーブ色(5Y 4/2)のシルトブロックが混じる。高師小僧顕著。
- 19 5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト 細砂・中砂のラミナ挟在。植物遺体挟在。高師小僧顕著。
- 20 10YR 2/1 黒色 シルト 白色粘土多く混じる。
- 21 10YR 3/2 黒褐色 シルト 高師小僧顕著。
- 22 2.5Y 6/4 にぶい黄色 粗砂 シルトブロックが混じる。杭の抜き取り痕か。
- 169 溝 23 2.5Y 4/1 黄灰色 礫混じり砂質シルト φ1~3cm大の亜円礫・亜角礫が40%混じる。
- 189 ピット 24 2.5Y 4/1 黄灰色 礫混じり砂質シルト φ1~3cm大の亜円礫が30%混じる。23層よりも砂質強い。
- 25 2.5Y 4/1 黄灰色 礫混じり砂質シルト φ1~3cm大の亜円礫が40%混じる。粗砂のラミナ挟在。24層よりも粘性強い。
- 26 7.5Y 3/2 オリーブ黒色 礫混じりシルト φ1cm大の角礫が5%混じる。土坑か
- 27 2.5Y 6/1 黄灰色 粗砂混じりシルト φ1~2cm大の亜角礫が1%混じる。
- 28 5Y 4/1 灰色 シルト 植物遺体挟在。
- 29 7.5Y 4/1 灰色 砂質シルト
- 30 5Y 4/1 灰色 砂混じりシルト 高師小僧顕著。
- 31 7.5Y 4/1 灰色 シルト 高師小僧顕著。
- 32 7.5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト 高師小僧顕著。
- 33 7.5Y 4/1 灰色 シルト 細砂のラミナが挟在する。植物遺体挟在。生痕による擾乱。
- 34 7.5Y 4/1 灰色 シルトと中砂の互層 樹枝等の植物遺体挟在。生痕による擾乱。
- 18 流路 35 7.5Y 4/1 灰色 礫混じりシルト φ1cm大の角礫が10%混じる。
- 36 7.5Y 4/1 灰色 シルト 樹枝等を含む大型植物遺体挟在。高師小僧顕著。
- 37 7.5Y 4/1 灰色 シルト φ1~10cm大の円礫・亜角礫が5%混じる。
- 38 10Y 4/1 灰色 シルトと中・細砂のラミナ シルト優勢。φ5cm大の亜円礫が3%混じる。生痕による擾乱あり。植物遺体挟在。
- 39 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色 中・粗砂とシルトのラミナ 生痕による擾乱。
- 40 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色 粗砂とシルトのラミナ 粗砂を主体とする。
- 41 7.5Y 3/1 オリーブ黒色 中・細砂とシルトのラミナ シルト主体。ラミナに乱れあり。植物遺体挟在。
- 42 5GY 5/1 オリーブ灰色 粗砂 シルトのラミナ挟在。
- 43 7.5Y 4/1 灰色 中砂とシルトのラミナ 植物遺体挟在。
- 36 流路 44 2.5GY 6/1 オリーブ灰色 中~粗砂 シルトのラミナ挟在。
- 45 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色 シルト 植物遺体挟在。生痕による擾乱。
- 46 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 シルトと細・中砂のラミナ ラミナに乱れあり。植物遺体挟在。
- 47 7.5Y 4/1 灰色 砂質シルト 植物遺体挟在。
- 48 7.5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト
- 49 5Y 4/1 灰色 砂質シルト 中砂のラミナ挟在、生痕か。植物遺体挟在。
- 50 5Y 4/1 灰色 細砂とシルトのラミナ 細砂やや優勢。植物遺体挟在。

第21図 南壁土層註記(1)

163 流路

- 51 7.5Y 4/1 灰色 粗砂混じりシルト ϕ 1~5cm大の亜円礫・亜角礫が5%混じる。植物遺体挟在。
- 52 7.5Y 5/1 灰色 中砂とシルトのラミナ 植物遺体挟在。
- 53 7.5Y 4/1 灰色 シルト 植物遺体多く挟在。
- 54 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 シルト質中・細砂 植物遺体挟在。
- 55 5Y 4/1 灰色 シルト 樹枝等の植物遺体大量に挟在。泥炭。
- 56 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 シルト質中・細砂 植物遺体のラミナ挟在。
- 57 5Y 5/2 灰オリーブ色 シルト混じり砂礫 ϕ 1~2cm大の亜円礫・亜角礫主体。
- 58 5Y 4/1 灰色 シルト 細砂のラミナ挟在。植物遺体挟在。高師小僧顕著。
- 59 7.5Y 4/1 灰色 砂質シルト 生痕による擾乱。高師小僧顕著。
- 60 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 シルト 高師小僧顕著。
- 61 5Y 4/1 灰色 礫・砂混じりシルト ϕ 1~10cm大の亜円礫・亜角礫が40%混じる。高師小僧顕著。
- 62 7.5Y 4/1 灰色 シルト 樹枝等の植物遺体が多く挟在。高師小僧顕著。
- 63 7.5Y 4/1 灰色 粗砂・中砂混じりシルト
- 64 7.5Y 4/1 灰色 シルト 樹枝等を含む大型植物遺体多く挟在。泥炭。
- 65 2.5Y 3/1 黒褐色 シルト 樹枝等を含む植物遺体大量に挟在。腐植のラミナあり。泥炭。
- 66 7.5Y 4/1 灰色 シルト ϕ 2~4cm大の亜円礫が1%混じる。高師小僧顕著。67層と同一か。
- 67 7.5Y 4/1 灰色 シルト ϕ 1~5cm大の円礫が1%混じる。植物遺体挟在。生痕あり。高師小僧顕著。66層と同一か。泥炭。
- 68 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 シルト混じり中砂 植物遺体を挟在する。69層の同時異層か。
- 69 7.5Y 5/1 灰色 シルト混じり細砂 微細な植物遺体多く挟在。68層の同時異層か。
- 70 7.5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト 植物遺体が多く挟在する。71層と同一か。
- 71 7.5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト 植物遺体が多く挟在する。生痕あり。70層と同一か。
- 72 7.5Y 5/1 灰色 シルト質細砂 73層よりシルトが多い。植物遺体挟在。
- 73 7.5Y 5/1 灰色 シルト質細砂 72層より細砂が多い。植物遺体が72層より多く挟在。
- 74 7.5Y 4/1 灰色 粗砂混じりシルト 植物遺体挟在。
- 75 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 中~粗砂 粗砂を主体とし、 ϕ 5mm大の亜角礫が1%混じる。東へ向かうにつれ砂粒が粗くなる。
- 76 7.5Y 5/1 灰色 シルト質細砂 植物遺体挟在。
- 77 2.5Y 4/2 暗灰黄色 砂混じりシルト 78,80層よりも暗い。高師小僧顕著。
- 78 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂混じりシルト 高師小僧顕著。
- 79 7.5Y 3/2 オリーブ黒色 シルト 80層起源のシルトブロックが混じる。
- 80 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 砂質シルト 細砂~中砂を含む。高師小僧顕著。
- 81 2.5Y 6/1 黄灰色 粗砂混じりシルト ϕ 3~5cm大の亜円礫が1%混じる。高師小僧顕著。
- 82 10Y 5/1 灰色 粗砂混じりシルト
- 83 7.5Y 6/1 灰色 砂混じりシルト ϕ 1~2cm大の亜角礫・粗砂が5%混じる。高師小僧顕著。
- 84 7.5Y 4/1 灰色 シルト 粘性強いが、85層に比べて砂質度強い。
- 85 5Y 4/1 灰色 シルト 粘性強い。炭片・炭化物粒が混じる。高師小僧顕著。
- 86 10Y 5/1 灰色 粗砂混じりシルト 87層中に粗砂がブロック状に混じる。 ϕ 1~3cm大の礫が30%混じる。
- 87 10Y 5/1 灰色 粗砂混じりシルト ϕ 1~3cm大の亜円礫・亜角礫が10%混じる。
- 88 7.5Y 5/1 灰色 シルト 東端は粗砂混じり。下位に細砂ラミナ挟在。
- 89 7.5Y 5/1 灰色 砂質シルト
- 90 7.5Y 5/1 灰色 シルト
- 91 7.5Y 4/1 灰色 砂質シルト
- 92 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 細砂~中砂 ラミナ認められる。
- 93 7.5Y 4/1 灰色 粗砂混じりシルト 91層と97層が混じりあった状態。
- 94 7.5Y 4/1 灰色 細砂~シルト シルトブロックが斑状に混じる。ラミナが認められる。
- 95 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 細砂 ラミナ不明瞭。
- 96 5Y 4/1 灰色 細砂~シルト 土壌化したシルトと細砂が混じりあう。ラミナが所々に見られる。
- 97 7.5GY 4/1 暗緑灰色 粗砂~礫
- 98 10GY 4/1 暗緑灰色 細砂 ラミナ不明瞭。
- 99 7.5GY 4/1 暗緑灰色 細砂 ラミナ不明瞭。
- 100 7.5GY 5/1 緑灰色 粗砂~礫

第22図 南壁土層註記(2)

- 101 10BG 4/1 暗青灰色 細砂 よく淘汰されるが、ラミナ不明瞭。
- 102 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色 細砂 ラミナ不明瞭。
- 103 2.5G 5/1 オリーブ灰色 粗砂 シルトブロックが混じる。
- 104 7.5Y 5/1 灰色 シルト 105層堆積後、上部から崩落したものか。
- 105 5G 5/1 緑灰色 粗砂・礫 φ1～10cm大の亜円礫主体。河床。
- 106 7.5GY 5/1 緑灰色 礫～粗砂
- 107 2.5Y 6/1 黄灰色 砂礫 粗砂とφ0.5～2cm大の亜円礫・亜角礫を主体とし、上部にφ5cm大の円礫・亜角礫が集中して分布する。
- 108 2.5Y 6/2 灰黄色 砂礫 φ0.5～1cm大の亜円礫・亜角礫を主体とし、φ5cm大の亜円礫が30%混じる。
- 109 10YR 5/6 黄褐色 φ3cm大の亜円礫～細砂 グレーディング堆積。
- 110 2.5Y 5/2 暗灰黄色 細砂と中砂のラミナ 砂礫のラミナが挟在する。
- 111 10YR 6/6 明黄褐色 砂礫 シルト質の中～粗砂中にφ1～8cm大の円礫が70%混じる。
- 112 10YR 6/6 明黄褐色 砂礫 φ1～10cm大の亜円礫・亜角礫を主体とする。淘汰悪い。
- 113 2.5Y 6/6 明黄褐色 砂礫 φ1～8cm大の円礫・亜円礫・亜角礫を主体とする。堆積下層はシルトブロックが混じり淘汰悪い。中層以上は水平方向に礫の大きさが揃い、淘汰が良い。
- 114 2.5Y 6/2 灰黄色 細砂 細かいラミナを形成する。中砂のラミナ挟在。
- 115 2.5Y 6/4 にぶい黄色 礫混じり粗～中砂 φ1～4cm大の亜円礫が50%混じる。
- 116 10YR 5/6 黄褐色 砂礫 粗砂中にφ0.5～5cm大の円礫・亜円礫・亜角礫が50%以上混じる。水平方向に礫の大きさが揃う。
- 117 2.5Y 5/2 暗灰黄色 中砂 細かいラミナあり。
- 118 2.5Y 5/4 黄褐色 砂礫 中砂中にφ1～5cm大の亜円礫・亜角礫が60%混じる。
- 119 2.5Y 6/1 黄灰色 細砂混じりシルトと細砂の互層 φ1～2cm大の円礫が20%混じる。
- 120 2.5Y 5/4 黄褐色 砂礫 粗～中砂中にφ0.5～10cm大の円礫・亜円礫が80%混じる。西側では細砂の層を挟在する。水平方向に礫の径が揃う。
- 121 2.5Y 6/2 灰黄色 中～細砂 ラミナあり。
- 122 7.5Y 5/1 灰色 細砂混じりシルト
- 123 5Y 6/2 灰オリーブ色 礫混じり粗砂 φ0.5～5cm大の亜円礫が混じる。淘汰が悪い。
- 124 2.5GY 6/1 オリーブ灰色 礫混じり粗砂 φ1～2cm大の円礫が20%混じる。
- 125 7.5Y 6/1 灰色 細砂～粗砂・砂礫のラミナ 砂礫はφ0.5～3cm大の亜円礫・亜角礫が混ざり、淘汰が悪い。
- 126 7.5Y 6/1 灰色 砂礫 粗～中砂にφ1～10cm大の亜円礫・亜角礫が70%以上混じる。
- 127 2.5GY 7/1 明オリーブ灰 シルト混じり粗～中砂 φ1～2cm大の円礫が10%混じる。
- 128 5YR 4/6 赤褐色 砂礫 φ1～2cm大の亜円礫を主体とし、φ5～10cm大の亜円礫・亜角礫が40%混じる。
- 129 7.5YR 5/6 明褐色 砂礫 φ1～2cm大の亜円礫を主体とし、φ3～5cm大の亜円礫・亜角礫が30%混じる。
- 130 5B 5/1 青灰色 粗～中砂 ラミナあり。φ1～3cm大の亜円礫が5%混じる。
- 131 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 粗砂と中砂の互層
- 132 2.5GY 7/1 明オリーブ灰 砂礫 中砂にφ1～2cm大の亜円礫・亜角礫が50%混じる。
- 133 7.5Y 5/6 明褐色 砂礫 φ0.5～5cm大の亜円礫・亜角礫を主体とする。淘汰が悪い。
- 134 10G 6/1 緑灰色 粗～中砂 グレーディング堆積。

第23図 南壁土層註記(3)

ミナ形成層が複雑に切りあいながら埋積する。163流路と36流路の上面は18流路の埋積物である35～37層によって覆われる。この埋積物は、かく乱流路の埋土28～34層によって浸食される。このかく乱流路については南壁断面では東西トレンチで観察したような、明瞭な段階を追うことができなかったが、西から東へと遷移する点は共通している。



写真7 作業風景(南側溝掘削)



写真8 作業風景(高所作業車による撮影)

(4) 西壁の土層堆積状況 (第24～27図、図版9・10)

重機による表土の掘削後、調査区の西縁から0.5m東側に控えを取り、幅2.5mの排水溝を掘削した。第24、25図に示した断面図では標高6.8m前後を通る一点鎖線以上は重機による表土掘削停止面までを、一点鎖線以下は排水溝の東側法面見通しを合成している。

圃場整備事業に伴う客土(3層)及び作土(2層)は断面図北半側の、 $X=-55,285$ 以北、標高6.8m前後より上に堆積し、圃場整備事業直前まで使われていたと見られる作土(1層)は、断面図南寄りの、 $X=-55,309$ 以南に若干残存する。これは、地形が南から北へと緩やかに傾斜し、さらに圃場整備時の掘削深度が、北側が深くなっていることによる。4層以下16層までが旧作土であり、16層下面が第1・2遺構面に相当する。

$X=-55,310$ の21層で構成される擬似畦畔の29擬似畦畔(第29図)は、18層に被覆されるため、18層が29擬似畦畔の作土に相当する。

断面図北側の $X=-55,270$ 以北では、16層下面に23層が堆積する。23層はシルトブロックが不規則に混じるという特徴から、人為層(作土)と考えられる。この23層の下面に、 $X=-55,261$ ～ $-55,272$ の範囲に炭粒が混じる特徴的な層が堆積する。これらは北壁断面で記載した39～43層と同じ性格の人為層と認識し、その下面を第3遺構面として扱った。

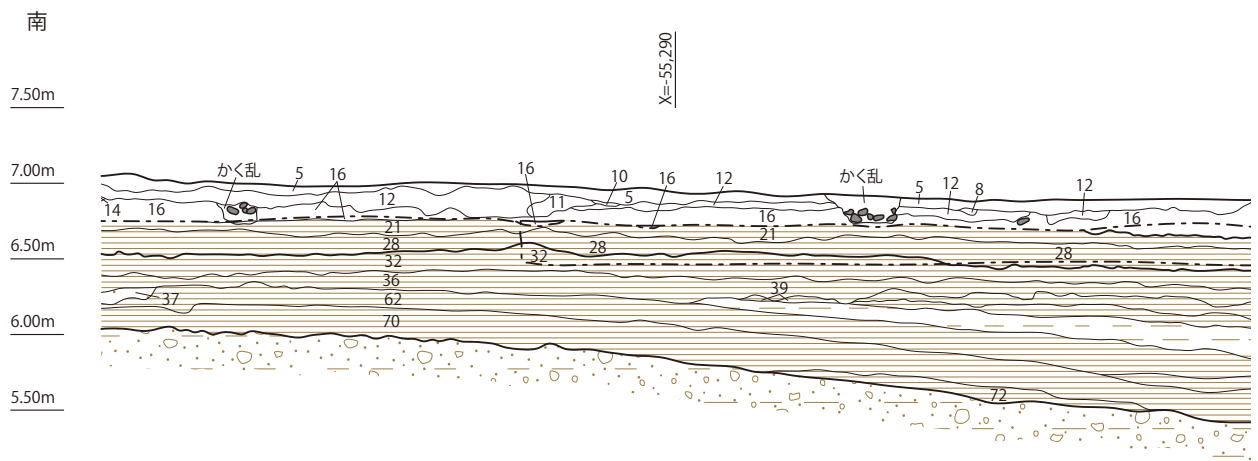
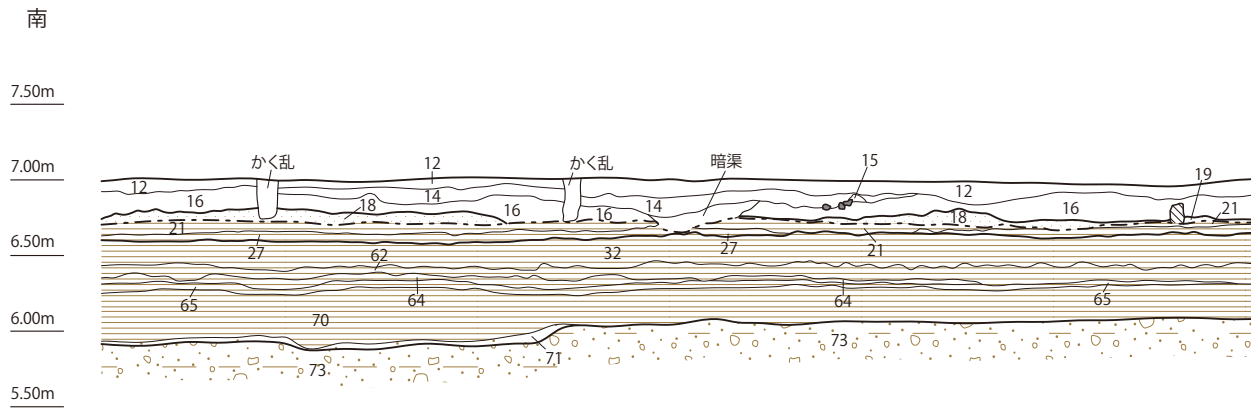
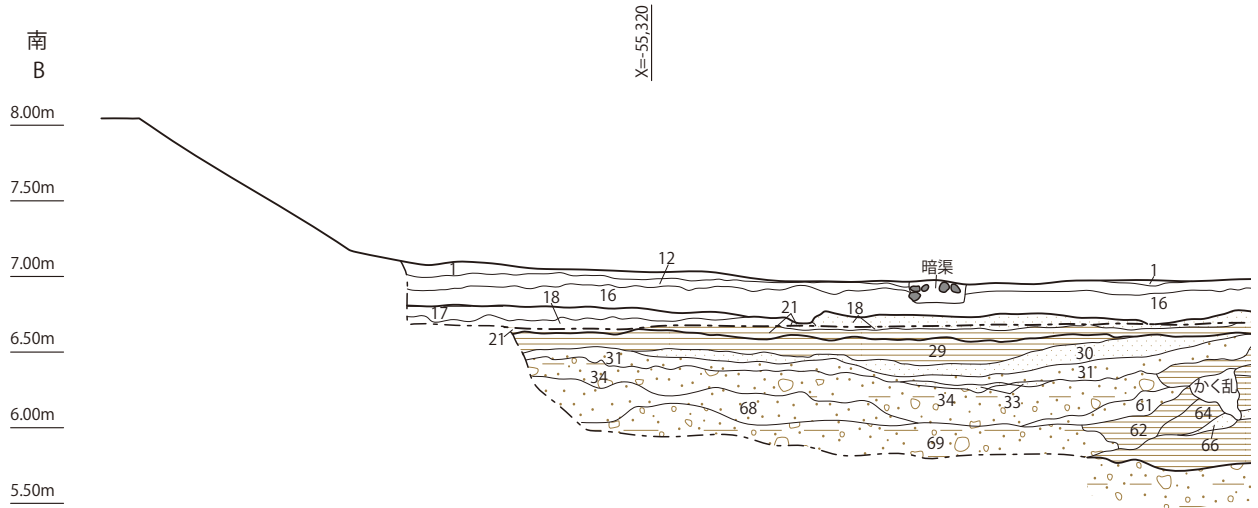
断面図中央の $X=-55,276$ ～ $-55,303$ の範囲に堆積する28層は、東西トレンチ断面図74層と同一層の、135流路内堆積物であり、その下層は32層である。

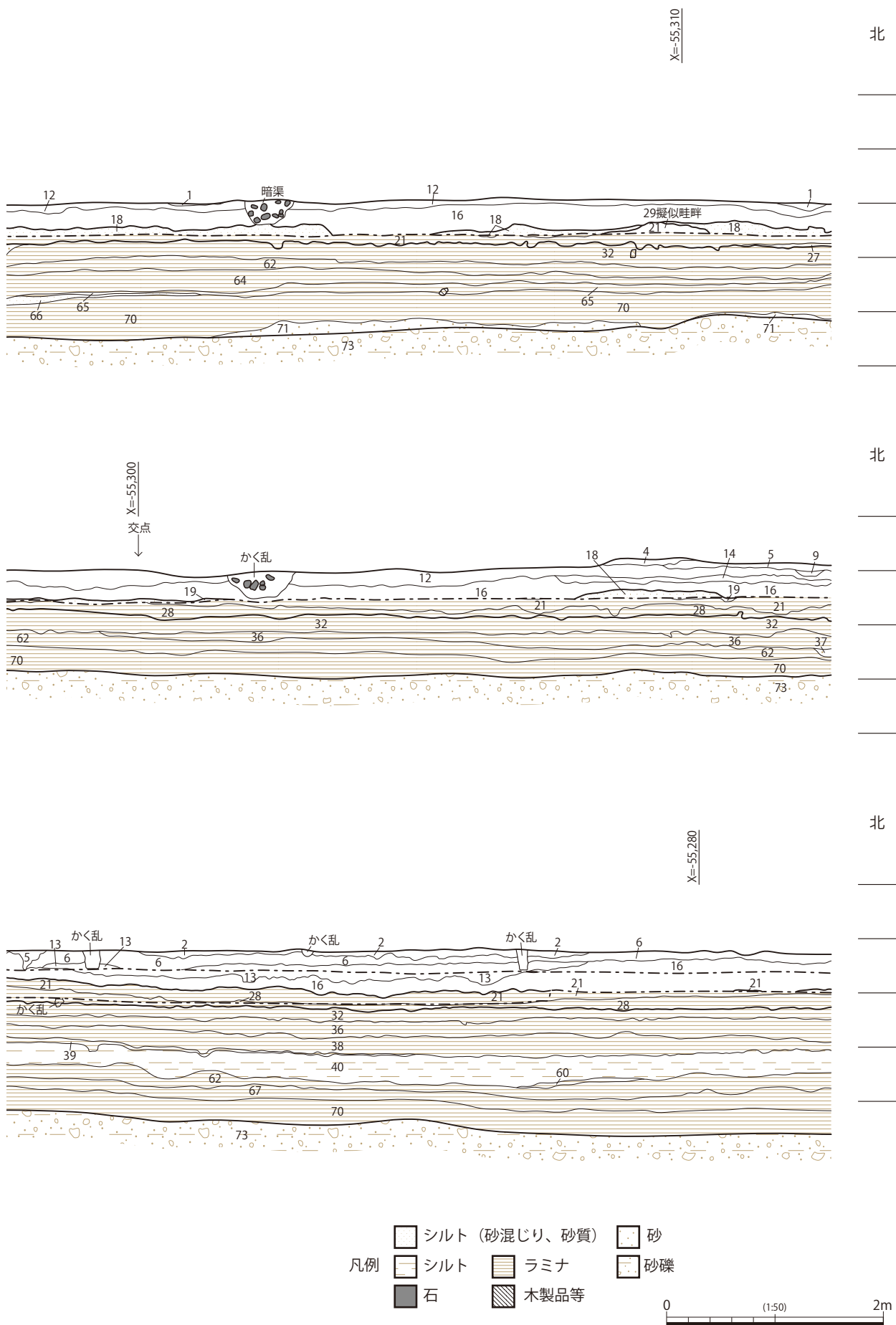
南壁断面で、85層下面すなわち88層上面を第3遺構面としたが、この南壁断面図の88層は西壁断面図の29層と同一である。さらに29層の上面は、その下層の30～32層上面と不整合面を共有する。このことにより、南壁断面図南端から北へ $X=-55,276$ までの範囲の、29～32層上面の不整合面と135流路(第74図)内堆積層下面を第3遺構面として扱った。

第3遺構面以下の層については、北端の45層は、その下層の46層が土壌化した層と考えられる。46層は植物遺体の腐植痕跡が認められ、湿地的な環境下における自然堆積層と推定される。南側の不整合面および135流路内堆積層以下は、いずれも河川性の自然堆積層である。断面図南端の標高6.5m以下に堆積する砂礫層34層は、南壁断面図西端の97層と同一であり、176流路(第84図)の河床堆積物である。これより上層の29層までが176流路の埋積物である。

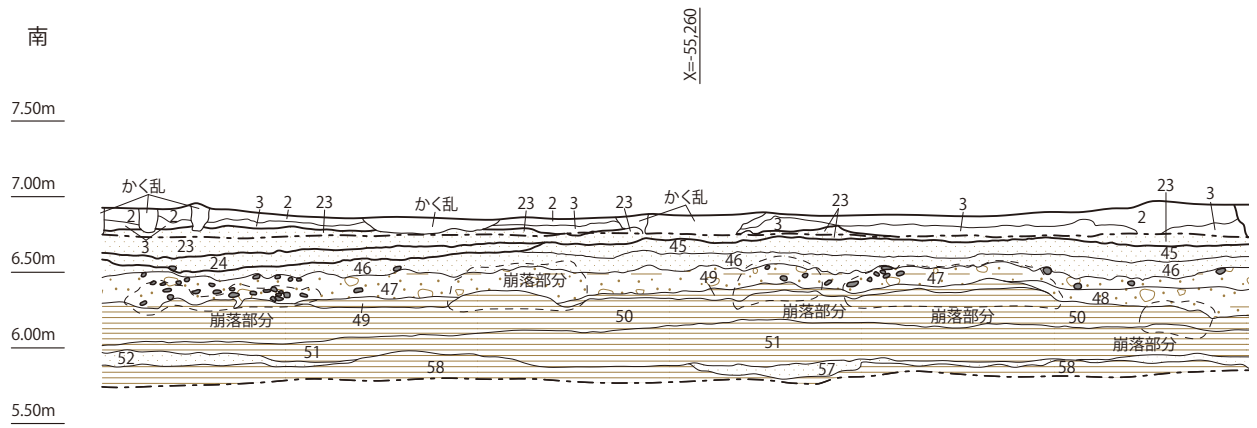
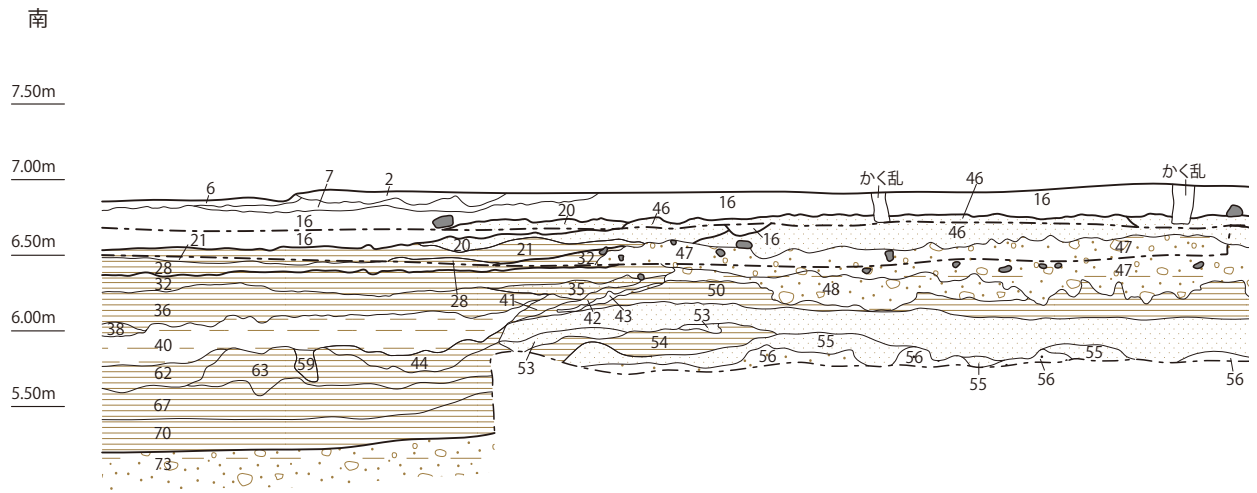
南端部の最下層に堆積する砂礫層69層は、南壁断面図の106層と連続する。すなわち179流路(第84図)の河床堆積物である。69層の北端を被覆する62層と、その下層の64層は、かく乱層を挟んで東側の水平堆積の層と同一であるが、南の69層側へ斜行している。これは176流路の34層の堆積後、何らかの圧力が加わったことが原因で、水平堆積層が褶曲したものと考えられる。73層は179流路に先行する178流路(第84図)の河床であり、その直上層の72層から61にかけての堆積物は、連続性のある堆積であるため、178流路の堆積物ととらえることにした。

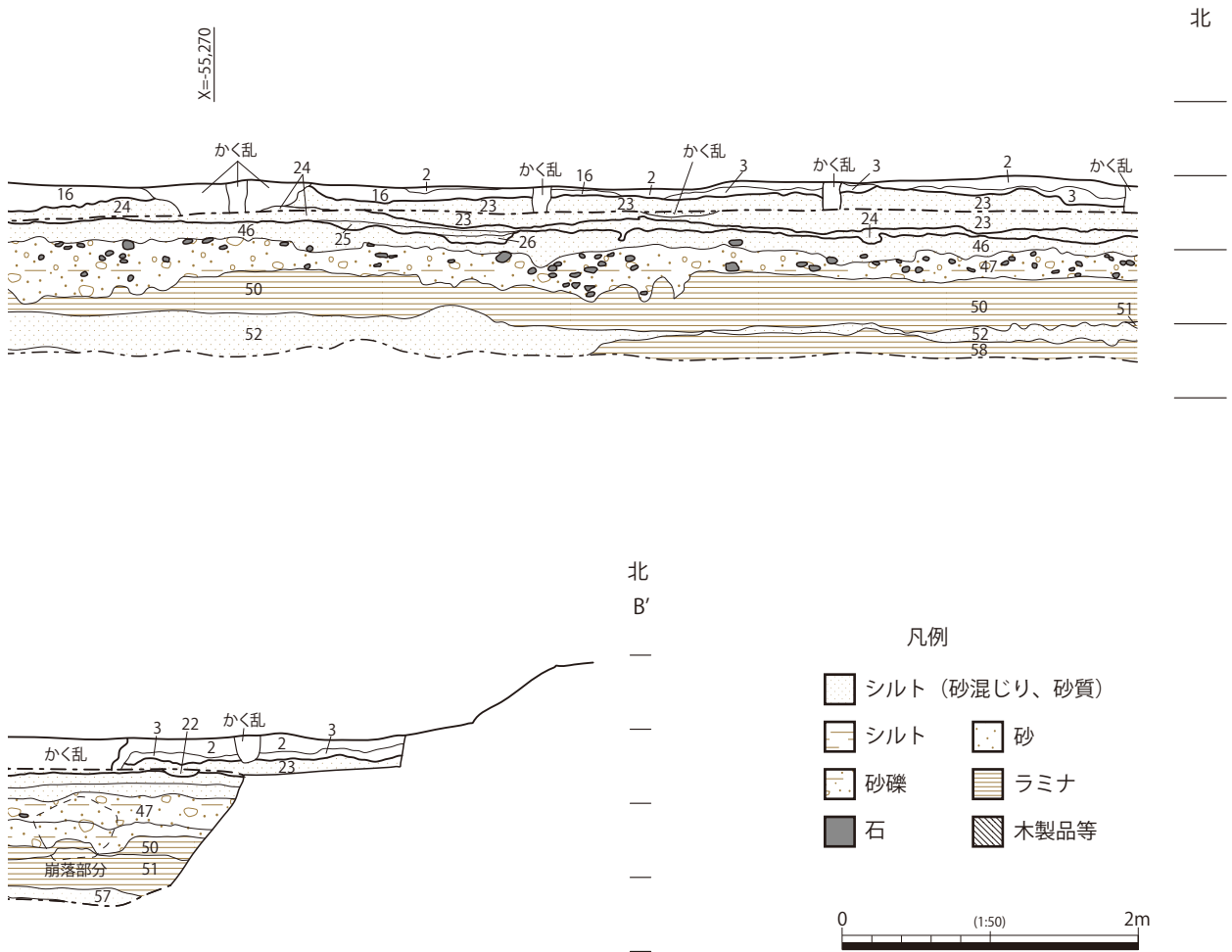
178流路の堆積物は、切りあいから4つのユニットに区分される。下層から、 $X=-55,318$ ～ $-55,276$ 間の59～73層と $55,268$ ～ $-55,255$ 間の57・58層(178流路-1)、 $X=-55,276$ ～ $-55,255$ 間の49～56層(178流路-2)、 $X=-55,275$ ～ $-55,255$ 間の46～48層(178流路-3)、 $X=-55,300$ ～ $-55,275$ 間の35～44層(178流路-4)がそれらに当たる。 $X=-55,318$ ～ $-55,306$ 間の河床礫73層が窪み、中砂層71層が堆積する。発掘調査中に178流路堆積物の掘り下げを進めていたところ、窪みの範囲を検出し、177流路と呼称したが、実際には178流路と同一とみなされる。





第24図 西壁土層断面図(1)





第25図 西壁土層断面図(2)

- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 12層に比べてやや暗い。白色粘土少量混じる。高師小僧顕著。
- 2 2.5Y 4/1 黄灰色 砂混じりシルト ϕ 1~3cm大の礫が5%混じる。現代の植物遺体が多量に混入。
- 3 2.5Y 5/1 黄灰色 砂質シルト シルトブロックが不規則に混じる。高師小僧顕著。圃場整備後の床土か
- 4 5Y 4/2 灰オリーブ色 砂質シルト しまり弱い。
- 5 2.5Y 4/2 暗灰黄色 砂質シルト しまり弱い。
- 6 2.5Y 6/2 灰黄色 砂混じりシルト 高師小僧顕著。
- 7 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂混じりシルト ϕ 2mm大の炭粒が1%混じる。高師小僧顕著。
- 8 2.5Y 3/1 黒褐色 シルト
- 9 7.5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト
- 10 5Y 5/2 灰オリーブ色 シルト
- 11 5Y 4/1 灰色 シルト 粗砂少量混じる。
- 12 10YR 2/1 黒色 シルト 白色粘土多く混じる。
- 13 2.5Y 3/2 黒褐色 砂混じりシルト ϕ 1~5mm大の礫粒が10%混じる。16層より明るい。高師小僧顕著。
- 14 2.5Y 4/2 暗灰黄色 シルト 16層に比して砂質強い。
- 15 5Y 3/2 オリーブ黒色 シルト 16層に比して砂質強い。
- 16 10YR 3/2 黒褐色 シルト 高師小僧顕著。
- 17 7.5Y 3/2 オリーブ黒色 シルト シルトブロックが混じる。
- 18 7.5Y 6/1 灰色 砂混じりシルト ϕ 1~2cm大の垂角礫・粗砂が5%混じる。高師小僧顕著。
- 19 5Y 4/3 暗オリーブ色 シルト 21層起源の細砂が斑状に混じる。
- 20 5Y 5/1 灰色 細砂混じりシルト ϕ 5mm大の炭粒が1%混じる。21層の土壌化。
- 21 5Y 5/1 灰色 砂質シルト 細砂のラミナ挟在。擾乱あり。
- 22 2.5Y 3/1 黒褐色 細砂混じりシルト 下層起源の砂質シルトが、 ϕ 5~10mmの斑状に混じる。 ϕ 5mm大の炭片が混じる。
- 23 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質シルト シルトブロックが不規則に混じる。高師小僧顕著。
- 24 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質シルト ϕ 3~10mm大の炭粒が10%混じる。 ϕ 5mm前後大の淡灰色の斑が不規則に混ざる。高師小僧顕著。
- 25 5Y 4/1 灰色 砂質シルト ϕ 5mm大の炭粒がわずかに混じる。 ϕ 5mm前後大の淡灰色の斑が不規則に混ざる。高師小僧顕著。
- 26 7.5Y 5/1 灰色 砂質シルト ϕ 5mm大の炭粒がわずかに混じる。 ϕ 5mm前後大の淡灰色の斑が不規則に混ざる。
- 27 5Y 5/6 オリーブ色 細砂 シルト質所々に混入。ラミナ認められる。
- 135 流路 28 2.5Y 6/4 にぶい黄色 細砂とシルトのラミナ 細砂主体。
- 29 7.5Y 5/1 灰色 シルト 下位に細砂ラミナ挟在。
- 30 10Y 5/1 灰色 砂混じりシルト マンガン斑顕著
- 31 10Y 5/1 灰色 細砂 ラミナ不明瞭。
- 32 5Y 5/1 灰色 砂質シルトと細砂のラミナ 砂質シルト主体。ラミナに擾乱あり。
- 33 10G 5/1 緑灰色 砂混じりシルト 31層起源の砂が混入する。
- 34 7.5GY 4/1 暗緑灰色 粗砂~礫
- 35 5Y 5/1 灰色 砂質シルト 36層よりも砂分多い。
- 36 5Y 5/1 灰色 砂質シルト 細砂のラミナ挟在。擾乱あり。
- 37 2.5Y 5/1 オリーブ灰色 細砂 62層起源のシルトが斑状に20%混じる。
- 38 5Y 4/1 灰色 砂質シルト 底部に波状の細砂ラミナあり。 ϕ 3mm大の炭粒がわずかに混じる。
- 39 5Y 4/1 灰色 細砂とシルトのラミナ
- 40 2.5Y 4/1 黄灰色 シルト
- 41 5Y 5/1 灰色 極細砂とシルトのラミナ
- 42 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 シルトと細砂のラミナ
- 43 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 礫混じり細砂 ϕ 3~5cm大の垂円礫が50%混じる。48層からの流入か。
- 44 5Y 4/1 灰色 砂質シルト 細砂のラミナ挟在。 Φ 5mm大の炭化物片・植物遺体が混じる。
- 45 2.5Y 6/2 灰黄色 砂質シルト ϕ 2~3mm大の炭粒がわずかに混じる。層相は46層に似る。高師小僧顕著。
- 46 7.5Y 5/1 灰色 砂質シルト ϕ 3~5mm大の炭粒がわずかに混じる。植物遺体の腐植痕顕著。
- 47 2.5Y 5/3 黄褐色 砂礫 ϕ 1~10cm大の角礫・垂角礫・垂円礫が不規則に混ざる。礫:砂 = 8:2
- 48 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 礫混じり粗砂 ϕ 1~5cm大の垂円礫・垂角礫およびシルトブロックが不規則に30~40%混じる。
- 49 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 中砂ラミナ
- 50 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 細砂と中砂のラミナ 水平のラミナ。粗砂のラミナ挟在。

第26図 西壁土層註記(1)

- 51 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 細砂ラミナ
 52 5Y 4/1 灰色 砂混じりシルト ϕ 5~10mm大の礫粒が5%混じる。
 53 7.5Y 5/1 灰色 砂混じりシルト
 54 2.5Y 6/6 明黄褐色 中砂と粗砂のラミナ ϕ 1~5cm大の垂円礫・垂角礫・シルトブロックが30%混じる。
 55 5Y 5/1 灰色 礫・砂混じりシルト ϕ 1~3cm大の垂円礫・垂角礫が40%混じる。固くしまる。
 56 2.5Y 6/8 明黄褐色 礫混じり粗砂 ϕ 1~3cm大の垂円礫・垂角礫が40%混じる。
 57 5Y 5/1 灰色 砂混じりシルト 粘性強い。
 58 7.5Y 5/1 灰色 細砂とシルトのラミナ
 59 5Y 4/1 灰色 細砂混じりシルト 細砂のラミナが乱れる。粘性強い。擾乱痕。
 60 5Y 4/1 灰色 細砂とシルトのラミナ
 61 10Y 5/1 灰色 細砂 ラミナ不明瞭。
 62 5Y 5/1 灰色 細砂混じりシルト 細砂のラミナと植物遺体挟在。
 63 5Y 5/1 灰色 砂質シルト 細砂のラミナと植物遺体挟在。
 64 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 細砂とシルトのラミナ 所々攪拌されたように見えるが、全体的にラミナが見られる。
 ϕ 1mm以下の炭化物粒が混じる。マンガン斑顕著。
 65 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 シルト~細砂 シルトを主体とするラミナ形成。 ϕ 1mm以下の炭化物粒が混じる。
 66 10Y 4/1 灰色 砂質シルト ϕ 5~10mm大の木片及び炭化物粒が多く混じる。
 67 2.5Y 4/1 灰色 シルト 細砂のラミナ挟在。植物遺体のラミナ多量に挟在。
 68 10G 6/1 緑灰色 粗砂 極細砂~礫が混じる。ラミナ不明瞭。
 69 7.5Y 4/2 灰オリーブ色 粗砂~礫 176河川古段階河床礫。
 70 5GY 5/1 オリーブ灰色 細砂とシルトの互層 ラミナ形成。
 71 5Y 5/3 灰オリーブ色 中砂 ラミナ不明瞭。
 72 5GY 5/3 オリーブ灰色 中砂 ラミナあり。
 73 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 礫~粗砂 粗砂と ϕ 1~15cm大の垂円礫・垂角礫が混ざる。177流路河床礫。

第27図 西壁土層註記(2)

178 流路-1の堆積は、70層は細砂とシルトのラミナであり、上層の62・63・67層は植物遺体を挟在する。流速のゆるやかな河川の縁辺の堆積と推定される。

178 流路-2の堆積は、河床付近の状況は明らかでないが、下位の52~56層は粗砂や礫が混入し、淘汰が悪いことから、洪水等で一時的に流速が強まり、178 流路-1の堆積物を浸食したことが推定される。その後、52層より上は中砂・細砂のラミナ層が堆積する。49・50層を浸食する砂礫層47・48層は角礫と円礫が混在し、粒径が揃わないなど淘汰が悪い。

このことから178 流路-3の堆積物は洪水等によってもたらされたものとする。

178 流路-4は、X=-55,275付近で178 流路1~3の堆積物を浸食する。堆積物はシルトと細砂であり緩やかな流速を示す。178 流路の最終段階である。



写真9 作業風景(西側溝掘削)



写真10 作業風景(ラジコンヘリによる撮影)

第3節 第1遺構面の遺構

(1) 概要

前節でも述べたように、調査区一帯が昭和57年度から平成5年度にかけて行われた圃場整備時のものと考えられる大規模な地盤改変の痕跡が顕著であった。調査開始時にまず重機により現代耕作土及び圃場整備時の客土を除去したが、調査区の大半は、その段階で早くも遺構が確認され、上層に存在したと考えられる遺物包含層（耕作関連遺構に関しては耕作土）が遺存している箇所は非常に限定的であった。

このほぼ現代の客土直下で検出した遺構面を第1遺構面とした。検出された標高は7.4～7.7m、検出した遺構は耕作関連遺構（2耕作痕、29擬似畦畔）及び自然流路（18流路）、溝（169溝）であり、時期は中世前期及び近世である。

(2) 耕作痕

2耕作痕（第29～31図、図版12・37・45・54）

調査区西半部に広がる耕作痕と、それを区画する3本の溝（溝1～3 第29図）について、すべて黒褐色シルトを主体とする埋土であったため、これらを一括して「2耕作痕」として調査した。

検出レベルは標高6.7m前後で、検出面上層の作土は現代の圃場整備により大規模に掘削されており、部分的に残存しているのみであった。

溝1は主軸を北東—南西方向（N-35°-E）にとり、幅40cm～90cm、深さ3～8cmを測るもので、南西端でやや西側に湾曲する。溝2は主軸を溝1よりやや西に振る北西—南東方向（N-60°-E）にとり、幅20～60cm、深さ2～3cmを測るもので、溝1南西端の湾曲部分の延長線上に位置していることから、本来は一連の溝であったものと考えられる。

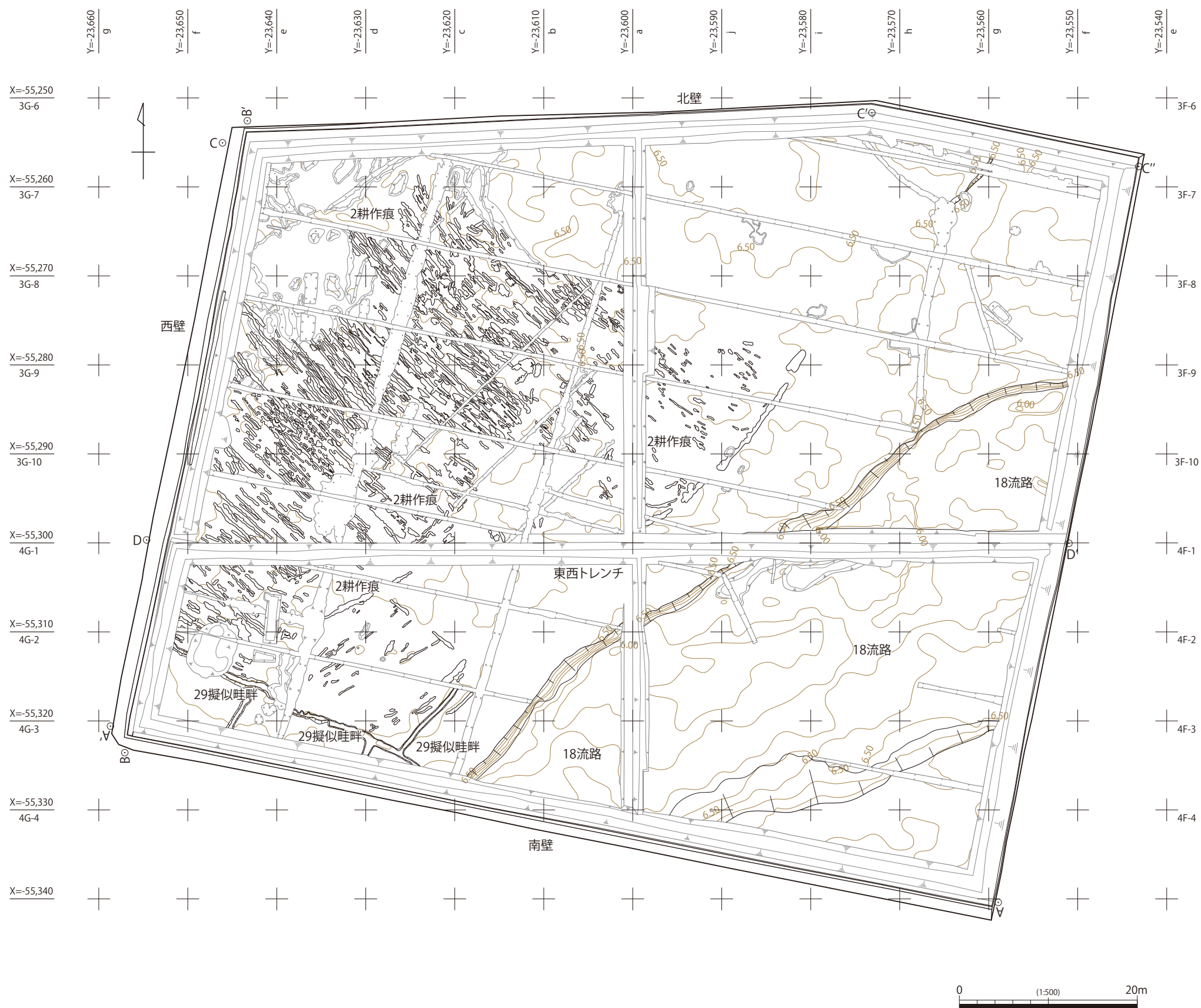
溝3は主軸を北西—南東方向（N-50°-W）にとり、幅20～60cm、深さ2～3cmを測る。この溝3以北、溝1・2以東の部分には耕作痕が認められなかった。

これら溝1～3は、その位置関係から、耕作地の区画を意図したものと判断されるが、区画溝であるのか、畦を造成する際の掘削跡なのか、上層部分の大半が削平されているためその具体的な構造を検討することができなかった。

耕作痕は調査区北西部の広い範囲に展開する溝1・2以西と、溝2・3以南の範囲に分けられる。溝1・2以西のものは、主軸を北西—南東方向（N-50°-W）にとるものと北東—南西方向（N-40°-E）にとるものの2種類認められ、前者は幅20～60cm、深さ3～8cm、後者は幅20cm前後、深さ2cm前後を測り、少なくとも2段階の変遷があった可能性がある。検出状況は、第29図にみるように、北西—南東方向の耕作痕が主体を占めており、北東—南東方向のものは僅かに残存しているのみであった。それぞれ埋土の特徴が共通しており、埋土から切り合い関係などは確認できなかった。詳しくは後述するが、この2耕作痕は、第3遺構面4耕作痕と関連すると考えられ、（古段階）北東—南西→（新段階）北西—南東という変遷が想定される。

溝2・3以南の耕作痕は、主軸を北東—南西（N-50°-E）にとり、幅30～50cm、深さ4～7cmで、溝1・2以西のものと明らかに方向性を異にしており、この箇所が独立した区画であったことを示唆する。南端は29擬似畦畔を境に耕作痕は認められなくなる。

遺構の時期については、図化し得なかったが、同じく2耕作痕埋土中より18世紀～19世紀初頭の



第28図 第1遺構面全体図

肥前系小碗片などが出土しており、当遺構の新しい段階の時期は近世であると考えられる。

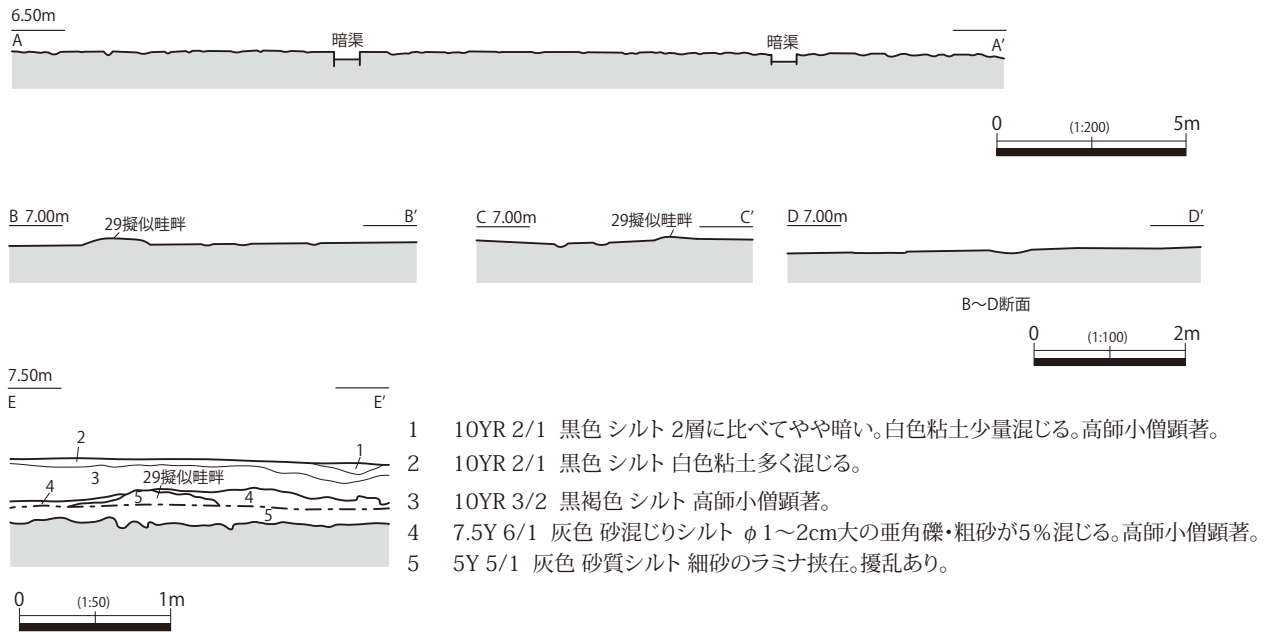
埋土より出土した遺物のうち、特徴的なもの4点を図化した(第31図)。

Po 1は土師器皿で、底部回転糸切り痕が認められ、丸みをもって立ちあがる体部をもつ。Po 2は土師器甕で、口縁部をゆるい「く」の字状に折り曲げ、屈曲部外面に指オサエを施している。Po 3は細長い形態の土錘。Po 4は高台の付く須恵器坏。高台から体部にかけてやや湾曲しながら外傾し、直線的に立ちあがる器形で、平らな底部に取り付けられた高台の内面はナデられている。Po 5は白磁皿で、やや肉厚の玉縁直下外面に沈線をもち、沈線直下からヘラ削りがなされている。

これらの遺物は概ね古代から中世前期(8世紀~12世紀)の所産と判断される。2耕作痕古段階の帰属時期のほかに、下層に存在した遺構や包含層に由来するものも含むものと考えられる。



第29図 2耕作痕、29擬似畦畔 平面図



第30図 2耕作痕、29擬似畦畔 断面図

(3) 擬似畦畔

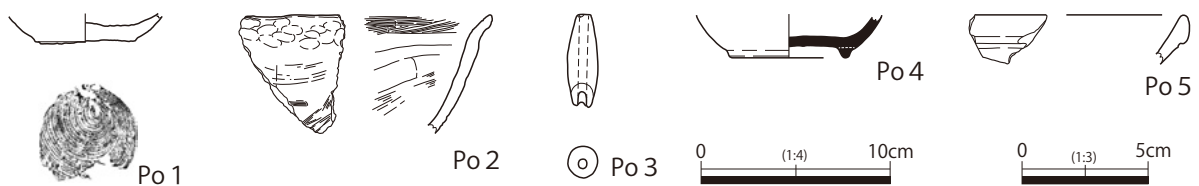
29擬似畦畔 (第29、30図、図版12・13)

2耕作痕の南側、X=-5,5310及びY=-23,620ラインに囲まれた範囲に帯状の高まりを確認し、擬似畦畔と認識して調査を行った。灰色砂質シルトの第5層(第30図、第24図:西壁21層)を母材とした耕作が行われ、畦畔内の削り残された部分が帯状に残存したものと判断される。耕作土は灰色砂混じりシルトの第5層(第30図、第24図:西壁18層)で、部分的に確認できた。

擬似畦畔は北西-南東方向(N-70°-W)をとる幅50~90cmとやや大型の擬似畦畔に、北東-南西方向(N-30~40°-E)をとる幅40~60cmの擬似畦畔が南側に2本、北側に1本の計3本取りついており、南側の2本は調査区外南側に向かって小区画を形成している。北側に取りつく1本は18流路北岸の礫部分と2耕作痕との境界に位置しており、2耕作痕を区画する性格のものであったと考えられる。また、大型の擬似畦畔以南は、2耕作痕が検出されておらず、両遺構はお互いに干渉していないことから、同時期に機能していたものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

当遺構の時期については、2耕作痕と29擬似畦畔はその位置関係から、互いに関連した遺構であり、北西-南東方向にのびる擬似畦畔は土地利用の差異を示す境界であったと考えられること、擬似畦畔の検出レベルは標高6.8mと高い位置で検出されていることから、2耕作痕、特に新段階と関連の深い遺構と考えられ、近世のものと考えられる。



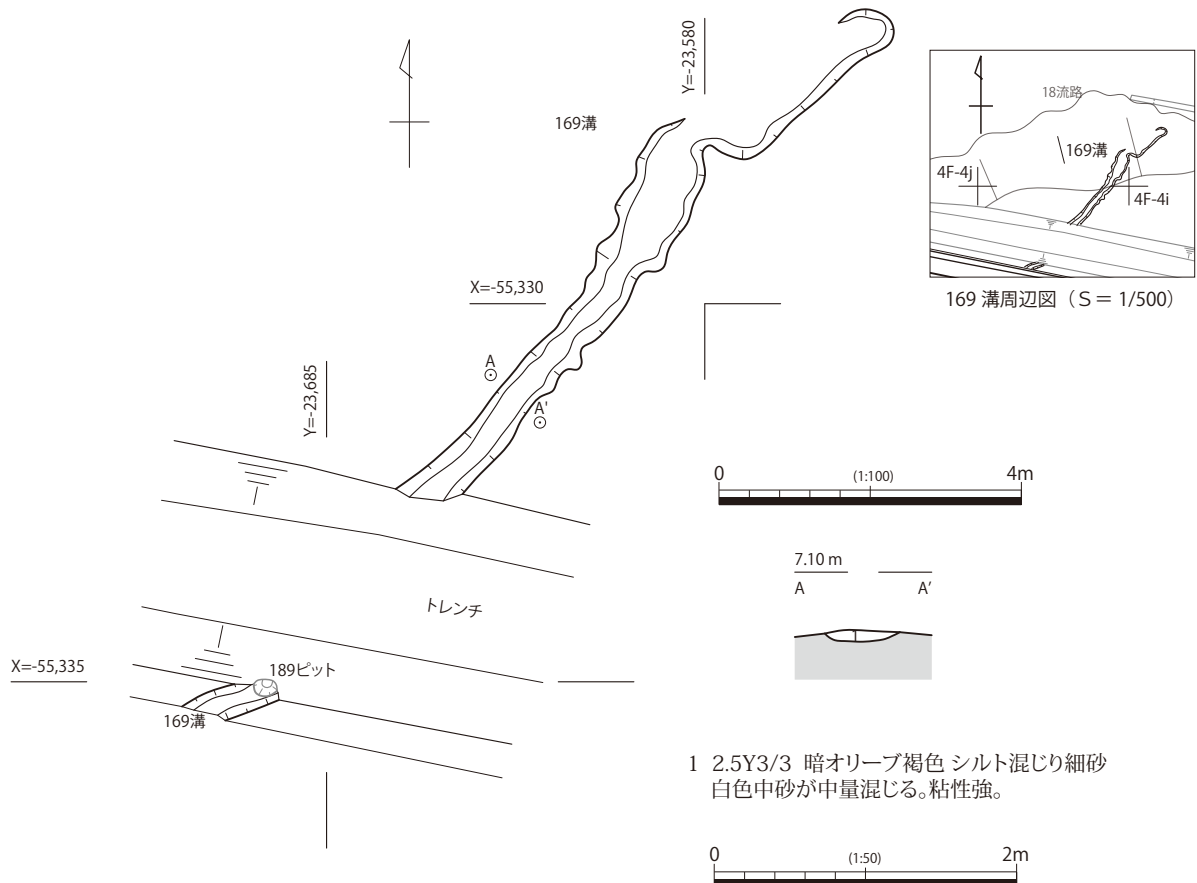
第31図 2耕作痕出土遺物

(4) 溝

169 溝 (第 32 図、図版 13)

調査区南東部、北東-南西方向 (N-38°-E) をとる全長 13 m、最大幅 90cm、深さ 15cm を測る溝で、南端は南壁調査区外に向かつてのびている。第 3 遺構面検出時に確認した溝であるが、南壁土層断面 (第 19 図) で確認した層序関係から、第 1 遺構面の遺構とした。

断面皿状を呈し、底面は平坦で、南西端部から北東端に向けて底面で約 20cm の傾斜をもって 18 流路に向けて下がっていき、18 流路に注ぎ込む水路であった可能性が考えられるが、付帯する施設などは検出されなかったため、性格は不明である。



第 32 図 169 溝 平面・断面図



写真 11 作業風景 (2 耕作痕検出)

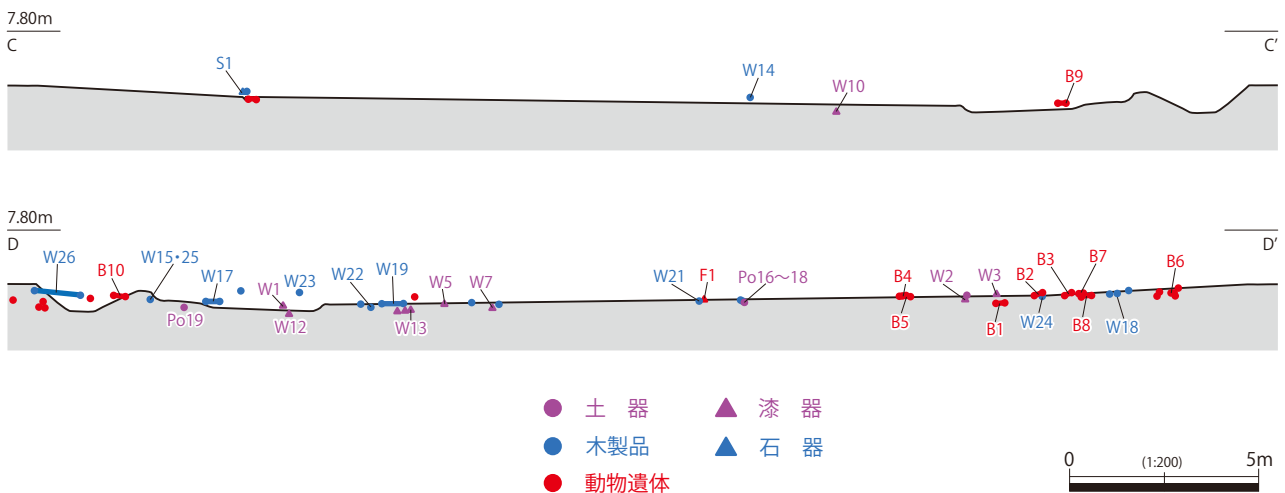
(5) 自然流路

機械掘削により現代耕作土及び圃場整備時の客土を除去した時点で、調査区南東に灰色系の埋土をもつ流路の存在が確認できた。断面観察の結果、この流路を3段階の変遷で捉え、それぞれ18流路(第34図：第1遺構面)、36流路(第55図：第2遺構面)、163流路(第77図：第3遺構面)と認識して調査を行った。

18流路(第33～39図、第1表、図版11・14～16・37・38・55～60・66・67・70・71)

調査区南東に位置し、南西から北東方向に流れる自然流路である。後に記述する163流路の埋没過程における最終段階に相当する。検出した長さは北西岸側で80m、幅30m、深さは最深部で約60cmである。流路底面の断面形は緩やかな皿状を呈する。北西寄りやや深くなっており、ちょうど18流路以下に埋没する自然流路の36流路上部に位置する。埋土は灰色～黄灰色系のシルトである。粘性の強い泥質層であり、乾裂(地割れ痕)が著しい。最下層は植物遺体が挟在するものの、全体としてラミナの形成は認められなかった。これらのことから、水の流れがほとんどなく、ヨシなどの植物が繁茂する湿地的な環境であったことが推定される。

18流路埋土上面の北西岸に沿って、乱杭を伴う流路の跡が認められた。この流路をかく乱流路(第35図第1～9層、第84図)と呼称し、出土遺物から近世～近代以前のもの判断されたため、詳細



第33図 18流路 遺物出土状況見通し図

第1表 18流路 出土主要獣骨一覧

図中番号	図版番号	取上番号	種別	グリッド	層位	部位	備考
B1	図版16-1	487	ウシカウマ	T30-6d-4F-3h	第35図12層	下腿骨か	やや小型だが成獣の下腿骨
B2	図版16-2	488	ウシカ	T30-6d-4F-3h	第35図12層	肋骨か	
B3	図版16-3	489	ウシカ	T30-6d-4F-3h	第35図12層	中手骨	
B4	—	491	不明	T30-6d-4F-2g	第35図12層	大腿骨	ウシやウマには小型か
B5	図版16-4	503	ウシカウマ	T30-6d-4F-2g	第35図12層	上腕骨か	
B6	図版16-5	508	ウシカ	T30-6d-4F-3h	第35図12層	大腿骨か	
B7	図版16-6	511	ウマ	T30-6d-4F-2g	第35図12層	中手骨か中足骨	
B8	図版16-7	512	ウマ	T30-6d-4F-3h	第35図12層	肩甲骨	左側の肩甲骨
B9	図版16-8	538	ウシカ	T30-6d-4F-1j	かく乱流路内か	肋骨	
B10	—	620	不明	T30-6d-3F-9g	埋土	大腿骨	ウマとは異なる。



第34図 18流路 平面図

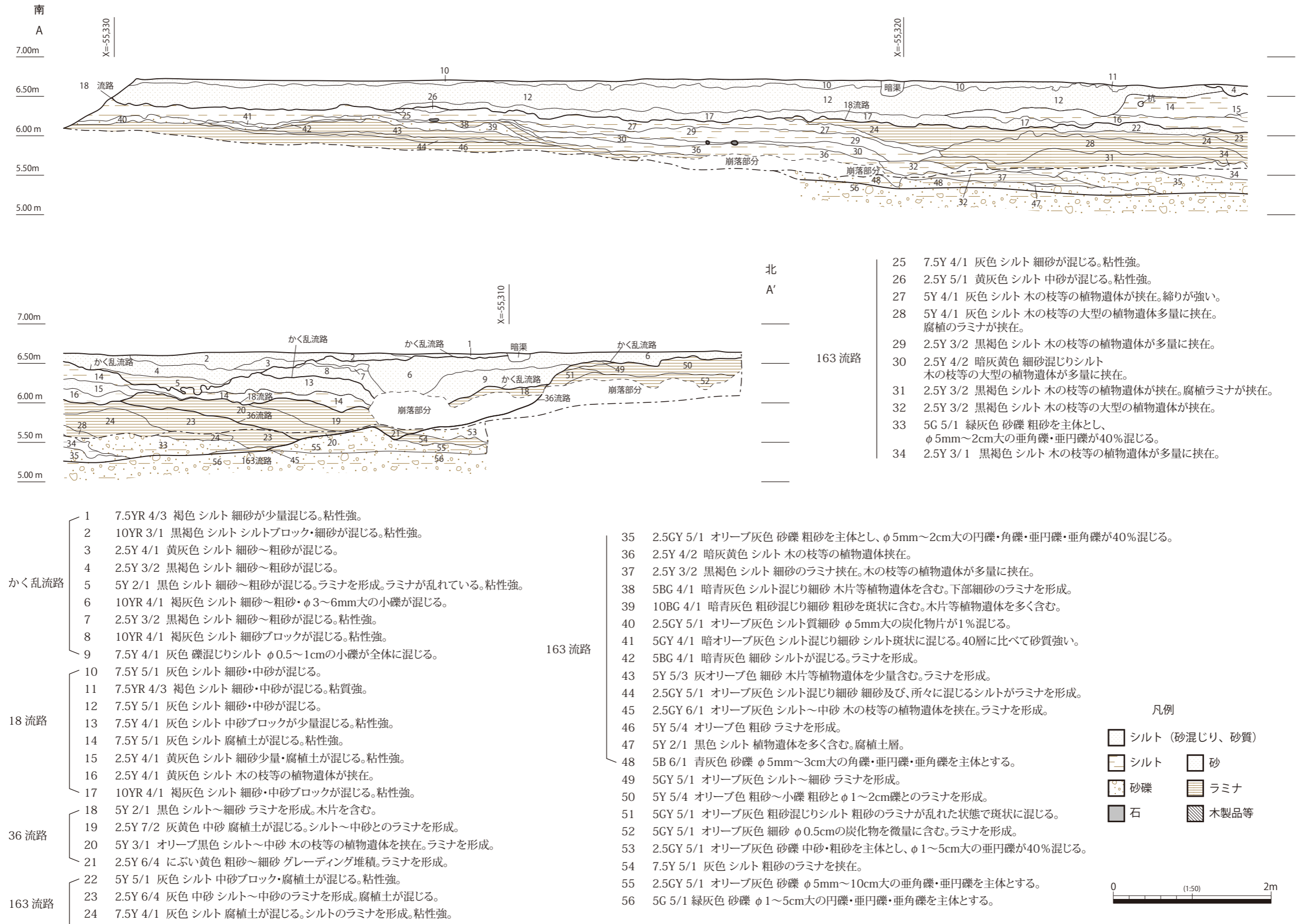
な調査は実施しなかった。断面観察により、複数回の掘り直しが行われており、18流路の埋没過程で常に水の通り道になっていた箇所が水路として利用・維持されていたことがうかがえる。

18流路内出土遺物としては土器類のほか、漆器をはじめとした木製品、鉄製品があり、このうち46点を図化した(第36～39図)。多くは流路底面近くから出土しており、一部掘り下げ過ぎて下層の36、163流路埋土出土にすべきものが混入している可能性もある。

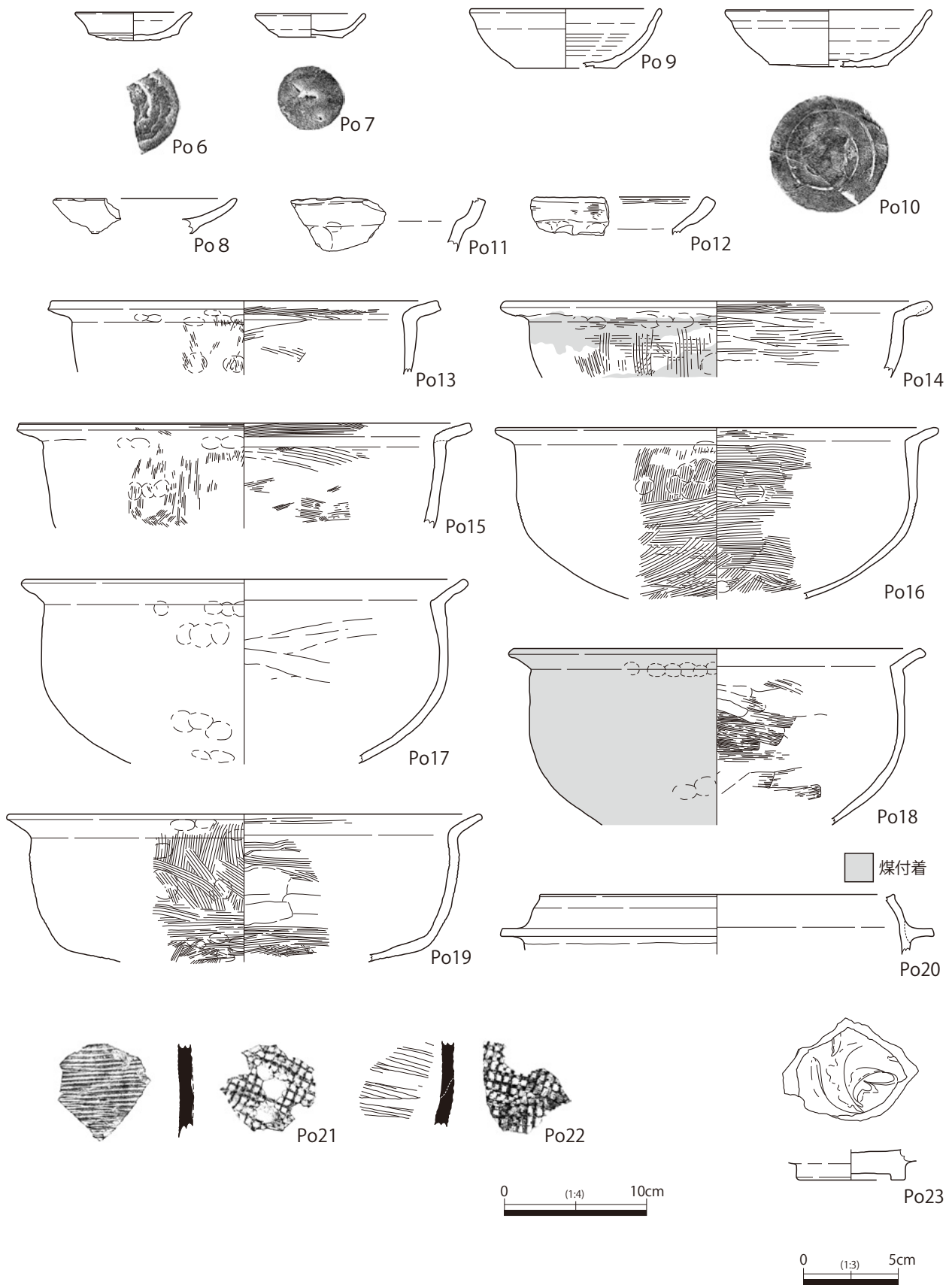
Po 6・7は土師器小皿で、どちらも底部に回転ヘラ切り痕が顕著に残る。Po 6の体部は底部から口縁部に向けて外反するもの。Po 7はやや内湾気味に立ち上がるものである。Po 8は土師器皿の破片で、底部が高台状に突出し、やや内湾しながら口縁部に向かって立ちあがる体部を持つ。底部外面の調整は遺存しておらず、不明である。Po 9・10は底部回転ヘラ切りの土師器坏で、どちらも体部内外面の回転ナデ調整が細い条痕として顕著に認められる。Po11は瓦質土器の鍋の口縁部破片。逆「L」字状に短く屈曲させ、内外面ヨコナデする。Po12～19は土師器鍋。Po12は口縁部破片で、「く」の字状に弱く屈曲させ、やや湾曲しつつ端部へ向けて外傾している。内外面ヨコハケ後、丁寧にヨコナデしている。Po13～19は口縁部「く」の字状に屈曲し、直線的に外傾するもので、Po16～18は丸みをもつ平坦な底部からやや内傾しつつ口縁部へと至る形状を呈しており、Po16は口縁部ヨコハケ後ナデ、内面は胴部ヨコハケ後、底部ナナメハケ。外面は体部タテハケ、底部ヨコハケ後、底部にナナメハケを施して仕上げている。土師器鍋でハケ調整が施されるものは、基本的に同様な手順の調整が認められ、口縁部ナデ調整や内外面仕上げのナナメハケの範囲になど、細部に差異が認められる程度である。Po17・18は同一個体の可能性があるもので、全面に丁寧なナデ調整が施されており、ハケ調整が認められない。Po19は体部と底部の境界が屈曲し、明瞭な平底を呈す。内外面調整は基本的にPo16と同様で、体部内面に粗いケズリ調整を施している。Po13～14は口縁部から体部の破片で、底部形状は不明だが、Po16と同様の調整が施される。このうち、Po15はやや長胴となるものと考えられる。Po20は瓦質土器の羽釜で、内外面ヨコナデ調整。内湾する口縁部下位に鏝部を貼りつける。Po21・22は須恵器甕の体部破片で、外面格子状叩き目、内面ヨコハケ調整による平行条線が認められる。Po23は龍泉窯系青磁碗の高台部破片。断面四角形の高台で、高台内部を浅く削ることによって輪高台が造り出されている。高台外面まで施釉され、畳付き及び高台内部は露胎。見込み部には片彫りの花文が認められる。

W 1～W13は挽物の漆器。漆器の出土状況として、検出レベルが他の遺物に比してやや低い傾向があり(第33図)、出土位置が18流路北岸、第2遺構面の36流路(第55図)と重なる位置に集中することから、本来は36流路上層出土であった可能性がある。また、36流路に関連する施設と考えられる104集石(第57図)部分に集中する傾向も興味深い。調査中に明確にすることができず、18流路出土として取り上げた。W 1・2は漆器小皿。W 2は内外面黒色、W 1は外面黒色、内面赤色に塗られており、W 1は畳付も一部黒色塗彩が確認できる。黒色は炭粉渋下地の上に透明漆が塗られており、赤色はその上に水銀朱により着色された赤色漆が塗られている。これは他の赤彩文様が描かれている個体も同様であることが、塗膜分析により明らかにされている(第5章第2節)。どちらも底部から内湾しつつ口縁部にいたる形状で、高台は作出されておらず、内外面ロクロ目が観察できる。この2点は口径8.35～8.4cm、底径6.2～6.4cm、器高1.4cm前後とほぼ同じ法量である。

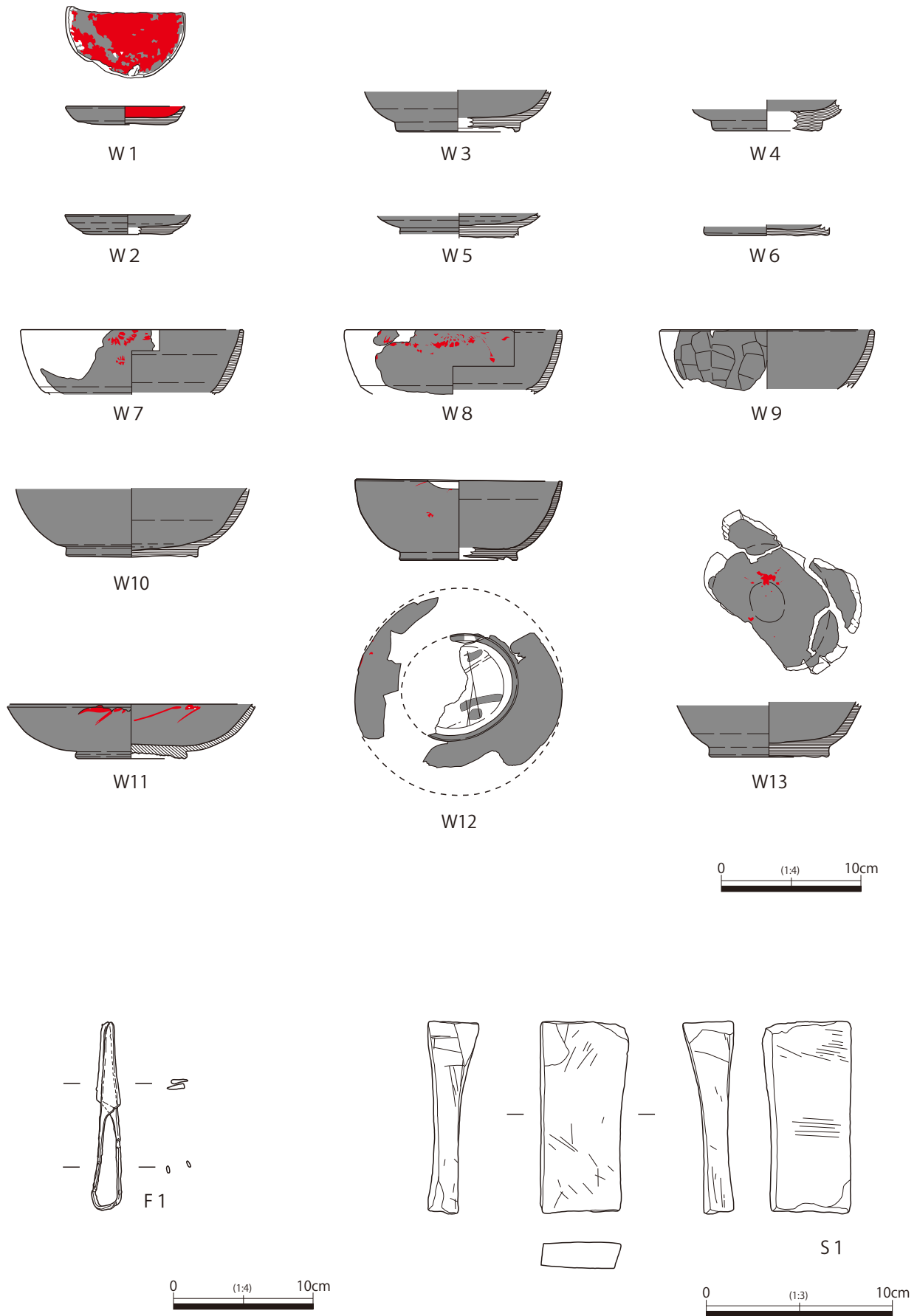
W 3～13は漆器碗。すべて内外面黒色に塗られ、ロクロ目が確認できる。底部が残存するものは、底部を突出させて高台を作出し、底部外周に浅い沈線を巡らせて輪高台を表現するという共通した特



第35図 18・36・163流路 土層断面図



第36図 18流路 出土遺物(1)



第37図 18流路 出土遺物(2)

徴を有する。法量については、W11・12などのように土圧により変形著しく、数値の取扱いには注意が必要なものも含まれるが、概ね復元口径15cm前後で、底径は少なくとも9cm前後と8cm前後のもの2種類が認められる。また外面にケズリ調整が施されるものもある(W9)。これは36流路出土W35(第60図)にみるように、外面の両側に施された装飾的なものと考えられる。赤色漆による花文で加飾されたものでは、口縁部外面(W7・8・12)、口縁部内外面(W11)、内面見込み部(W13)に施されたものがある。これらの樹種については、トチノキ(W1・3・4・8・11・13)、クリ(W2・6・10・12)、ケヤキ(W7)、トネリコ属(W5・9)と器種、法量などに規則性はみられなかった(第5章第1節)。

他の木製品としては、木簡(W14)、物差し(W15)、羽子板状木製品(W16～19)、柄(W20)、差し歯下駄の台(W21)、連歯下駄(W22)、草履芯(W23)、差し歯下駄の歯(W24)、卒塔婆(W26)などが出土した。

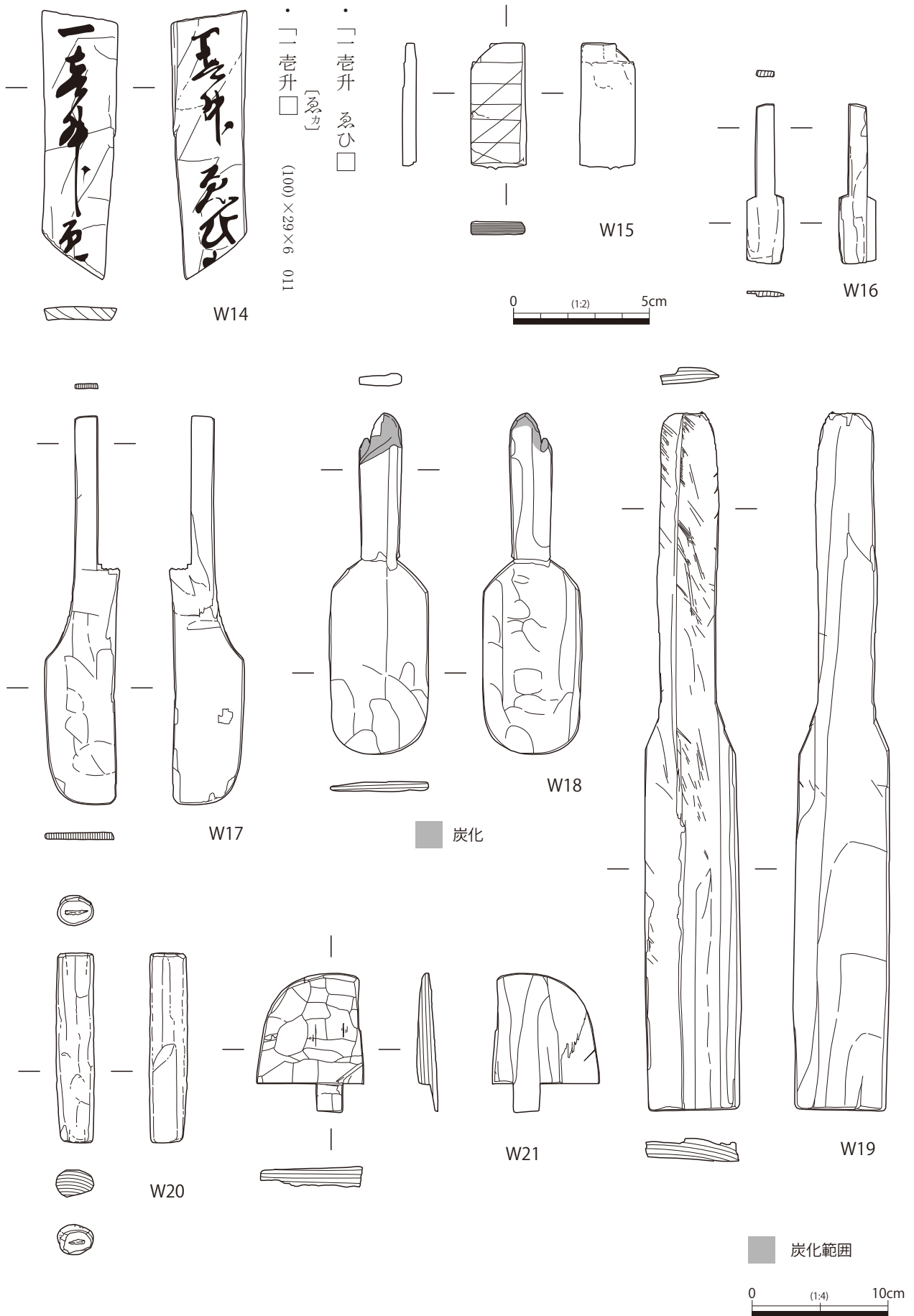
木簡(W14)^(註2)は針葉樹で、板目。下端を意図的に切断している。上端及び左右両側辺を削り、表裏面も削り跡が明瞭に確認できる。表裏上部に「一壺升」と数量が記され、下端が切断されており全体は不明であるが、その下に表には「ゑひ□ と、なにかの名称と考えられる文字が記されている。荷札のようなものであろうか。

羽子板状木製品(W16～19)は、小型のもの(W16)、大型のもの(W19)、丁寧に加工の施されたもの(W18)など、バラエティに富んでいる。羽子板は、胡鬼板(ごきいた)とも呼ばれ、西アジアから来る鬼(災厄)を打ち払う儀式が中世に遊びに変わったものであるという^(註3)。当流路の前段階である36・163流路で木製祭祀具が出土しているように、この羽子板状木製品も祭祀に関連する遺物であるかもしれない。同じく卒塔婆(W26)も、赤外線撮影でも文字は確認できなかったことから、大型の斎串である可能性も残る^(註3)。

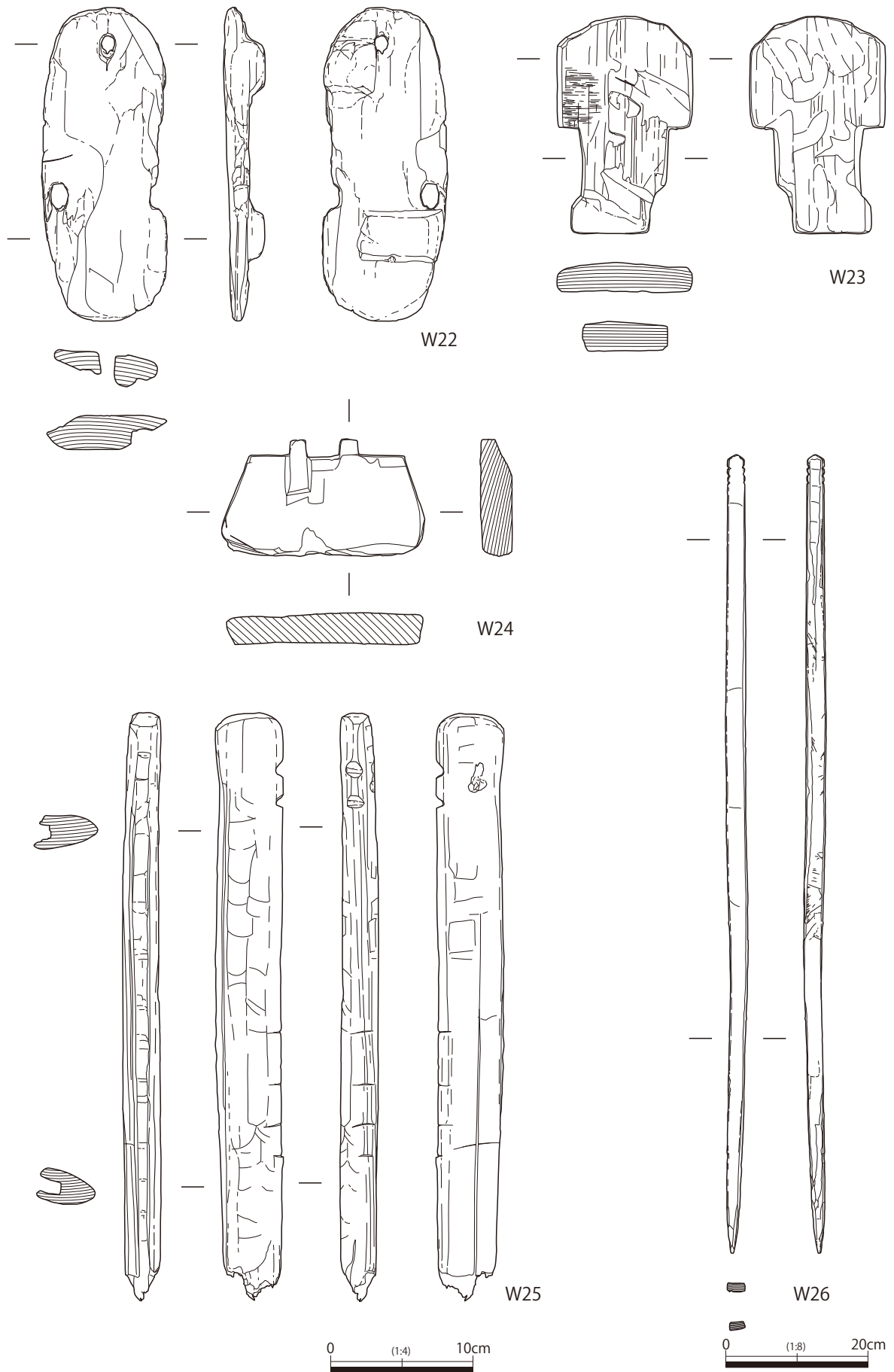
そのほか握り鉄(F1)や砥石(S1)も出土している。

18流路埋土中より獣骨が出土している(第33・34図、第1表、図版16)。風化著しく種別を特定できるものは少なかったが、ある程度種別及び部位が特定できたものを第1表に示した^(註4)。出土位置は流路北東岸(4F-9gグリッド)周辺及び南岸(4F-3hグリッド)周辺の大きく2箇所集中する。先にも述べたように、18流路埋土は粘性の強い泥質層であり、遠くから流されてきたとは考え難い状況といえる。同様な事例は、鳥取市高住平田遺跡の12世紀段階の河川である2河川古段階及び中世期の流路の可能性のある1004溝でも確認されており、同遺跡で出土した獣骨について、報告書のなかで、古代から中世に行われた「殺牛祭祀」に関わる可能性を指摘されている(鳥取県教育委員会2013)。18流路での獣骨出土状況も、大腿骨などの長骨が主体であることなど異なる部分はあるが、高住平田遺跡例と類似する状況で出土している。しかし、出土状況は、ある程度集中するものの自然流路内に散在しており、積極的に人為の及んだものと判断するには躊躇せざるを得ない。これらの獣骨が祭祀行為などの影響によるものかどうか、今後良好な事例との比較検討が必要であると考えられる。

遺物の時期は、龍泉窯系青磁碗(Po23)や土師器鍋、瓦質土器羽釜などから、12～14世紀のものと考えられるが、18流路の帰属時期は、第6章第2節で想定しているように、13世紀以降と考える。また第1・2遺構面検出中出土としたPo166(第89図)の肥前系陶器の土瓶片も当流路埋土の可能性があることから、比較的新しい時期まで存続していたか、もしくは今回認識できなかったが、上層部分に近世に降る時期に対応する流路が存在していた可能性も残る。



第38図 18流路 出土遺物(3)



第39図 18流路 出土遺物(4)

第4節 第2遺構面の調査

(1) 概要

第2遺構面の遺構は、北壁周辺において一部包含層が認められたものの、圃場整備時の削平によりほぼ第1遺構面と同一面で検出されたもので、第1遺構面とした遺構とは性格を異にしていると認定したものである（第40図）。

調査区南東部を流れる自然流路第2段階(36流路)及び36流路北岸に沿って掘立柱建物及びピット、土坑を検出した。掘立柱建物は柱配置が不整形で、簡易的な建物が想定されるものであり、主軸は岸に杭を伴い人為的な管理が行われたと考えられる36流路に並行または直交し、36流路を意識して配置されている。

(2) 掘立柱建物

36流路北岸では、ピットの集中域が大きく4か所認められ、このうちピットが列状に方向性を持つものについて、掘立柱建物5棟、柵列1列を想定した。

掘立柱建物については、柱間寸法や柱列など不揃いで、掘立柱建物として認識することに躊躇するものも含まれる。ピット埋土の特徴や底面レベルなど、様々な角度から検討を試みたが、ピット配置以上の特徴を見出すことができなかった。構造物として他の可能性も考えられるが、柱痕跡の認められるものや、建物廃絶時の儀礼に関わると考えられる土器の埋納が確認されていることから、掘立柱建物としたものである。

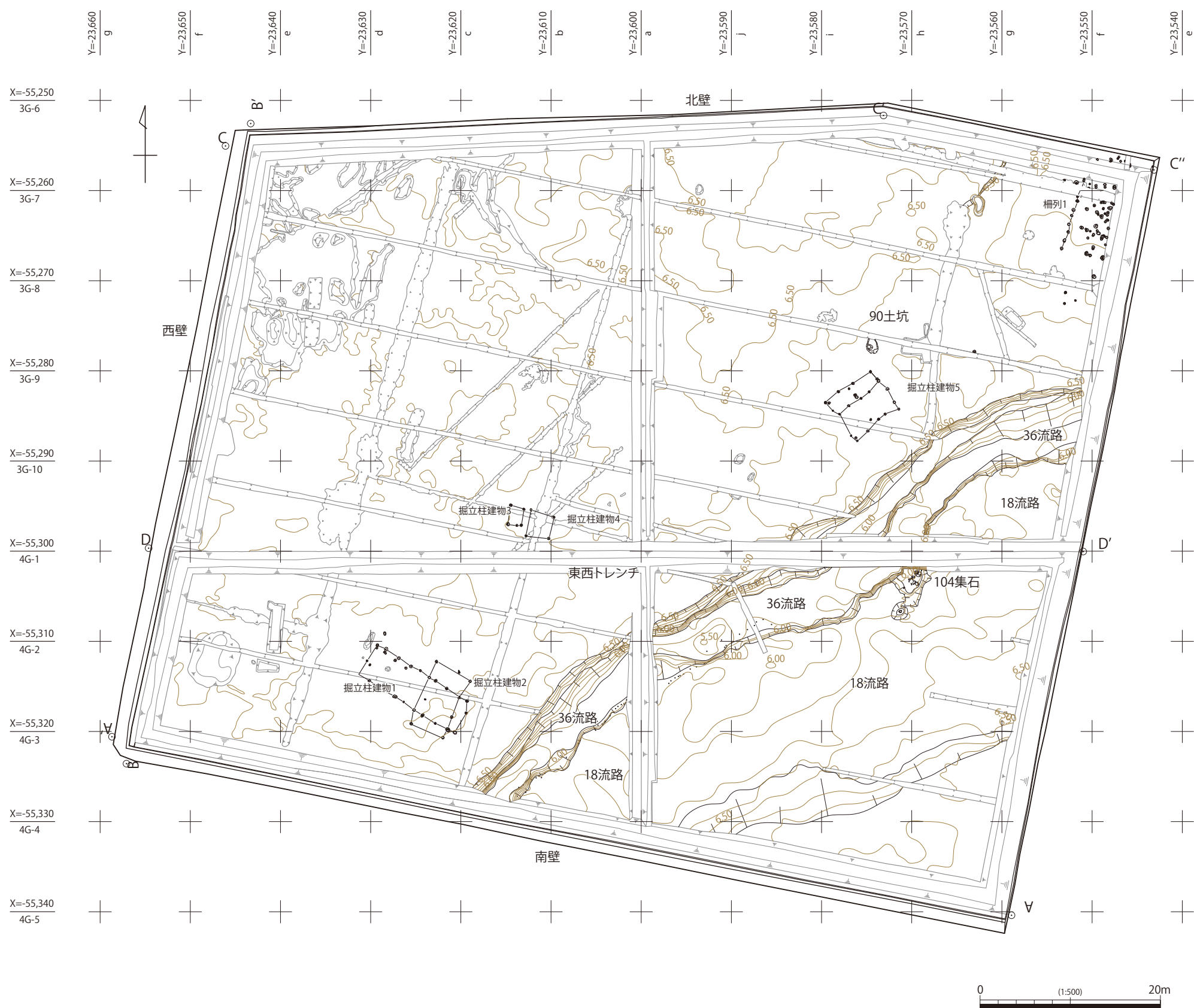
掘立柱建物1（第41～43図、第2表、図版17・38）

遺跡南西部、4G-3cグリッドを中心とした位置で検出した掘立柱建物で、梁行2間（3.8～3.9m）、桁行9間（11.6～12.4m）の側柱建物である。主軸はN-59°-Wである。柱間寸法は一定しておらず、梁行方向で1.2～2.4m、桁行方向で0.8～1.8mと不揃いである。柱穴は長軸53～21cm、短軸38～18cmの円形もしくは楕円形で、柱材等は残存していなかったが、埋土中に柱痕跡の認められるもの（14ピット、129ピット）から径18～12cmの丸太材であったと推定される。検出面からの深さは浅いもので9cm（174ピット）、深いもので37cm（22ピット）を測る。

27ピットには礎盤石が、28ピットには根石と考えられる礫が検出された。また建物北隅の12-10-8-7ピットの内側には、それぞれに対応するように、11-9-124-123ピットが検出されており、建て替えなどが想定されるが、他のピットに建て替え痕跡は認められなかった。ピット列が方形に巡っていることから掘立柱建物としたが、柱が不揃いで違和感が残る。囲いのような施設であった可能性もある。

遺物は23ピット及び129ピットから出土している。23ピットからは小皿が2点（Po24、Po25）重ねられた状態で出土した。建物廃絶時の儀礼に伴う埋納と考えられる。どちらも底部回転糸切りで、底部からやや丸みをもって立ちあがる形状を呈す。Po24が口径7.0cm、底径3.8cm、Po25が復元口径7.6cm、復元底径5.0cmと25が底径が口径に対して大きい。Po26は129ピット埋土中より出土した土師器の羽釜の破片で、内傾気味に直立する口縁部を持つ。

本掘立柱建物の帰属時期は、23ピット出土遺物（Po24、Po25）の特徴から、概ね12世紀代と判断される。129ピット出土の羽釜（Po26）は、23ピットよりやや新しい時期と考えられることから、掘立柱建物2に伴う可能性が考えられ、位置的に129ピットと対となる16-20-27ピットも同様に掘立柱建物2に伴うと考えるべきかも知れない。



第40図 第2遺構面全体図

掘立柱建物2（第41～43図、第2表、図版17・45）

掘立柱建物1にほぼ直交する形で検出された掘立柱建物で、梁行1間（3.8～4.3m）、桁行3～4間（7.0～7.3m）の側柱建物。主軸はN-26°-Eである。柱間寸法は一定しておらず、梁行方向で3.8～4.3m、桁行方向で7.0～7.4mと不揃いである。柱穴は長軸30～53cm、短軸27～40cmの円形もしくは楕円形を呈する。検出面からの深さは浅いもので8cm（126・130ピット）、深いもので50cm（129ピット）を測る。建物としては柱配置が不揃いで、16・20・27・129ピットについては掘立柱建物1と共有している形となり、掘立柱建物1の付属施設のようなものの可能性もあるが、現地での検討では確証を得ることができなかった。しかし、出土遺物に時期差が認められる可能性があることから、不自然な形であるが、掘立柱建物1とは別個の掘立柱建物として報告する。

出土した遺物は129ピット出土の土師器羽釜片（Po26）のみである。この羽釜は、12世紀後半以降のものであり、12世紀代に比定される掘立柱建物1の23ピット出土土器（Po24・Po25）より比較的新しい時期の所産であり、時期差が認められる可能性がある。129ピットは先にも述べたように掘立柱建物1と2のどちらに所属するか判断つきかねた柱穴である。129ピットと23ピットが、それぞれ異なる時期のものであり、23ピットが掘立柱建物1の、129ピットが掘立柱建物2の帰属時期を示す遺物であろうか。

掘立柱建物3（第44・45図、図版18・19・38・45）

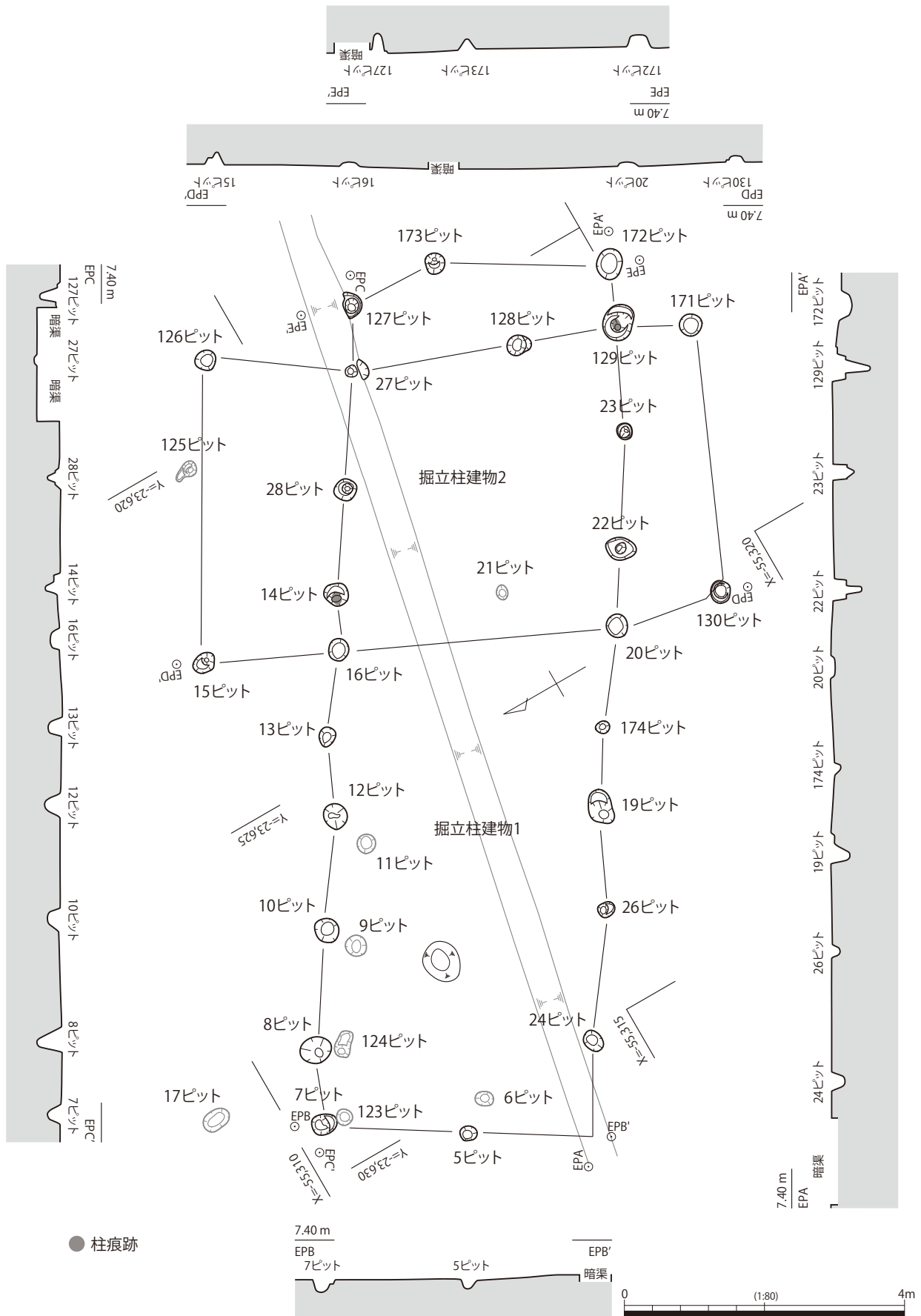
調査区中央部である4F-10bグリッド、掘立柱建物1から北東に約20m離れた位置で検出された、梁行1～2間（1.2～1.7m）、桁行1間（1.9～2.1m）の不整形な側柱建物である。主軸はN-7°-Eで、隣接して検出された掘立柱建物4とはほぼ同一方向に主軸をもつため、同一の建物の可能性も考えたが、南辺の32-31-140ピットが掘立柱建物4の南辺30-38ピットと柱筋が揃わないため、それぞれ別の建物と認識した。柱間寸法は一定しておらず、梁行方向で1.4～1.5m、桁行方向で1.8～2.1mと不揃いである。柱穴は長軸23～42cm、短軸23～35cmの円形もしくは楕円形を呈する。検出面からの深さは浅いもので10cm（32ピット）、深いもので30cm（34ピット）を測る。

遺物は、140ピットから皿（Po27）及び坏（Po28）が出土している。意図的に破碎された後、土器片がピット中央部にまとまって埋められていたことから、柱が抜き取られた後に埋められたものとみ

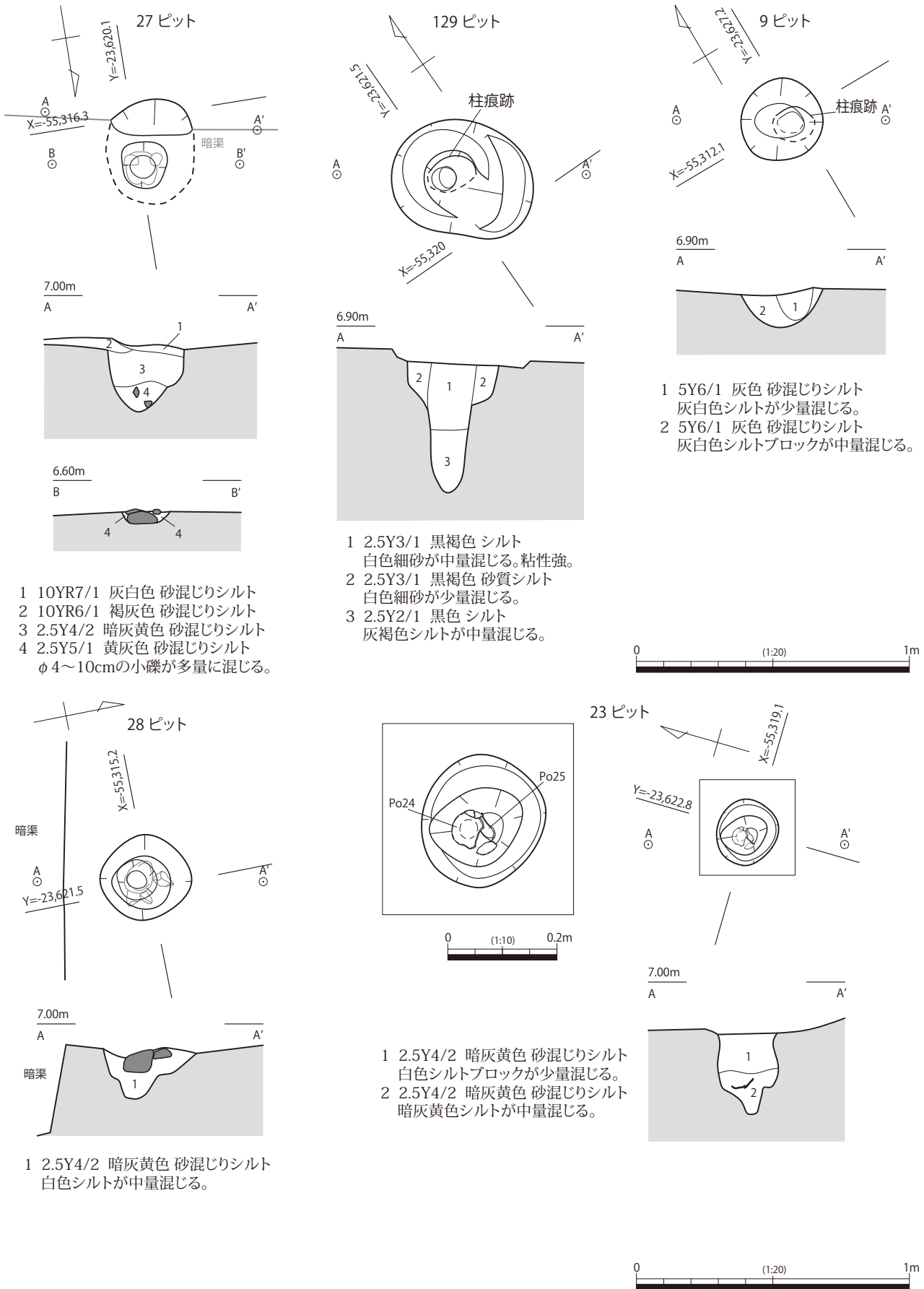
第2表 掘立柱建物1・2及び周辺ピット一覧

遺構番号	集合遺構名	規模 (cm)			備考
		長軸	短軸	深さ	
5	掘立柱建物1	25	21	13	
6		26	20	15	
7	掘立柱建物1	36	29	18	
8	掘立柱建物1	46	38	33	
9		31	30	12	柱痕跡有り。
10	掘立柱建物1	37	34	19	
11		28	23	16	
12	掘立柱建物1	37	34	23	
13	掘立柱建物1	28	25	19	
14	掘立柱建物1	35	32	17	柱痕跡有り。
15	掘立柱建物2	34	27	17	
16	掘立柱建物2	32	29	16	
17		40	27	15	
19	掘立柱建物1	50	33	25	
20	掘立柱建物2	33	31	13	
21		21	16	15	
22	掘立柱建物1	44	33	37	

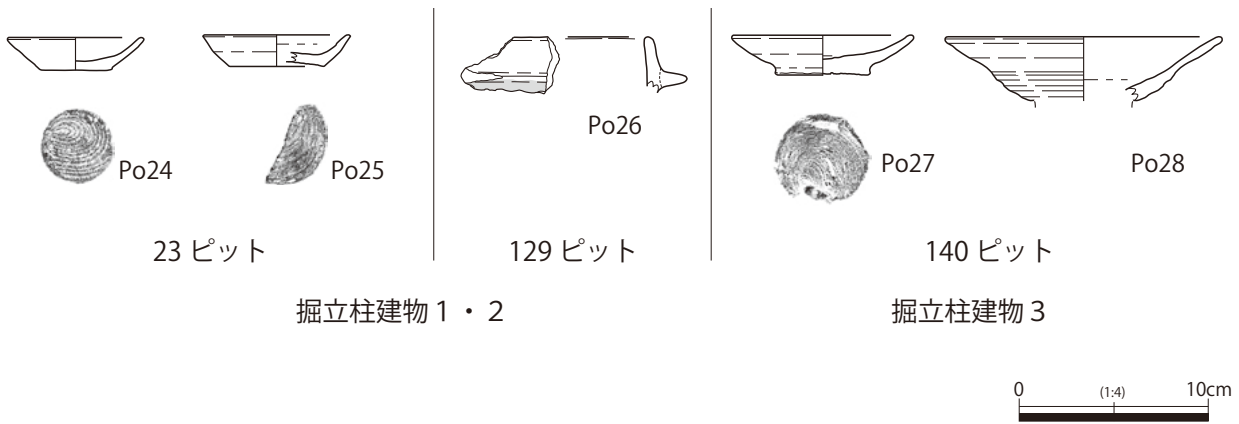
遺構番号	集合遺構名	規模 (cm)			備考
		長軸	短軸	深さ	
23	掘立柱建物1	24	23	29	土師器（Po24、Po25）出土。
24	掘立柱建物1	32	24	19	
26	掘立柱建物1	25	21	12	
27	掘立柱建物2	-	-	23	29ピットが切る。
28	掘立柱建物1	34	31	19	礎盤石検出。
123		23	23	13	
124		38	23	19	
125		35	21	7	
126	掘立柱建物2	30	30	8	
127	掘立柱建物1	-	38	25	
128	掘立柱建物2	35	30	20	29ピットが切る。
129	掘立柱建物2	53	40	50	柱痕跡有り。
130	掘立柱建物2	33	28	8	
171	掘立柱建物2	33	32	23	
172	掘立柱建物1	44	36	16	
173	掘立柱建物1	30	30	14	
174	掘立柱建物1	21	18	9	



第41図 掘立柱建物1・2及び周辺ピット 平面、断面図



第42図 掘立柱建物1・2及び周辺ピット 個別平面、断面図



第43図 掘立柱建物1～3 出土遺物

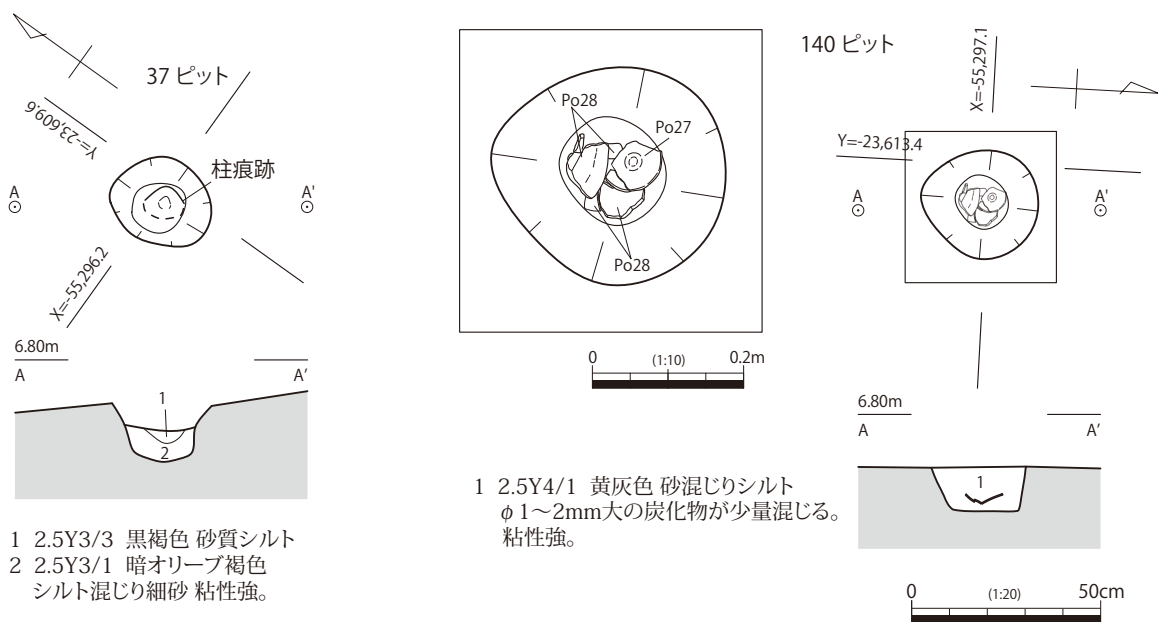
ることができる。

Po27は土師器の小皿。口径9.2cm、底径4.8cmを測り、回転糸切り痕の認められる底部は高台状に突出し、体部はやや内湾しつつ直線的に外傾する。Po28は坏で、復元口径14.2cm、底部は欠損しているため形状など不明である。体部中央部を強いヨコナデによって屈曲させ、下半部を丸く、上半部から口縁部にかけて直線的に外傾させている。11世紀後半～12世紀前半の所産と判断されるものである。

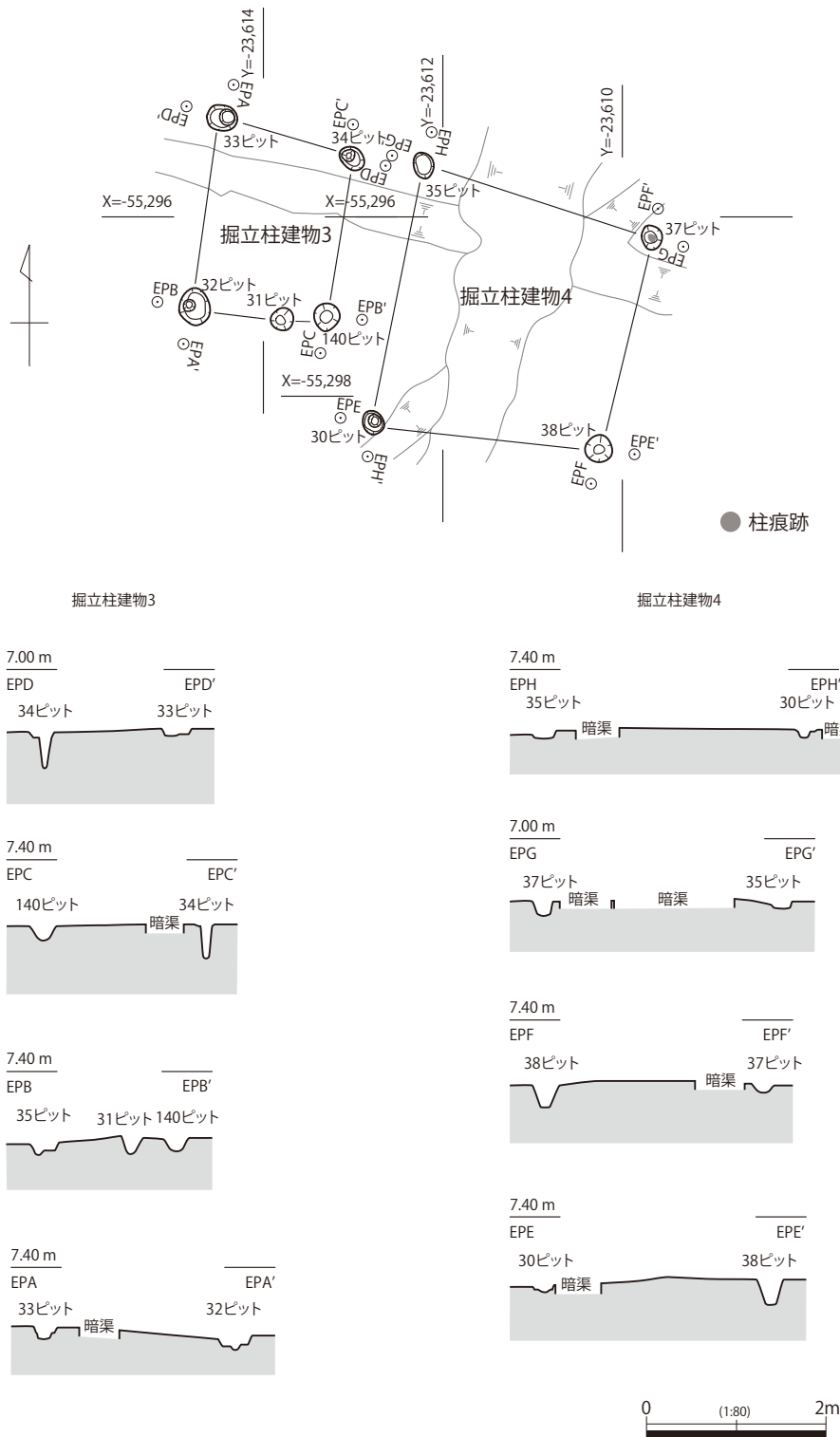
これらは建物廃絶時に埋納されたものと考えられることから、この遺物の時期は、掘立柱建物3の廃絶時期を示すものであると判断できる。

掘立柱建物4 (第44・45図、第3表、図版18)

調査区中央部、掘立柱建物3に隣接する位置で検出した1間×1間の側柱建物である。主軸はN-11°-Eで、身舎中央部分が圃場整備前に利用されていたと思われる近代～現代の水路で南北方向に大きく壊されている。本来はこの水路によって壊されている箇所には柱穴が存在した可能性がある。



第44図 掘立柱建物3・4ピット 個別平面、断面図



第45図 掘立柱建物3・4 平面、断面図

第3表 掘立柱建物3・4ピット 一覧

遺構番号	集合遺構名	規模 (cm)			備考
		長軸	短軸	深さ	
30	掘立柱建物4	27	23	7	
31	掘立柱建物3	23	25	17	
32	掘立柱建物3	42	35	10	
33	掘立柱建物3	35	28	14	
34	掘立柱建物3	30	23	30	
35	掘立柱建物4	30	23	8	
37	掘立柱建物4	27	23	16	柱痕跡有り。
38	掘立柱建物4	30	29	27	
140	掘立柱建物3	31	29	12	土師器 (Po27、Po28) 出土。

柱間寸法は一定しておらず2.4～2.9 mを測り、柱穴は長軸30～27cm、短軸29～23cmの円形もしくは楕円形を呈する。検出面からの深さは浅いもので7cm(30ピット)、深いもので27cm(38ピット)を測る。柱材等は残存していなかったが、埋土中に柱痕跡の認められるもの(37ピット)から、径20cm以下の丸太材であったと想定される。

遺物は出土しなかった。遺構の帰属時期は、隣接する掘立柱建物3と主軸がほぼ揃っていることから、掘立柱建物3と近い時期であったものと推定される。

掘立柱建物5(第46～49図、第4表、図版18・19・67)

調査区北東部、3F-9hグリッド、36流路から北西約5mの位置で検出した廂付の掘立柱建物である。主軸はN-54°-Eをとり、36流路とほぼ平行する。

91-94-105-119ピットを隅柱とする身舎は梁行2～3間(3.5～3.9m)、桁行4間(5.7～5.8m)で、105ピットと121ピットの間が暗渠で削平されており、残存していないが、本来はこの間にもう一基柱穴が存在した可能性があり、梁行3間、桁行4間であったと推定される。全体的に柱筋は通っておらず、柱間寸法は梁行方向で0.9～2.7m、梁行方向で0.9～1.7mと掘立柱建物1～4と同様、平面不整形となる柱穴配置である。しかし、暗渠で削平されていると考えられる105-121ピット間に柱穴が存在していたと仮定すると、梁行方向、桁行方向ともに対向する柱位置はほぼ揃っており、やや整っている印象を受ける。柱穴は長軸21～38cm、短軸20～33cmの円形もしくは楕円形を呈し、検出面からの深さは浅いもので8cm(121ピット)、深いもので24cm(118ピット)を測る。柱材が93ピット、105ピットに残存しており、うち残りのよい105ピットのを図示した(W27)。長軸9.2cm、短軸8.6cmの丸太材で、底部に粗い加工痕が確認でき、他は未調整である。

この身舎北西部平側に廂部分と考えられる96-97-99-111ピットが身舎と95、106ピットを介して接続する。廂部分平側の柱間寸法は桁行方向0.2～1.2cm、梁行方向1.8～2.4m、柱間は3間で、身舎の柱間と揃っていない。柱穴は長軸17～32cm、短軸16～28cmの円形もしくは楕円形。検出面からの深さは、浅いもので9cm(92ピット)、深いもので22cm(97ピット)を測る。

その他、建物内部にピット6基が検出されている(98、112～115、120ピット)。なかには柱材が残存するもの(113、115ピット)があり、掘立柱建物5と関連する柱穴である可能性が考えられたが、明らかにし得なかった。

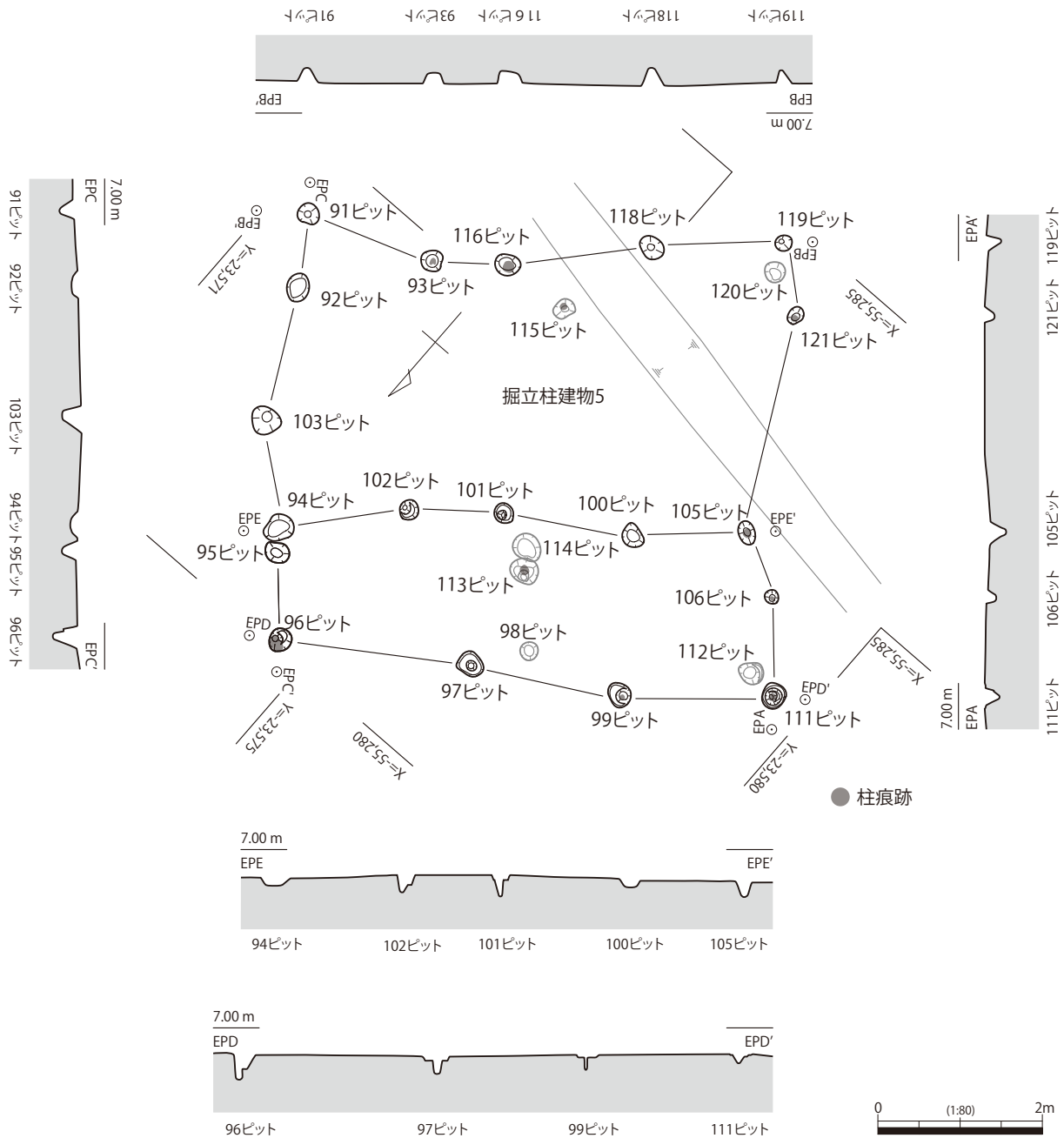
掘立柱建物5の帰属時期について、時期を推定し得る遺物が出土しておらず、また第4節(1)概要にも述べたように第2遺構面の掘立柱建物をはじめとする遺構は、圃場整備時の客土もしくは作土直下で検出されたものである。そのため層位的にも帰属時期を明確にすることができなかった。根拠としては弱いだが、掘立柱建物1～4と同様に、36流路の北岸に36流路を意識するように建てられているということから、これらの掘立柱建物の帰属時期である11世紀後半～12世紀代のものと捉えておきたい。

(3) 柵列及び周辺ピット

調査区北東隅で検出された柵列及びピット群である。両遺構は関連性が深いと判断されるため、併せて報告する。

柵列1(第50・51図、第5表、図版20)

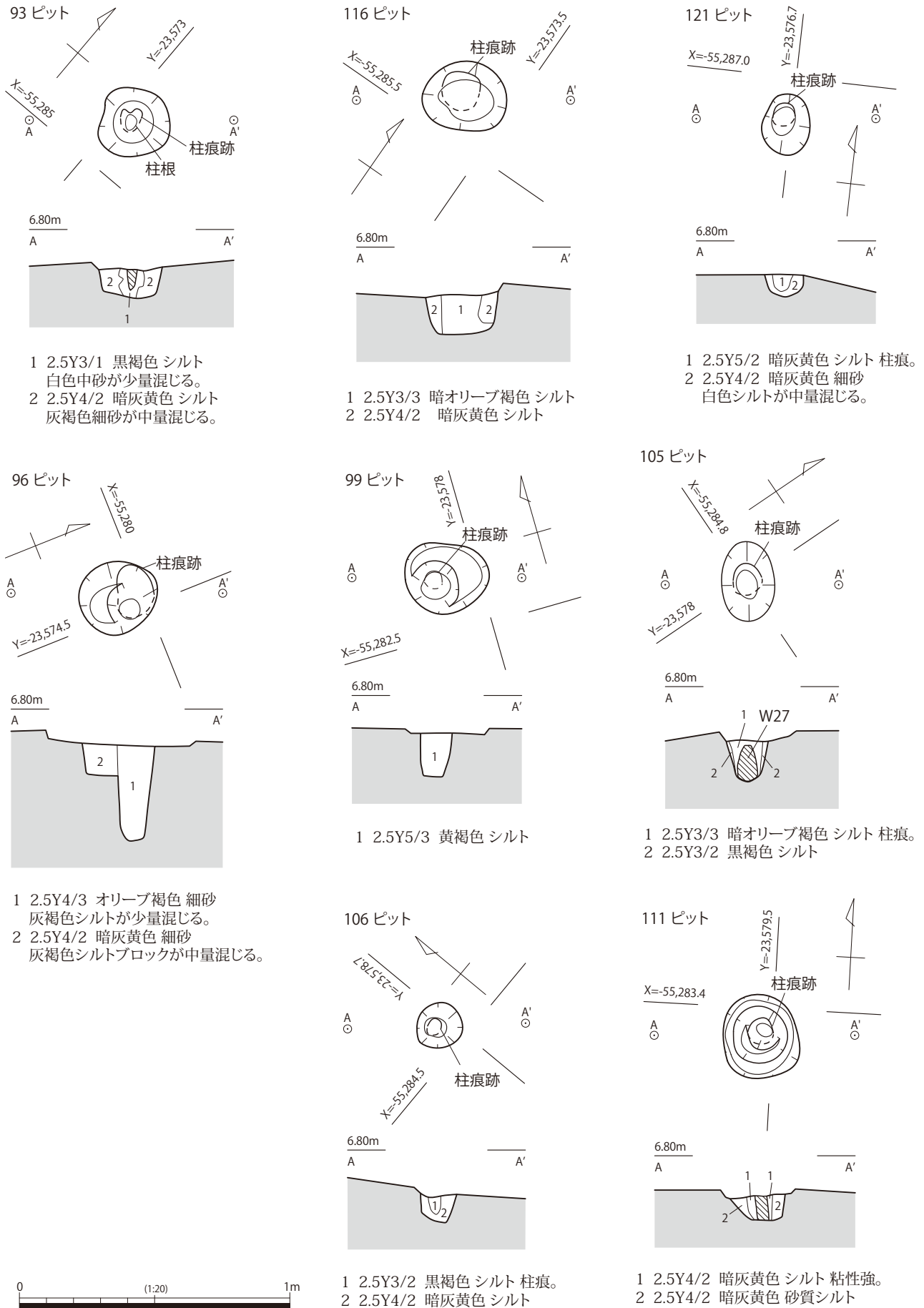
調査区北東部隅、3F-6fグリッドを中心に列状に並んだピット9基を検出し、柵列と認識したものである。検出長は8.4m、167-69ピット間を攪乱により壊されており、本来は1～2基のピットが存



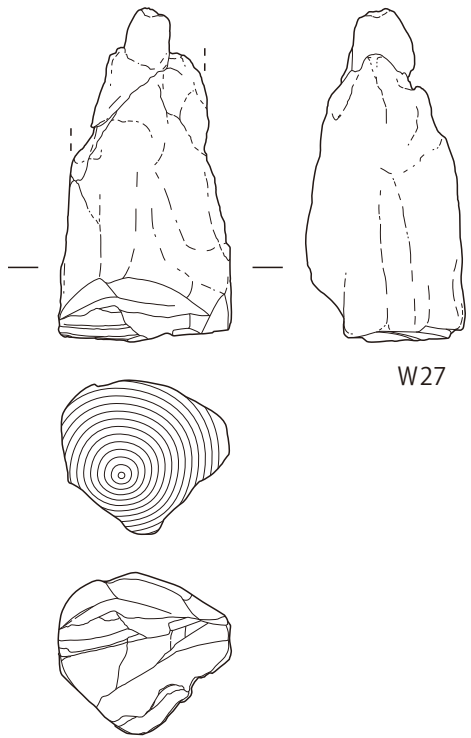
第46図 掘立柱建物5 平面、断面図

第4表 掘立柱建物5及び周辺ピット一覧

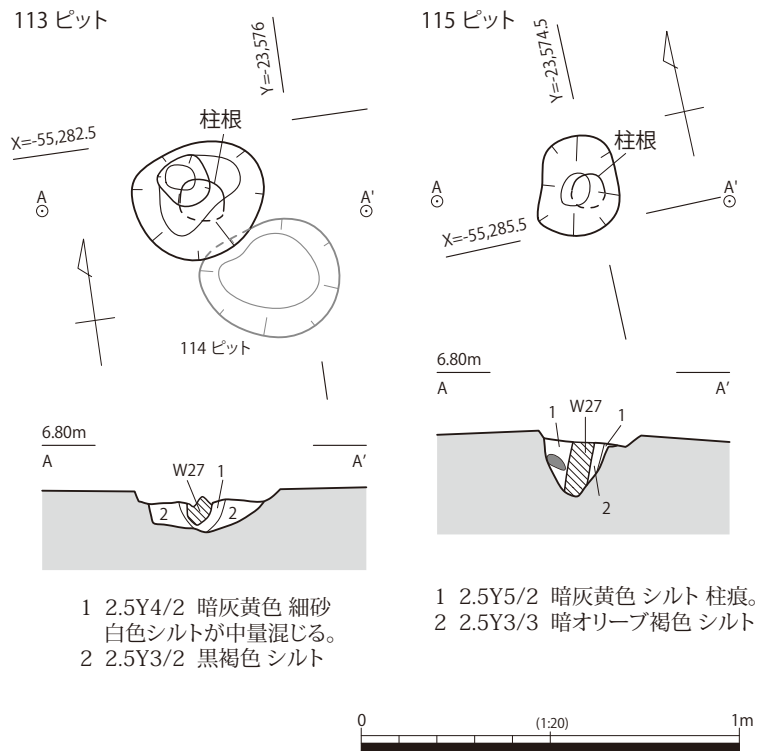
遺構番号	集合遺構名	規模 (cm)			備考
		長軸	短軸	深さ	
91	掘立柱建物5	28	26	19	身舎
92	掘立柱建物5	35	29	9	身舎
93	掘立柱建物5	27	27	13	柱痕跡有り。
94	掘立柱建物5	38	32	9	身舎
95	掘立柱建物5	31	26	18	
96	掘立柱建物5	30	26	38	柱痕跡有り。
97	掘立柱建物5	32	27	22	
98		22	21	25	
99	掘立柱建物5	31	25	18	柱痕跡有り。
100	掘立柱建物5	30	23	10	身舎
101	掘立柱建物5	26	23	14	身舎
102	掘立柱建物5	26	23	20	身舎
103	掘立柱建物5	37	33	21	身舎
105	掘立柱建物5	30	20	19	柱痕跡有り。身舎
106	掘立柱建物5	17	16	11	柱痕跡有り。
111	掘立柱建物5	31	28	12	柱痕跡有り。
112		31	27	16	
113		35	30	12	柱材残存。
114		37	31	19	
115		26	20	18	柱材残存。
116	掘立柱建物5	31	26	18	柱痕跡有り。身舎
118	掘立柱建物5	33	25	24	身舎
119	掘立柱建物5	21	20	17	身舎
120		25	24	16	
121	掘立柱建物5	23	18	8	柱痕跡有り。身舎



第47図 掘立柱建物5ピット 個別平面、断面図



第48図 掘立柱建物5 (105ピット) 出土遺物



第49図 掘立柱建物5周辺ピット 平面、断面図

在していたものと考えられる。この167-69ピット間を除くと、ピット間距離は0.6～1.0mとなる。ピットは長軸32～45cm、短軸25～37cmの円形もしくは楕円形を呈する。検出面からの深さは、浅いもので19cm (167ピット)、深いもので41cm (45ピット)を測る。

杭材は残っていなかったが、47・117ピットで柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で、径は47ピットで9cm、117ピットで15cm前後である。掘立柱建物1～5で検出した柱痕跡の径とあまり差は見いだせなかった。

この柵列を境として南側に、建物の柱穴と考えられるピットが集中して検出された。

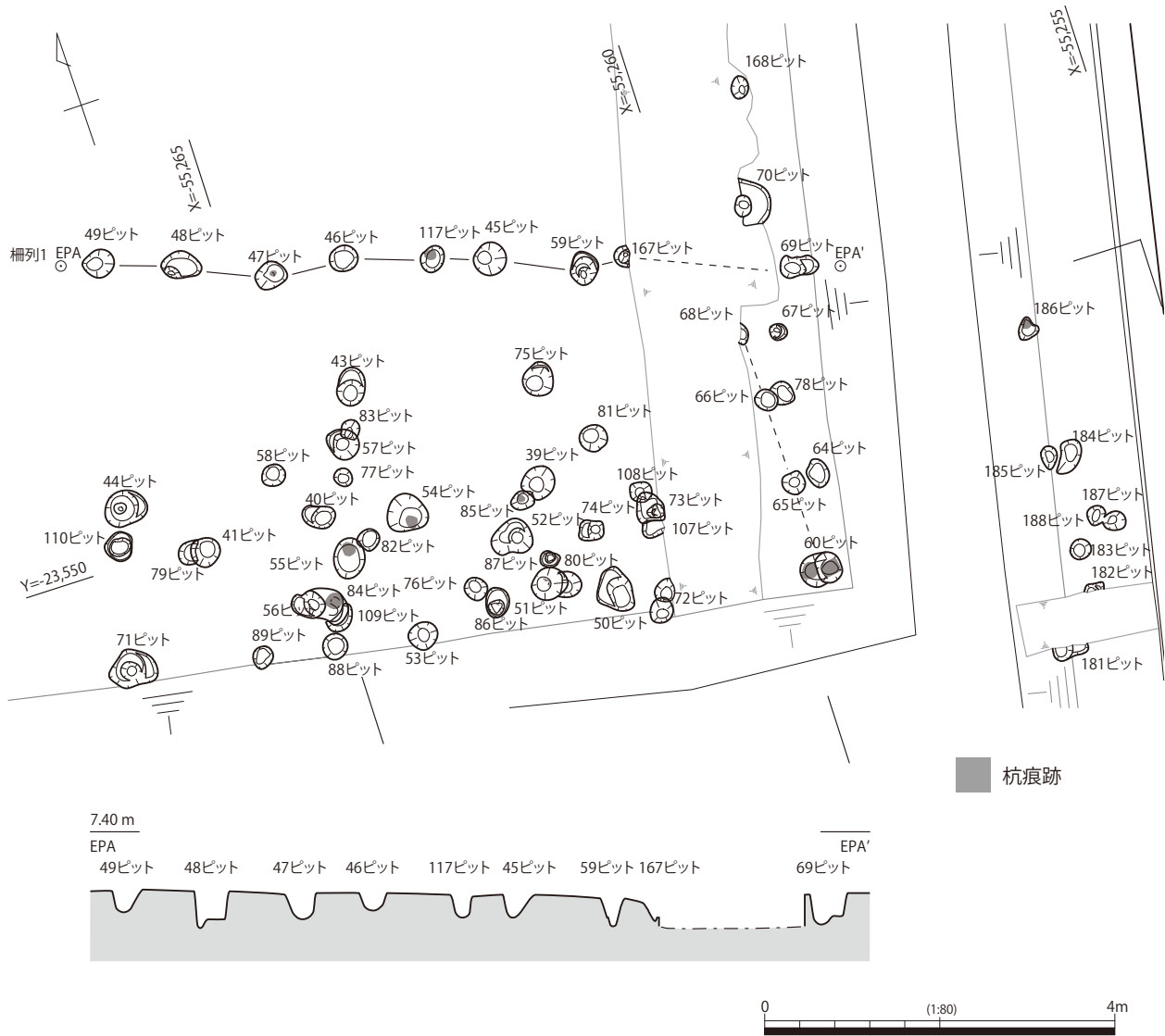
柵列1周辺ピット群 (第50～52図、第5表、図版20・38)

柵列1を境として東側、3F-7fグリッドと3F-7eグリッドの境界部分で検出されたピット群で、検ピットは更に調査区外東側、1区に向けて広がっているものと考えられる。

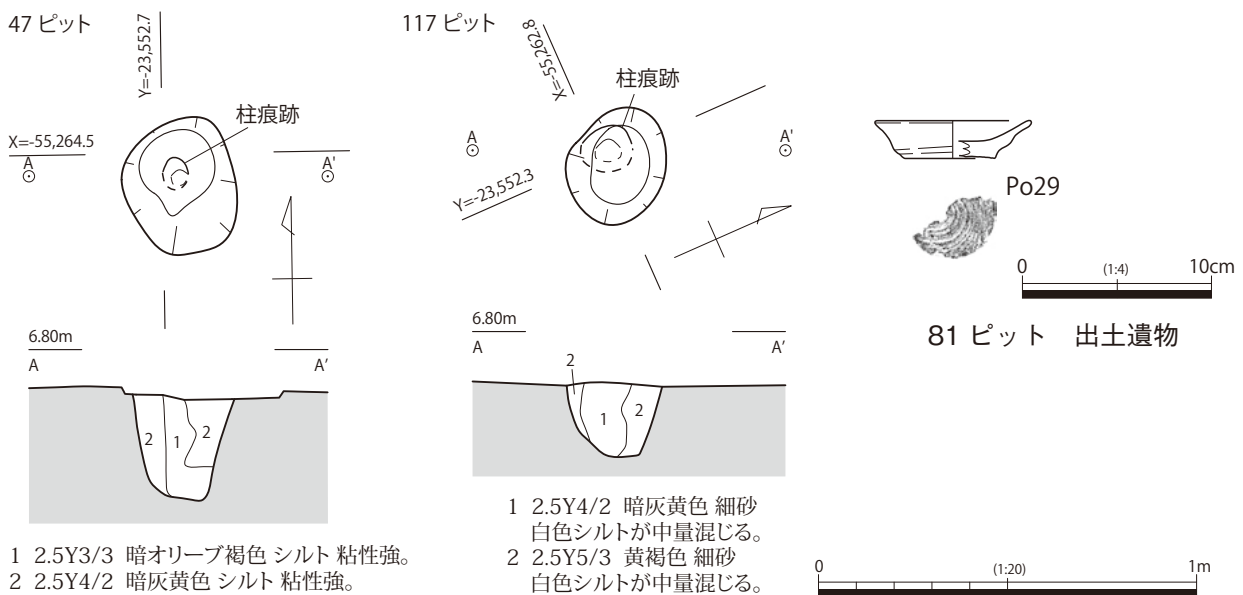
検出されたピットは柵列1としたものを除き51基である。そのうち、埋土中に柱痕跡の認められたものは9基 (54、55、60-1、60-2、73、84、85、86、186ピット)、柱根の残っていたもの1基 (73ピット)あり、なんらかの構造物が築かれていたことは確実である。

ピット列として並ぶものが少なくとも108-74-80-86ピットと68-66-65-60ピットの2列(第50図)認められるが、これらのピット列に対応し、掘立柱建物に認定し得るようなピット列は確認できなかった。柱痕跡の認められたもので、注目されるのが60-1ピットである (第52図)。この柱痕跡は、長辺20cm、短辺17cmの方形を呈しており、角材を用いた柱が立てられていたことを示唆するものである。60-1ピットが構成する構造物の所属時期が新しいという可能性も残るが、埋土は他のピットと特段差異は認められず、これまでみてきた掘立柱建物の柱根及び柱痕跡が径10cm前後の丸太材を用いていると考えられる状況と比較すると、興味深い。

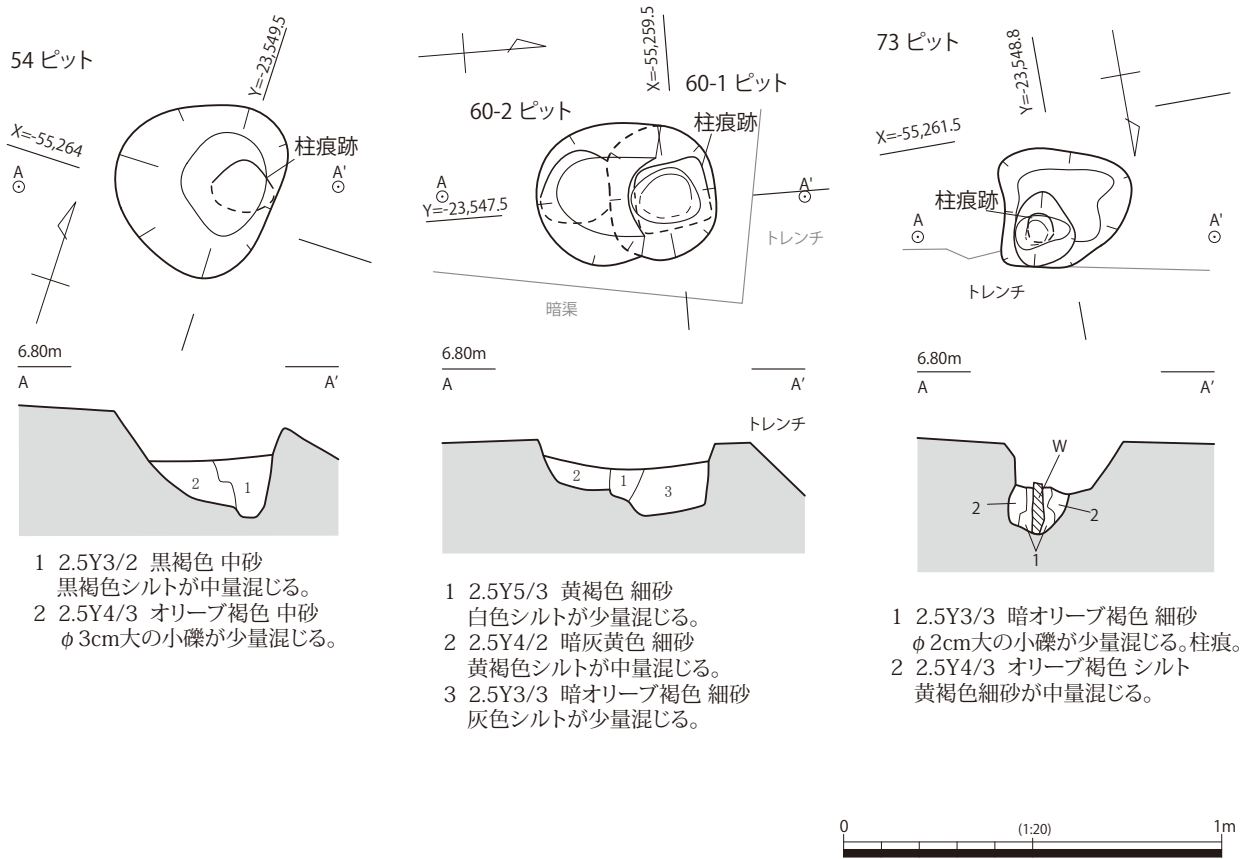
帰属時期の推定できる出土遺物として、81ピットから出土した土師器小皿 (Po29)がある。復元



第50図 柵列1及び周辺ピット 平面、断面図



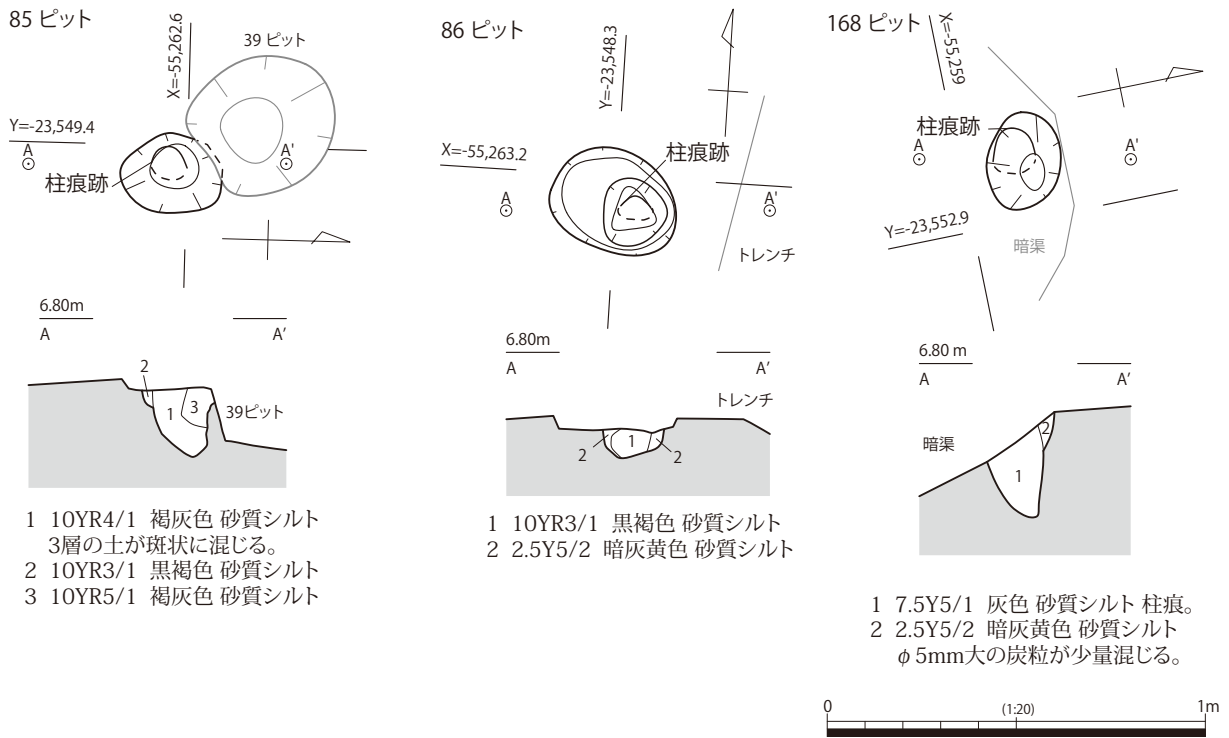
第51図 柵列1ピット 個別平面、断面図及び81ピット 出土遺物



第52図 柵列1周辺ピット 平面、断面図(1)

第5表 柵列1及び周辺ピット一覧

遺構番号	集合遺構名	規模 (cm)			備考
		長軸	短軸	深さ	
39		37	35	18	
40		38	26	20	
41		34	33	27	
43		44	31	25	
44		49	39	23	
45	柵列1	39	37	41	
46	柵列1	33	30	20	
47	柵列1	37	32	30	柱痕跡
48	柵列1	45	32	28	
49	柵列1	36	33	22	
50		53	42	18	
51		43	37	25	
52		47	41	38	
53		34	31	23	
54		47	43	25	柱痕跡
55		47	36	14	柱痕跡
56		39	30	32	84ピットを切る。
57		39	33	25	
59	柵列1	38	33	20	
60		28 > -	35 > 37	20 > 13	柱痕跡 新>旧
64		35	25	8	
65		26	25	19	
66		26	26	19	
67		21	19	20	
68		-	-	18	
69	柵列1	45	26	34	
70		27	23	20	
71		56	43	20	
72		30 > 28	26 > 23	23 > 15	新>旧
73		40	33	25	柱痕跡
74		32	27	16	
75		40	35	34	
76		27	25	16	
78		-	24	15	
79		-	27	17	
80		-	30	16	
81		32	31	27	
82		26	24	16	
83		22	20	14	
84		52	35	29	柱痕跡
85		26	21	21	柱痕跡
86		34	27	11	柱痕跡
87		23	20	5	
88		30	28	25	
89		27	23	17	
109		-	36	16	
110		34	31	21	
117	柵列1	32	26	20	柱痕跡
167	柵列1	-	25	19	
168		26	20	23	
181		40	-	24	
182		-	-	8	
183		24	23	17	
184		45	22	19	
185		26	18	12	
186		25	21	15	柱痕跡
187		25	23	21	
188		23	20	10	



第53図 柵列1周辺ピット 平面、断面図(2)

口径8.0cm、復元底径4.8cm、器高2.0cmで、高台状にやや突出した回転糸切りの底部から丸みを持って立ち上がり、体部半ばから口縁部にかけて直線的に外反するもので、12世紀代の所産と考えられるものである。

(4) 土坑

90土坑(第54図、図版21)

調査区北東部、掘立柱建物5の北側に位置する。長軸1.53m(残存)、短軸1.34mの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは0.22mを測る。

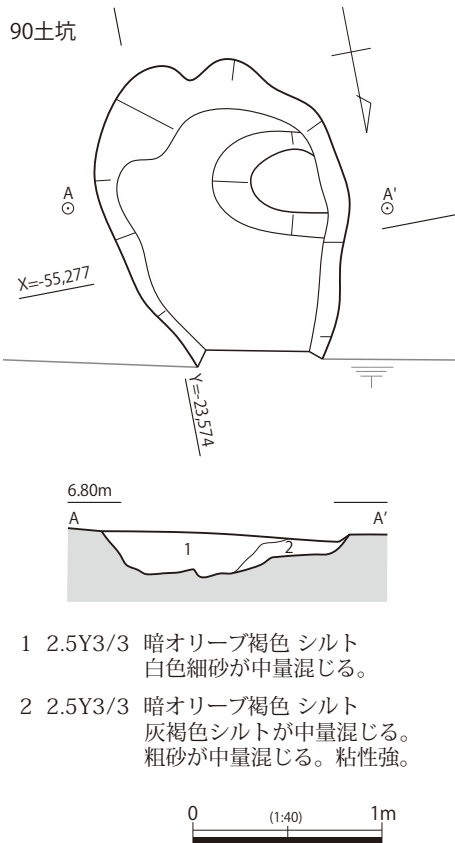
埋土は2層に分かれ、どちらも暗オリーブ褐色のシルトであり、1層は細砂が、2層は灰褐色シルトが斑状に混じる。埋土の特徴から、人為的に掘削されたものと考えられるが、時期・性格ともに不明である。

(5) 流路、集石

第1遺構面18流路下面より、36流路及び36流路に関連する施設であると考えられる104集石を検出した。

36流路(第55・56・58～60図、第6表、図版22・23・35・39・61～64・67～69・71)

調査区南東に位置し、南西から北東方向に流れる自然流路である。18流路内の埋土を除去した段階で、18流路底面の北西岸寄りで見出した。後に記述する163流路の埋没過程における



第54図 90土坑 平面、断面図

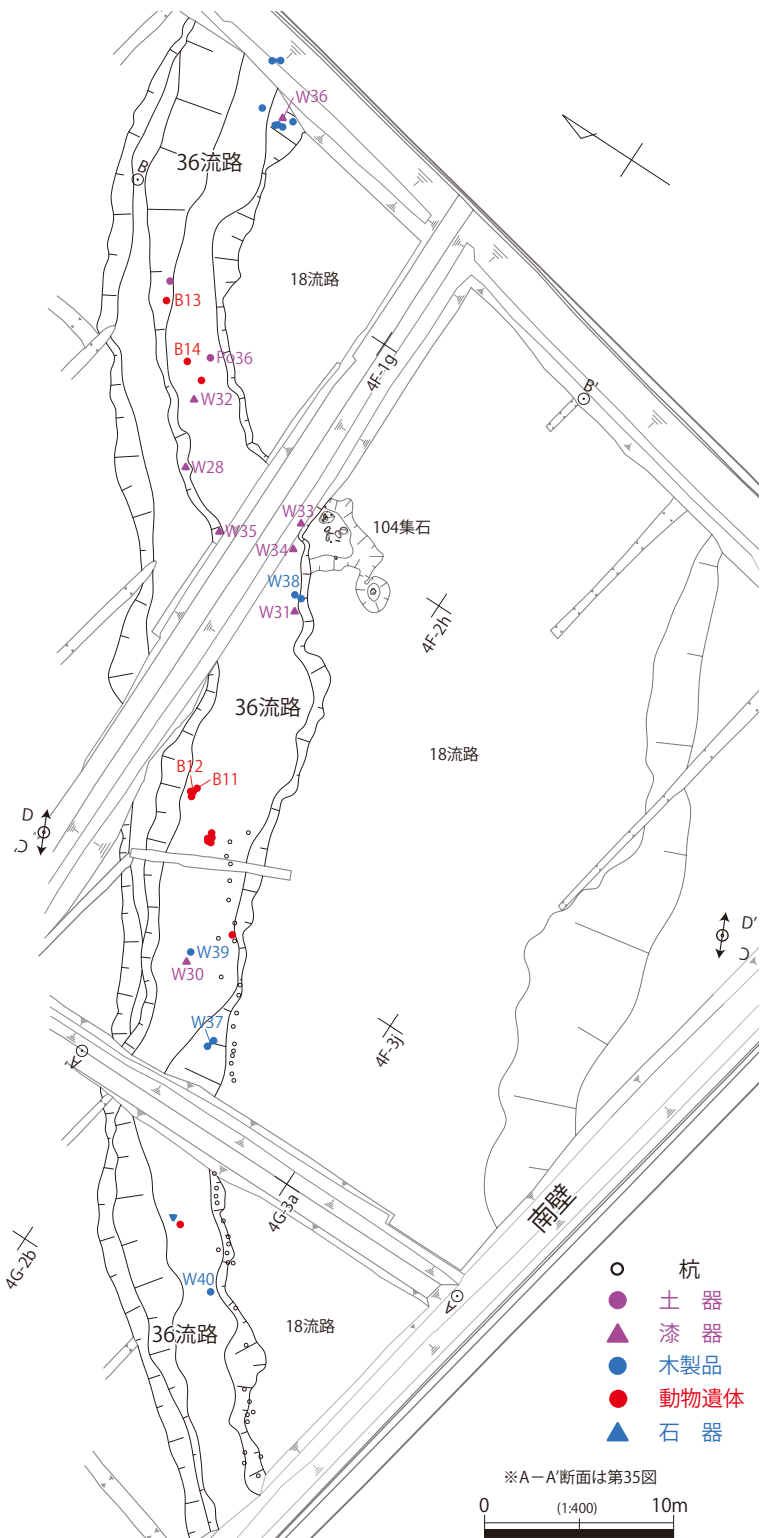
中段階に相当する。検出した長さは北西岸側で80m、幅は最大で3.2m、深さは約50cmである。断面形は緩やかな皿状を呈する。埋土断面（第58図）は、シルトと砂のラミナ形成層が複雑に切りあっている様子が観察できる。また植物遺体を挟在し、生痕による擾乱が認められる。163流路の埋積が進んだ段階で水の通り道が北西岸寄りに集約したものと推定される。36流路の南東岸に沿って乱杭が並ぶことから、人の手によって管理・維持されていたことがうかがえる。ラミナ形成層の切りあいについては、流路内の底さらいが行われた可能性が考えられる。

104集石（第57図、図版23）

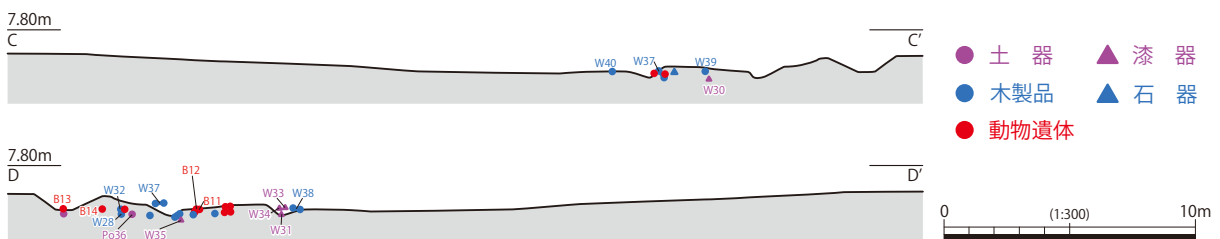
36流路南岸4F-1gグリッド西側において、36流路に接続するように落ち込みがあり、落ち込み中に河原石が集中する箇所が認められたため、人為的な所産であると判断し、104集石と呼称した。

落ち込みは最大幅4.5m、長さ5.6m、深さは深い部分で30cmほどの不整形を呈し、北側が36流路に接続する。

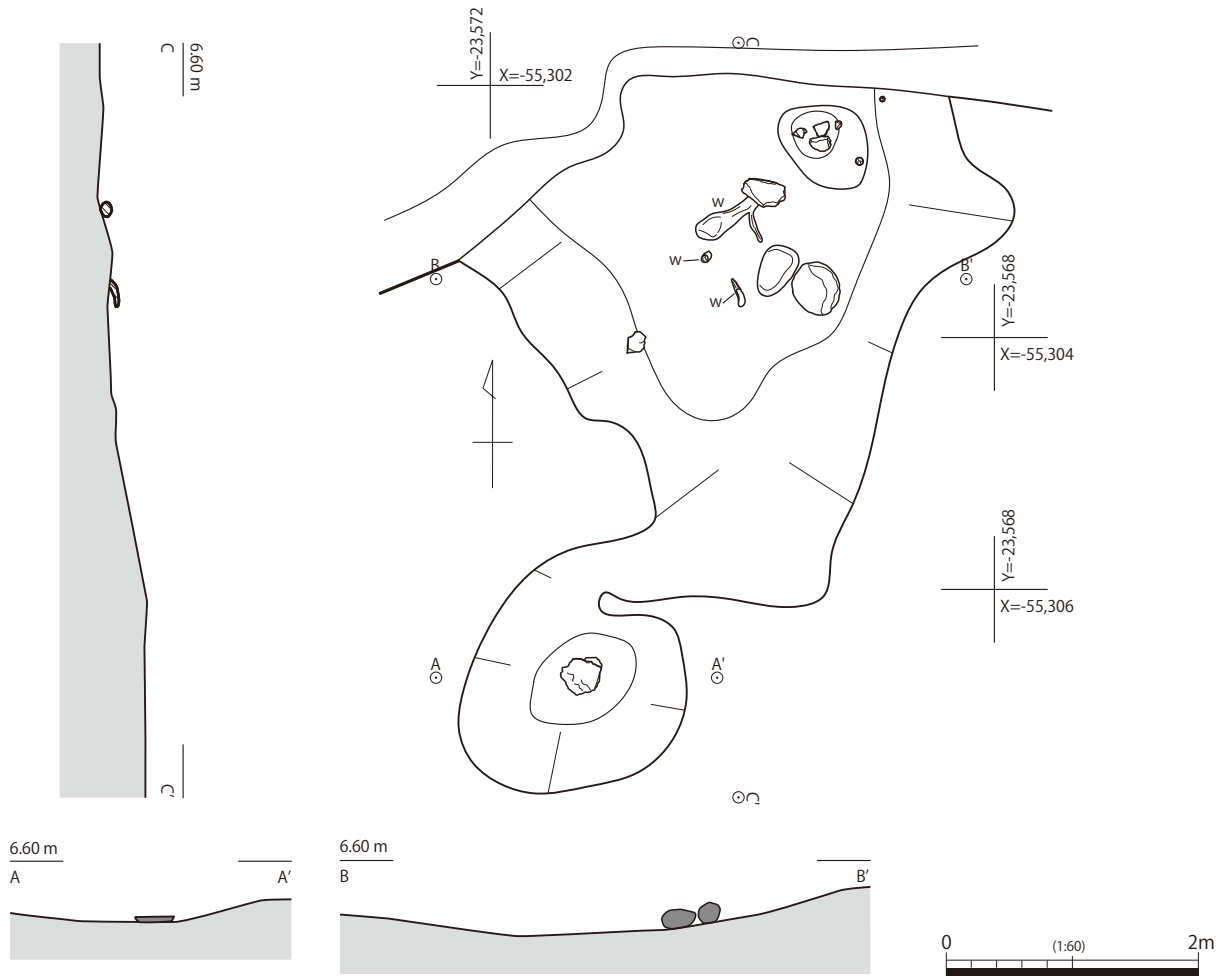
落ち込み内には中央部分に長軸40cm前後の河原石が置かれ、この河原石周辺に3本の杭が打たれていた。また、40cm前後の平らな割石も落ち込み中から落ち込み周辺に集中的に認められた。



第55図 36流路 平面図



第56図 36流路 遺物出土状況見通し図



第 57 図 104 集石 平面、断面図

この遺構の性格については、36 流路を利用もしくは管理するための施設である可能性が高いと考えられるが、具体的な機能については判断できなかった。

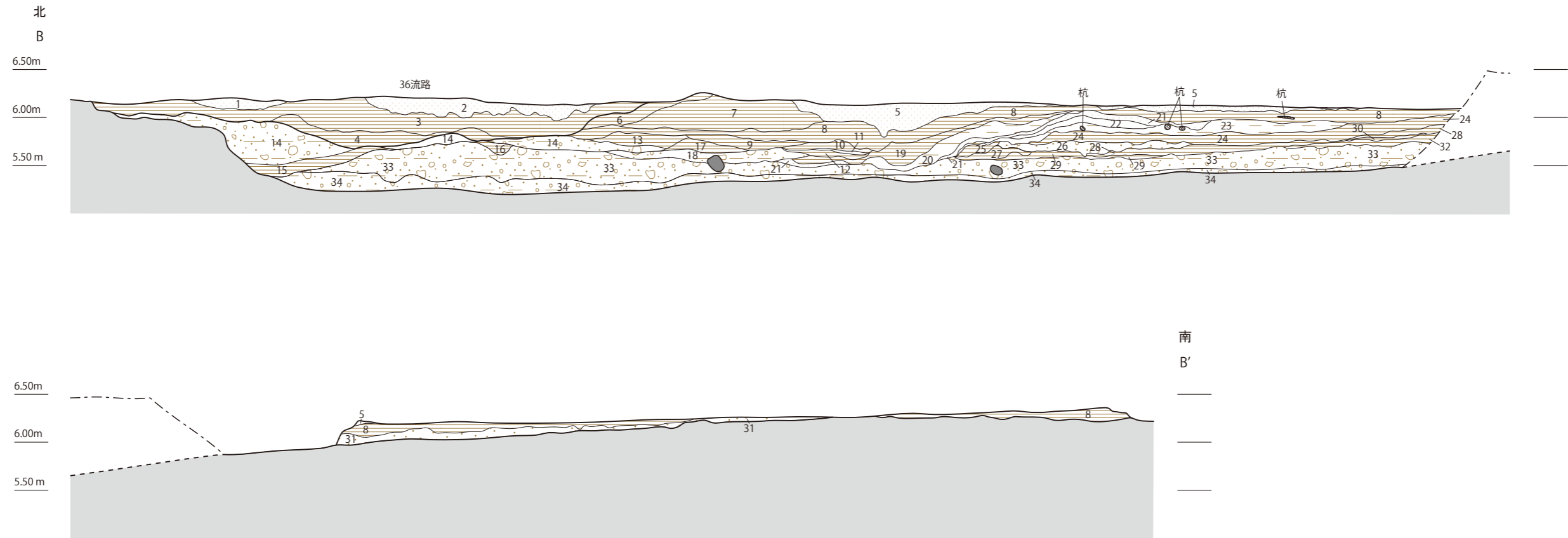
36 流路出土遺物として土器 8 点、木製品 13 点（うち漆器 9 点）を図化した。また、獣骨も出土している（第 55・56 図、第 6 表）。

全体的な出土傾向としては、木製品に比して土器の出土が少ない点が挙げられる。また獣骨は流路中央部分にまとまって出土しており、ある種別及び部位の判明したものを第 6 表に示した。漆器は流路下流にあたる北半部で多く出土している。この出土傾向、特に漆器の出土傾向については、104 集石との関連も想定されたが、判然としなかった。

Po30 は底径 4.5cm、土師器小皿の底部の中央を穿孔し、紡錘車に転用したもので、底部には回転糸切痕が認められる。Po31 ~ 37 は土鍋で、Po31 ~ 36 は土師器、Po37 は瓦質土器である。口縁部

第 6 表 36 流路 出土主要獣骨一覧

図中番号	図版番号	取上番号	種別	グリッド	層位	部位	備考
B11	-	685	ウシ	T30-6d-4F-1i	上層	中手骨	
B12	-	686	ウシ	T30-6d-4F-1i	上層	指骨か	
B13	-	711	イヌカ	T30-6d-3F-9g	下層	上腕骨か	
B14	図版 23 - 4	713	ウシ	T30-6d-3F-10g	下層	上顎骨	



- 36 流路
- 1 7.5GY 4/1 暗緑灰色 粗砂混じりシルト φ2~3cmの円礫5%含む。ラミナの認められる粗砂が斑状に20%混じる。
 - 2 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰色 粗砂混じりシルト ラミナが認められる。粗砂が10%混じる。
 - 3 7.5GY 3/1 暗緑灰色 粗砂~シルト ラミナを形成。
 - 4 5Y 7/2 灰白色 粗砂~細砂 ラミナを形成。
- 163 流路
- 5 7.5GY 3/1 暗緑灰色 砂質シルト 高師小僧顕著。木片等有機質多く含む。
 - 6 5Y 7/2 灰白色 シルト~粗砂 細砂主体でラミナを形成。
 - 7 5GY 7/1 暗オリーブ灰色 細砂~シルト ラミナを形成。草本類の植物遺体多く含む。
 - 8 2.5Y 4/1 黄灰色 シルト オリーブ灰色(5GY 5/1)シルトが筋状に混じる。高師小僧顕著。ラミナ形成。
 - 9 5Y 7/2 灰白色 細砂~シルト 細砂主体でラミナを形成。
 - 10 5Y 7/2 灰白色 粗砂~細砂 ラミナ形成。
 - 11 5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト 木片等有機質少量含む。腐植層
 - 12 5Y 7/2 灰白色 粗砂~細砂 ラミナ形成。
 - 13 5Y 7/2 灰白色 細砂 ラミナ形成。草本類の植物遺体含む。φ5cmの礫微量含む。
 - 14 5Y 5/2 灰オリーブ色 砂礫 φ3~5cmの亜円礫と粗砂で形成。
 - 15 5Y 6/6 オリーブ色 粗砂 ラミナ形成。
 - 16 7.5GY 5/1 緑灰色 細砂~粗砂 ラミナ形成。
 - 17 5Y 7/2 灰白色 細砂~シルト ラミナ形成。
 - 18 7.5Y 5/3 灰オリーブ色 粗砂~礫 φ1~3cmの亜円礫主体。
 - 19 7.5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト~細砂 植物遺体多く含む。ラミナ形成。
 - 20 7.5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト

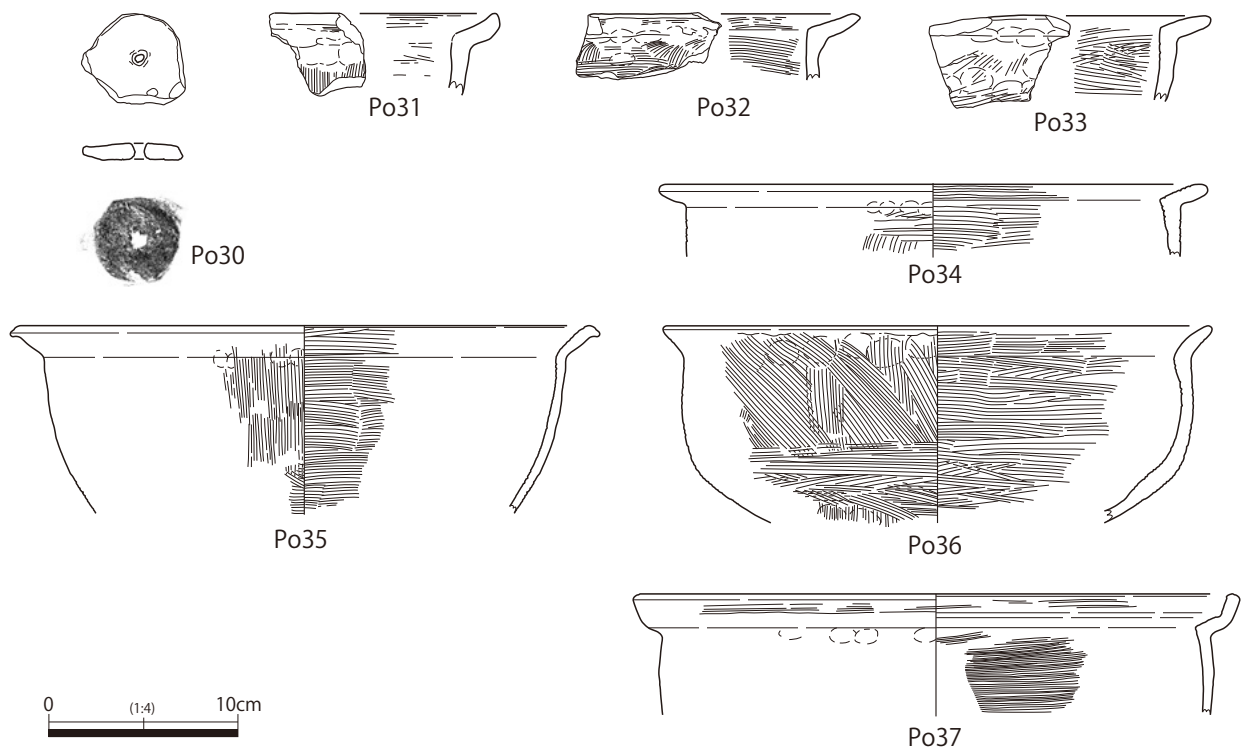
- 163 流路
- 21 7.5Y 3/1 灰オリーブ色 砂混じりシルト
 - 22 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色 シルト~細砂 ラミナ形成。
 - 23 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色 シルト 木片等有機質多く含む。腐植層。
 - 24 5Y 4/2 灰オリーブ色 シルト 有機質多く含む。ラミナ形成。
 - 25 2.5Y 5/1 オリーブ灰色 中砂と砂質シルトのラミナ 木の枝等の植物遺体挟在。
 - 26 2.5Y 5/3 黄褐色 砂礫 粗砂中にφ1~3cmの亜円礫50%混じる。
 - 27 5G 5/1 緑灰色 中砂~粗砂 ラミナ形成。
 - 28 7.5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト~中砂 ラミナ形成。
 - 29 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 細砂~シルト ラミナ形成。
 - 30 5Y 3/2 オリーブ黒色 シルト~細砂 ラミナ形成。
 - 31 7.5Y 5/1 灰色 シルト質細砂
 - 32 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 粗砂~中砂 ラミナ形成。植物遺体挟在。
 - 33 2.5Y 5/4 黄褐色 砂礫 中・粗砂中にφ1~15cm大の円礫・亜円礫が50%混じる。
 - 34 5B 5/1 青灰色 砂礫 礫優勢。φ5cm大の亜円礫を主体とする。

凡例

- シルト (砂混じり、砂質)
- シルト
- 砂礫
- 石
- 砂
- ラミナ
- 木製品等



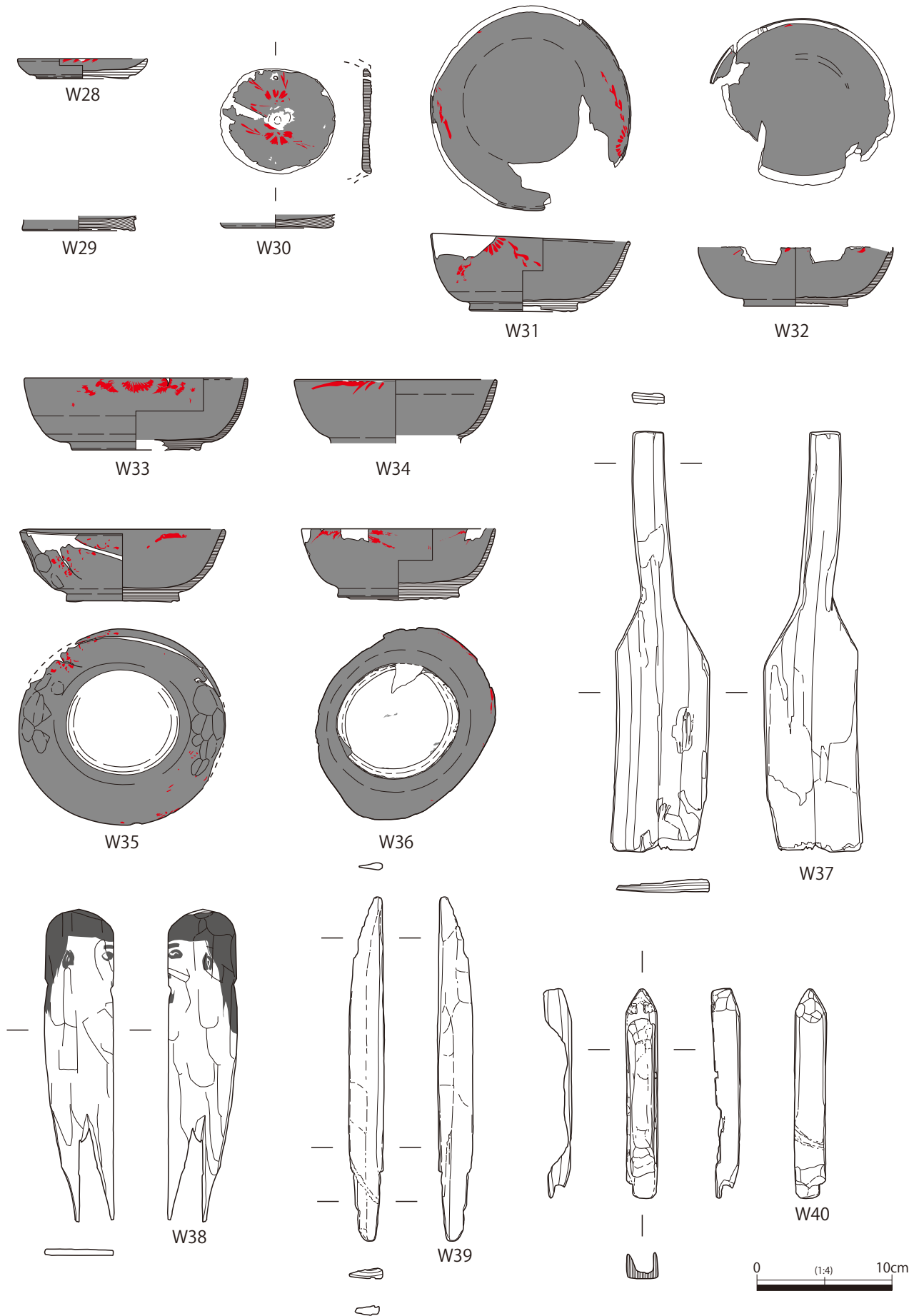
第58図 36・163流路 土層断面図



第59図 36流路 出土遺物(1)

が「く」の字に屈曲し、直線的に外反するもの (Po32～36)、「く」の字に屈曲後、やや内湾気味に立ち上がるもの (Po31)、口縁部が屈曲して斜め方向に立ちあがった後、再度上方に屈曲して受け口状となるもの (Po37) の3種類の形態が認められる。このうち、「く」の字に屈曲する口縁部をもつものについては、Po36の口縁部はやや丸みを帯びつつ「く」の字の屈曲しており、鋭く「く」の字に屈曲する他の個体とは異なる特徴をもつ。図化していないものも含め36流路からの土器の出土は少なく、特に坏、皿類が極端に少ない点も特徴であろう。

W28～36は挽物の漆器。出土傾向としては、先にも触れたように、36流路下流に当たる北半部に集中しており、シルト主体の上層 (第58図：第1・2層) ではなく、ラミナの認められる粗砂～細砂主体の下層 (第58図：第3・4層) から多く出土している傾向が認められる。彩色については、36流路出土漆器も18流路出土漆器 (第37図) と同様に、黒色は炭粉渋下地の上に透明漆が塗られ、赤色はその上に水銀朱により着色された赤色漆が塗られるという、すべて同じ手法で着色されている (第5章第2節参照)。W28は小皿。内外面黒色、畳付まで黒色に塗られており、口縁部内面に赤色による文様が描かれる。復元口径9.4cm、底径6.8cmと、18流路出土の2点 (第37図：W1・2) よりやや大きい。内外面ともにロクロ目 (筋) が認められる。W30は高台部だけの破片で7.4～8.2cmという底径から椀と考えられる。高台外面及び内面見込みを黒色に塗り、見込みには赤色にて草花が描かれている。見込み外側に径3mm程の穿孔がみられるが、意図的なものかどうか判断が難しい。意図的なものであれば、見込み部分の文様を飾るためになんらかの装飾として再利用したものとも考えられる。畳付部分は風化著しく調整等不明である。W29、W31～36も椀。器壁内外面にロクロ目 (筋) が明瞭に認められる。すべて内外面黒色に塗られる。状態の良いW33、35、36については口縁部内面から底部内面に向かって斜め方向に透明漆を塗った際に付けられたと考えられる刷毛目痕



第60図 36流路 出土遺物(2)

が観察できる。

形態の分かるものは底部から内湾しつつ外に開き口縁部に至る形状で、高台畳付外周に浅い沈線を巡らし、輪高台を表現している。また、W35の外面には、口縁部下の対向する位置2箇所に縦3～4cm、横5～6cmの範囲を削っている。これは18流路出土漆器W9（第37図）にも認められる特徴で、持ちやすくするための工夫もしくは装飾的なものと考えられる。

法量については、復元口縁15cm前後（W31・34・35・36）、底径8cm前後（W29～32）と9cm前後（W33・36）に分かれる傾向は18流路と同じである。その中で、W33については土圧による変形をあまり受けていないようにみえるにも関わらず、復元口径16.4cm、復元底径9.4cm、器高5.3cmと他に比して大振りである。赤漆による花文で加飾されているものの部位は口縁部内外面（W31・35・36）、口縁部外面（W32～34）、内面見込み部（W30）である。これらの樹種については、トチノキ（W29・30・33・34・36）が最も多く、他はケヤキ（W28・31・35）、クリ（W32）であり、特に器種・法量等との関連性は認められなかった。これらの漆器は、18流路出土漆器と法量や文様など、ほぼ同じ特徴を有しており、同一セットとしても違和感がないものである。

その他木製品として羽子板状木製品（W37）、人形（W38）、刀形（W39）、舟形（W40）がある。

羽子板状木製品（W37）は、18流路でも3点出土しており（W37）、18流路でも述べたように、祭祀に関連する遺物の可能性がある。

人形（W38）は全長23.1cm、幅5.1cm、横向きで手の表現がなく、足を鋭い逆V字状に、顎及び首を緩い切欠きによって表現し、顔面、耳、髪、顎髭を墨書きで表現している。

W39の刀形は、長さ25.5cmの長細い板を加工し、上部20.4cmの片側を削り尖らせることによって刃部を、下部5.1cmの両側を削り込むことによって茎部を作出している。刃部は峰から2.1cmの部分から刃先に向かって削り始めており、この削り出しの境界、刃部と峰部の間に縦方向の稜が観察できる。鎬を表現したものか。

W40は舟形で、4×4cm程の角柱材を削り貫いて船槽を、両端を削り船首、船尾を作出し、舷側上端両側には、櫂を装着した箇所を表現したと考えられる削りこみがみられる写実的なものである。

これらの出土遺物の示す時期は、瓦質鍋の出現期である12世紀後半以降であるが、36流路の機能時期は第4章第2節の検討から、11世紀後半から12世紀代としておきたい。



写真12 作業風景（36流路漆器写真撮影）



写真13 作業風景（36流路掘削）

第5節 第3遺構面の調査

(1) 遺構の概要

これまでも述べてきたように、調査区全体が圃場整備による大規模な削平を受けており、旧地形の高い部分は削平され、低い部分は客土されている状況であった。そのため、遺構を被覆していたはずの包含層が残っていない部分が多く認められた。

その中で、旧地形が他所に比して低かったため、層位的関係を追うことが可能な箇所、調査区中央部北側及び調査区南西部南側において、炭化物の混じる特徴的な層（北壁43層：第14、15図、南壁85層：第20図）が認められた。この層を鍵層とし、鍵層及び鍵層に対応する層の下面について遺構検出を実施した。そこで検出された遺構及び調査区南東部を流れる自然流路について第3遺構面として認識し、調査を行った。

調査区南東部を流れる自然流路第3段階（163流路）に加えて、上で述べた鍵層の下面より掘立柱建物1棟、土坑6基、溝1条、耕作痕のほか、炭化物が集中的に認められた箇所（炭化物範囲）3ヶ所、土器が出土した落ち込み1か所、自然流路を検出した。

また、163流路中から、小皿、鍋を中心とする土師器や白磁、漆器のほか、下駄や弓、硯など様々な生活用具が出土している。

(2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物6（第62図、第7表、図版24・45）

調査区北側中央部、3F-7jグリッドを中心とした位置で検出した掘立柱建物である。梁行1間（3.3m）、桁行2間（3.6m）の側柱建物で、主軸はN-56°-Wである。柱間寸法は、梁方向2.4m、桁方向1.6～1.7mとほぼ揃っている。柱穴は径18～47cmの円～楕円形で、検出面からの深さは浅いもので22cm（141・142ピット）、深いもので30cm（157ピット）を測る。

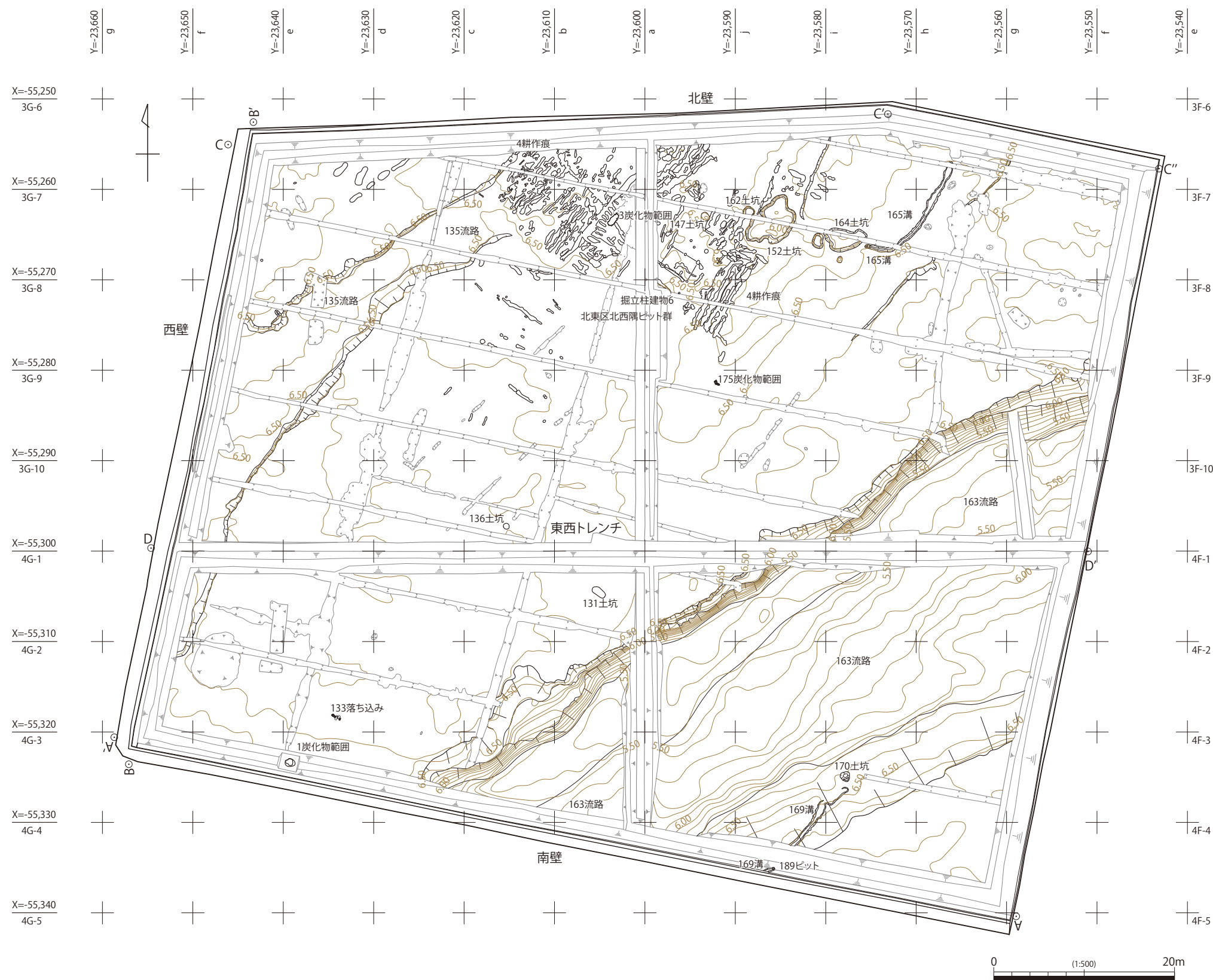
この掘立柱建物の周囲には、143～145・155ピットと、この掘立柱建物となんらかの関係があった可能性のあるピットが検出されているが、これらの性格を明らかにすることはできなかった。

柱穴の埋土はシルトや炭化物の混じる細砂で、141・142ピットでは楕円形（径10cm前後）の柱痕跡が確認された。丸太材を用いて建てられていたものであり、柱痕跡の径は10cm前後と、柱としてはやや細めであることから、簡易的な建物であったと推定される。

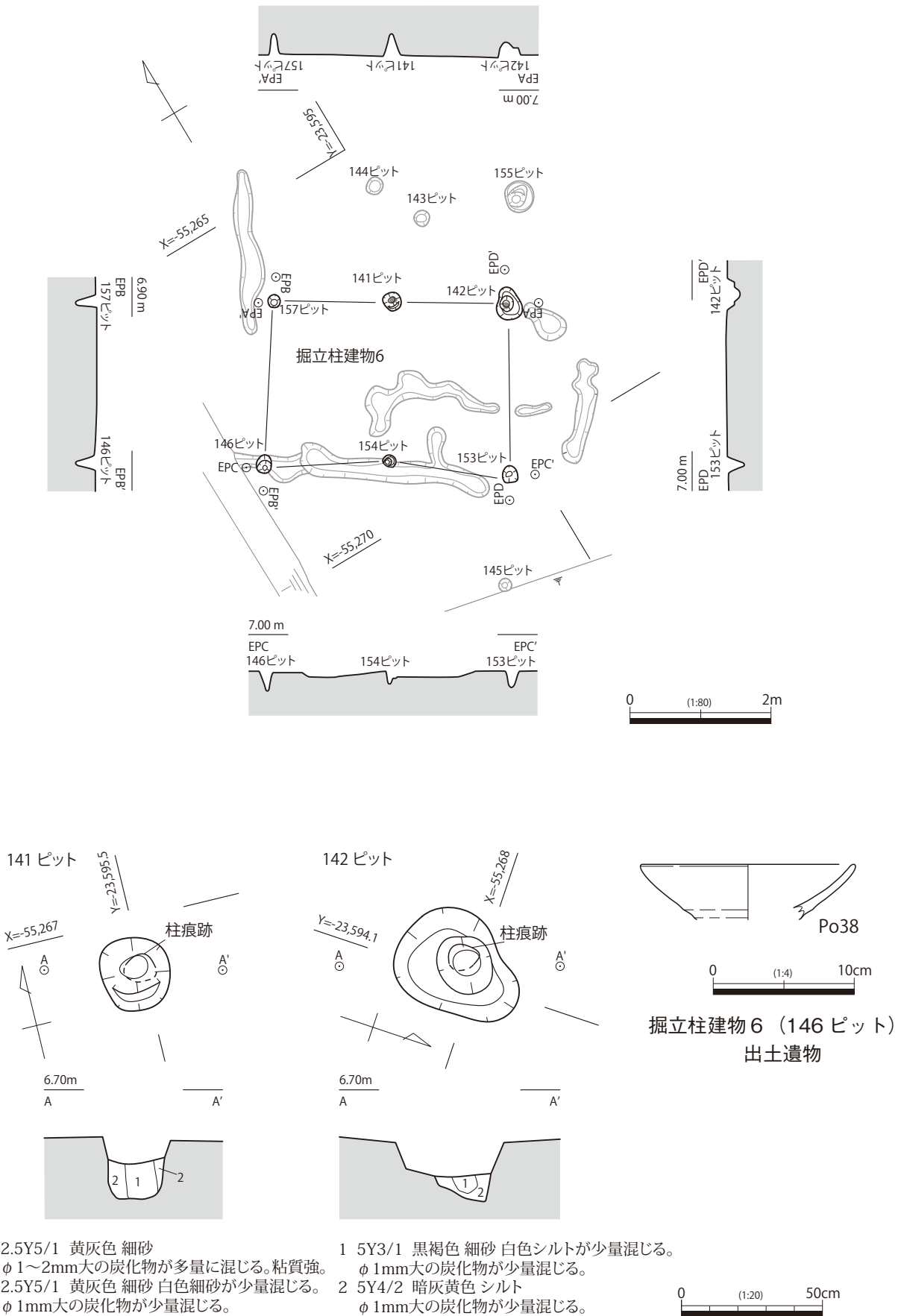
4耕作痕が検出された範囲内に位置するが、4耕作痕を被覆している北壁43層（第14、15図）上面では検出できなかった。そして、北壁43層とピット埋土との関係性も確認することができなかったが、4耕作痕で詳しく述べるように、掘立柱建物6は4耕作痕古段階には耕作地として利用されていない区画に建てられており、4耕作痕の古段階は同時併存していた可能性が高いと考えられる。

遺物は146ピット埋土中より土師器坏（Po38）が出土している。復元口径14.9cmを測り、内面回転ナデ、外面は磨滅著しく調整は不明瞭であるが、強い回転ヨコナデ調整による成形の影響を受けて体部下半がくびれ、やや内湾しつつ大きく開く器形の坏で、第2遺構面掘立柱建物3の140ピット（第44、45図）で意図的に埋納されていたと考えられる土師器坏（Po38）と同様の特徴をもつ。

外面が著しく磨滅していること、出土は破片1点のみであることから、この土師器坏は意図的にピット内に埋納されたものではなく、埋土に混入したものと考えられる。11世紀後半～12世紀前半の所産と考えられるものである。



第61図 第3遺構面全体図

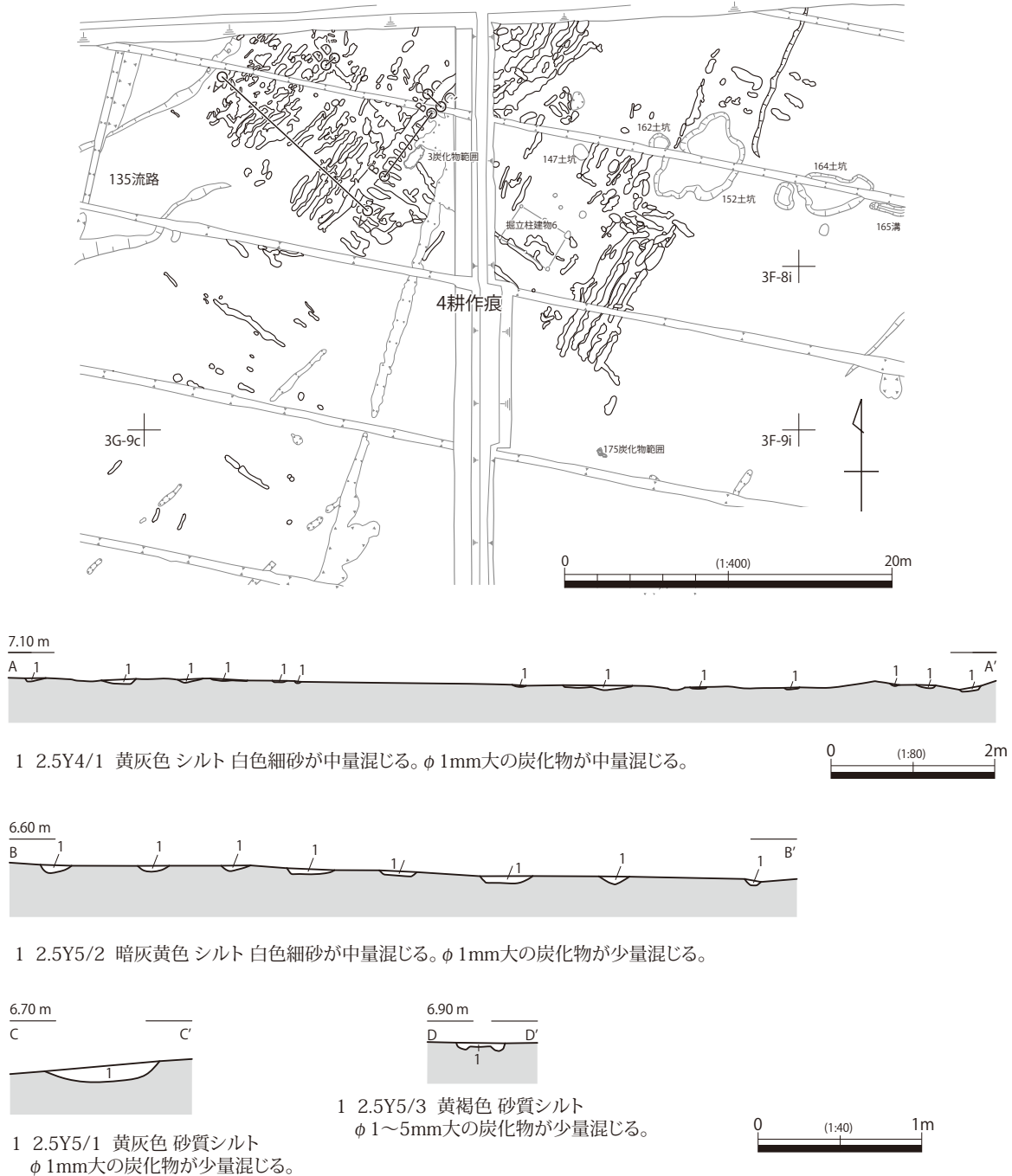


第62図 掘立柱建物6及び主要ピット 平面、断面図及び出土遺物

第7表 掘立柱建物6及び周辺ピット一覧

遺構番号	集合遺構名	規模 (cm)			備考
		長軸	短軸	深さ	
141	掘立柱建物6	26	24	22	柱痕跡有り。
142	掘立柱建物6	47	37	22	柱痕跡有り。
143		23	22	16	
144		25	24	9	
145		19	18	24	

遺構番号	集合遺構名	規模 (cm)			備考
		長軸	短軸	深さ	
146	掘立柱建物6	26	21	27	
153	掘立柱建物6	24	22	23	
154	掘立柱建物6	-	19	11	
155		44	40	30	
157	掘立柱建物6	18	17	30	

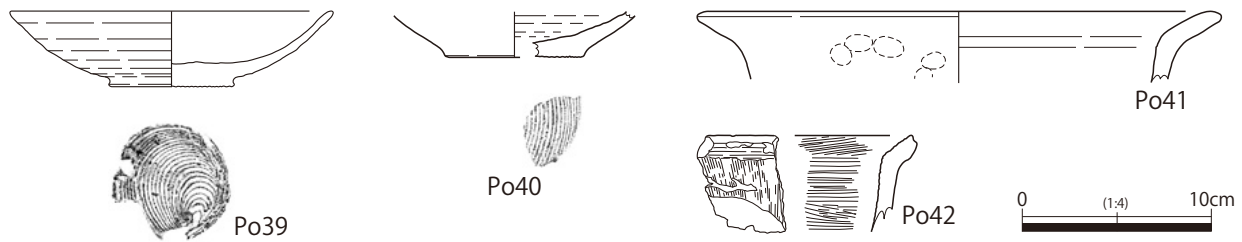


第63図 4耕作痕 平面、断面図

(2) 耕作痕

4耕作痕 (第63、64図、図版25・40・45)

調査区北側中央部に広がる耕作痕及びそれを区画する溝について、炭化物の多く混じる特徴的な同一層(北壁43層:第14、15図)が埋土であったため、一括して「4耕作痕」として調査した。



第64図 4 耕作痕 出土遺物

検出できた範囲は耕作土であると考えられる北壁43層が比較的厚く残存していた箇所、本来は更に広がっていたものと考えられるが、他の箇所は圃場整備により削平を受けているため、同層は遺存しておらず、同一の耕作痕の広がりを確認することはできなかった。

区画溝は、3G-7aグリッドをほぼ対角線上、北東-南西方向に横切る、長さ12.8m、最大幅90cm、深さ10cm前後のものである。この溝を境に西側の耕作痕は、主軸を北東-南西方向(N-40°-E)にとるものが主で、区画溝より東側、掘立柱建物6を中心にした箇所は北西-南東方向(N-55°-W)、更に東側は再度北東-南西方向に主軸をもつ耕作痕が主となることから、大きく3つの区画が存在していたと考えられる。

このうち掘立柱建物6周辺に主に認められる北西-南東方向の耕作痕の深さは、両側の北東-南西方向のものに比して浅く、前者が1~4cm、後者は3~8cmとなっている。また、それぞれの検出された耕作痕の密度についても前者は疎、後者は密というように差が認められる。これは、掘削された高さの差異を表しており、北西-南東方向が高い位置で耕作されたため、遺構検出面に達する部分が少なく、耕作痕としても浅いものとして遺存した、と解釈できる。つまり、耕作痕が残された順序は耕作された高さが低いもの(北東-南西方向の耕作痕)が古く、高いもの(北西-南東方向の耕作痕)が新しいと考えることができる。

そうであれば、新しい段階の耕作痕(北西-南東方向)が大部分を占める掘立柱建物6周辺は、古い段階には耕作の行われていない区画となり、畠の傍に立てられた掘立柱建物、という景観を想定することが可能となる。

また、北東-南西方向及び北西-南東方向の2種類の主軸をもつ耕作痕は、調査区西半部にて第1遺構面2耕作痕(第29図)がある。2耕作痕では前者が疎で後者が密と、4耕作痕とは逆の検出状況となっている。これは、両方向の耕作痕が形成された耕作レベルはどちらも高い位置にあり、新しいもの(北西-南東方向の耕作痕)が古いもの(北東-南西方向の耕作痕)を壊して形成されたためと解釈したい。実際、2耕作痕の検出レベルは標高6.7m前後、4耕作痕は標高6.4m前後と約30cmの比高差が認められる。上層が残っていないため、想像するしかないが、新しい段階には、4耕作痕の残る低い部分が埋め立てられ、2耕作痕とほぼ同一レベルで耕作が行われていたと解釈すれば、矛盾がない。

そうであれば、2耕作痕、4耕作痕ともに、北西-南東方向の耕作痕が新しく、北東-南西方向の耕作痕が古いということになり、2耕作痕と4耕作痕は、別の遺構面として調査したが、それぞれ関連する2時期の耕作痕と考えることができる。

遺物は4点図化した。Po39は土師器坏。復元口径16.8cm、底径6.2cm、高台状に突出する回転糸切りの底部から内湾しつつ大きく広がる器形で、坏としては扁平な器形である。深めの皿とすべきも

のかもしれない。Po40は土師器
 坏の底部破片で、全体の器形はわ
 からないが、復元底径7.2cm、高
 台状に突出した回転糸切りの底部
 から立ち上がる体部の角度は
 Po39と類似しており、同様の器
 形となる可能性がある。

Po41は土師器甕の口縁部破片。
 外面及び口縁部内面はナデ調整、
 口縁部より下部の内面はケズリ調
 整が施されている。Po42は土師
 器鍋の口縁部破片で、体部外面に
 タテハケ、内面にヨコハケ調整を
 施し、口縁部を「く」の字に屈曲
 させている。

これらの土器の帰属時期は、11
 世紀後半～12世紀代を中心とす
 るものと判断されることから、4

耕作痕のうち古段階（北東－南西方向の耕作痕）の時期は、同一方向に主軸をもつ2耕作痕とともに、この時期を上限とするものであり、新段階（北西－南東方向の耕作痕）は、2耕作痕中より出土している肥前系小椀から、近世段階に形成されたものと解釈することができる。

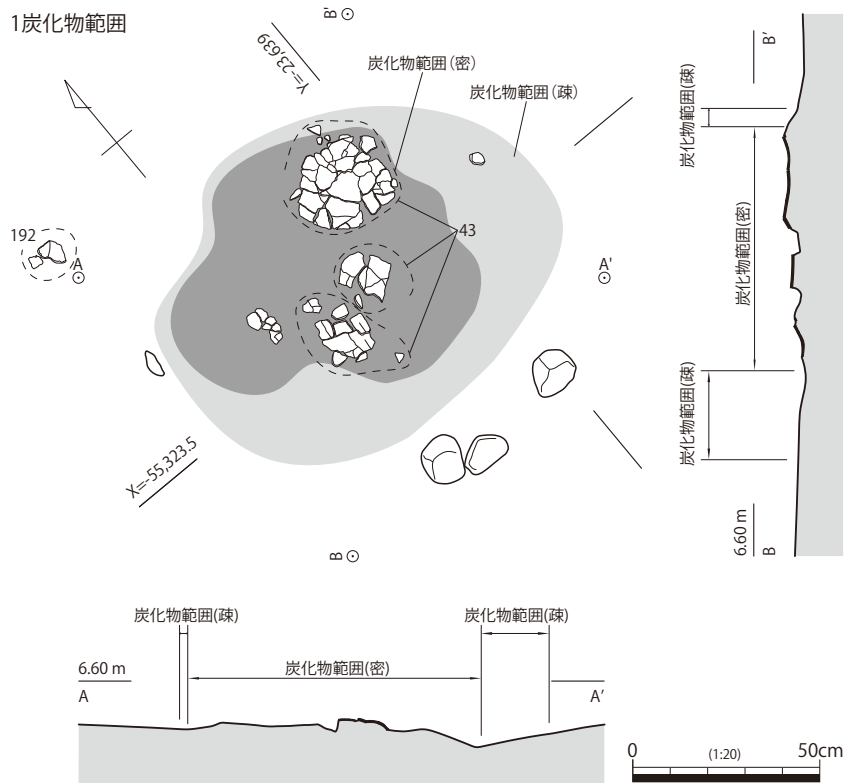
(3) 炭化物範囲、落ち込み

1 炭化物範囲（第65・66図、図版26、40）

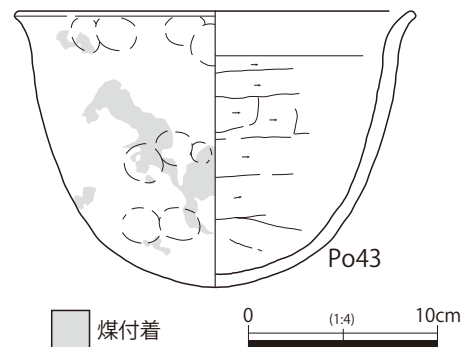
南側の排水用側溝の掘削中に、南壁83層（第20図）灰色砂混じりシルトの下面で検出した。1炭化物範囲の検出面の標高は、これより7m北西に位置する133落ち込みに比べて約20cm低いですが、これは1炭化物範囲を検出した周辺の地盤が低いためであり、直下に埋没している自然流路176河川が地盤形成に影響を及ぼしたものと考えられる。

長径1.1m、短径0.9mの不整楕円形の範囲に炭化物が分布する。中央の0.8×0.7mの不整形の範囲に炭化物片が密に分布し、その外周は疎らである。炭化物の層の厚みはほとんどない。炭化物は微粒子状で種類は特定できないが、木炭ではなく、稲わら等の燃え滓か、と推定される。ただし炭化物の下面は被熱の根拠となりうる酸化・硬化の痕跡は認められなかったため、腐植の可能性も考えられる。

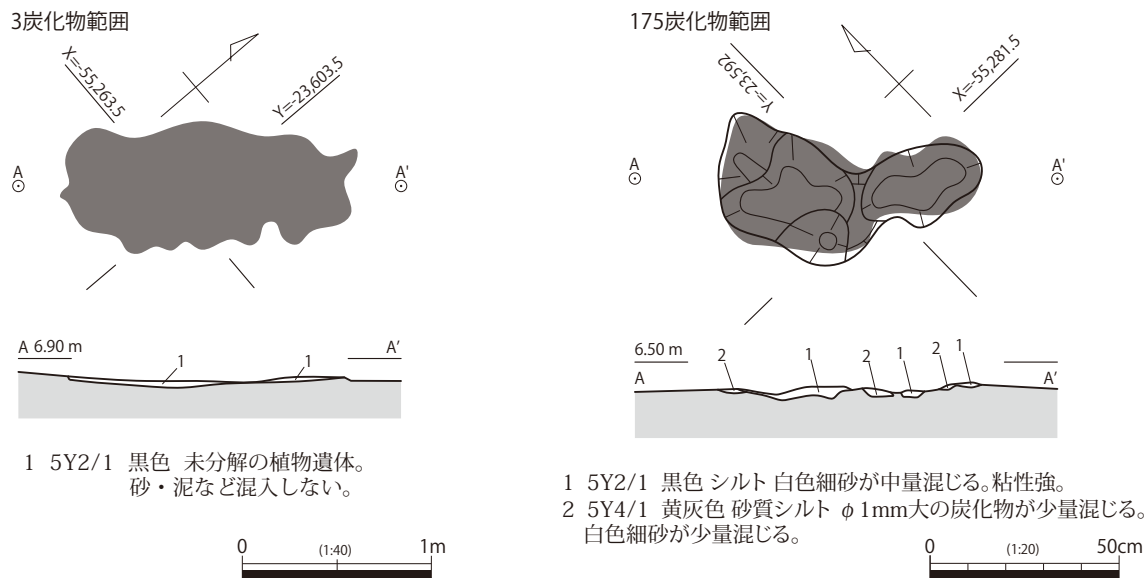
炭化物分布範囲の中央部直上で土師器の甕（Po43）が出土している。器高14.9cm、口径20.9cmと小型であり、形状は丸底で口縁端部を外反させた、背高のヘルメット形を呈する。大片に分割破碎され、それぞれが内面を上に向けて配され、押しつぶされ



第65図 1炭化物範囲 平面、断面図



第66図 1炭化物範囲 出土遺物



第67図 3・175炭化物範囲 平面、断面図

た状態で出土している。甕の外面には煤が付着しており、使用された痕跡が認められる。

炭化物範囲の南側外縁に接するように、直径10cm大の垂円礫3個を検出した。これらは炭化物範囲の検出面では下半が埋まっていた。人為的に持ち込まれたものと推測されるが、炭化物範囲との直接的関連は不明である。

遺構の性格については、炭化物の広がりとその直上での甕の特殊な出土状況から、この地点で儀礼・祭祀等の特殊な催しが執り行われていたことが推測される。

帰属時期については、出土した土師器甕から、11世紀代と考えられる。

3炭化物範囲（第67図、図版27）

調査区北西区の3G-7aグリッドにおいて、炭化物の混じる北壁43層（第14・15図）を掘り下げたところ、その下面で黒色を呈する堆積物の広がりを検出した。その範囲は長径1.6m、短径0.7mの不整形で、中央の厚さは約2cm、端部の厚さは約5mmの、薄い皿状に堆積する。

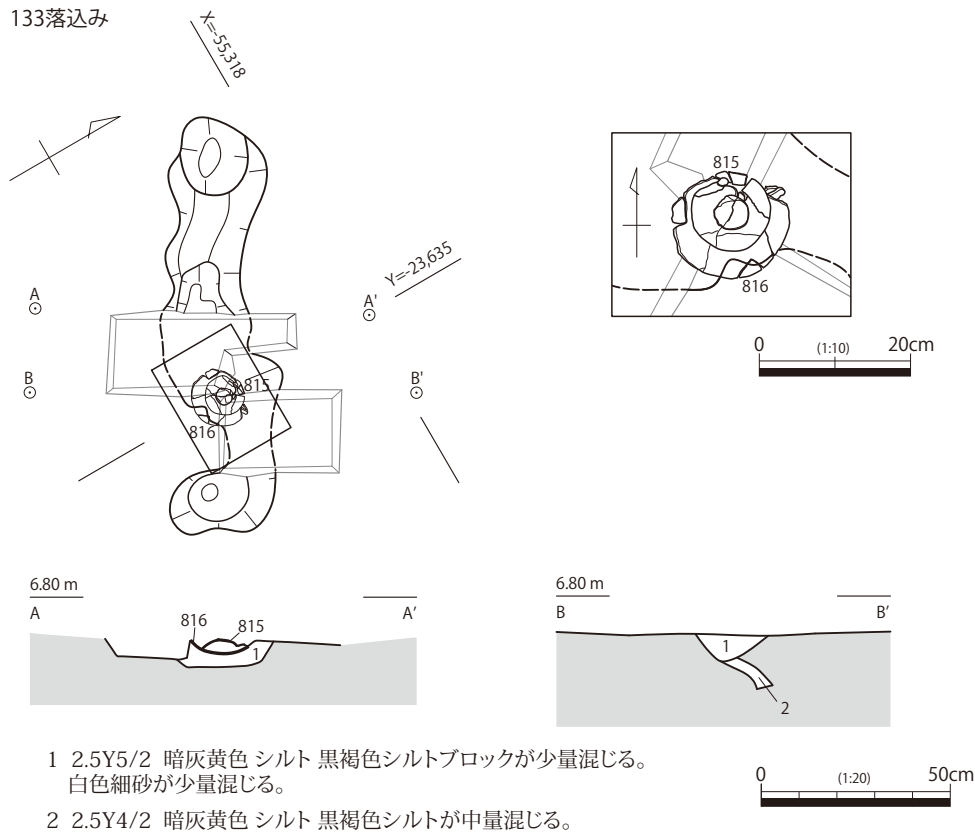
堆積物を肉眼観察すると、微細な植物遺体の集合体であり、炭化した籾殻が混じることを確認した。この植物遺体のサンプルを採取し、同定を行ったところ、イネ、イヌビエ属、ホタルイ属、アカザ属、ササゲ属の炭化種実および未炭化の種実のほか、同定困難な微細炭化物片が抽出された（第5章第3節）。イネと水田雑草を主体とし、炭化していることから、水田耕作の一環で廃棄、焼却されたものと推定される。堆積物の下面は変色・硬化等の変化が認められなかった。

同一面で検出した4耕作痕は3炭化物範囲と切りあわない。これは3炭化物範囲の検出面が、4耕作痕の検出面よりも標高が低いことによるためと考えられる。仮に一帯で焼畑（焼田？）が行われ、炭化した植物遺体が肥料として作土にすきこまれ、その残存が3炭化物範囲とするならば、上層のシルトに混じる炭化物はこの3炭化物範囲に由来する可能性が考えられる。

175炭化物範囲（第67図、図版28）

調査区北東区の3F-9jグリッドで、黒色を呈する炭化物の広がりを検出した。4耕作痕の南端から2m南に位置する。長径0.7m、短径0.3mの範囲で検出した平面形は不整形かつ境界は不明瞭である。堆積物の厚みは中央の厚いところで3cm、周辺で1cm程度である。

堆積物を除去した面は不規則な起伏をなし、焼成による変色や硬化などの変質は認められない。3



第68図 133 落ち込み 平面、断面図

炭化物範囲と同様に、植物を焼却したあとに、肥料として作土にすきこむ過程で、窪みに入ったものが残された可能性が考えられる。

133 落ち込み (第68・69図、図版29・40)

調査区南西部、4G-2a グリッドで検出した溝状の落ち込みである。上部の削平された溝の残存部の可能性も考えたが、133 落ち込みの延長上に同様の溝状の痕跡が検出されなかったこと、形状が不整形であることから、落ち込み状遺構として調査したものである。主軸を北西-南東方向 (N-60°-W) にとり、長さ、1.10 m、幅 0.26 m、深さ 30cm を測る。断面形は幅の広い部分は逆台形、狭い部分は逆三角形状を呈し、埋土は黒褐色シルトが混じる暗灰黄色シルトで、第68図 B-B' 断面で確認した第2層は、底面から帯状に下層に延びており、植物根痕の可能性はある。

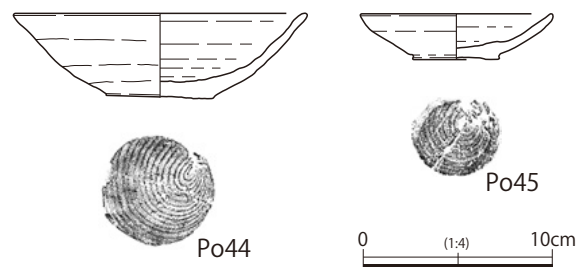
遺物は、土師器坏 (Po44) と土師器小皿 (Po45) が、坏を小皿で蓋をしたような状態で出土した。Po44 の土師器坏は口径 15.3cm、底径 5.6cm、器高 4.5cm を測り、高台状にやや突出した回転糸切りの底部から、やや内湾しつつ口縁部に向けて大きく開く体部をもつ。Po45 の土師器小皿は口径 10.0cm、底径 4.5cm、器高 2.4cm を測り、回転糸切りの底部から、直線的に開き、口縁部付近でやや内湾する。どちらも白味がかかった浅黄色を呈す。

11 世紀代の所産と考えられる。

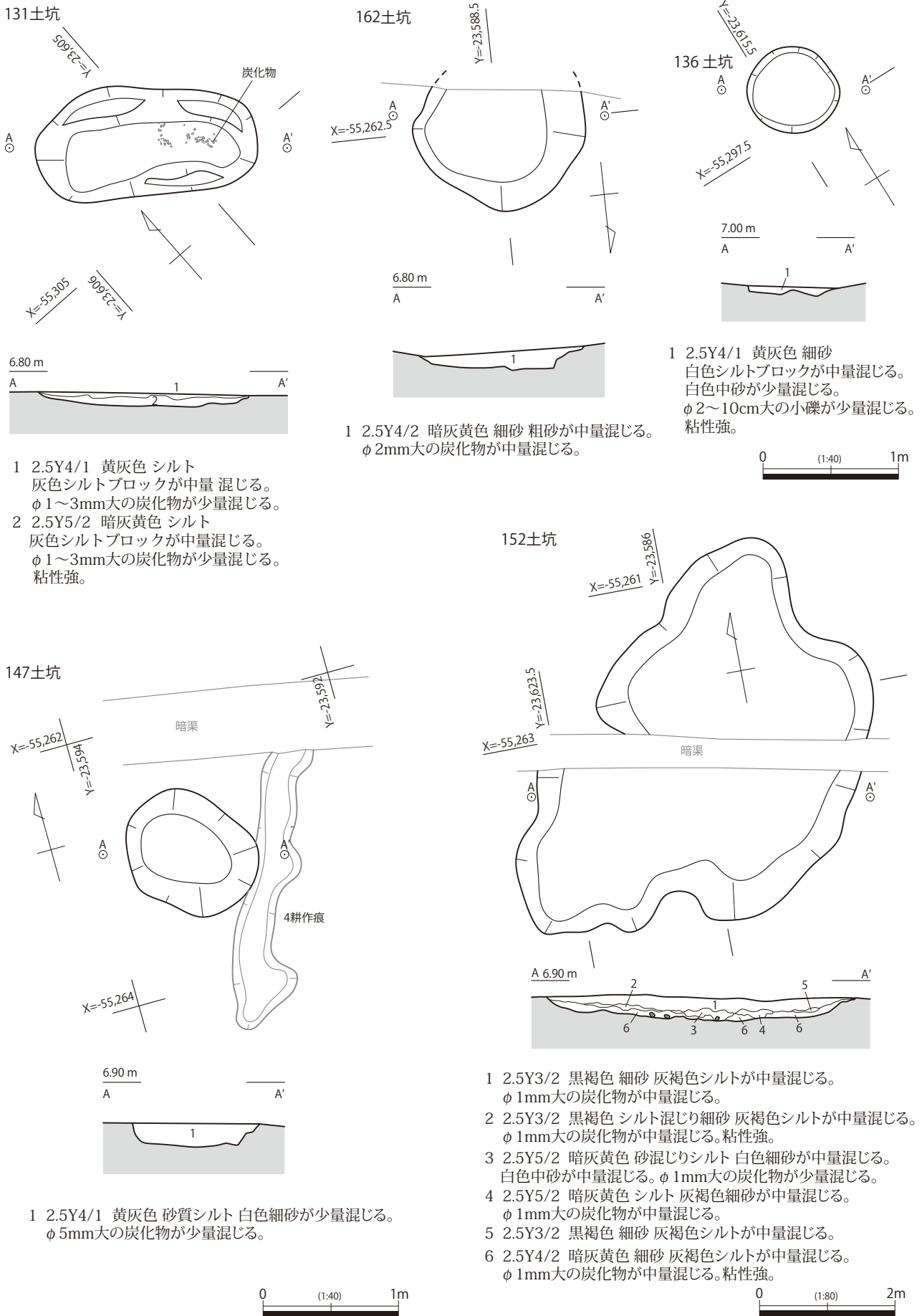
(4) 土坑

131 土坑 (第70図、図版30)

調査区中央部南側、4G-1a グリッドで検出した土坑で、長軸 1.65 m、短軸 0.84 m、検出面からの深さ 10cm を測る。平面形は長楕円形で、長軸



第69図 133 落ち込み 出土遺物



第70図 131・136・147・152・162土坑 平面、断面図

両側に高さ2cm程の段をもつ。

埋土は2層に分けられ、上層が黄灰色シルト、下層が暗灰黄色シルトで、それぞれ炭化物粒を含む。この上下層の境界部分において、炭化物が薄く広がっている状況が確認できたが、焼土は検出されなかったため、土坑内で何かを燃焼したという可能性は低く、土坑が埋没していく段階で炭化物が混入していったものと考えられる。

遺物は炭化物のほか、埋土中より土器の細片1点が出土したが、図化しえない細片であり、他に時期比定可能な遺物は出土しなかった。

136 土坑 (第70図、図版31)

調査区中央部、3g-10d グリッドで検出された土坑で、長軸0.7m、短軸0.65m、検出面からの深さ7cmを測る。平面形はほぼ円形を呈する浅い土坑である。

埋土は単層で、白色シルトブロックの混じる黄灰色細砂である。

遺物は出土しなかった。

147 土坑 (第70図、図版31・40)

調査区北側中央部、3F-7j グリッド、4耕作痕中で検出された土坑で、長軸0.7m、短軸0.65m、検出面からの深さ18cmを測る。平面形は楕円形を呈す。

埋土は単層で、炭化物の混じる黄灰色砂質シルトである。

この土坑は4耕作痕の中に位置しており、埋土も4耕作痕と類似することから、なんらかの関連する遺構である可能性があるが、性格を明らかにし得なかった。

埋土中より Po46 の土師器底部が出土している。底部回転糸切り、復元底径7.2cmと底部はやや大きめで高台状に突出し、厚手の体部が直線的に立ち上がる器形である。

遺構の時期は、出土遺物の特徴から、12世紀後半と考えられる。

152 土坑 (第70図、図版32・42)

調査区北東部、3F-7i グリッドで検出された土坑である。長軸6.65m、短軸4.15m、検出面からの深さ35cmを測る。平面形は不整楕円形で、中央部分が暗渠で壊されており、東側に接するように164土坑がある。

埋土は黒褐色～暗灰黄色シルトで、全体的に灰褐色シルトが斑状に含まれていた。

遺物は土器片が3点出土している。そのうち特徴のわかる1点(Po47)を図化した。Po47は、底部回転糸切り、復元底径5.1cmの厚手の土師器小皿で、底部から丸みをもって立ちあがる形態である。

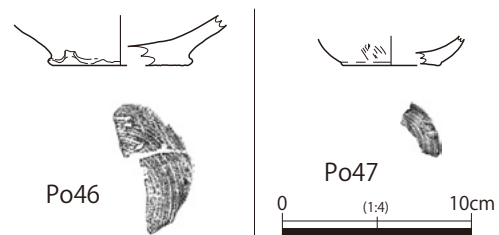
遺構の時期は、出土遺物の特徴から12世紀代と考えられる。

162 土坑 (第70図、図版32・33)

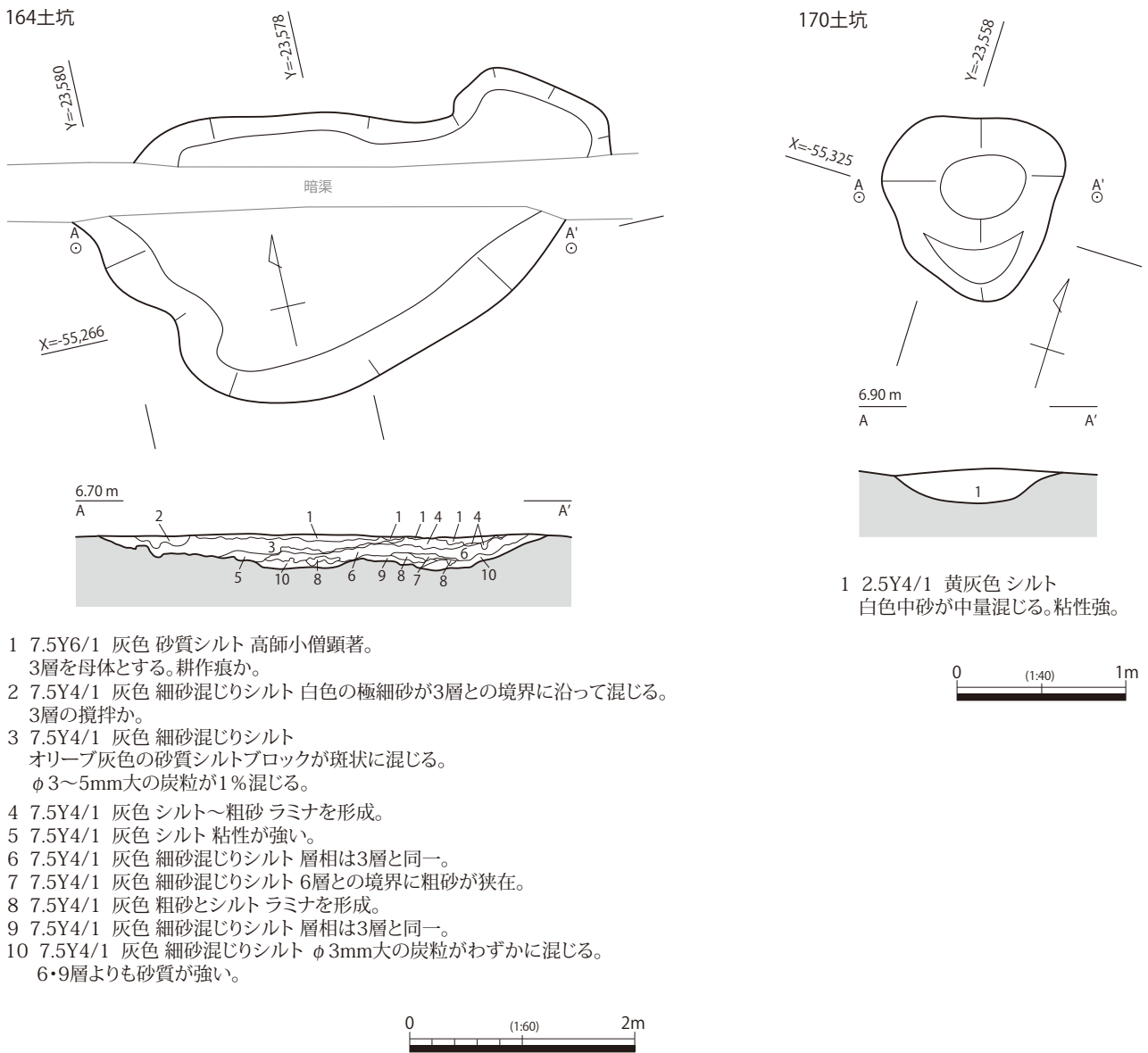
調査区中央北側、3F-7i グリッドで検出した土坑である。幅1.28mで、南側が暗渠によって壊されているが、平面形は径1.3m前後のやや歪な円形を呈していたものと考えられる。検出面からの深さは15cmである。

埋土は単層で、暗灰黄色細砂であった。

遺物は土器片5点出土したが、いずれも細片で、時期比定可能なものではなかったため図化していない。



第71図 147・152土坑 出土遺物



第72図 164・170土坑 平面、断面図

164土坑（第72図、図版32・33）

調査区北東部、3F-7i グリッドで検出された土坑で、長軸 4.6 m、短軸 2.6 m、検出面からの深さ 30cm を測る。平面形は不整楕円形で、中央部分が暗渠で壊されていた。

埋土は上層（1・2層）が灰色砂質シルトが主体で、3層を母材とした攪拌が認められることから、西側で検出されている4耕作痕に関連する耕作が行われた層であると考えられる。下層である4層以下は、ラミナを形成する層（3・8層）の存在から、一度に埋められたものではなく、徐々に埋没していった状況が伺える。

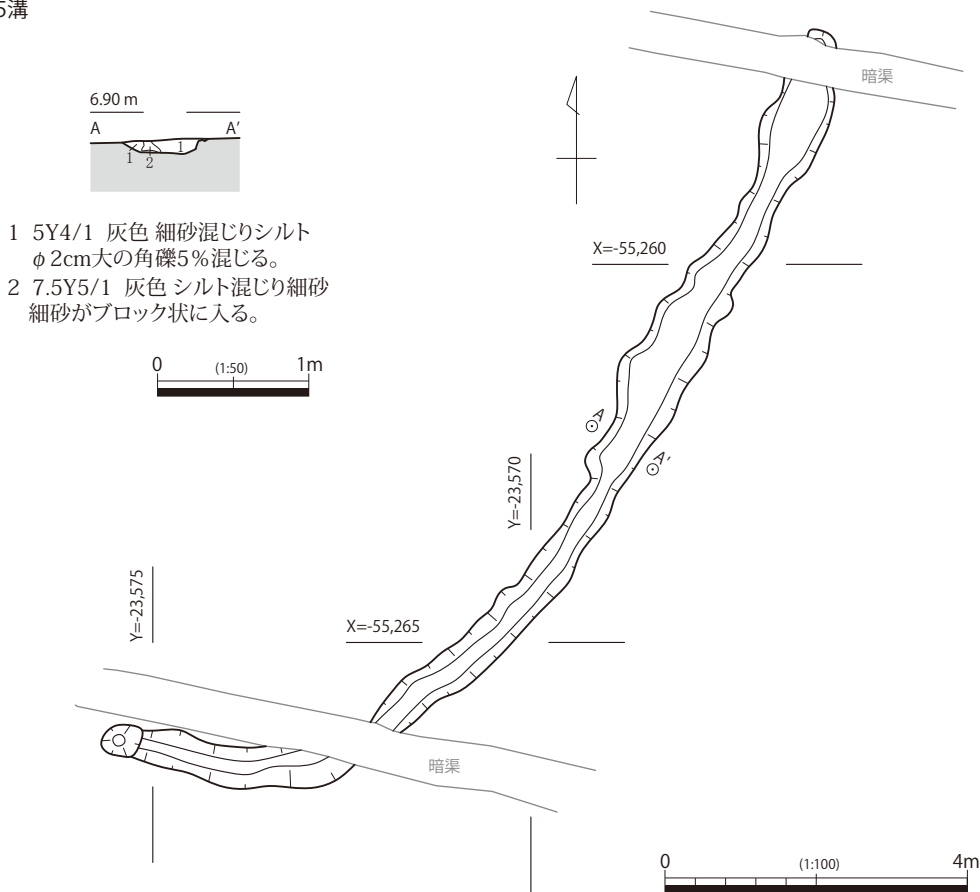
東端には165溝が164土坑に接続するように延びてきており、両遺構が関連する施設であった可能性があるが、調査では明らかにすることができなかった。

遺物は出土していない。

170土坑（第72図、図版34）

調査区南東部、163流路南岸の4F-3h グリッドで検出した土坑で、長軸 1.1 m、短軸 1.08 m、検出面からの深さ 11cm を測る。平面形は歪な円形を呈す。

165溝



第73図 165溝 平面、断面図

埋土は単層で、中砂の混じる黄灰色シルトである。検出した位置から、163 流路に関わる遺構の可能性はあるが、調査では明らかにし得なかった。

遺物は出土していない。

(5) 溝

165 溝 (第73図、図版32・33)

調査区北東部、3F-7g から3F-7h グリッドを中心に検出した溝で、全長13.5m、最大幅0.93m、検出面からの深さ6～13cmを測る。断面形は皿状を呈する。

北東から南西方向(N-31°-E)に走り、南端部で西に屈曲し、先端部の0.5m先には164土坑が検出されている。両遺構が関連していた可能性がある。

時期比定が可能な遺物は出土していない。

(6) 流路

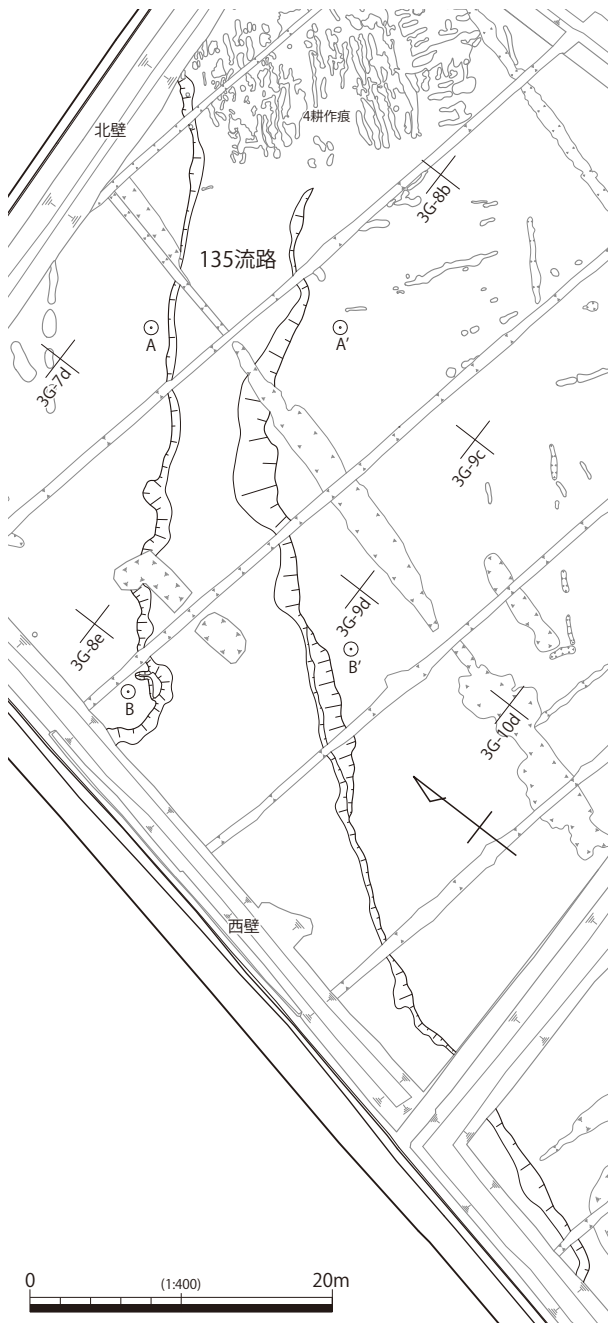
135 流路 (第74～76図、図版34・40・45)

調査区北西部で検出した、北東方向から南東方向に流れる自然流路である。

西壁断面で認められた、ラミナの認められるにぶい黄色の細砂主体の層(西壁28層:第24・25図)が带状に認められたことから、流路跡と認識して調査を行った。

最大幅12.5m、長さ68mで、検出面からの深さは0.1～0.7mを測る。北東側では4耕作痕に向かって浅くなっていき、消滅してしまう。

下層の3面下で検出した自然流路である178流路(第84図)とほぼ同一の位置で検出されており、



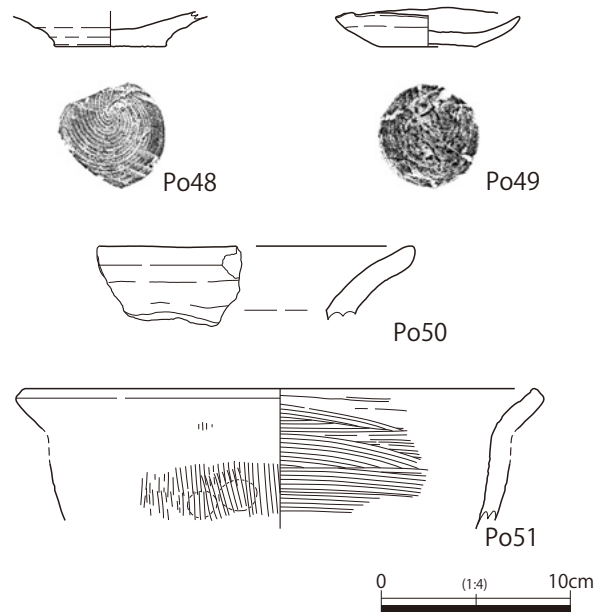
第74図 135流路 平面図

178 流路が埋没していく過程で残存していた流路であり、最終段階の178流路として捉えられるものと考えられる。

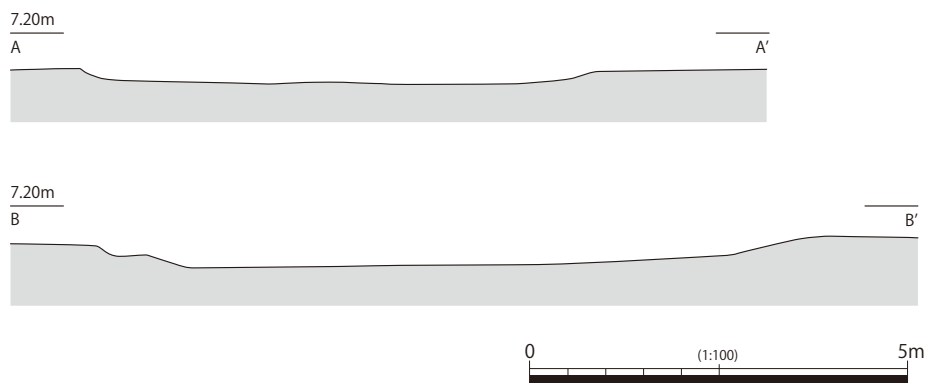
遺物は4点図化した。Po48は土師器皿の底部破片。底部回転糸切りで、復元底径5.8cmを測る。高台状の底部から直線的に外傾する体部が一部残る。Po49は完形の土師器小皿。底部回転糸切りで、口径9.6cm、底径5.0cmと小皿にしては大型である。底部から直線的に外傾し、口縁部6~7mmほどをやや立ち上げて緩い稜を持たせている。

Po50は土師器甕の口縁部破片。内外面とも回転ナデ調整が施されている。

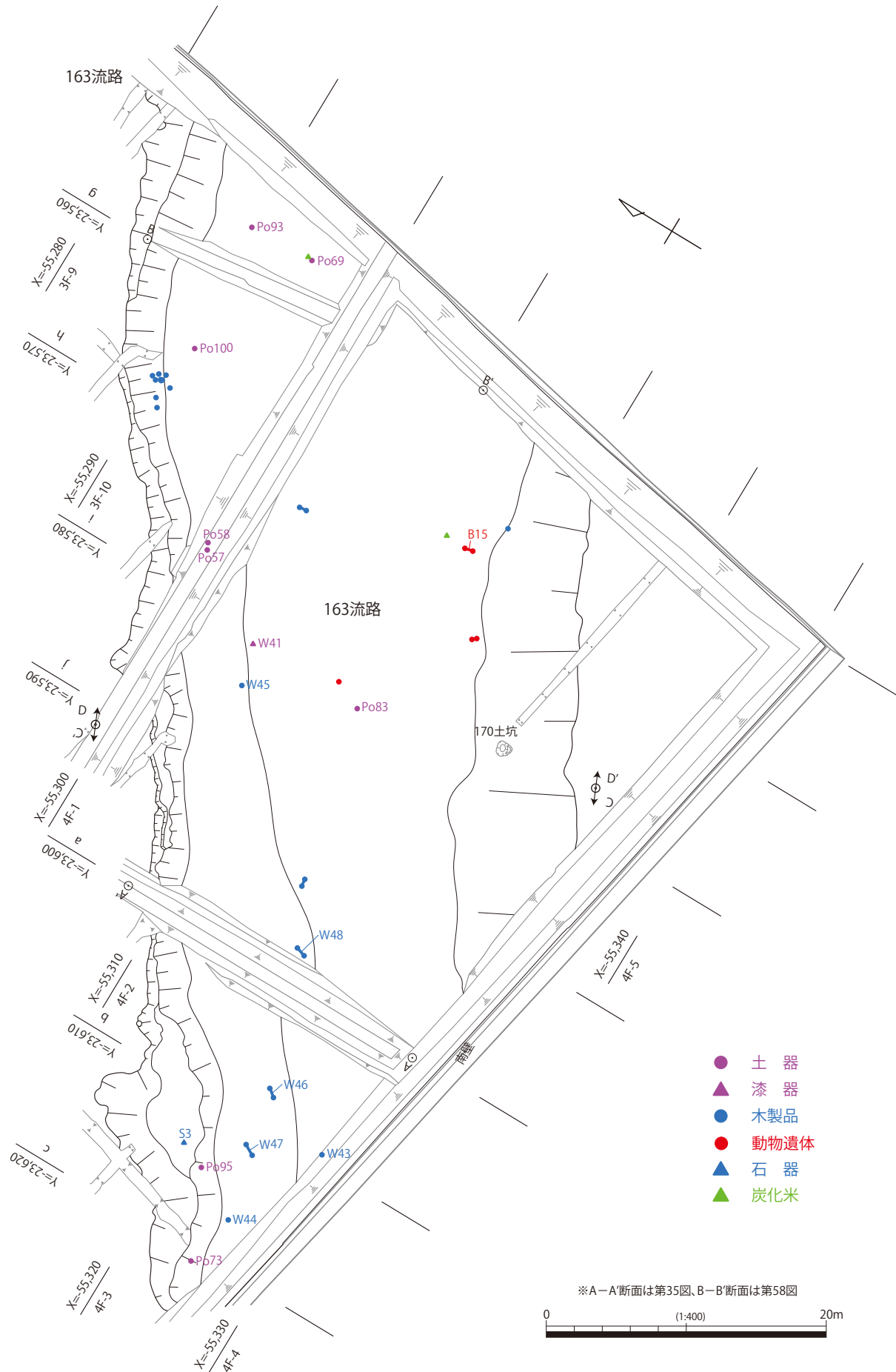
Po51は土師器鍋の口縁部破片で、「く」口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコハケ、外面体部をタテハケ調



第75図 135流路 出土遺物



第76図 135流路 断面図



第77図 163流路 平面図

整が施される。ハケ調整の単位が粗いのが特徴である。

これらの遺物から、135 流路は4耕作痕より古く、概ね10世紀後半～11世紀代と判断される。

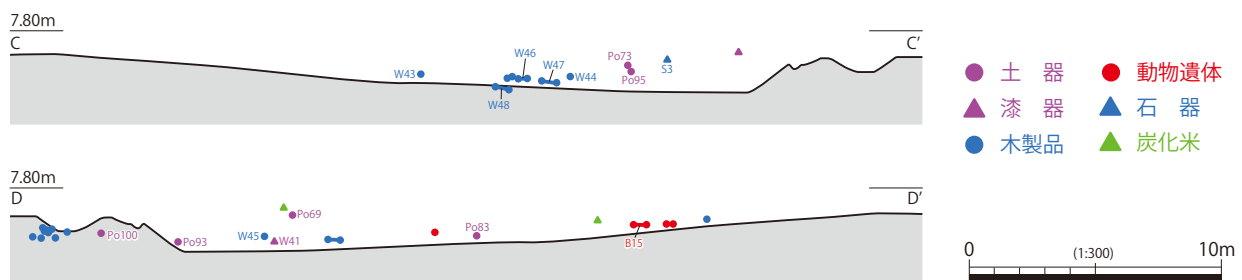
163 流路 (第35・58・77～83 図、第8表、図版35・36・41～44・54・65・68～72)

調査区南東に位置し、南西から北東方向に流れる自然流路である。検出した長さは北西岸側で86m、幅30m、深さは最深部で約1.5mである。流路底面は北西岸から2m内側までは急勾配で最深部に達し、そこから南西岸までは緩やかなこう配で上がっていく。

底面から25～50cmの高さまでは、直径5～10cm大の円礫を包含する砂礫が堆積する。その上部には粗砂、中砂、細砂、シルトが堆積する。細砂からシルトまでは細かいラミナが形成され、植物遺体を挟在する。とくに上層のシルト中には、樹木の幹や枝など大型の植物遺体や加工された木片が多量に包含されていた。

遺物は土器・土製品・陶磁器・木製品などが多数出土した。これら遺物の出土層位は、ラミナが形成されているシルト～粗砂中を上層出土、底面に堆積する砂礫を下層出土として把握している。

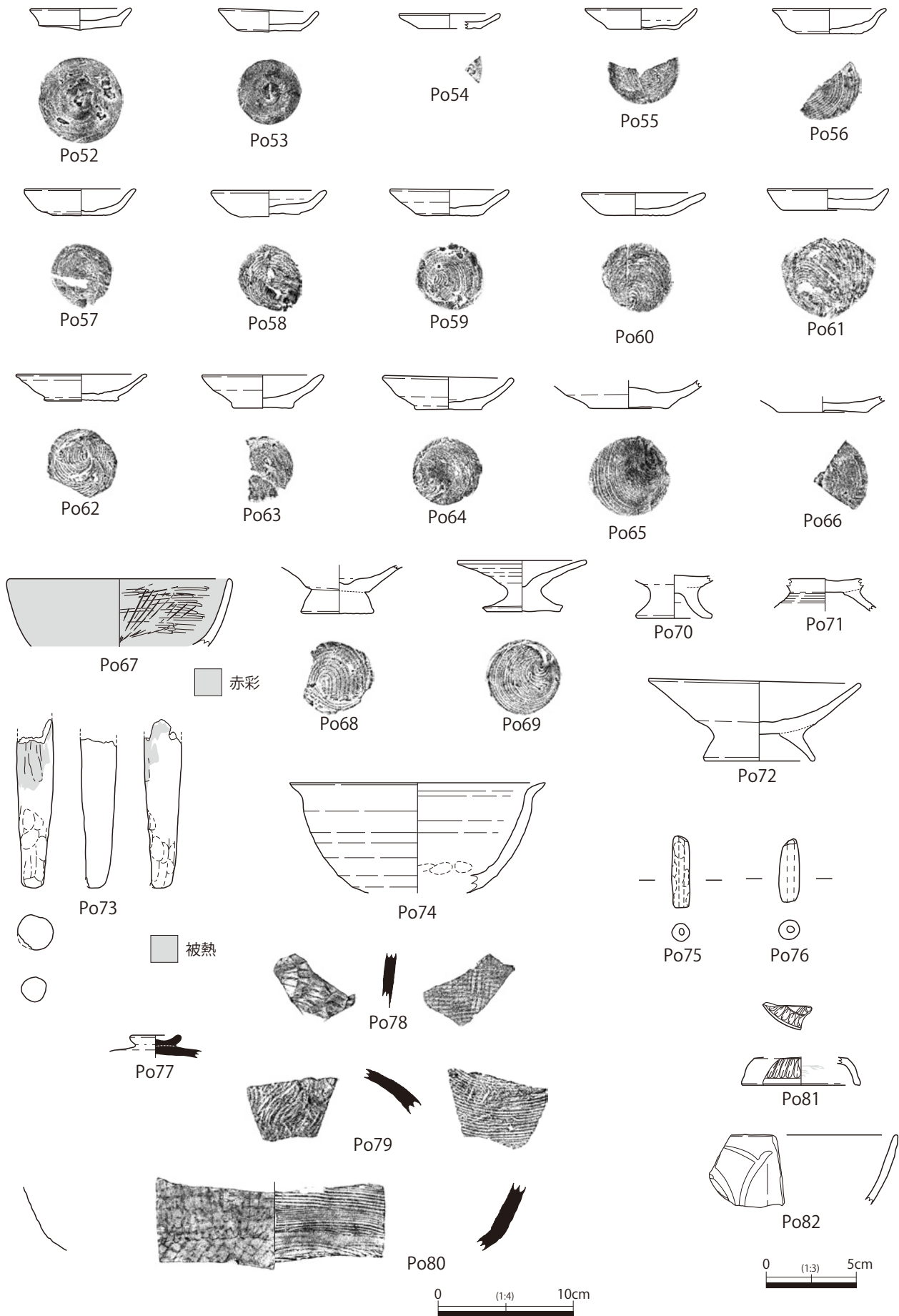
土器・土製品・陶磁器あわせて49点を図化した。Po52～66は土師器小皿。内3点(Po52～54)は底部回転ヘラ切りで、他は回転糸切りである。口径は7.1～9.4cm、底径は4.4～6.8cmとバラつきがあり、器形も口縁部が外反するものから、内湾するものと様々である。Po65は底部回転糸切り、Po66は底部回転ヘラ切りで、底部からの立ち上がりの角度から土師器皿と判断した。Po65は内湾、Po66はやや外反しながら立ちあがっている。Po67は内外面赤彩、内面を磨いた後暗文が認められる7世紀末～8世紀前半の土師器坏で、全体的に磨滅が著しいことから、流路の底面が古い流路を挟り、上流から流されてきたものと考えられる。Po68・69は柱状高台をもつ皿。Po69は全体的にシャープな造作で、どちらも底部内面中央に窪みが作られている。Po70は古墳時代の低脚坏で、Po67と同じく、下層の河川性堆積の影響と考えられる。Po71・72は高台付坏。いわゆる足高高台をもつもので、全体を復元できたPo72の法量は、復元口縁15.5cm、底径8.1cm、器高6.1cmとなる。Po73は三足羽釜の脚部。Po74は小型の土師器鍋か。口縁部外面付近に煤付着している。Po75・76は土錘。土錘は包含層中からも出土しており、河川における漁撈を示すものかもしれない。Po77～80は須恵器。Po77は坏蓋で、輪状つまみをもつ。Po78～80は体部片で、Po78は内面に放射状の当て具痕が認め



第78図 163流路 遺物出土状況見通し図

第8表 163流路 出土主要獣骨一覧

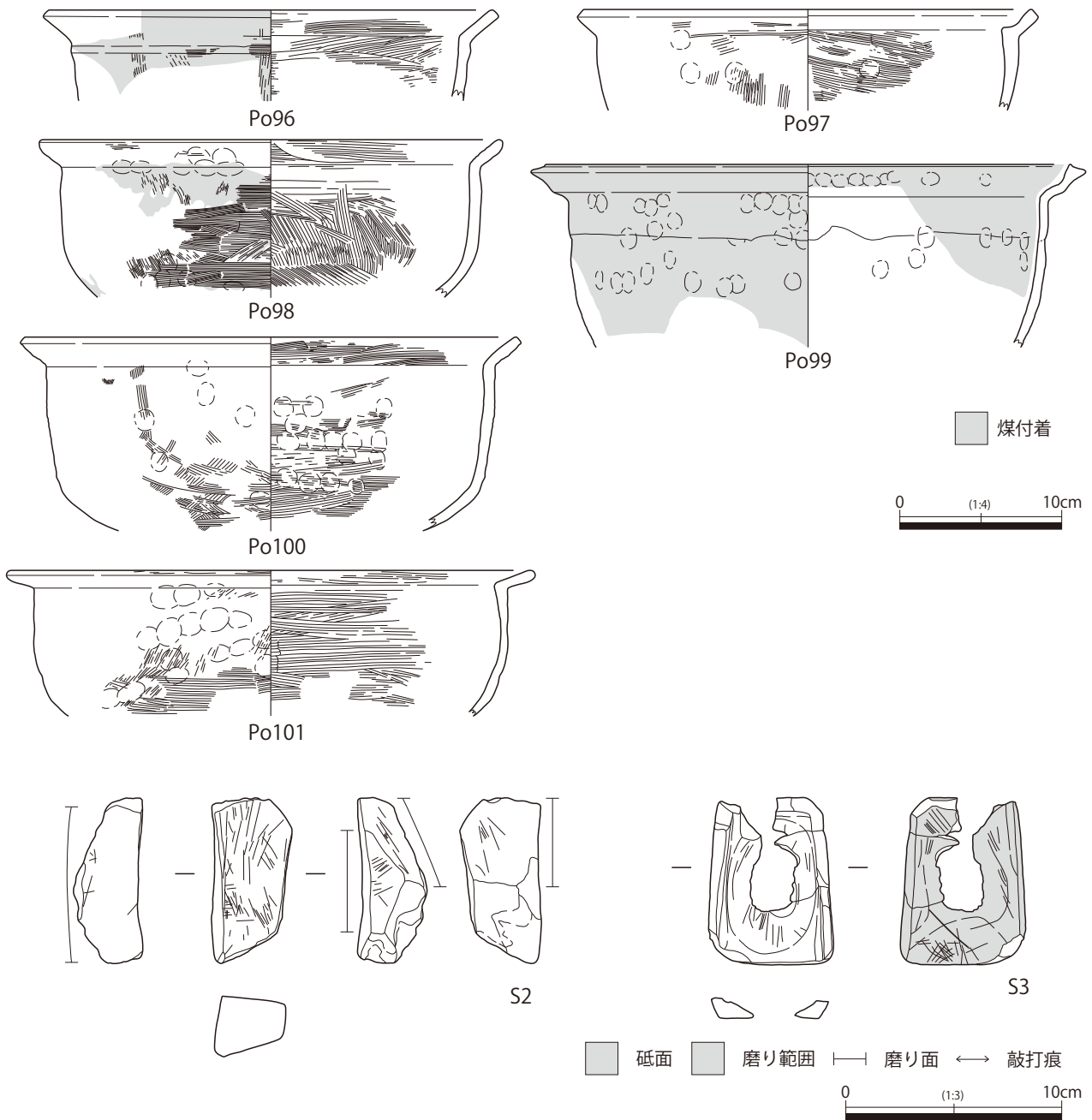
図中番号	図版番号	取上番号	種別	グリッド	層位	部位	備考
B15	-	927	鹿	T30-6d-4F-2g	埋土	角	若い個体のものか



第79図 163流路 出土遺物(1)

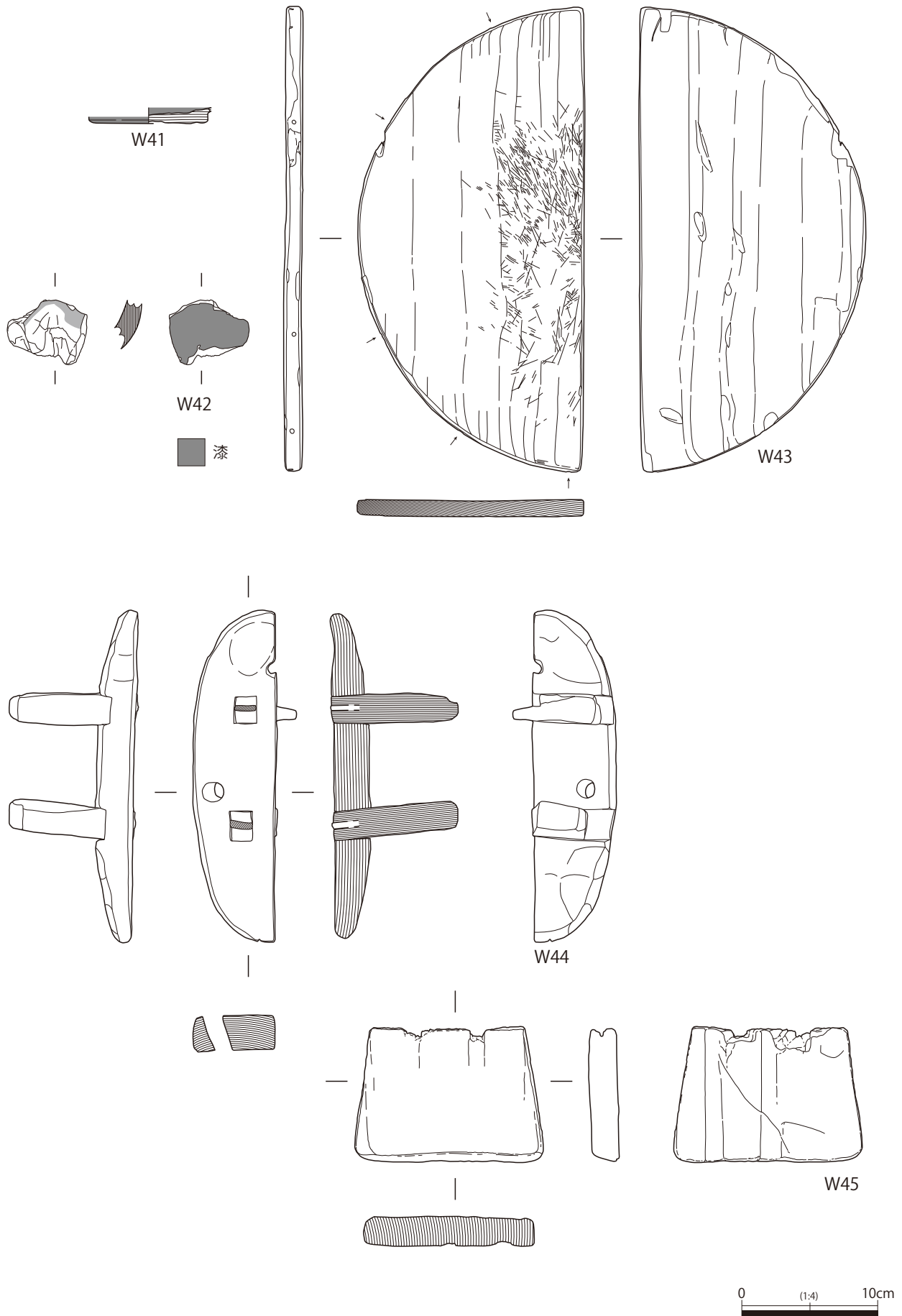


第80図 163流路 出土遺物(2)

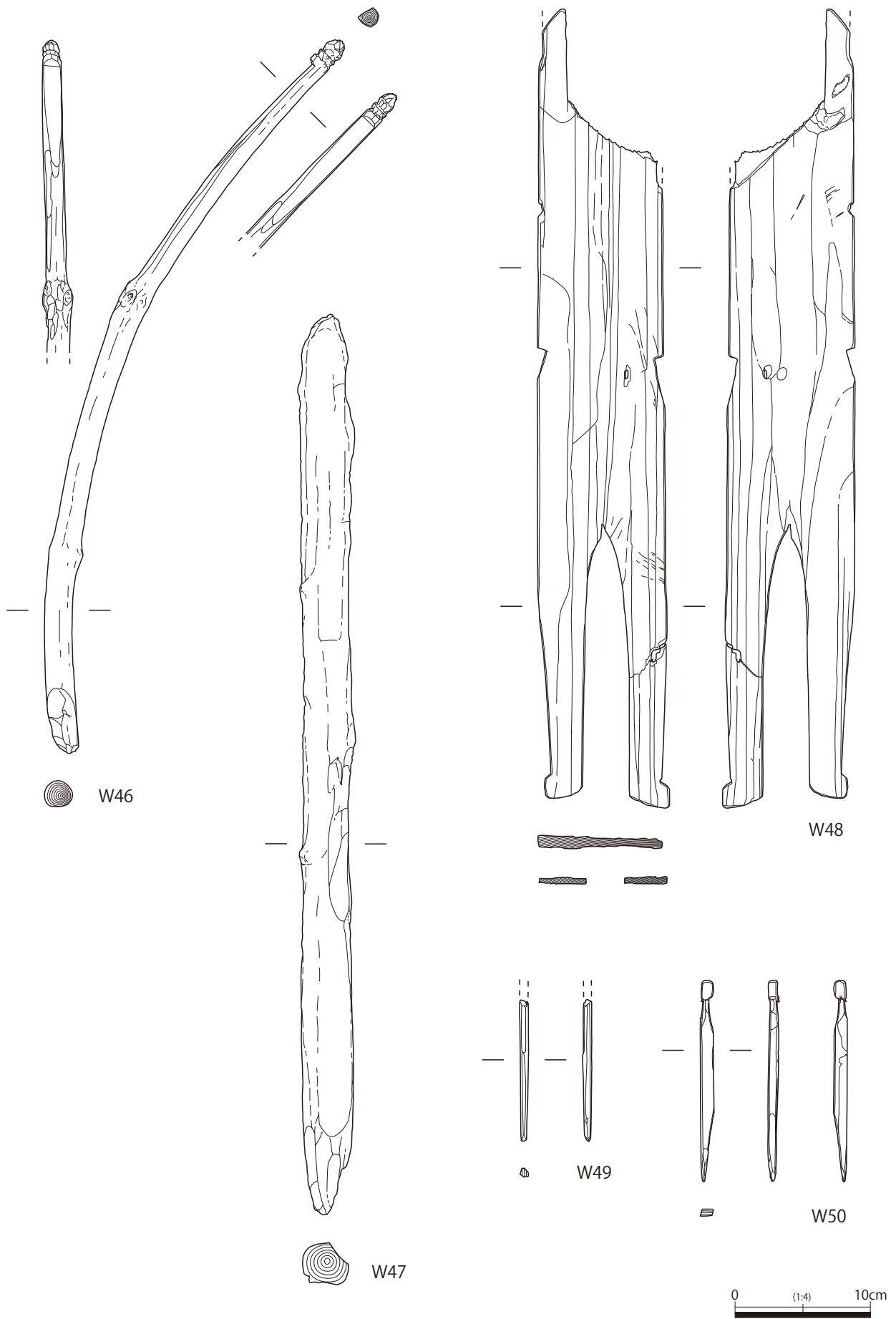


第81図 163流路 出土遺物(3)

られる。Po80は勝間田焼の甕と考えられる。中国製の磁器2点が出土している。Po81は外面蓮弁文の白磁合子蓋。口縁部内面は露胎で、内面に暗赤褐色の付着物が認められる。Po82は外面鎬連弁文の龍泉窯系青磁碗の破片である。Po84・85は土師器の鉢か。同一個体と考えられ、Po84は直立する口縁部で、Po85は嘴状の注口部が認められる。Po83・86～101は鍋で、Po99のみ瓦質土器の鍋である。口縁部が「く」の字に屈曲し、直線的に外反するもの（Po83・86～96・98・100・101）、「く」の字に屈曲後、やや内湾気味に立ち上がるもの（Po97）、口縁部が屈曲して斜め方向に立ちあがった後、再度上方に屈曲して受け口状となるもの（Po99）が認められる。内外面の調整については、内外面ナデ調整のもの（Po83・99）のほかは、口縁部の調整に個体差はあるものの、体部外面タテハケ後、体部下部～底部にかけてヨコ～ナナメハケ、内面ヨコ～ナナメハケと、ほぼ同一の調整で作られている。底部形状のわかるものについては、丸味をもつ平底気味のもの（Po94・95）と、ほぼ



第82図 163流路 出土遺物(4)



第83図 163流路 出土遺物(5)

丸底のもの (Po90) が認められ、ほぼ丸底の Po90 は体部と底部の境界も不明瞭である。

流路内から出土する土器は一部古い時期を示すものを除き、土鍋の外面に固着した炭化物が残るなど、総じて磨滅が少ないことがいえる。これは近傍から流路内に廃棄されたことを示すものであろう。163 流路の出現時は、深く地面をえぐる強い流れであったが、しだいに流速が落ち、上流から流されてきた樹木片などが浅瀬にはき寄せられ、流域の湿地化が進んだものと推測される。

石器は砥石 (S 2) と硯 (S 3) が出土した。このうち S 3 の硯は、粘板岩で、表面の 3 辺に溝が彫られている。中央部は集中的に使用され、穴が空いている。裏面は砥石として使用され、図面下端部が窪んでいる。硯として使用できなくなった後、砥石として再利用されたものと考えられる。

漆器は 2 点出土している。W 41 は底径 8.8cm の高台部破片。内面及び畳付部分は腐食して残存していないが、高台部側面に黒色塗彩がみられる。炭粉渋下地の上に透明漆を塗ったもので、18・36 流路出土漆器と同じである (第 5 章第 2 項参照)。高台側面にロクロ目 (筋) が観察でき、挽物であることがわかる。樹種は本遺跡出土の漆器で最も多いトチノキである (第 5 章第 1 項参照)。底径から、18・36 流路と同一規格の椀であろう。調査中は判断できなかったが、上層である 36 流路の埋土掘り残し部分からの出土の可能性がある。W 42 は他の漆器に比して異質なもので、内外面ともに挽物であることを示すロクロ目 (筋) がみられず、内面に縦方向のケズリ調整がみられる。おそらく割り物であろう。内外面とも黒色で、炭化したようにみられたため、漆器かどうか判断できなかったが、塗膜分析で漆が検出されおり、漆器と確認できた。樹種は当遺跡出土漆器中唯一クスノキ科であり (第 5 章第 1・2 節参照)、他の漆器とは別系統のものであると考えられる。

その他の木製品として、8 点図化した。W 43 は桶底板、径 34.3cm で、側面 5ヶ所に目孔が認められる。W 44 は差歯下駄。台下面の歯を差し込んだ溝に歯を固定するためのホゾ穴を台上面まで穿ち、ホゾ穴に差し込まれた歯のほぞには台上面から木製の楔が打ち込まれている。W 45 は下駄歯。台形状の板上端面に 2 箇所割り込みが認められ、下端面は擦り減る。W 46 は弓。中央部分で折損している。残存長 52.6cm で、完形ならば 1m 以上のものであったと考えられる。先端部分に擬宝珠状の装飾が作出され、装飾の下部には弦を引かけるためと考えられる割り込みがみられる。割り込み周辺は部分的に削って加工してあるが、他の部分は木の皮を剥いだまま未加工となっている。163 流路からは人形 (W 48)、斎串 (W 49・50) も出土しており、この弓も祭祀具として使用された可能性も考えられる^(註³)。W 47 は長さ 66.4cm を測る杭。弓 (W 46) や差歯下駄 (W 44) など、比較的木製品が集中する 163 流路北西部分で出土した。流路北東部分にも木製品集中部分が認められる (第 77 図)。ここからは、図化し得なかったが、粗く加工された棒状の木製品が集中して出土している。

W 48 は人形。頭部を欠損する残存長 58.2cm を測る大型のもので、手の部分を切り欠き、足はつま先まで表現する。赤外線撮影でも墨書きの痕跡はみられなかった。斎串も 2 点出土している (W 49・50)。

これら遺物の所属時期は、一部古い時期のものを除き、概ね 10 世紀後半～13 世紀代のものと捉えられる。これは、163 流路の埋没過程の流路と把握した第 1 遺構面 18 流路、第 2 遺構面 36 流路と比して、ほぼ同時期となる。163 流路の機能時期は、第 6 章第 2 節で検討したように 10 世紀後半から 11 世紀前半の時期と考えることから、青磁碗や白磁、三足羽釜など新しい時期のものは、本来 18 流路及び 36 流路に帰属するものと考えておきたい。

第6節 3面下河川性堆積

調査着手時に掘削した調査区の東西南北辺及び東西南北を横断するトレンチの土層観察により、第3遺構面より下層については幾筋もの自然流路が段階的に埋没した河川性堆積であることを確認していた。しかし、トレンチ掘削中、弥生土器や須恵器などの遺物が河川性堆積層中より出土していたことから、遺構の存在する可能性が考えられた。

そこで第3遺構面下層の河川性堆積層について、「3面下河川性堆積」と呼称し、主にシルト～細砂を人力で、人力での掘削が困難な砂礫層については重機を使用し、河川性堆積層の把握に努めた。

結果、人為的な痕跡と認められる遺構は検出されず、遺物の出土をみたものの、包含量としては希薄であった。これら河川性堆積内より出土した遺物は上流より流されてきたものと判断されたものである。

本節では、土層観察及び出土遺物をもとに想定された調査区内の河川の変遷について述べる。

(1) 調査区内における河川の変遷 (第84図、図版2～4)

第84図は、第4章第2節で述べた土層観察の結果及び現地での検討によって想定される河川の変遷及びそれに対応する東西トレンチの土層断面である。

河川の氾濫等のイベントによって堆積したと考えられる砂礫層を、大きく5層(礫層①～⑤)捉え、それら砂礫層を河床として堆積しているシルトや砂を河川埋土と認識して掘削を行った。

第84図をみると、流路は大きく西から東へと変遷していることがわかる。178流路の南東岸を侵食して179流路が流れ、179流路南東岸を侵食した礫層④を河床として180流路。180流路南東岸を侵食した礫層③を河床として181流路。その後これらの河川を直交するように北東-南西方向を流れる176流路の段階を経て、第3遺構面として検出した163流路が181流路南西岸を侵食して流れる。その後163流路が埋没していく過程で、流路幅を狭めた36流路、湿地状の環境が想定される18流路へと変遷し、近世～近代の用水路と考えられるかく乱流路へと至る。河川性堆積のうち礫層①については、調査区南東岸に163流路河床として確認され、今回調査した掘削深度以下に及んでいたため、層位的に他の礫層との前後関係は確認できなかった。

この河川の変遷に伴い、調査区の西側部分から徐々に陸地化が進行し、163流路の段階に至って人々が活動できるような環境が整っていったものと推察される。

(2) 3面下河川性堆積内出土遺物

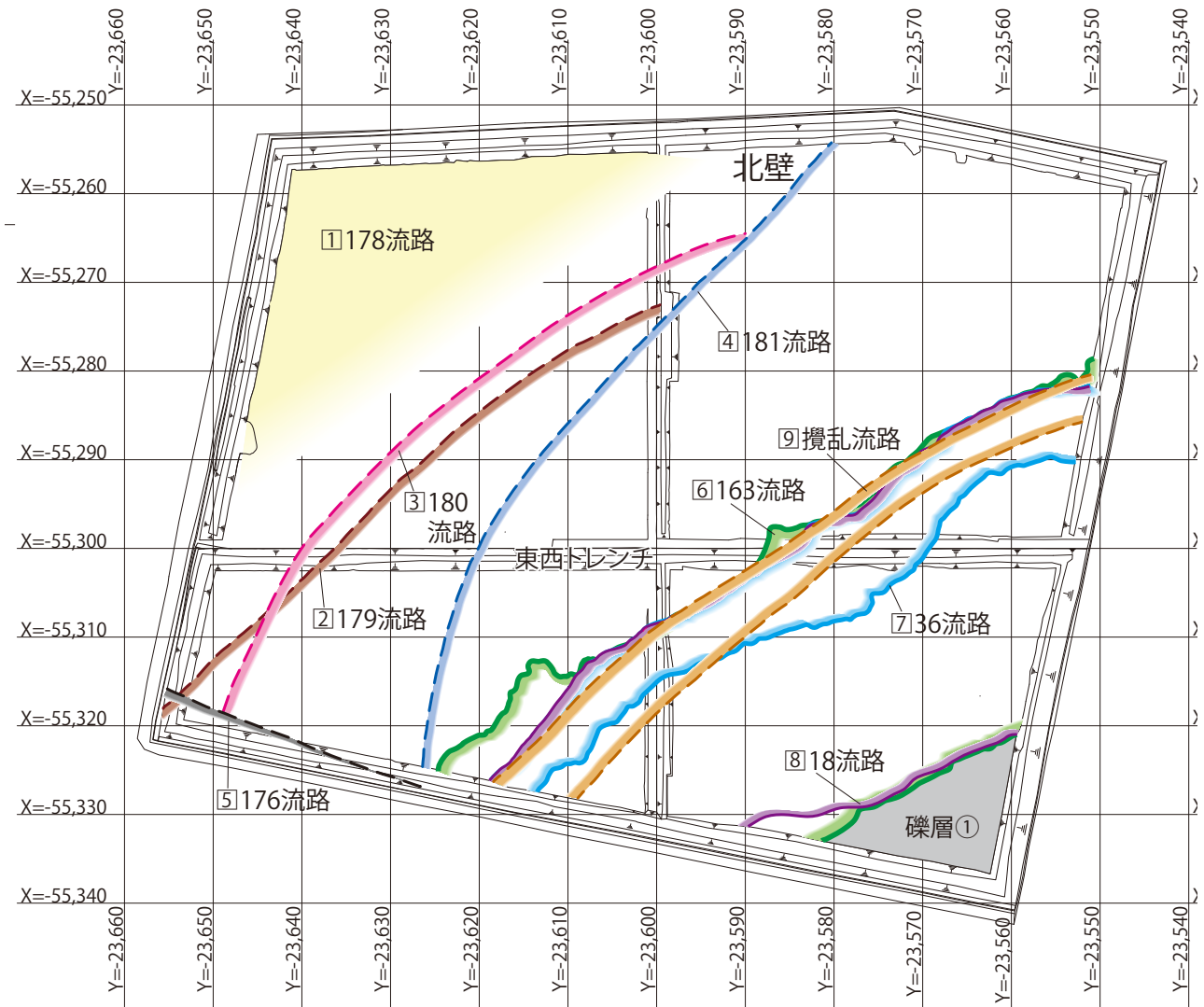
3面下河川性堆積内から出土した遺物を第85～87図に示した。各層の時期の上限を押さえるため、それぞれ出土遺物中で新しい特徴を有するものを中心にその特徴を述べる。

163流路河床(礫層①)(第85図、図版45・51)

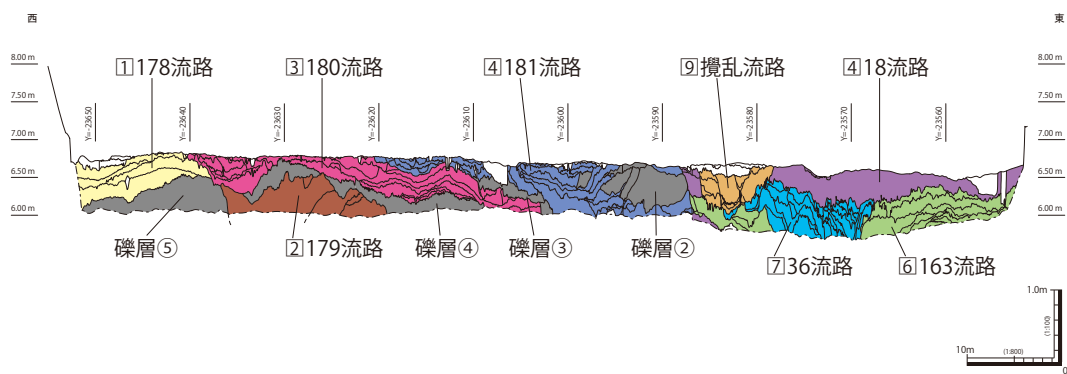
礫層①は163流路河床及び163流路南東岸を形成する砂礫層で、上述したように他層との前後関係が層位的に確認できなかった層である。ここから須恵器の蓋坏(Po102)、坏蓋(Po103)、高坏(Po104)、土師器高坏脚部(Po105)が出土した。これらのうち最も新しい特徴を示すのは返りを有する須恵器坏蓋であるPo103で、7世紀後半頃の所産と考えられる。後述する他の河川性堆積出土遺物のなかで最も古い時期に形成された層であると想定される。

178流路河床(礫層⑤)(第85図、図版45・48・50・51)

178流路河床である礫層⑤からは、弥生土器(Po106)、須恵器高台付坏(Po107、108)、無高台坏

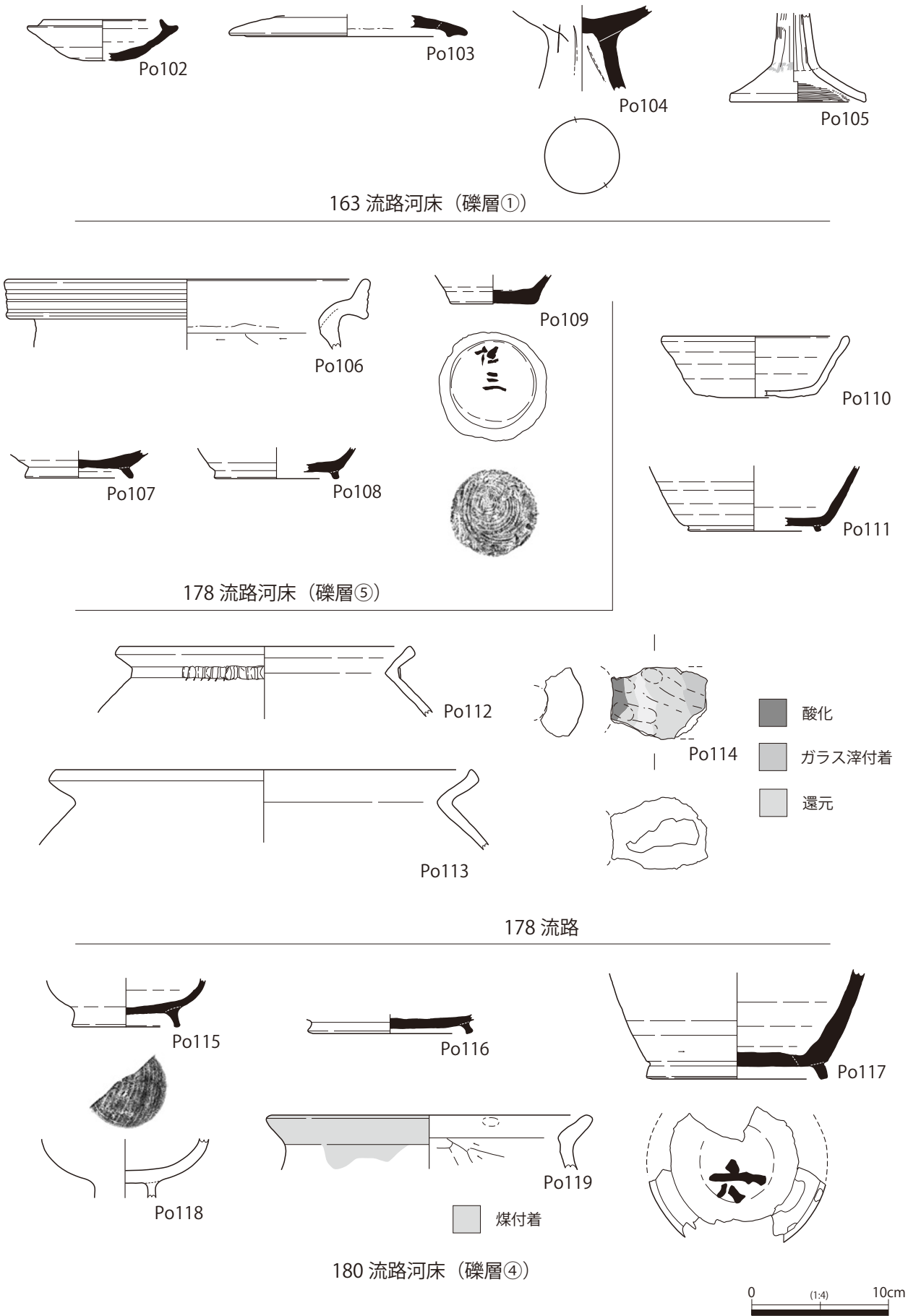


東西トレンチ河川性堆積色分け図



※□内番号は堆積順を示す。

第84図 調査区内自然流路の変遷



第85図 河川性堆積内 出土遺物 (1)

底部 (Po109) が出土している。このうち無高台の坏 (Po109) は、直線的に外傾する体部をもち、回転糸切りの底部に「□三」と墨書されるもので、このなかでは最も新しく8世紀末から9世紀前半のものであると考えられる。

178 流路 (第85図、図版46・50・51)

178 流路埋土と考えられる層中からは、弥生土器 (Po112、113)、土師器坏 (Po110)、須恵器高台付坏 (Po111)、甕の羽口 (Po114) が出土している。土師器坏 (Po110) は底部回転ヘラ切り後ナデで、直線的に外傾するもの。赤彩は施されていない。Po111 の須恵器高台付坏は、底部回転糸切りで、やや強く外傾する体部をもち、どちらも8世紀末から9世紀前半の特徴を有する。

180 流路河床 (礫層④) (第85図、図版46・48・50・51)

180 流路河床である礫層④からは、土師器高坏 (Po118)、土師器甕 (Po119)、須恵器高台付坏 (Po115、116)、高台付壺の底部 (Po117) が出土している。このうち、Po117 の高台付壺の底部は、底部外面に「六」の墨書が認められるもので、8世紀を中心とした時期のものと考えられる。

179 流路 (第86図、図版46・48～51)

179 流路埋土中からは、他の河川性堆積層に比して多くの遺物が出土している。弥生土器 (Po120～122、124、128)、古墳時代の土師器 (Po123、125)、須恵器 (Po129) のほか、古代の須恵器や土師器、土製支脚 (Po138) など、様々な時期の遺物が認められる。

このうち最も新しい時期に属するものは、Po132 の坏及び Po137 の高台付壺であり、8世紀代を中心とした7世紀末から9世紀前半と考えられるものである。また、Po131 の須恵器皿は、回転糸切りの底部が高台状に突出し体部が内湾しつつ口縁部にいたる形状のもので、他地域からの搬入品の可能性が考えられる。

180 流路 (第86図、図版46・49～51)

180 流路埋土からは、弥生土器 (Po139) 及び古墳時代の土師器高坏 (Po140)、須恵器坏蓋及び壺 (Po141、142) が出土している。これらは前後する時期の流路である179流路及び181流路河床の下限を示す遺物より古い特徴を有するため、これらの遺物の時期から180流路の帰属時期を想定することはできない。

181 流路河床 (礫層③) (第87図、図版49)

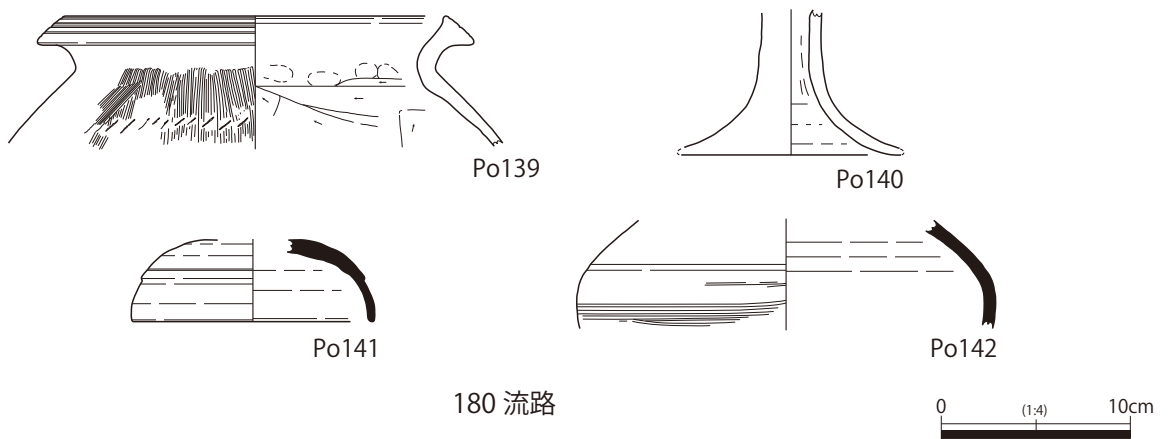
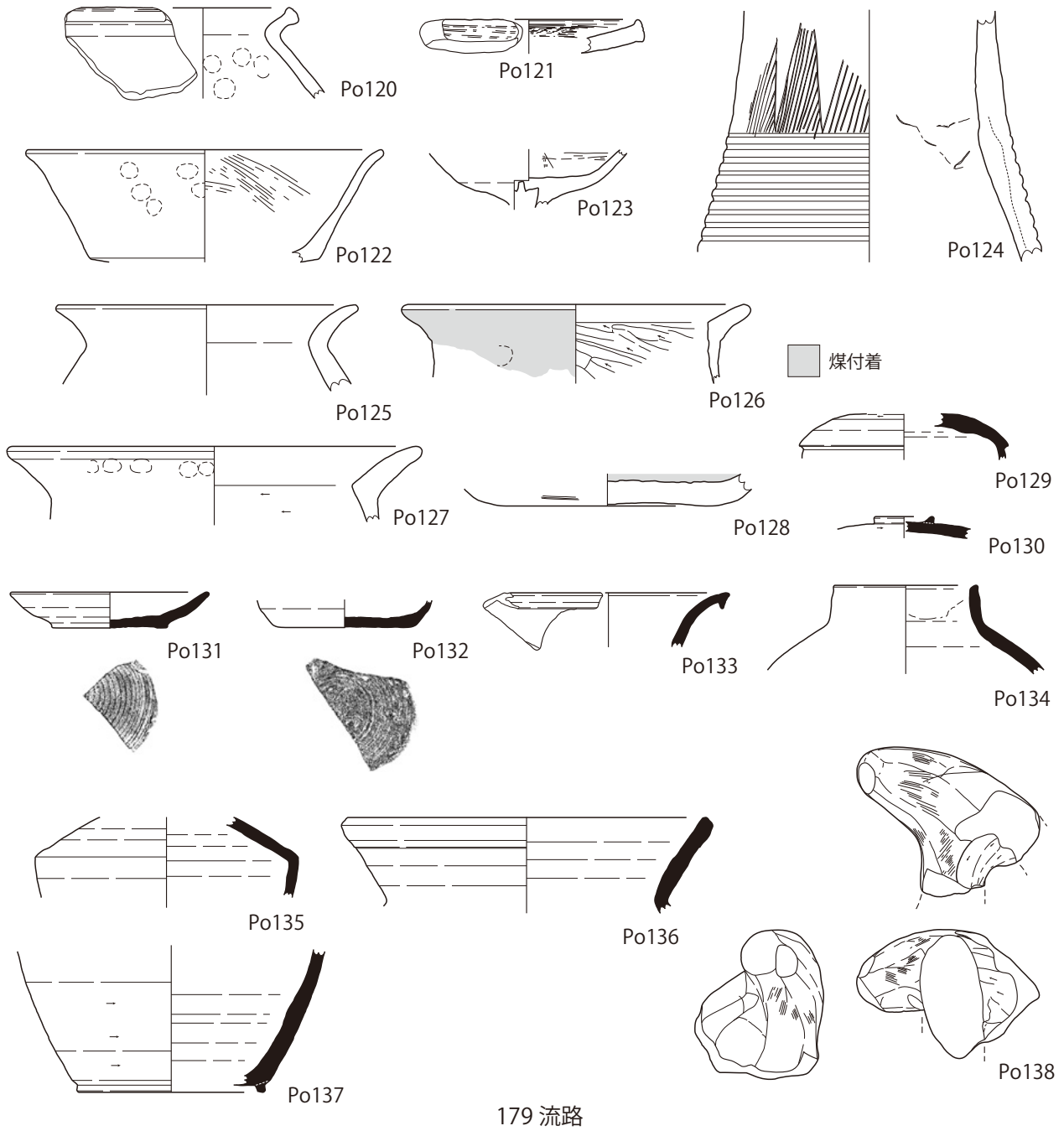
181 流路河床である礫層③からは、須恵器が3点出土した。Po143 は内外面ナデ調整で成形された横瓶の口縁部、Po144 は高台付壺の底部、Po145 は外面平行タタキ、内面に車輪状の当て具痕が認められる甕胴部の破片である。

このうち、Po144 は7世紀末から9世紀前半の所産と考えられる。

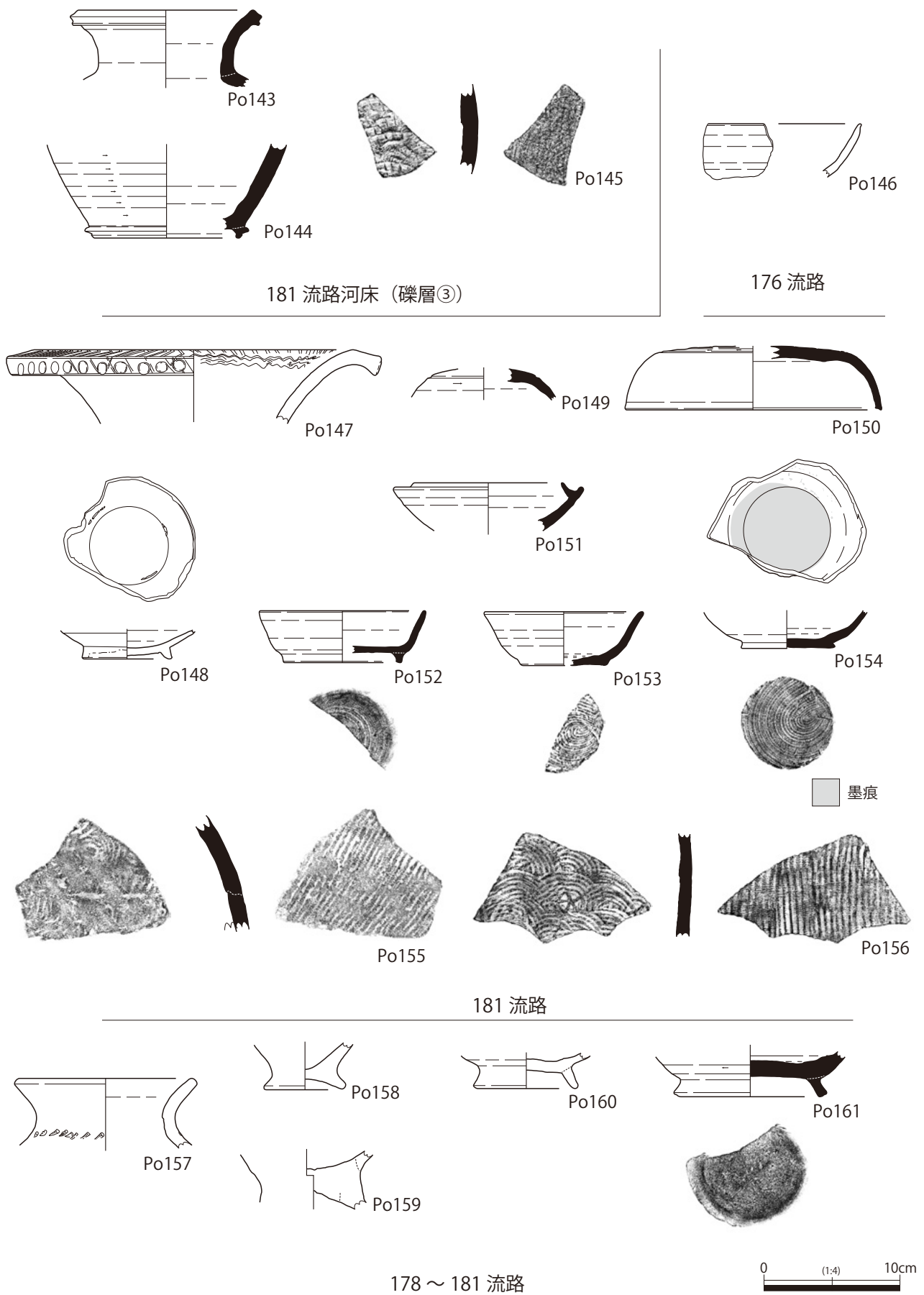
181 流路 (第87図、図版47・49～51・65)

181 流路埋土からは、弥生土器 (Po147)、古墳時代の須恵器 (Po149～151)、古代の須恵器 (Po152～156) のほか、緑釉陶器 (Po148) が出土している。このうち Po152 は須恵器高台付坏、Po153・154 は他地域産の可能性のある須恵器無高台坏、Po155・156 は内面に車輪状の当て具痕が認められる須恵器甕胴部の破片である。

緑釉陶器の Po148 は体部に稜を持ち、削り出し輪高台の内面は露胎である。また、内面見込み部に一次焼成時上に載せられた高台の跡が輪状に残る。おなじく見込み部に3か所、釉の剥げた目跡がみられる。これは二次焼成時にトチン等使用せず上に直置きした高台の痕と考えられるものである^(註5)。



第86図 河川性堆積内 出土遺物(2)



第 87 図 河川性堆積内 出土遺物 (3)

10世紀前半に比定される。

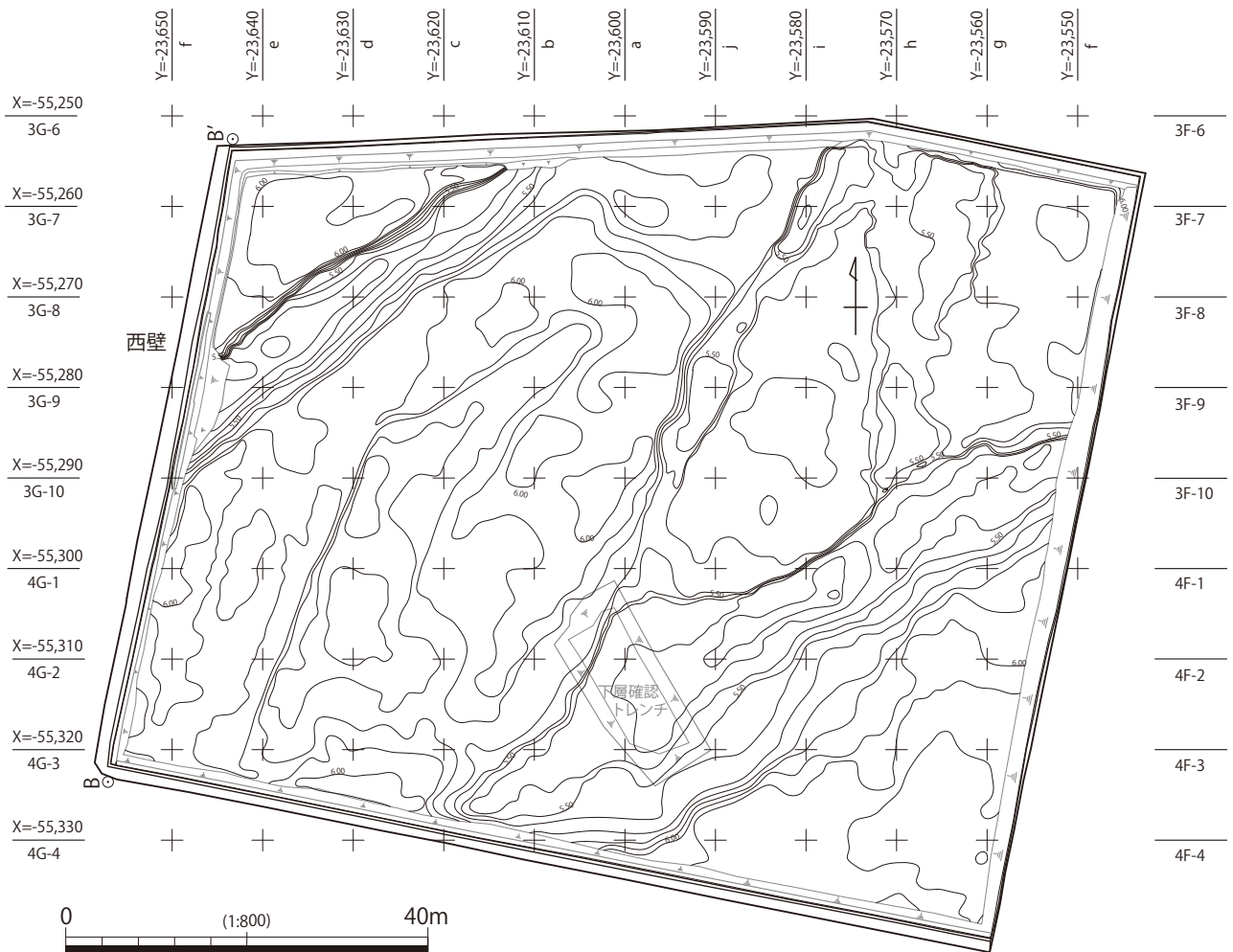
176 流路 (第 87 図、図版 48)

176 流路からは、土師器杯の破片が 1 点出土した (Po146) が、時期比定は難しい。

その他 (第 87 図、図版 47・49・50)

その他出土層位が不明瞭なものとして、弥生土器 (Po157～159) 及び土師器高台付杯 (Po160)、須恵器高台付杯 (Po161) を図化した。弥生土器は点数は多くはないものの、弥生中期中葉から後期にかけてのものが出土しており、いずれも自然流路の下層若しくは上流からの紛れ込みであると考えられるものであるが、周辺に該期の遺跡の存在を窺わせるものである。Po160・161 はどちらも礫層③と⑤が交差する箇所出土したもので、上述した各礫層の出土遺物の特徴から、Po160 が礫層③、Po161 が礫層⑤に帰属するものと考えられる。

以上、3面下河川性堆積より出土した遺物から想定される堆積状況をまとめると、7世紀後半に堆積した礫層①を河床とした自然流路が、8世紀末から10世紀前半にかけて、複数回の洪水等のイベントでもたらされた礫層 (③～⑤) 及びそれらの礫層を河床とする河川の堆積物 (176、178～181 流路) によって浸食と埋積を繰り返し、西から徐々に陸地化していった、と考えることができよう。その後少なくとも11世紀後半には、163 流路 (36 流路) 西岸で人々の活動が始まる。



第 88 図 調査終了後地形測量及び下層確認用トレンチ位置図

第7節 遺構外出土遺物

第1・2遺構面検出中出土遺物（第89図、図版51・53・54・72）

本章4節でも述べたように、第1・2遺構面はほぼ同一面で検出されているため、検出中出土遺物についても合わせて報告する。

Po162～164は11～12世紀の所産と考えられる土師器小皿。Po162・163は底部回転ヘラ切り、Po164は回転糸切り痕が認められる。Po165は底部回転糸切りの土師器皿。

Po166は18世紀後半～19世紀前半頃の肥前系陶器の土瓶の破片で、検出作業中に出土したものであるが、一部18流路の埋土を掘り込んだ可能性がある箇所である。出土グリッドは近代～近世に機能したと考えられるかく乱流路に近いので、かく乱流路の影響の可能性もあるが、かく乱流路埋土とは別に出土しており、湿地状の環境であったと考えられる18流路が近世まで続いていた可能性を示す遺物として掲載しておく。

Po167・168は瓦質の土鍋、Po169は須恵質で器種不明であるが、内面に×状に櫛描きの文様のよなものが施されている。Po170は播鉢、Po171、172は須恵器鉢の口縁部である。

Po173～179は土錘、Po180は土玉。Po181・182は中国産の白磁碗。

木製品としては、斎串状のW51や、容器の底板と考えられるW52・53、金属器として不明鉄片（F2）、1078年初鑄の北宋銭である元豊通宝が出土している。

第1・2遺構面検出中に出土した遺物は、概ね11～13世紀を中心とした時期の所産である。

第3遺構面検出中出土遺物（第90図、図版52～54）

Po183～185は底部回転糸切りの土師器小皿、Po186～195は土師器坏で、Po188は高台付坏、Po187・190～192は底部回転糸切りの無高台坏、Po193～195は回転糸切り痕が認められる柱状高台付坏である。

Po196は古代の土師器甕口縁部、Po197～Po204は口縁部「く」の字に屈曲する土師器土鍋で、内外面ハケ調整主体のもの（Po197・198・201～204）、外面はナデ調整のみとなるもの（Po200）、内外面ナデ調整主体のもの（Po199）と器面調整にバラエティの認められる点は、第1遺構面18流路、第3遺構面163流路出土のものと同様である。

Po205は陶器播鉢の底部で、高台を持つ。Po206はなにかの把手と思われるもの。Po207は土錘。Po208は他地域産と考えられる須恵器坏、Po209は須恵器甕の口縁部である。

Po210・211は中国産の白磁碗の口縁部で、11世紀後半から12世紀前半の所産である。

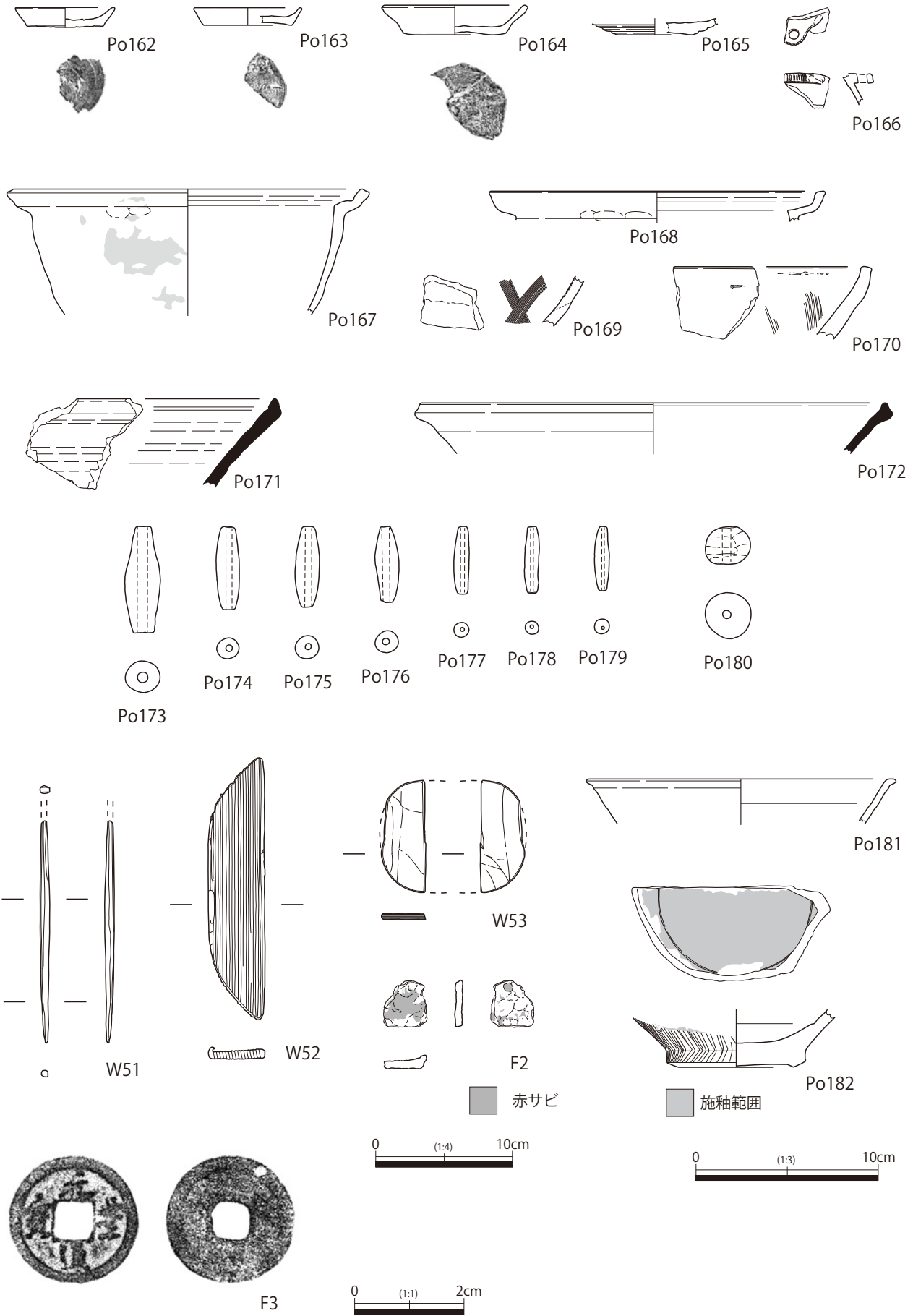
第3遺構面検出中に出土した遺物は、概ね11～13世紀のものであり、第1・2遺構面検出中の遺物群と時期的に明確な差異は認められない。

表土及びかく乱土出土遺物（第91図、図版53・54・69・72）

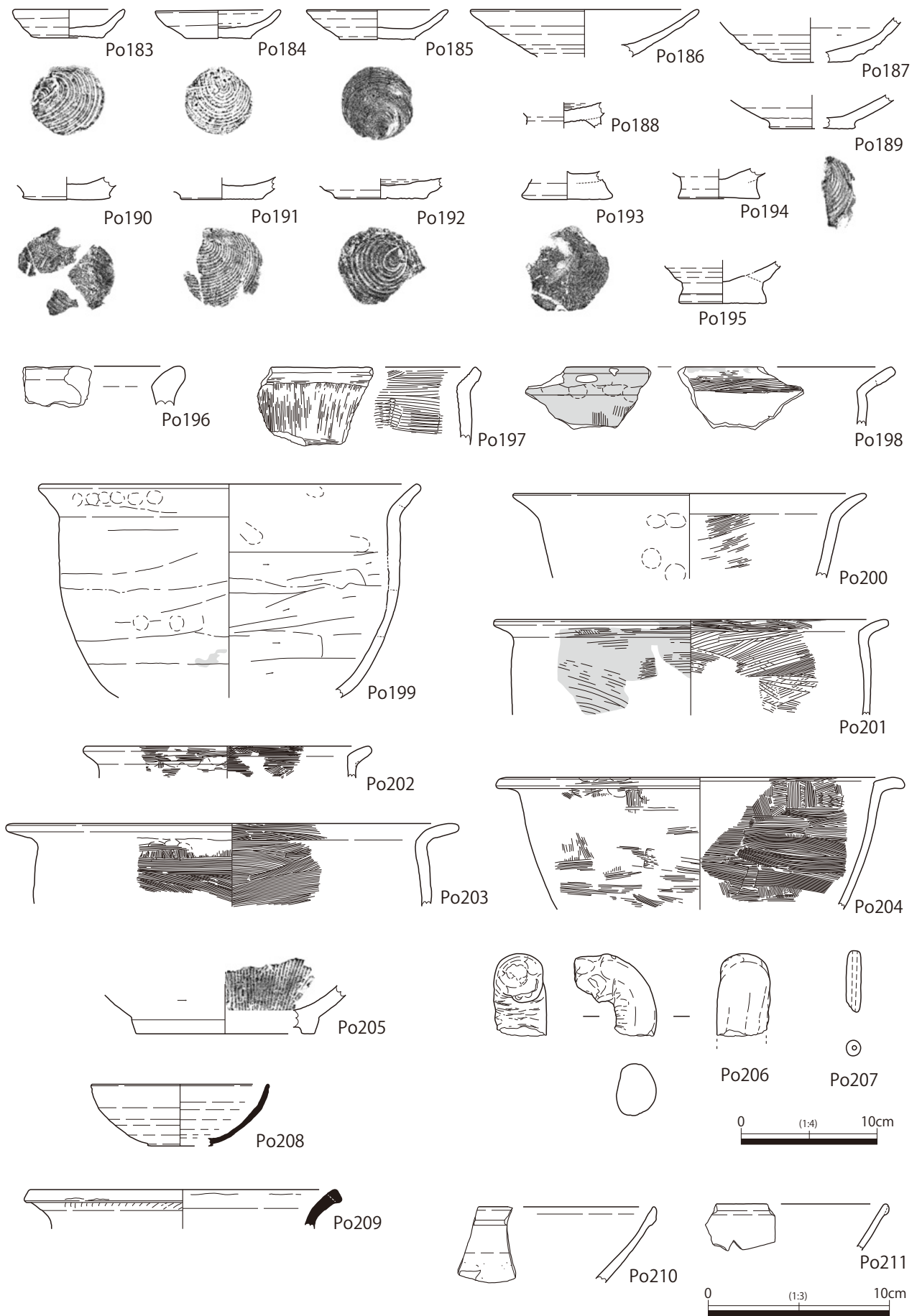
明確に現代～近世にかけての造成土や暗渠埋土から出土したものを、5点図化した。

Po212は越前焼の甕で17世紀後半のもの。Po213・214は土玉、W54・56は目孔の認められる板材で、何らかの木製品の一部と考えられる。

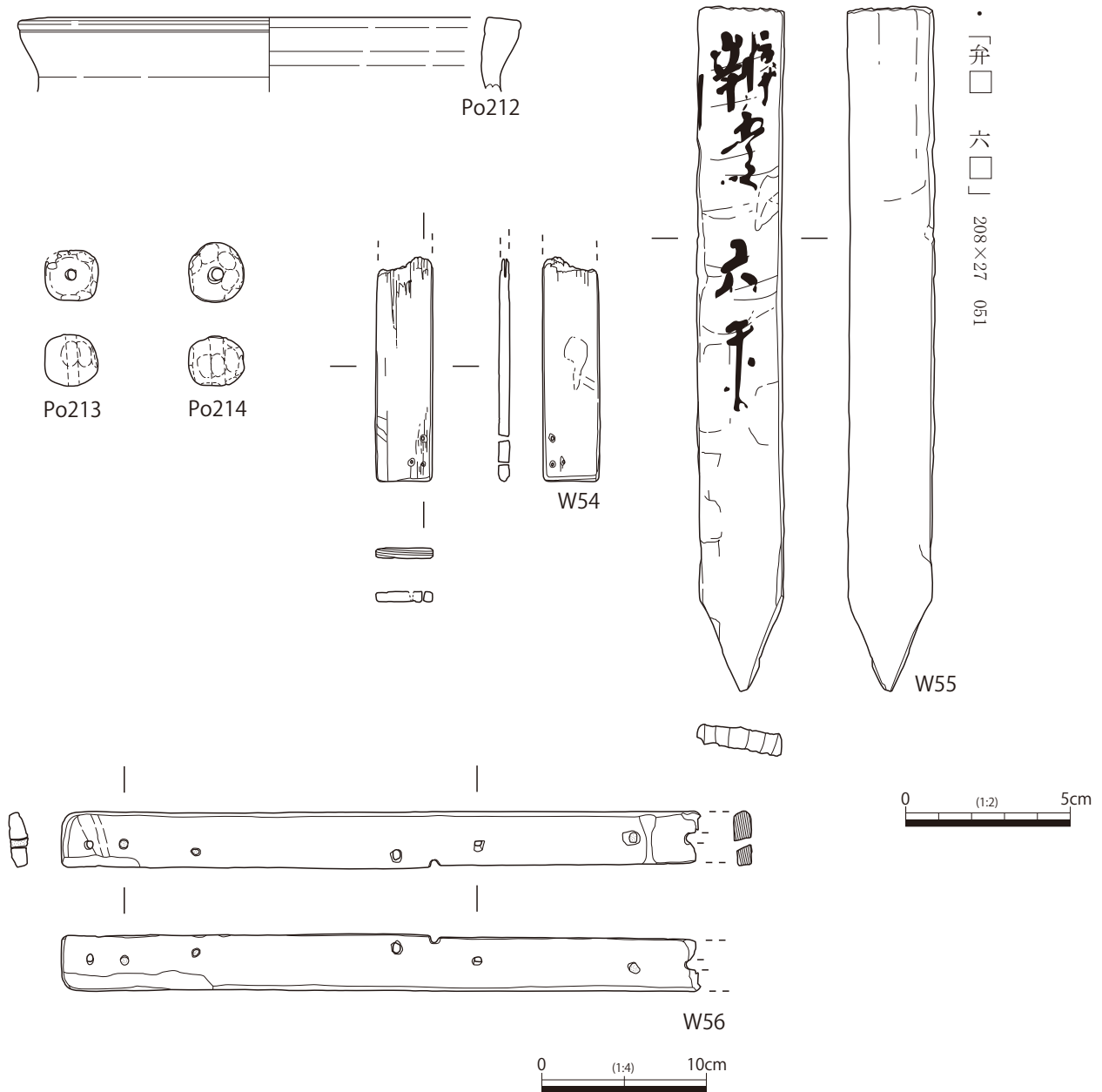
W55は近世以降の溝状かく乱から出土したもので、下端を両側から切り欠き尖らせており、表面に、「弁□ 六□」と墨書が認められる。何らかの品名と数量を示した荷札木簡のようなものではないかと考えられる。



第89図 第1・2遺構面検出中 出土遺物



第90図 第3遺構面検出中 出土遺物



第 91 図 表土及び攪乱土 出土遺物

【註】

- 1) 当時を知る地元の方に御教授いただいた。
- 2) 木簡の釈読及び評価、赤外線撮影は、独立行政法人国立文化財機構奈良国立文化財研究所（資料研究室）に御協力いただいた。

木簡の図版横に記載している木簡の釈文記載様式や型式番号は『木簡研究』（木簡学会編）の記載様式、分類に準じている。

釈文下のアラビア数字は、木簡の長さ（文字の方向）、幅、厚さ（mm）を示し、欠損している場合は括弧付で示した。法量に続く3桁の数字が型式番号である。

- 3) 木製祭祀具について播磨町郷土資料館（平成26年度当時）の大平茂氏に御指導賜り、御教授いただいた。
- 4) 獣骨の同定は、鳥取大学農学部共同獣医学科の保坂善真准教授（平成25年度当時）に御協力いただいた。
- 5) 大阪大学大学院文学研究科の高橋照彦准教授（平成25年度当時）に御教授いただいた。

【参考文献】

鳥取県教育委員会 2013『高住平田遺跡Ⅱ』

第9表-1 土器観察表(1)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別	グリッド	遺構層位	法量 (cm)			調整	胎土焼成	色調	備考
						口径	底径	器高				
Po1	第31図 図版37	368	土師器 皿	T30-6d-3G-9b	2耕作痕	-	※5.3	△1.6	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：浅黄色 内面：浅黄色	
Po2	第31図 図版45	331	土師器 甕	T30-6d-3G-9c	2耕作痕	-	-	△6.3	外面：口縁部ナデ・指頭圧痕、体部ハケ後ナデ 内面：口縁部横方向ハケ、体部ヘラケズリ・ハケ 後ナデ	密 やや良	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄色～黒褐色	外面煤付着
Po3	第31図 図版54	350	土錘	T30-6d-3G-9b	2耕作痕	最大長 △4.9	最大幅 1.6	最大厚 1.7		密 良好	外面：灰黄色～黒褐色	手づくね成形
Po4	第31図 図版45	387	須恵器 高台付杯	T30-6d-3G-9a	2耕作痕	-	※6.0	△2.3	外面：体部回転ナデ、高台内部ナデ 内面：体部回転ナデ、見込部ナデ	密 やや軟	外面：灰白色～灰色 内面：灰色	
Po5	第31図 図版45	349	白磁 碗	T30-6d-3G-8c	2耕作痕	-	-	△2.0	外面：口縁部玉縁、玉縁下部1条の枕線、沈線以 下ヘラ削り	密 良好	外面：胎土灰白色 内面：施釉部灰白色～灰オリ ープ色	大宰府編年白磁碗 IV類
Po6	第36図 図版37	542	土師器 皿	T30-6d-4F-1h	18流路	※8.0	※6.4	2.0	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、見込部ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：灰黄色	
Po7	第36図 図版38	492	土師器 皿	T30-6d-4F-1h	18流路	7.4	4.5	1.7	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：灰黄褐色～にぶい 橙色	
Po8	第36図 図版37	464	土師器 皿	T30-6d-4F-2j	18流路	-	-	△2.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰黄色～黒色 内面：灰黄色	
Po9	第36図 図版37	517	土師器 杯	T30-6d-4F-1g	18流路	※13.2	※7.0	4.2	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：明赤褐色～褐灰色 内面：明赤褐色～褐灰色	
Po10	第36図 図版38	581	土師器 杯	T30-6d-3F-9g	18流路	※14.2	8.4	4.0	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：暗灰黄色～黒色 内面：暗灰黄色～黒色	
Po11	第36図 図版37	523	瓦質土器 鍋	T30-6d-4F-3g	18流路	-	-	△3.7	外面：ヨコナデ・指頭圧痕 内面：ヨコナデ	密 良好	外面：黒色 内面：灰白色～暗灰色	内外面炭素吸着
Po12	第36図 図版37	522	土師器 鍋	T30-6d-4F-3h	18流路	-	-	△2.7	外面：横方向ハケ目後ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部横方向ハケ目・ヨコナデ	密 良好	外面：暗灰黄色～黒褐色 内面：黒色	
Po13	第36図 図版37	520	土師器 鍋	T30-6d-4F-2g	18流路	※27.0	-	△5.2	外面：口縁部ヨコナデ、頸部～胴部縦方向ハケ目 後ナデ・指頭圧痕 内面：横方向ハケ目後ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：灰黄色	外面煤付着
Po14	第36図 図版37	520	土師器 鍋	T30-6d-4F-2g	18流路	※29.6	-	△5.4	外面：口縁部ヨコナデ、頸部指頭圧痕、胴部ハケ 目 内面：横方向ハケ目	密 良好	外面：灰黄褐色 内面：黒褐色	外面煤付着
Po15	第36図 図版37	540	土師器 鍋	T30-6d-4F-1f	18流路	※31.4	-	△7.4	外面：口縁部ヨコナデ、頸部及び胴部指頭圧痕、 胴部ハケ目後ナデ 内面：口縁部横方向ハケ目、頸部ナデ、胴部横方 向ハケ目後ナデ	密 良好	外面：黒褐色～黒色 内面：灰白色～にぶい黄 褐色	外面煤付着
Po16	第36図 図版37	534	土師器 鍋	T30-6d-4F-2g	18流路	※30.8	-	△12.0	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケ目、頸部指頭圧 痕 内面：口縁～胴部横方向ハケ目後口縁部ナデ、 底部ハケ目	密 良好	外面：黒色 内面：にぶい黄褐色～黒 褐色	外面煤付着
Po17	第36図 図版38	534他	土師器 鍋	T30-6d-4F-1g	18流路	※30.8	-	△12.9	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、頸部および胴 部下指頭圧痕 内面：ヨコナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒 色 内面：にぶい黄褐色～黒 褐色	外面上半煤付着
Po18	第36図 図版38	534他	土師器 鍋	T30-6d-4F-2h	18流路	※28.6	-	△12.4	外面：口縁部ヨコナデ、頸部指頭圧痕、胴部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向ハケ目後ナデ、 底部ヨコナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒 色 内面：にぶい黄褐色～黒 褐色	外面煤付着、Po17 と同一個体か
Po19	第36図 図版37	616他	土師器 鍋	T30-6d-3F- 10g	18流路	※32.8	-	△10.4	外面：ハケ目・指頭圧痕 内面：口縁～頸部横方向ハケ目後口縁部ヨコナデ、 胴部中ほどヘラケズリ後ナデ、底部ハケ目	密 良好	外面：黒褐色 内面：暗灰黄色～黒褐色	外面煤付着
Po20	第36図 図版37	497	瓦質土器 羽釜	T30-6d-4F-3i	18流路	※27.0	-	△4.2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密 良好	外面：灰黄色～黒色 内面：褐灰色～黒色	内外面炭素吸着
Po21	第36図 図版37	76	須恵器 甕	T30-6d-4F-2f	18流路 (東側溝)	-	-	△6.6	外面：格子状タタキ 内面：カキ目	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	勝間田焼か
Po22	第36図 図版37	477	須恵器 甕	T30-6d-4F-2h	18流路	-	-	△6.0	外面：格子状タタキ 内面：ハケ目後ナデ	密 やや良	外面：褐灰色 内面：灰色	
Po23	第36図 図版37	523	青磁 碗	T30-6d-4F-3g	18流路	-	※5.6	△1.6	外面：高台外面施釉、畳付および高台内は露胎 内面：施釉、見込部に片彫花文	密 良好	外面：露胎部 灰黄色 内面：施釉部 灰オリープ色	大宰府編年龍泉 窯系青磁碗I類
Po24	第43図 図版38	438	土師器 皿	T30-6d-4G-2c	掘立柱建物1 (23ピット)	7.0	3.8	1.8	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 やや良	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po25	第43図 図版38	439	土師器 皿	T30-6d-4G-2c	掘立柱建物1 (23ピット)	※7.6	※5.0	1.7	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄色 内面：灰黄色	
Po26	第43図 図版45	827	土師器 羽釜	T30-6d-4G-2c	掘立柱建物2 (129ピット)	-	-	△3.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面跨下煤付着
Po27	第43図 図版38	992	土師器 皿	T30-6d-3G- 10b	掘立柱建物3 (140ピット)	9.2	4.8	2.1	外面：体部回転ナデ後一部ナデ、底部回転糸切り 後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒 色 内面：橙色～黒色	
Po28	第43図 図版45	991・ 993・ 997	土師器 杯	T30-6d-3G- 10b	掘立柱建物3 (140ピット)	※14.2	-	△3.4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰黄褐色～黒色 内面：灰黄褐色～黒色	
Po29	第51図 図版38	697	土師器 皿	T30-6d-3F-7e	81ピット	※8.0	※4.8	2.0	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：浅黄色 内面：浅黄色	
Po30	第59図 図版39	515	紡錘車	T30-6d-4F-2g	36流路	最大長 4.8	最大幅 5.3	最大厚 0.9	外面：回転糸切り 内面：ナデ	密 良好	外面：灰黄色 内面：灰黄色	底径4.5cmの土師 器皿底部を転用 底部回転糸切
Po31	第59図 図版39	722	土師器 鍋	T30-6d-3F-9f	36流路	-	-	△4.3	外面：口縁部横方向ハケ目後ナデ、頸部指頭圧痕、 胴部縦方向ハケ目 内面：ハケ目後ナデ	密 やや良	外面：灰黄色 内面：にぶい黄褐色	
Po32	第59図 図版39	563	土師器 鍋	T30-6d-4F-2g	36流路	-	-	△3.5	外面：ハケ目後ナデ・指頭圧痕 内面：横方向ハケ目後口縁部ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：黄褐色～黒褐色	外面煤付着

第9表-2 土器観察表(2)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別	グリッド	遺構層位	法量 (cm)			調整	胎土焼成	色調	備考
						口径	底径	器高				
Po33	第59図 図版39	702	土師器 鍋	T30-6d-3F-10g	36 流路	-	-	△4.9	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケ目後ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケ目	密良好	外面：黒色 内面：にぶい黄橙色	
Po34	第59図 図版39	542・543	土師器 鍋	T30-6d-4F-1h	36 流路	※28.0	-	△3.8	外面：口縁部ヨコナデ、頸部指頭圧痕、胴部ハケ目 内面：横方向ハケ目後口縁部ナデ	密良好	外面：褐灰色～黒色 内面：褐灰色～黒色	外面煤付着
Po35	第59図 図版39	521	土師器 鍋	T30-6d-4F-2g	36 流路	※30.1	-	△10.0	外面：口縁部ヨコナデ、頸部指頭圧痕、胴部縦方向のハケ目後ナデ胴部ハケ目 内面：横方向のハケ目	密良好	外面：黒色 内面：にぶい黄橙色～灰黄褐色	外面煤付着
Po36	第59図 図版39	720	土師器 鍋	T30-6d-3F-10g	36 流路	※28.6	-	△10.4	外面：ハケ目、口縁部ナデ、頸部および底部指頭圧痕 内面：口縁部横方向ハケ目後ナデ、胴部横方向ハケ目	密良好	外面：黒色 内面：にぶい黄色～黄褐色	外面煤付着
Po37	第59図 図版39	543	瓦質土器 鍋	T30-6d-4F-2g	36 流路	※31.2	-	△6.4	外面：口縁部横方向ハケ目後ナデ、頸部指頭圧痕、胴部ナデ 内面：横方向ハケ目後口縁部ナデ	密良好	外面：灰色～黒色 内面：灰黄色～暗灰色	外面および口縁部 内面炭素吸着
Po38	第62図 図版45	1085	土師器 坏	T30-6d-3F-7i	掘立柱建物6 (146ピット)	※14.9	-	△3.9	外面：摩滅著しく不明瞭 内面：回転ナデ	密やや良	外面：橙色～灰黄褐色 内面：橙色～灰黄褐色	
Po39	第64図 図版40	863	土師器 坏	T30-6d-3G-7a	4 耕作痕	※16.8	6.2	4.0	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：にぶい黄橙色～黒色 内面：灰黄褐色～黒褐色	
Po40	第64図 図版45	862	土師器 坏	T30-6d-3G-6a	4 耕作痕	-	※7.2	△2.4	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：回転ナデ	密やや良	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po41	第64図 図版45	884	土師器 甕	T30-6d-3F-8j	4 耕作痕	※26.4	-	△3.8	外面：ヨコナデ、指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ後ナデ	密良好	外面：黒色 内面：にぶい褐色～黒褐色	外面煤付着
Po42	第64図 図版45	888	土師器 鍋	T30-6d-3G-7a	4 耕作痕	-	-	△5.1	外面：口縁部横方向ハケ目後ナデ、体部縦方向ハケ目後ナデ 内面：横方向ハケ目	密良好	外面：黒色 内面：にぶい赤褐色～灰褐色	外面煤付着
Po43	第66図 図版40	188・189・190	土師器 甕	T30-6d-4G-3d	1 炭化物範囲	※20.7	-	14.9	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラケズリ、胴部下半ヘラケズリ後ナデ	密やや良	外面：黒色 内面：にぶい黄褐色～黒褐色	外面煤付着
Po44	第69図 図版40	816	土師器 坏	T30-6d-4G-2d	133 落込み	15.3	5.6	4.5	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：浅黄色～明黄褐色 内面：浅黄色～明黄褐色	
Po45	第69図 図版40	815	土師器 坏	T30-6d-4G-2d	133 落込み	10.0	4.5	2.4	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り後ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：浅黄色～明黄褐色 内面：浅黄色～明黄褐色	
Po46	第71図 図版40	900	土師器 坏	T30-6d-3F-7i	147 土坑	-	※7.2	△2.6	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：ナデ	密良好	外面：灰黄褐色～褐灰色 内面：灰黄褐色	
Po47	第71図 図版45	882	土師器 皿	T30-6d-3F-7i	152 土坑	-	※5.1	△1.6	外面：体部回転ナデ後一部ナデ、底部回転条切り後ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：暗灰色～灰黄褐色 内面：暗灰色～灰黄褐色	
Po48	第75図 図版45	820	土師器 皿	T30-6d-3G-8d	135 流路	-	※5.8	△1.8	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：ナデ	密良好	外面：橙色 内面：橙色	
Po49	第75図 図版40	804	土師器 皿	T30-6d-3G-8e	135 流路	9.6	5.0	2.1	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：浅黄色～橙色 内面：灰黄色～橙色	
Po50	第75図 図版45	832	土師器 甕	T30-6d-3G-7d	135 流路	-	-	△4.2	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ後ナデ 内面：ヨコナデ	密良好	外面：灰黄色～橙色 内面：灰黄色～橙色	
Po51	第75図 図版45	820	土師器 鍋	T30-6d-3G-8d	135 流路	※26.8	-	△7.4	外面：口縁部横方向ハケ目後ナデ、頸部以下縦方向ハケ目、胴部指頭圧痕 内面：口縁部ハケ目後ナデ、胴部ハケ目	密良好	外面：黒色 内面：灰黄褐色	外面煤付着
Po52	第79図 図版41	933	土師器 皿	T30-6d-3F-10f	163 流路 下層	7.4	6.1	1.6	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰黄褐色～黄灰色 内面：灰黄褐色～黄灰色	
Po53	第79図 図版41	948	土師器 皿	T30-6d-3F-10h	163 流路 上層	7.1	4.8	1.8	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：にぶい黄色 内面：灰黄色	
Po54	第79図 図版41	932	土師器 皿	T30-6d-3F-10f	163 流路 下層	※7.4	※5.3	1.1	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：黄灰色 内面：黄灰色～黒色	
Po55	第79図 図版41	1100 1123	土師器 皿	T30-6d-4G-3a	163 流路 下層	8.1	4.7	1.6	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：暗褐色 内面：にぶい黄褐色～褐色	
Po56	第79図 図版41	1050	土師器 皿	T30-6d-4F-1i	163 流路 下層	※8.2	※4.4	1.9	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：口縁～底部回転ナデ、底部中央ナデ	密良好	外面：暗灰色～黄灰色 内面：黄灰色	
Po57	第79図 図版41	1116	土師器 皿	T30-6d-3F-10h	163 流路 下層	長軸 8.5 短軸 8.0	4.5	2.0	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：橙色 内面：橙色	外面黒斑あり
Po58	第79図 図版41	1115	土師器 皿	T30-6d-3F-10h	163 流路 下層	長軸 8.5 短軸 8.2	4.3	2.0	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po59	第79図 図版42	945	土師器 皿	T30-6d-3F-10f	163 流路 下層	8.6	4.9	2.0	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：にぶい黄色～にぶい黄褐色 内面：にぶい黄色	
Po60	第79図 図版42	948	土師器 皿	T30-6d-3F-10h	163 流路 上層	8.8	4.8	1.7	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい褐色～にぶい黄褐色	
Po61	第79図 図版42	1039	土師器 皿	T30-6d-4G-3a	163 流路 下層	※8.8	6.8	1.6	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：口縁～底部回転ナデ、底部中央ナデ	密良好	外面：にぶい褐色～にぶい黄褐色 内面：にぶい褐色～褐色	
Po62	第79図 図版42	1050	土師器 皿	T30-6d-4F-1i	163 流路 下層	※9.4	※5.5	2.0	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色～褐色 内面：にぶい黄色	
Po63	第79図 図版42	945	土師器 皿	T30-6d-3F-10f	163 流路 下層	※9.0	※4.5	2.5	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り後ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰黄褐色～黒色 内面：灰黄褐色～黒色	
Po64	第79図 図版42	972	土師器 皿	T30-6d-3F-10g	163 流路 下層	9.4	5.0	2.6	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り後ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：褐色 内面：褐色～明褐色	
Po65	第79図 図版42	933	土師器 皿	T30-6d-3F-10f	163 流路 下層	-	5.9	△2.1	外面：体部回転ナデ、底部回転条切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：にぶい褐色～にぶい黄褐色 内面：にぶい褐色	

第9表-3 土器観察表(3)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別	グリッド	遺構層位	法量 (cm)			調整	胎土焼成	色調	備考
						口径	底径	器高				
Po66	第79図 図版41	932	土師器 皿	T30-6d-3F-10f	163 流路 下層	-	※6.6	△1.2	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰黄褐色～にぶい橙色 内面：暗灰黄色	
Po67	第79図 図版41	948	土師器 杯	T30-6d-3F-10h	163 流路 細砂層	※16.2	-	△5.1	外面：ヨコナデ 内面：ヘラミガキ後暗文	密 良好	外面：明赤褐色 内面：にぶい褐色	内外面赤色塗彩
Po68	第79図 図版42	998	土師器 柱状高台皿	T30-6d-3F-10h	163 流路 下層	-	※4.7	△3.6	外面：体部～高台回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po69	第79図 図版42	924	土師器 柱状高台皿	T30-6d-3F-10f	163 流路 上層	※9.5	5.4	3.8	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰黄色～にぶい褐色 内面：灰黄色～黒色	内面上部に黒斑あり
Po70	第79図 図版42	1000	土師器 低脚杯	T30-6d-4F-1h	163 流路 下層	-	5.4	△3.2	外面：見込部および脚部回転ナデ 内面：脚部回転ナデ	密 良好	外面：橙色～にぶい黄褐色 内面：橙色～にぶい黄褐色	
Po71	第79図 図版43	1063	土師器 高台付杯	不明	163 流路	-	-	△2.5	外面：見込部ナデ、脚部回転ナデ 内面：脚部回転ナデ	密 やや軟	外面：黄灰色～橙色 内面：黄灰色～褐色	足高高台
Po72	第79図 図版43	945・ 946	土師器 高台付杯	T30-6d-3F-10f	163 流路 下層	※15.5	8.1	6.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	足高高台
Po73	第79図 図版43	1047	土師器 三足羽釜	T30-6d-4G-3c	163 流路 上層	最大長 △12.5	最大幅 △2.8	最大厚 △2.8	外面：ナデ・指頭圧痕	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒色	支脚部。上部煤付着
Po74	第79図 図版41	973	土師器 鍋?	T30-6d-3F-10g	163 流路 下層	※18.6	-	△8.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、底部指頭圧痕	密 良好	外面：暗灰黄色～黒褐色 内面：にぶい黄褐色～黒褐色	口縁部外面煤付着、底部内面炭化物付着
Po75	第79図 図版54	968	土錘	T30-6d-3F-10h	163 流路上層	最大長 5.3	最大幅 1.3	最大厚 1.3		密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒色	手づくね成形
Po76	第79図 図版54	948	土錘	T30-6d-3F-10h	163 流路 上層	最大長 4.7	最大幅 1.5	最大厚 1.4		密 良好	外面：灰黄色～にぶい黄褐色	手づくね成形
Po77	第79図 図版41	1002	須恵器 蓋	T30-6d-4F-1h	163 流路 下層	-	-	△1.7	外面：つまみ内回転ナデ、天井部回転ナデ 内面：天井部回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
Po78	第79図 図版41	1127	須恵器 甕?	T30-6d-4G-4a	163 流路 細砂層	-	-	△4.1	外面：ハケ目後平行タタキ 内面：車輪状当て具痕	密 やや軟	外面：灰オリーブ色 内面：灰黄色	
Po79	第79図 図版41	1040	須恵器 壺?	T30-6d-4G-3a	163 流路 下層	-	-	△3.3	外面：タタキ後カキ目、一部キザミ 内面：当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
Po80	第79図 図版41	932	須恵器 甕?	T30-6d-3F-10f	163 流路 下層	-	-	△5.0	外面：格子状タタキ後ナデ 内面：ハケ目	密 良好	外面：暗オリーブ灰色 内面：暗灰色～灰色	勝間田焼か
Po81	第79図 図版41	931	白磁 合子蓋	T30-6d-3F-10f	163 流路 下層	※6.5	-	△1.6	外面：施釉、蓮弁文 内面：施釉、一部釉が剥離	密 良好	外面：露胎部 灰白色～暗赤灰色 内面：施釉部 明青灰色・白灰色	内面暗赤褐色の付着物。大宰府福平白磁碗文類
Po82	第79図 図版41	968	青磁 碗	T30-6d-3F-9g	163 流路 上層	-	-	△4.0	外面：施釉 内面：施釉、体部に蓮弁文	密 良好	オリーブ灰色 内面：施釉部	龍泉窯系青磁碗
Po83	第80図 図版43	984・ 988	土師器 鍋	T30-6d-4F-2i	163 流路 上層	※25.0	-	△14.8	外面：調整不明、下部ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒色 内面：にぶい黄褐色～黒色	内外面煤付着
Po84	第80図 図版41	949	土師器 鉢?	T30-6d-4F-2g	163 流路	-	-	△5.1	外面：縦方向ハケ目 内面：横方向ハケ目	密 良好	外面：黒色 内面：灰黄褐色～黒褐色	外面煤付着、Po85 と同一個体か
Po85	第80図 図版41	946・ 950	土師器 鉢?	T30-6d-4F-3g	163 流路	-	-	△4.2	外面：縦方向ハケ目 内面：横方向ハケ目、口縁部指頭圧痕	密 良好	外面：黒色 内面：黄灰色～黒褐色	外面煤付着、Po84 と同一個体か
Po86	第80図 図版41	950	土師器 鍋	T30-6d-4F-3g	163 流路	-	-	△3.9	外面：口縁部ヨコナデ、胴部縦方向ハケ目 内面：横方向ハケ目	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒褐色 内面：にぶい黄褐色～黒褐色	外面煤付着
Po87	第80図 図版41	948	土師器 鍋	T30-6d-3F-10h	163 流路 上層	※25.0	-	△10.4	外面：横方向ハケ目後ナデ・指頭圧痕 内面：横方向ハケ目	密 良好	外面：黒褐色～黒色 内面：にぶい黄色～黒色	外面煤付着
Po88	第80図 図版43	933	土師器 鍋	T30-6d-3F-10f	163 流路 下層	※29.4	-	△14.2	外面：口縁～胴部上半縦方向ハケ目・指頭圧痕、 胴部下半横方向ハケ目・指頭圧痕 内面：横方向ハケ目・指頭圧痕	密 良好	外面：黄灰色～黒褐色 内面：灰黄褐色～黒褐色	内外面煤付着
Po89	第80図 図版43	945	土師器 鍋	T30-6d-3F-10f	163 流路 下層	※28.6	-	△10.2	外面：口縁部横方向ハケ目後ナデ、頸～胴部上部 縦方向ハケ目後ナデ、胴部下部横方向ハケ目、頸 部以下指頭圧痕 内面：横方向ハケ目、口縁部ナデ、胴部指頭圧痕	密 良好	外面：黄灰色～黒色 内面：にぶい黄色～灰色	外面煤付着
Po90	第80図 図版43	932・ 933・ 946・ 948・ 970・ 972・ 973	土師器 鍋	T30-6d-3F-10f	163 流路 下層	※29.9	-	15.7	外面：口縁部ヨコナデ、頸部縦方向ハケ目後ナデ ・指頭圧痕、胴部ハケ目 内面：横方向ハケ目・指頭圧痕	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒色 内面：にぶい黄褐色～黒色	外面底部および内 面一部煤付着
Po91	第80図 図版41	609・ 948	土師器 鍋	T30-6d-3F-10h	163 流路 上層	※28.0	-	△7.4	外面：口縁部横方向ハケ目後ナデ、胴部縦方向ハ ケ目後ナデ 内面：横方向ハケ目	密 良好	外面：黒褐色～黒色 内面：暗灰黄色～黒褐色	外面および口縁部 内面煤付着
Po92	第80図 図版43	945	土師器 鍋	T30-6d-3F-10f	163 流路 下層	※28.4	-	△10.0	外面：口縁部ヨコナデ・指頭圧痕、胴部横方向ハ ケ目・指頭圧痕 内面：口縁～胴部上半ヨコナデ、胴部下半横方向 ハケ目	密 良好	外面：黒色 内面：暗灰褐色～黒色	外面煤付着
Po93	第80図 図版44	923	土師器 鍋	T30-6d-3F-10f	163 流路 上層	※33.4	-	△10.4	外面：口縁部ナデ、頸部指頭圧痕、口縁～胴部 ハケ目 内面：横方向ハケ目、頸～胴部上半ナデ・指頭圧痕	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒褐色 内面：灰黄褐色～黒褐色	外面煤付着
Po94	第80図 図版44	969	土師器 鍋	T30-6d-3F-10h	163 流路 上層	※30.8	-	13.9	外面：口縁部ナデ、胴部上半縦方向ハケ目後ナ デ・指頭圧痕、胴部下半ハケ目 内面：口縁部ハケ目後ナデ、胴部ハケ目	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒褐色 内面：にぶい黄褐色～黒褐色	外面煤付着
Po95	第80図 図版44	1037・ 1046・ 1059	土師器 鍋	T30-6d-4G-3b	163 流路 上層	※32.6	-	△14.6	外面：口縁部横方向ハケ目後ナデ、頸部以下ハケ 目、頸部および胴部指頭圧痕 内面：口縁～胴部上半横方向ハケ目、胴部下半不 正方向ハケ目後ナデ・指頭圧痕	密 良好	外面：灰黄褐色～黒色 内面：灰黄褐色～黒色	内外面煤付着

第9表-4 土器観察表(4)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別	グリッド	遺構層位	法量 (cm)			調整	胎土 焼成	色調	備考
						口径	底径	器高				
Po96	第81図 図版44	972・ 973	土師器 鍋	T30-6d-3F- 10g	163 流路	※ 27.4	-	△ 5.7	外面：口縁部ナデ、頸部以下縦方向ハケ目 内面：口縁部横方向ハケ目後ナデ、口縁以下ハケ目	密 良好	外面：黒色 内面：暗灰黄色～黒褐色	外面煤付着
Po97	第81図 図版41	936	土師器 鍋	T30-6d-4F-2g	163 流路	※ 27.7	-	△ 6.2	外面：口縁部ヨコナデ、口縁～胴部ハケ目・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下横方向ハケ目・指頭圧痕	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
Po98	第81図 図版44	973	土師器 鍋	T30-6d-3F- 10g	163 流路 下層	※ 28.2	-	△ 9.7	外面：口縁部横方向ハケ目後ナデ・指頭圧痕、胴部横方向ハケ目・指頭圧痕 内面：口縁部横方向ハケ目後ヨコナデ、胴部ハケ目	密 良好	外面：黄灰色～黒色 内面：灰黄色～黒色	外面煤付着
Po99	第81図 図版44	719・ 947・ 948・ 973	瓦質土器 鍋	T30-6d-3F- 10g	163 流路 下層	※ 32.3	-	△ 11.3	外面：口縁部ヨコナデ、胴部指頭圧痕 内面：指頭圧痕後ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：灰黄色～黒色	内外面煤付着
Po100	第81図 図版44	943	土師器 鍋	T30-6d-3F- 10g	163 流路 上層	※ 30.4	-	△ 12.0	外面：口縁部ナデ、頸部以下ハケ目後、胴部上半ナデ・指頭圧痕 内面：口縁～胴部下横方向ハケ目後、頸～胴部ナデ・指頭圧痕	密 良好	外面：黒褐色 内面：にぶい黄褐色～暗灰黄色	外面煤付着
Po101	第81図 図版44	973	土師器 鍋	T30-6d-3F- 10g	163 流路 下層	※ 32.0	-	△ 9.0	外面：口縁部横方向ハケ目後ヨコナデ、胴部ハケ目後ナデ・指頭圧痕 内面：横方向ハケ目後口縁部ヨコナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒褐色 内面：にぶい黄褐色～黒褐色	内外面煤付着
Po102	第85図 図版51	96	須恵器 坏身	T30-6d-4F-3f	163 流路河床 礫層①	※ 8.6	-	3.1	外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
Po103	第85図 図版51	110	須恵器 坏蓋	T30-6d-4F-2f	163 流路河床 礫層①	※ 14.9	-	△ 1.5	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
Po104	第85図 図版45	1228	須恵器 高坏	T30-6d-4F-2f	163 流路河床 礫層①	-	-	△ 6.2	外面：回転ナデ 内面：受け部回転ナデ、脚部回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	脚部に2方透かし、受け部と脚部外面の境にヘラ記号「×」
Po105	第85図 図版45	118	土師器 高坏	T30-6d-4F-4g	163 流路河床 礫層①	-	※ 9.8	△ 6.5	外面：摩滅著しく不明瞭 内面：脚柱部シボリ目・ヘラケズリ後ナデ、脚部横方向ハケ目	密 良好	外面：にぶい黄褐色～橙色 内面：にぶい黄褐色～橙色	外面赤色塗彩
Po106	第85図 図版50	1076	弥生土器 甕	T30-6d-4G-3e	178 流路河床か 礫層⑤か	※ 26.4	-	△ 5.2	外面：ヨコナデ、口縁部3条の凹線 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	第V-3様式
Po107	第85図 図版45	1313	須恵器 高台付坏	T30-6d-3G- 10e	178 流路河床 礫層⑤ 重機掘削	-	※ 7.7	△ 2.0	外面：高台回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：灰色～黄灰色 内面：灰色	
Po108	第85図 図版51	1315	須恵器 高台付坏	T30-6d-4G-2e	178 流路河床 礫層⑤ 重機掘削	-	※ 8.8	△ 2.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色～黄灰色 内面：灰色～黄灰色	
Po109	第85図 図版48	1212	須恵器 坏身	T30-6d-3F-6i	178 流路河床か 礫層⑤か	-	6.0	△ 2.1	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 やや良	外面：灰白色 内面：灰色	底部外面に墨書「□三」
Po110	第85図 図版46	1180	土師器 坏身	T30-6d-3G-6b	178 流路	※ 13.6	※ 8.9	4.3	外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～橙色 内面：にぶい黄褐色～橙色	
Po111	第85図 図版51	1163	須恵器 高台付坏	T30-6d-3G-7b	178 流路	-	※ 9.6	△ 4.8	外面：体部回転ナデ、高台内回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、見込部ナデ	密 やや軟	外面：灰白色 内面：灰白色	
Po112	第85図 図版50	1140	弥生土器 甕	T30-6d-3G-6a	178 流路	※ 21.0	-	△ 5.2	外面：口縁部ヨコナデ、頸部貼付突帯・キザミ目あり、胴部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	密 良好	外面：浅黄色～灰黄色 内面：浅黄色～灰黄色	第IV様式
Po113	第85図 図版50	1157	弥生土器 甕	T30-6d-3G-7b	178 流路 上層シルト層	※ 30.4	-	△ 5.6	外面：口縁部キザミ目か、口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	密 やや良	外面：灰黄色 内面：灰黄色	第III様式
Po114	第85図 図版46	1312	輪羽口	T30-6d-3G-7d	178 流路か	最大長 △ 7.0	最大幅 △ 5.8	最大厚 2.6		密 良好		先端部付近
Po115	第85図 図版46	790	須恵器 高台付坏	T30-6d-4G-3c	180 流路河床 礫層④	-	※ 7.4	△ 3.6	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
Po116	第85図 図版51	1320	須恵器 高台付坏	T30-6d-4G-2c	180 流路河床か 礫層④か 重機掘削	-	※ 11.2	△ 1.4	外面：体部～高台回転ナデ、底部回転ヘラケズリ後回転ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
Po117	第85図 図版48	1318	須恵器 高台付壺	T30-6d-3G-9a	180 流路河床か 礫層④か	-	※ 13.2	△ 8.0	外面：体部回転ヘラケズリ後回転ナデ、高台回転ナデ、胴部ナデ 内面：体部回転ナデ、見込部ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	高台内に墨書「六」
Po118	第85図 図版46	1316	土師器 高坏	T30-6d-3G-8a	180 流路河床か 礫層④か 重機掘削	-	-	△ 4.3	外面：ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：橙色～にぶい黄褐色 内面：橙色～にぶい黄褐色	磨滅著しい
Po119	第85図 図版50	184	土師器 鍋	T30-6d-4G-3d	180 流路河床か 礫層④か	※ 23.0	-	△ 4.0	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ・指頭圧痕、頸部以下ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒色 内面：にぶい黄褐色～褐灰色	内外面煤付着
Po120	第86図 図版50	1210	弥生土器 甕	T30-6d-4G-2d	179 流路	-	-	△ 5.2	外面：口縁部凹線、頸部以下ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ・指頭圧痕	密 良好	外面：にぶい黄褐色～灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色～灰黄褐色	第IV様式
Po121	第86図 図版50	1223	弥生土器 壺	T30-6d-4G-2d	179 流路	-	-	△ 2.1	外面：口縁部3条の凹線 内面：横方向ハケ目	密 良好	外面：浅黄色～暗灰黄色 内面：浅黄色～暗灰黄色	第V様式
Po122	第86図 図版48	1253	弥生土器 器台	T30-6d-3G-8b	179 流路	※ 22.3	-	△ 7.1	外面：不明瞭 内面：ハケ目	密 良好	外面：にぶい黄褐色～橙色 内面：にぶい黄褐色～橙色	第VI様式 内面赤色塗彩
Po123	第86図 図版48	1192	土師器 高坏	T30-6d-4G-2d	179 流路	-	-	△ 3.7	外面：不明瞭 内面：受け部ハケ目・ナデ、脚部ヘラケズリ	やや密 良好	外面：浅黄色～にぶい橙色 内面：浅黄色～にぶい橙色	
Po124	第86図 図版48	1205	弥生土器 器台	T30-6d-4G-1d	179 流路 礫混じり砂層	-	-	△ 15.8	外面：上段に鋸歯文、下段に9条の凹線 内面：ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	脚部
Po125	第86図 図版50	1249	土師器 甕	T30-6d-4G-3c	179 流路	※ 18.8	-	△ 5.4	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	密 良好	外面：暗灰黄色 内面：にぶい黄色～暗灰黄色	

第9表-5 土器観察表(5)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別	グリッド	遺構層位	法量 (cm)			調整	胎土焼成	色調	備考
						口径	底径	器高				
Po126	第86図 図版50	1225	土師器 甕	T30-6d-4G-3d	179 流路	※ 21.2	-	△ 5.0	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒褐色 内面：橙色	
Po127	第86図 図版50	1237	土師器 甕	T30-6d-4G-2c	179 流路	※ 25.6	-	△ 4.8	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、頸部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po128	第86図 図版46	1186	弥生土器 甕？	T30-6d-3G-10d	179 流路	-	※ 13.7	△ 2.0	外面：ナデ 内面：炭化物付着のため不明瞭	密 良好	外面：暗灰黄色～暗オリーブ 褐色 内面：黒色	内面炭化物付着
Po129	第86図 図版51	1184	須恵器 坏蓋	T30-6d-3G-9d	179 流路	-	-	△ 2.9	外面：体部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色～灰黄褐色 内面：灰色～灰黄褐色	
Po130	第86図 図版51	1259	須恵器 坏蓋	T30-6d-3G-10c	179 流路	-	-	△ 1.4	外面：つまみ内回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：灰色	密 良好	外面：褐灰色～灰色 内面：灰色	輪状つまみ
Po131	第86図 図版51	1224	須恵器 皿	T30-6d-4G-3c	179 流路	※ 12.4	※ 7.3	2.3	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	他地域系か
Po132	第86図 図版46	1237	須恵器 坏	T30-6d-4G-2c	179 流路	-	※ 8.2	△ 1.7	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	やや密 やや軟	外面：灰色 内面：灰色	
Po133	第86図 図版49	1223	須恵器 壺	T30-6d-4G-2d	179 流路	※ 23.6	-	△ 3.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
Po134	第86図 図版49	1223	須恵器 短頸壺	T30-6d-4G-2d	179 流路	※ 9.0	-	△ 5.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色～灰オリーブ色 内面：灰色～灰オリーブ色	外面および口縁部 内面自然釉付着
Po135	第86図 図版49	1253	須恵器 壺	T30-6d-3G-8b	179 流路	-	-	△ 5.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
Po136	第86図 図版49	1222	須恵器 甕	T30-6d-4G-2d	179 流路	※ 22.6	-	△ 6.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色～にぶい橙色 内面：灰色～にぶい橙色	
Po137	第86図 図版49	1209	須恵器 壺	T30-6d-4G-2d	179 流路	-	※ 11.6	△ 9.0	外面：体部回転ヘラケズリ後回転ナデ、高台回転 ナデ、高台内ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
Po138	第86図 図版46	1253	土製支脚	T30-6d-3G-8b	179 流路	最大長 △ 8.1	最大幅 △ 9.4	最大厚 △ 11.5	外面：ハケ目後ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～にぶい 黄褐色	手づくね成形
Po139	第86図 図版50	1096	弥生土器 壺	T30-6d-4G-2d	180 流路か 3面下砂層	※ 20.0	-	△ 6.9	外面：口縁部4条の凹線後ナデ、頸部ナデ、胴部 縦方向ハケ目・キザミ目 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ・指頭圧痕、胴 部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～橙色 内面：にぶい黄褐色～明黄褐 色	第V-1様式
Po140	第86図 図版46	1196	土師器 高坏	T30-6d-3F-6i	180 流路 礫層③ 下シルト	-	-	△ 7.7	外面：ナデ 内面：脚部上半シボリ目、下半ヘラケズリ後ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	脚部
Po141	第86図 図版51	1243	須恵器 坏蓋	T30-6d-4G-1b	180 流路か 3面下砂層	※ 12.7	-	△ 4.3	外面：口縁～体部回転ナデ、天井部ヘラケズリ 内面：口縁部回転ナデ、天井部回転ナデ薄ナデ	密 やや良	外面：灰色～灰オリーブ色 内面：灰色～灰オリーブ色	
Po142	第86図 図版49	1235	須恵器 壺	T30-6d-4G-2b	180 流路か 礫層③下砂層	-	-	△ 5.7	外面：肩部回転ナデ・1条の沈線胴部横方向ハケ 目後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
Po143	第87図 図版49	370	須恵器 横瓶	T30-6d-3G-10a	181 流路河床 礫層③	※ 12.8	-	△ 5.6	外面：回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ、頸部当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
Po144	第87図 図版49	798	須恵器 壺	T30-6d-4G-2b	181 流路河床か 礫層③か	-	※ 10.8	△ 6.9	外面：回転ヘラケズリ後回転ナデ 内面：回転ナデ	密 やや良	外面：灰色 内面：灰色	
Po145	第87図 図版49	1251	須恵器 甕または 壺	T30-6d-3G-8a	181 流路河床 礫層③	-	-	△ 6.6	外面：平行タタキ 内面：車輪状当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
Po146	第87図 図版48	1139	土師器 椀	T30-6d-4G-2e	176 流路	-	-	△ 3.9	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～にぶい橙色 内面：にぶい黄褐色～にぶい橙色	
Po147	第87図 図版50	220	弥生土器 壺	T30-6d-3F-6i	181 流路か 礫層②か	※ 27.4	-	△ 5.5	外面：摩擦により不明瞭。口縁部斜格子文後円 形浮文 内面：摩擦により不明瞭。口縁部外周に羽状文、 内周に櫛描波状文	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	第Ⅲ様式
Po148	第87図 図版65	1266	緑陶土器 皿	T30-6d-3F-7g	181 流路か 礫層②下砂層	-	6.4	△ 2.2	外面：体部回転ナデ、稜あり。底部削り出し輪状 高台、高台内露胎 内面：回転ナデ、施釉	密 良好	外面：露胎部 灰黄色 内面：施釉部 オリーブ灰色	見込部に一次焼成 時に載せられた 高台の跡が輪状に 入る。おなじく見 込部に3か所の目 跡。二次焼成時に トチン等使用せず 上に直置きした高 台の跡
Po149	第87図 図版51	1170	須恵器 坏蓋	T30-6d-4G-1a	181 流路か 礫層② or ③ 重機掘削	-	-	△ 2.1	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部ヘラケズリ後 ナデ、口縁部付近回転ナデ、天井部と体部の境に 1条の沈線 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色～黄灰色	T K 209 併行期
Po150	第87図 図版47	1286	須恵器 坏蓋	T30-6d-3F-7h	181 流路か 礫層②下砂層	※ 18.8	-	4.7	外面：体部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後回 転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色～灰色 内面：灰色	天井部内面自然釉 付着
Po151	第87図 図版51	1226	須恵器 坏身	T30-6d-3F-8f	181 流路 礫層② 重機掘削	※ 11.0	-	△ 3.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	T K 209 併行期
Po152	第87図 図版47	1290	須恵器 高台付坏	T30-6d-3F-9f	181 流路か 礫層②下砂層	※ 12.0	※ 8.6	3.8	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
Po153	第87図 図版47	106	須恵器 椀	T30-6d-3F-8e	181 流路か 礫層②下層	※ 11.7	※ 6.4	4.0	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色～灰色 内面：灰色	東播系須恵器か
Po154	第87図 図版47	1287	須恵器 椀	T30-6d-3F-7g	181 流路か 礫層②下砂層	-	※ 6.9	△ 2.8	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 やや良	外面：浅黄色～オリーブ灰色 内面：浅黄色～オリーブ灰色	篠原須恵器か
Po155	第87図 図版49	1303	須恵器 甕または 壺	T30-6d-3F-6h	181 流路か 礫層②下砂層	-	-	△ 8.9	外面：回転ナデ後平行タタキ 内面：ハケ目後同心円状の当て具痕	密 軟	外面：暗灰色 内面：暗灰色	

第9表-6 土器観察表(6)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別	グリッド	遺構層位	法量 (cm)			調整	胎土 焼成	色調	備考
						口径	底径	器高				
Po156	第87図 図版49	1177	須恵器 甕または壺	T30-6d-3F-9h	181 流路 礫層②	-	-	△ 7.6	外面：平行タタキ 内面：車輪状当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
Po157	第87図 図版50	1102	弥生土器 壺	T30-6d-3G-9e	178～180 流路 3面下砂層	※ 12.9	-	△ 5.1	外面：ヨコナデ、頸部キザミ目 内面：口縁部ヨコナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙色～にぶい 橙色 内面：にぶい黄橙色～浅黄色	第V様式か
Po158	第87図 図版47	1199	弥生土器 鉢	T30-6d-3F-7i	178～181 流路 河床 礫層③ or ⑤	-	6.0	△ 3.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：橙色～褐灰色 内面：灰黄色～黄灰色	磨減著しい
Po159	第87図 図版47	1164	弥生土器 台付鉢?	T30-6d-3G-8a	179～181 流路 3 面下シルト層	-	-	△ 4.3	外面：ヘラケズリ後ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙色～明褐灰色 内面：にぶい橙色	磨減著しい
Po160	第87図 図版47	1308	土師器 高台付坏	T30-6d-3F-6i	178～181 流路 河床 礫層③ or ⑤	-	※ 7.4	△ 2.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
Po161	第87図 図版 47・49	1308	須恵器 壺	T30-6d-3F-6i	178～181 流路 河床 礫層③ or ⑤	-	※ 10.3	△ 3.3	外面：体部回転ナデ、底部 ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	高台内ヘラ記号
Po162	第89図 図版51	317	土師器 皿	T30-6d-3G-8e	第1・2遺構 面検出中	※ 7.0	※ 5.6	1.5	外面：体部回転ナデ、底部 回転ナデ後ヘラケズリ、高台 回転ナデ、底部回転ナデ、 内面：口縁部回転ナデ後一部 縦方向ナデ、見込部ナデ後 沈線上の工具痕	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：灰黄色	
Po163	第89図 図版51	314	土師器 皿	T30-6d-3G-7d	第1・2遺構 面検出中	※ 6.6	※ 5.1	1.3	外面：体部回転ナデ、底部 回転ナデ、内面：口縁部 回転ナデ、見込部ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：灰黄色～黄褐色	
Po164	第89図 図版51	384	土師器 皿	T30-6d-4F-2h	18 流路埋土か 第1・2遺構 面検出中	※ 10.2	※ 7.4	2.2	外面：体部回転ナデ、底部 回転ナデ、指頭圧痕 内面：体部回転ナデ、見込 部ナデ・指頭圧痕	密 良好	外面：橙色～黄灰色 内面：橙色～にぶい褐色	内外面煤付着
Po165	第89図 図版53	359	土師器 皿	T30-6d-3G-8a	第1・2遺構 面検出中	-	※ 5.6	△ 1.2	外面：体部3条の沈線・ナデ、 底部回転ナデ、内面：回転 ナデ	密 良好	外面：灰黄色 内面：灰黄褐色	
Po166	第89図 図版51	422	陶器 土瓶	T30-6d-4G-3a	18 流路埋土か 第1・2遺構 面検出中	-	-	△ 2.6	外面：回転ナデ、指頭圧痕、 10条の刻み 内面：回転ナデ	密 やや良	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	肥前系陶器
Po167	第89図 図版53	297	瓦質土器 鍋	T30-6d-3G-7e	第1・2遺構 面検出中	※ 25.4	-	△ 9.2	外面：口縁部ヨコナデ、頸部 指頭圧痕 内面：ヨコナデ	密 良好	外面：黄灰色～黒色 内面：黒色	外面煤付着、内面 炭素吸着。
Po168	第89図 図版53	314	瓦質土器 鍋	T30-6d-3G-7d	第1・2遺構 面検出中	※ 24.2	-	△ 2.2	外面：口縁部回転ナデ、頸部 指頭圧痕 内面：回転ナデ	密 良好	外面：黄灰色～黒褐色 内面：黄灰色～黒色	外面煤付着
Po169	第89図 図版53	296	不明	T30-6d-3G-7d	第1・2遺構 面検出中	-	-	△ 3.7	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ後ヨコナデ、 9条の横溝文	密 良好	外面：灰黄色～黒色 内面：黒褐色	
Po170	第89図 図版53	316	土師器 搦鉢	T30-6d-3G-8d	第1・2遺構 面検出中	-	-	△ 5.3	外面：口縁部ヘラケズリ後 ヨコナデ、体部ヨコナデ 内面：ヨコナデ後5条の 釦目	密 良好	外面：黄灰色 内面：黄灰色	
Po171	第89図 図版53	304	須恵器 鉢?	T30-6d-3G-9e	第1・2遺構 面検出中	-	-	△ 6.6	外面：回転ナデ後縦方向ナデ 内面：口縁部回転ナデ・1条 の凹線、体部ヘラケズリ 後回転ナデ	密 良好	外面：灰色～黒色 内面：灰色	口縁部外面自然釉 付着
Po172	第89図 図版53	397	須恵器 甕	T30-6d-3G-9b	第1・2遺構 面検出中	※ 33.8	-	△ 3.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色～暗灰色 内面：灰色	口縁部自然釉付着
Po173	第89図 図版54	311	土鍾	T30-6d-3G-6c	第1・2遺構 面検出中	最大長 7.8	最大幅 2.6	最大厚 2.3		密 良好	外面：にぶい黄色～黒色	手づくね成形・黒 斑
Po174	第89図 図版54	298	土鍾	T30-6d-3G-8d	第1・2遺構 面検出中	最大長 6.1	最大幅 1.7	最大厚 1.5		密 良好	外面：浅黄色	手づくね成形
Po175	第89図 図版54	301	土鍾	T30-6d-3G-8e	第1・2遺構 面検出中	最大長 5.9	最大幅 1.8	最大厚 1.7		密 良好	外面：浅黄色	手づくね成形
Po176	第89図 図版54	301	土鍾	T30-6d-3G-8e	第1・2遺構 面検出中	最大長 5.5	最大幅 1.7	最大厚 1.6		密 良好	外面：にぶい黄橙色～褐 灰色	手づくね成形
Po177	第89図 図版54	314	土鍾	T30-6d-3G-7d	第1・2遺構 面検出中	最大長 4.9	最大幅 1.1	最大厚 1.1		密 やや良	外面：にぶい赤褐色	手づくね成形
Po178	第89図 図版54	312	土鍾	T30-6d-3G-7c	第1・2遺構 面検出中	最大長 4.9	最大幅 1.0	最大厚 1.0		密 良好	外面：にぶい黄褐色～橙 色	赤色塗彩
Po179	第89図 図版54	304	土鍾	T30-6d-3G-9e	第1・2遺構 面検出中	最大長 4.7	最大幅 1.1	最大厚 1.1		密 良好	外面：にぶい赤褐色	手づくね成形
Po180	第89図 図版54	314	土玉	T30-6d-3G-7d	第1・2遺構 面検出中	最大長 2.7	最大幅 2.9	最大厚 3.4		密 良好	外面：灰黄色～黒褐色	手づくね成形
Po181	第89図 図版53	400	白磁 碗	T30-6d-4G-1 f	18 流路埋土か 第1・2遺構 面検出中	※ 16.0	-	△ 2.4	外面：施釉、口縁部が外側に 突出、上部に面あり 内面：施釉、体部沈線	密 良好	外面：胎土灰白色 内面：施釉部灰白色	大宰府編年白磁碗 V類
Po182	第89図 図版51	18	白磁 碗?	T30-6d-3F-6g	第1・2遺構 面検出中	-	7.1	△ 3.2	外面：露胎、縦方向ハケ目 状の沈線 内面：施釉、見込部1条の 沈線	密 良好	外面：露胎部灰白色 内面：施釉部灰白色	削り出し輪高台
Po183	第90図 図版52	619	土師器 皿	T30-6d-3F-7f	第3遺構面 検出中	8.0	5.2	2.1	外面：体部回転ナデ、底部 回転ナデ、内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄色	
Po184	第90図 図版52	193	土師器 皿	T30-6d-4G-2f	第3遺構面 検出中	9.1	4.8	2.1	外面：体部回転ナデ、底部 回転ナデ、内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～褐 灰色 内面：にぶい黄褐色～褐 灰色	
Po185	第90図 図版52	417	土師器 皿	T30-6d-3G-7b	第3遺構面 検出中	※ 10.2	※ 5.6	2.2	外面：体部回転ナデ、底部 回転ナデ、内面：回転ナデ	密 良好	外面：橙色～黒褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po186	第90図 図版54	415	土師器 坏	T30-6d-3G-6a	第3遺構面 検出中	※ 16.6	-	△ 3.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒 色 内面：にぶい黄褐色	
Po187	第90図 図版53	392	土師器 坏	T30-6d-3G-7a	第3遺構面 検出中	-	※ 6.0	△ 3.3	外面：体部回転ナデ、底部 ナデ 内面：ヘラケズリ後回転 ナデ	密 やや良	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po188	第90図 図版53	845	土師器 高台付坏	T30-6d-3G-9b	第3遺構面 検出中	-	-	△ 1.9	外面：体部回転ナデ、底部 回転ナデ、内面：ヘラケ ズリ後回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po189	第90図 図版54	406	土師器 坏	T30-6d-3G-6b	第3遺構面 検出中	-	※ 6.3	△ 2.5	外面：体部回転ナデ、底部 回転ナデ、内面：回転ナ デ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	

第9表-7 土器観察表(7)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別	グリッド	遺構層位	法量 (cm)			調整	胎土焼成	色調	備考
						口径	底径	器高				
Po190	第90回国版52	358	土師器 坏	T30-6d-3G-7b	第3遺構面 検出中	-	※6.4	△1.7	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 やや良	外面：にぶい黄色 内面：灰黄褐色	
Po191	第90回国版54	390	土師器 坏	T30-6d-3G-6b	第3遺構面 検出中	-	5.9	△1.7	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：黒褐色 内面：橙色～黒色	
Po192	第90回国版53	358	土師器 坏	T30-6d-3G-7b	第3遺構面 検出中	-	※6.8	△1.5	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：灰黄褐色～黒色	
Po193	第90回国版52	845	土師器 柱状高台 坏	T30-6d-3G-9b	第3遺構面 検出中	-	※6.6	△2.1	外面：高台回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	
Po194	第90回国版52	381	土師器 柱状高台 坏	T30-6d-3G-7b	第3遺構面 検出中	-	※5.8	△2.2	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 やや良	外面：灰黄褐色 内面：黒褐色	
Po195	第90回国版52	868	土師器 柱状高台 坏	T30-6d-3F-7i	第3遺構面 検出中	-	※6.3	△3.1	外面：体部ヨコナデ、底部ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	高台
Po196	第90回国版54	406	土師器 甕	T30-6d-3G-6b	第3遺構面 検出中	-	-	△2.9	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ後ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：橙色	外面煤付着
Po197	第90回国版54	415	土師器 鍋	T30-6d-3G-6a	第3遺構面 検出中	-	-	△5.8	外面：口縁部横方向ハケ目後ヨコナデ、体部縦方向ハケ目 内面：口縁部横方向ハケ目後ナデ、体部横方向ハケ目	密 良好	外面：黒褐色～黒色 内面：橙色～灰灰色	外面煤付着
Po198	第90回国版53	168	土師器 鍋	T30-6d-4G-4a	第3遺構面 検出中	-	-	△4.3	外面：口縁部ヨコナデ、頸部指頭圧痕、胴部縦方向ハケ目後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部近くハケ目、胴部ヨコナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～黒色 内面：にぶい黄褐色～黒色	内外面煤付着
Po199	第90回国版53	171他	土師器 鍋	T30-6d-4G-3d	第3遺構面 検出中	※27.5	-	△15.7	外面：口縁～底部ナデ・口縁部および体部指頭圧痕 内面：口縁～胴部ナデ・指頭圧痕、頸部以下ヘラケズリ	密 良好	外面：暗黄褐色～黒褐色 内面：暗黄褐色～黒褐色	
Po200	第90回国版53	203・362	土師器 鍋	T30-6d-3G-10a	第3遺構面 検出中	※25.2	-	△6.2	外面：ヨコナデ、指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ目後ナデ	密 良好	外面：灰黄色～にぶい赤褐色 内面：灰黄色～黒褐色	
Po201	第90回国版53	183	土師器 鍋	T30-6d-4G-3d	第3遺構面 検出中	※28.6	-	△7.0	外面：口縁～胴部横方向ハケ目後ナデ 内面：口縁～胴部横方向ハケ目	密 良好	外面：にぶい黄色～黒色 内面：灰黄褐色～黒褐色	内外面煤付着
Po202	第90回国版53	875・883	土師器 鍋	T30-6d-3F-9i	第3遺構面 検出中	※20.8	-	△2.4	外面：横方向ハケ目 内面：ハケ目	密 良好	外面：にぶい橙色～褐灰色 内面：にぶい橙色～灰黄色	
Po203	第90回国版54	408	土師器 鍋	T30-6d-3G-7b	第3遺構面 検出中	※32.0	-	△6.1	外面：口縁部ヨコナデ・指頭圧痕、胴部縦方向ハケ目後横方向ハケ目 内面：ハケ目	密 良好	外面：黒褐色～黒色 内面：灰黄褐色～黒褐色	外面煤付着
Po204	第90回国版53	860	土師器 鍋	T30-6d-3G-10a	第3遺構面 検出中	※28.3	-	△10.7	外面：口縁部横方向ハケ目後ナデ、胴部縦方向ハケ目後ナデ 内面：口縁部横方向ハケ目、胴部横方向ハケ目後一部縦方向ハケ目	密 良好	外面：黒褐色～黒色 内面：にぶい黄褐色～黒褐色	外面煤付着
Po205	第90回国版53	209	陶器 搦鉢	T30-6d-3G-9d	第3遺構面 検出中	-	※13.0	△3.6	外面：ヘラケズリ後回転ナデ 内面：卸目	密 良好	外面：にぶい黄褐色～にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色～にぶい黄褐色	
Po206	第90回国版52	789	把手	T30-6d-4G-2f	第3遺構面 検出中	最大長 △6.1	-	最大厚 3.9		密 良好	外面：黒色	手づくね成形。本体にはめ込んだ境界面で剥離
Po207	第90回国版54	763	土錘	T30-6d-3F-6i	第3遺構面 検出中	最大長 △4.5	最大幅 1.1	最大厚 1.2		密 良好	外面：灰黄色	手づくね成形
Po208	第90回国版53	895	須恵器 椀	T30-6d-3F-7h	第3遺構面 検出中	※13.0	※4.9	△4.5	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切りか 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色～灰色 内面：灰白色～灰色	東播系?
Po209	第90回国版54	416	須恵器 甕	T30-6d-3G-7a	第3遺構面 検出中	※22.4	-	△2.9	外面：回転ナデ 内面：ヘラケズリ後回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	外面自然釉付着
Po210	第90回国版54	756	白磁 碗	T30-6d-3F-8i	第3遺構面 検出中	-	-	△4.2	外面：施釉、口縁部縦長の玉縁が付く 内面：施釉	密 良好	外面：胎土 白色 内面：施釉部 灰白色	大宰府福年白磁碗IV類
Po211	第90回国版54	767	白磁 碗	T30-6d-3F-8j	第3遺構面 検出中	-	-	△2.6	外面：施釉、口縁部小さい玉縁が付く 内面：施釉	密 良好	外面：胎土 灰白色 内面：施釉部 灰白色	化粧土有り。大宰府福年白磁碗IV類か
Po212	第91回国版53	55	越前焼 甕	T30-6d-3G-6c	攪乱土	※26.4	-	△4.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰赤色 内面：灰赤色～にぶい橙色	
Po213	第91回国版54	1	土玉	T30-6d-3G-8e	表土	最大長 3.0	最大幅 3.3	最大厚 3.1		密 良好	外面：灰黄色～暗灰黄色	手づくね成形
Po214	第91回国版54	6	土玉	T30-6d-3G-9c	表土	最大長 3.6	最大幅 3.4	最大厚 4.0		密 良好	外面：黒褐色～黒色灰黄褐色	手づくね成形、黒斑

第9表-8 漆器観察表

掲載番号	挿図番号	取上番号	器種	グリッド	遺構層位	法量 (cm)			調整	木取り	樹種	備考
						口径	底径	器高				
W1	第37図 図版55	605	漆器小皿	T30-6d-3F-10g	18 流路	8.35	6.2	1.35	外面：黒色塗り。ロクロ目（筋）。 内面：黒色塗り（炭粉洗下地後、透明漆。）後、赤漆全面塗布。 ロクロ目（筋）	横木取り	トチノキ	
W2	第37図 図版55	514	漆器小皿	T30-6d-4F-2g	18 流路	8.4	6.4	1.4	外面：黒色塗り。ロクロ目（筋）。 内面：黒色塗り。ロクロ目（筋）	横木取り	クリ	
W3	第37図 図版56	531	漆器椀	T30-6d-4F-2h	18 流路	-	※ 8.7	△ 3.0	外面：底面外周沿いに沈線がめぐる。黒色塗り。ロクロ目（筋）。 内面：黒色塗り。ロクロ目（筋）	横木取り	トチノキ	
W4	第37図 図版56	501	漆器椀	T30-6d-4F-2i	18 流路	-	※ 7.7	△ 2.25	外面：底面外周沿いに沈線がめぐる。黒色塗り。ロクロ目（筋）。 内面：黒色塗り。ロクロ目（筋）	横木取り	トチノキ	
W5	第37図 図版57	539	漆器椀	T30-6d-4F-1h	18 流路	-	※ 8.5	△ 1.8	外面：黒色塗り。ロクロ目（筋）。 内面：黒色塗り。ロクロ目（筋）	横木取り	トネリコ属	
W6	第37図 図版57	470	漆器椀	T30-6d-4F-2i	18 流路	-	9	△ 0.8	外面：底面外周沿いに沈線がめぐる。黒色塗り。ロクロ目（筋）。 内面：黒色塗り。ロクロ目（筋）	横木取り	クリ	
W7	第37図 図版58	460	漆器椀	T30-6d-4F-2i	18 流路	※ 15.4	-	△ 4.6	外面：黒色塗り後、口縁端部に赤漆の花弁文様。ロクロ目（筋）。 内面：黒色塗り。ロクロ目（筋）	横木取り	ケヤキ	
W8	第37図 図版58	550	漆器椀	T30-6d-4F-1h	18 流路	※ 15.3	-	△ 4.6	外面：黒色塗り後、口縁端部に赤漆の花弁文様。 内面：黒色塗り。ロクロ目（筋）	横木取り	トチノキ	
W9	第37図 図版58	468	漆器椀	T30-6d-4F-1j	18 流路	※ 15.0	-	△ 4.2	外面：ケズリによる器面調整。黒色塗り。ロクロ目（筋）。 内面：黒色塗り。ロクロ目（筋）	横木取り	トネリコ属	
W10	第37図 図版59	459	漆器椀	T30-6d-4G-2a	18 流路	-	9.5	△ 5.0	外面：ロクロ目（筋）。黒色塗り。底面外周沿いに沈線がめぐる。 ロクロ目（筋） 内面：黒色塗り。ロクロ目（筋）	横木取り	クリ	
W11	第37図 図版59	1109	漆器椀	T30-6d-3F-10h	18 流路	※ 16.4	※ 8.0	3.9	外面：底面外周沿いにわずかに沈線がめぐる。黒色塗り後、 口縁端部に赤漆の文様。ロクロ目（筋） 内面：黒色塗り後、口縁端部に赤漆の文様。ロクロ目（筋）	横木取り	トチノキ	土圧により体部が広がる
W12	第37図 図版60	618	漆器椀	T30-6d-3F-10g	18 流路	※ 14.5	※ 8.12	5.8	外面：ケズリによる器面調整。黒色塗り後、口縁端部に赤漆の文様。ロクロ目（筋）。 内面：黒色塗り。ロクロ目（筋）	横木取り	クリ	土圧により体部及び高台部変形
W13	第37図 図版60	556	漆器椀	T30-6d-4F-1h	18 流路	-	※ 8.6	△ 4.0	外面：底面外周沿いに沈線がめぐる。黒色塗り。ロクロ目（筋）。 内面：黒色塗り後、見込に赤漆による文様。ロクロ目（筋）	横木取り	トチノキ	
W28	第60図 図版61	694	漆器小皿	T30-6d-3F-10h	36 流路下層	※ 9.4	6.8	△ 1.5	外面：黒色塗り。ロクロ目（筋）。 内面：黒色塗り後、口縁端部に赤漆の文様。ロクロ目（筋）	横木取り	ケヤキ	
W29	第60図 図版63	680	漆器椀？	T30-6d-4G-2a	36 流路上層	-	8.2	△ 1.1	外面：底面外周沿いに沈線がめぐる。内側はわずかに窪む。 黒色塗り。ロクロ目（筋） 内面：黒色塗り。ロクロ目（筋）	横木取り	トチノキ	
W30	第60図 図版61	712	漆器椀	T30-6d-4F-1j	36 流路下層	-	7.4～8.2	△ 1.0	外面：黒色塗り。ロクロ目（筋）。 内面：黒色塗り後、見込に赤漆の花弁文様。ロクロ目（筋）	横木取り	トチノキ	端部に穿孔あり
W31	第60図 図版62	714	漆器椀	T30-6d-4F-1h	36 流路下層	14.5	8～8.5	5.8	外面：底面外周沿いに沈線がめぐる。黒色塗り後、口縁端部 対面に赤漆の花弁文様。ロクロ目（筋） 内面：黒色塗り後、口縁端部に赤漆の花弁文様。ロクロ目（筋）	横木取り	ケヤキ	土圧により体部変形
W32	第60図 図版62	699	漆器椀	T30-6d-3F-10g	36 流路下層	-	7.8	△ 4.4	外面：底面外周沿いに沈線がめぐる。黒色塗り後、口縁端部 に赤漆の文様。ロクロ目（筋） 内面：黒色塗り後、口縁端部に赤漆の文様。ロクロ目（筋）	横木取り	クリ	土圧により体部変形
W33	第60図 図版63	136	漆器椀	T30-6d-4F-1h	36 流路	※ 16.4	※ 9.4	5.3	外面：底面外周沿いに沈線がめぐる。黒漆後、口縁端部に赤 漆の文様。ロクロ目（筋） 内面：黒色塗り後、見込に赤漆の花弁文様。ロクロ目（筋）	横木取り	トチノキ	
W34	第60図 図版63	117	漆器椀	T30-6d-4F-1h	36 流路	※ 14.6	-	△ 4.7	外面：黒漆後、口縁端部に赤漆の文様。ロクロ目（筋）。 内面：黒色塗り。ロクロ目（筋）	横木取り	トチノキ	
W35	第60図 図版64	698	漆器椀	T30-6d-3F-10h	36 流路下層	14.7	7.9～8.4	4.4	外面：底面外周沿いに沈線がめぐる。体部対面にケズリによる 器面調整。黒色塗り後、体部対面に赤漆の文様。ロクロ目（筋） 内面：黒色塗り後、口縁端部に赤漆の文様。ロクロ目（筋）	横木取り	ケヤキ	
W36	第60図 図版64	732	漆器椀	T30-6d-3F-9f	36 流路下層	14.2	9	5.3	外面：底面外周沿いに沈線がめぐる。黒色塗り後、口縁端部 に赤漆の文様。ロクロ目（筋） 内面：黒色塗り後、口縁端部に赤漆の文様。ロクロ目（筋）	横木取り	トチノキ	土圧により体部変形
W41	第82図 図版65	962	漆器椀？	T30-6d-4F-1i	163 流路細砂層	-	8.8	△ 1.2	外面：黒色塗り。 内面：黒色塗り。ロクロ目（筋）	横木取り	トチノキ	
W42	第82図 図版65	1110	不明漆器	T30-6d-4G-2a	163 流路底面砂層	-	-	△ 3.6	外面：炭粉洗下地のみ残存。 内面：炭粉洗下地のみ残存。一部炭化か。縦方向のケズリ。	縦木取り？	クスノキ科	

第9表-9 石器観察表

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別	グリッド	遺構層位	法量 (cm)			重量 (g)	石 材	備考
						長さ	幅	厚さ			
S1	第37図 図版54	476	砥石	T30-6d-4F-3i	18 流路	10.4	4.7	2.7	145		4 側面擦面
S2	第81図 図版54	956	砥石	T30-6d-4F-1g	163 流路 腐植混じりシルト	7.4	3.6	3.0	80		4 側面擦面
S3	第81図 図版54	1029	硯	T30-6d-4G-2b	163 流路 礫混じりシルト	7.8	5.8	0.9	44		擦面中央部にかけてくぼむ両側面および裏面は砥面

第9表-10 金属器観察表

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別	グリッド	遺構層位	法量 (cm)			重量 (g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
F1	第37図 図版37	536	鉄	T30-6d-3F-1g	18 流路	13.4	2.1	0.4	19	振り鉄
F2	第89図 図版51	314	不明	T30-6d-3G-7d	第1・2 遺構面 検出中	3.4	3.2	0.5	17.0	
F3	第89図 図版51	113	銭	T30-6d-3G-9e	第1・2 遺構面 検出中	2.3	2.3	0.1		元豊通宝

第9表-11 木器観察表

掲載 番号	挿図 番号	取上 番号	種 別	グリッド	遺構 層位	法量 (cm)			形状	木取り	樹 種	備 考
						長さ	幅	厚さ				
W14	第38図 図版66	426	木簡	T30-6d-4G-3a	18 流路	9.3	2.8	0.5	板材	柃目	針葉樹	表裏面に墨書あり
W15	第38図 図版66	617	物指	T30-6d-3F-10g	18 流路 下層	4.6	2.1	0.5	板材	板目	針葉樹	
W16	第38図 図版71	499	羽子板状木製品	T30-6d-4F-2h	18 流路	11.8	2.7	0.5	板材	柃目	針葉樹	
W17	第38図 図版71	65	羽子板状木製品	T30-6d-3F-9f	18 流路 (東側溝)	28.7	5.2	0.6	板材	柃目	針葉樹	
W18	第38図 図版71	505他	羽子板状木製品	T30-6d-4F-3h	18 流路	25.2	7.3	0.8	板材	板目	針葉樹	
W19	第38図 図版71	535	羽子板状木製品	T30-6d-4F-1h	18 流路	51.3	7.0	1.5	板材	板目	針葉樹	
W20	第38図 図版66	431	柄	T30-6d-4G-2a	18 流路	14.0	2.8	2.2	丸材	芯去	針葉樹	
W21	第38図 図版70	504	用途不明指物	T30-6d-4F-1g	18 流路	10.3	7.9	1.5	板材	板目	針葉樹	
W22	第39図 図版70	576	連歯下駄	T30-6d-4F-1h	18 流路 下層	22.1	8.5	2.4	板材	板目	針葉樹	
W23	第39図 図版70	440	草鞋芯?	T30-6d-4F-1i	18 流路	17.5	9.6	2.1	板材	板目	針葉樹	かく乱水路か?
W24	第39図 図版70	782	下駄歯	T30-6d-4F-3h	18 流路	8.2	14.2	2.2	板材	柃目	針葉樹	
W25	第39図 図版66	617	不明	T30-6d-3F-10g	18 流路 下層	41.3	4.6	2.7	板材	板目	針葉樹	
W26	第39図 図版67	592	卒塔婆	T30-6d-3F-9g	18 流路 上層	112.1	2.8	1.2	板材	板目	針葉樹	齋申の可能性あり
W27	第48図 図版67	760	柱材	T30-6d-3F-9h	掘立柱建物5 (105ピット)	17.7	長軸 9.2	短軸 8.6	丸太材	芯持	針葉樹	
W37	第60図 図版71	695	羽子板状木製品	T30-6d-4F-2j	36 流路 上層	31.2	6.9	1.0	板材	板目	針葉樹	
W38	第60図 図版68	696	人形	T30-6d-4F-2h	36 流路 上層	23.1	5.1	0.5	板材	板目	針葉樹	
W39	第60図 図版67	677	刀形	T30-6d-4F-1j	36 流路 上層	25.5	2.6	0.8	板材	板目	針葉樹	
W40	第60図 図版69	673	舟形	T30-6d-4G-2a	36 流路 上層	15.5	2.4	2.0	角材	芯去	針葉樹	
W43	第82図 図版72	170	桶底板	T30-6d-4G-3a	163 流路	34.3	16.6	1.2	板材	板目	針葉樹	
W44	第82図 図版70	1045	差歯下駄	T30-6d-4G-3b	163 流路 腐植土混シルト層	24.5	6.1	2.6	板材	板目	針葉樹	上面ホゾに楔
W45	第82図 図版70	961	下駄歯	T30-6d-4F-1i	163 流路 細砂層	10.0	13.9	2.1	板材	柃目	針葉樹	
W46	第83図 図版68	1028	弓	T30-6d-4G-3a	163 流路 腐植土混シルト層	52.6	2.5	1.9	丸太材	芯持	針葉樹	
W47	第83図 図版68	1048	杭	T30-6d-4G-3b	163 流路 細砂層	66.4	4.0	3.0	丸太材	芯持	針葉樹	
W48	第83図 図版69	1027	人形	T30-6d-4F-2j	163 流路 腐植土混シルト層	58.2	9.4	0.9	板材	板目	針葉樹	
W49	第83図 図版72	1064	齋申	T30-6d-4G-2b	163 流路 礫混じりシルト層	10.4	0.7	0.7	角材	芯去	針葉樹	
W50	第83図 図版72	180	齋申	T30-6d-4G-3c	163 流路 (南側溝)	14.9	1.0	0.5	角材	芯去	針葉樹	
W51	第89図 図版72	413	齋申	T30-6d-4G-3d	第1・2遺構面 検出中	13.6	3.5	0.7	角材	芯去	針葉樹	
W52	第89図 図版72	425	底板?	T30-6d-4G-3a	第1・2遺構面 検出中	19.2	4.2	0.9	板材	柃目	針葉樹	
W53	第89図 図版72	643	底板?	T30-6d-3F-6h	第1・2遺構面 検出中	8.2	3.3	0.5	板材	板目	針葉樹	
W54	第91図 図版72	575	不明木製品	T30-6d-3F-9f	攪乱(水路?)	13.6	3.5	0.7	板材	板目	針葉樹	
W55	第91図 図版69	294	木簡	T30-6d-4F-1g	溝状攪乱	20.7	2.7	0.7	板材	柃目	針葉樹	表裏面に墨書あり
W56	第91図 図版72	575	不明木製品	T30-6d-3F-9f	攪乱(水路?)	38.6	3.4	1.1	板材	板目	針葉樹	

第5章 自然科学分析

第1節 下坂本清合遺跡出土漆器の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

はじめに

河内川左岸に位置する下坂本清合遺跡の流路から出土した漆器の樹種同定を行なった。なお、同一試料を用いて塗膜分析も行なわれている（次節参照）。

(1) 試料と方法

試料は、18流路から13点、36流路から9点、163流路から2点の、計24点の出土漆器である。発掘調査所見では、これらの漆器は36流路の機能した11世紀後半～12世紀代の時期のものと考えられている。全ての試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

生材の樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柀目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

(2) 結果

同定の結果、広葉樹のクリとケヤキ、クスノキ科、トチノキ、トネリコ属の5分類群がみられた。トチノキが最も多く12点で、クリが5点、ケヤキが4点、トネリコ属が2点、

第10表 下坂本清合遺跡出土漆器の器種別樹種同定結果

樹種	漆器椀		漆器小皿		漆器皿?		不明漆器	合計
	器種 文様	あり なし	あり なし	あり なし	あり なし	あり なし		
クリ		1	2		1	1		5
ケヤキ		3			1			4
クスノキ科							1	1
トチノキ		6	2	2	1	1		12
トネリコ属			2					2
合計		10	6	2	3	1	1	24

クスノキ科が1点であった。木取りについては、不明漆器（クスノキ科）が縦木取り?である以外は、いずれの試料も横木取りであった。第10表に器種別の同定結果を、第11表に同定結果一覧を示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 第92図 1a-1c (W10)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列である。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 第92図 2a-2c (W31)

年輪のはじめに大型の道管が1列並び、晩材部では径を急に減じた道管が多数複合して接線状または斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が方形となる異性で、幅1～5列となる。

放射組織の上下端には、まれに結晶がみられる。

ケヤキは温帯から暖帯にかけての肥沃な谷間などに好んで生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬いが、切削などの加工はそれほど困難ではない。

クスノキ科 Lauraceae 第92図 3a-3c (W42)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は10段程度の階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、1～3列となる。また木部繊維内には、油細胞がまれにみられる。

クスノキ科にはニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属などがあり、暖帯を中心に分布する、主に常緑性の高木または低木である。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 第92図 4a-4c (W34)、5b (W8)

小型の道管が単独ないし2～3個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で単列である。また、放射組織は層階状に配列する。

トチノキの分布の北限は北海道南部で、九州まで広く分布するが、東北に多くみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや軽軟で、切削加工は極めて容易である。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 第92図 6a-6c (W5)

年輪のはじめに大型の道管が並び、晩材部では径を急に減じた道管が単独または2～3個複合して散在する散孔材であるが、試料では大型の道管の配列する様子が確認できず、シオジ節かトネリコ節かの判断ができなかった。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で1～2列となる。

トネリコ属にはトネリコ節とシオジ節があり、いずれも日本各地の温帯の山地などの湿潤地に分布する、落葉高木から小高木の広葉樹である。

(3) 考察

今回の漆器碗では、トチノキが最も多く8点で、クリとケヤキが各3点、トネリコ属が2点であった。いずれも木取りは、横木取りである。漆器碗について文様の有無と樹種の間接関係をみると、トチノキは文様ありが6点、文様なしが2点であった。またケヤキは3試料全てに文様がみられ、クリは文様ありが1点、文様なしが2点であった。なお、漆器碗?の2点はいずれも横木取りのトチノキで、文様はみられなかった。

漆器小皿もいずれも横木取りで、クリとケヤキ、トチノキが各1点みられた。文様の有無と樹種の間接関係では、文様はいずれの樹種でもみられなかった。また全て横木取りである漆器皿?では、クリとトチノキが各1点みられ、トチノキでは文様が確認できたが、クリでは文様は確認できなかった。不明漆器は縦木取りの可能性のあるクスノキ科で、文様は確認できなかった。

クリとケヤキ、トチノキ、トネリコ属は、現在でも木地としての利用が多い。なかでもクリとケヤキ、トネリコ属は堅硬で耐朽性が高いが、トチノキは軽軟で保存性が悪いという材質を持つ。また、ケヤキは加工性が良くて木理の狂いが少ないため良材であるとされるが、クリとトネリコ属は加工性が比較的悪く、トチノキは加工性が良いが保存性が悪くて木理の狂いが大きい(伊東ほか, 2011)、という点で、材質的にはケヤキよりも劣っていると考えられる。

山陰地方では、鎌倉時代より挽物碗が多く出土するようになり、有力者層が居住する遺跡とその他の遺跡とでは容器の樹種が異なっていた可能性が指摘されている(中川, 2012)。下坂本清合遺跡で

は漆器類の使用者層と樹種との関係は確認できず、器種毎の樹種選択傾向も明確には確認できなかった。一方、文様の有無と樹種の関係では、ケヤキは文様ありが多く、クリヤトネリコ属は文様なしが多いなど、一部の樹種に、文様がある漆器とない漆器で偏りがみられた。文様部分が遺存していないだけという可能性もあり、注意が必要ではあるが、ケヤキの漆器については文様が描かれている器種が多いことから、良材であるケヤキの漆器が他と異なる扱いであった可能性が考えられる。

【参考文献】

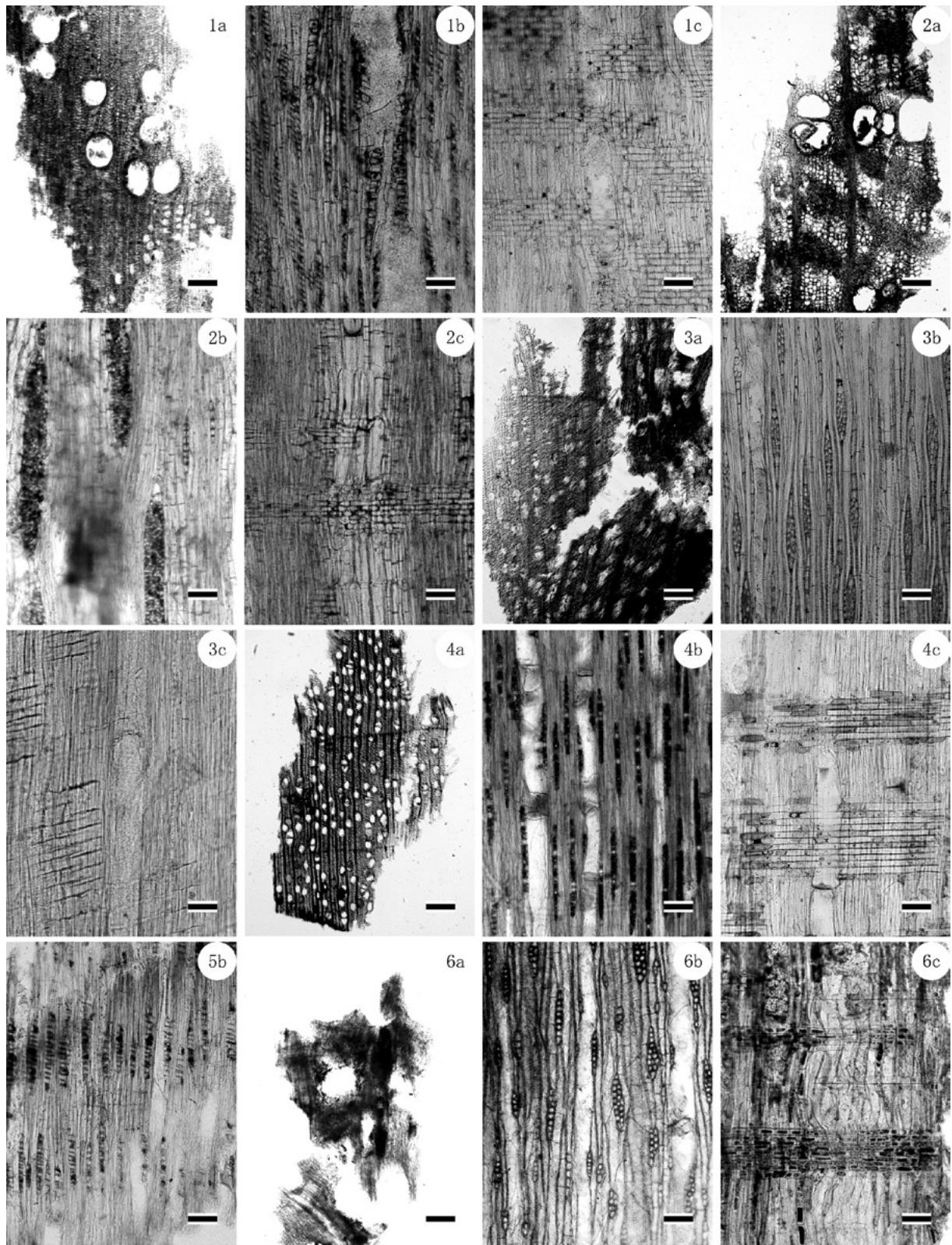
平井信二（1996）木の大本科－解説編－. 642p, 朝倉書房.

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌, 238p, 海青社.

中川 寧（2012）中国（2）－鳥取県・島根県－. 伊東隆夫・山田昌久編「木の考古学」: 291-295, 海青社.

第 11 表 下坂本清合遺跡出土漆器の樹種同定結果一覧

遺物 No.	出土遺構	器種	樹種	木取り	備考	時期
W1	18 流路	漆器小皿	トチノキ	横木取り	外面黒色 内面赤色	11 世紀後半 ～ 12 世紀
W2	18 流路	漆器小皿	クリ	横木取り	内外面黒色	
W3	18 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色	
W4	18 流路	漆器椀?	トチノキ	横木取り	内外面黒色	
W5	18 流路	漆器椀	トネリコ属	横木取り	内外面黒色	
W6	18 流路	漆器皿?	クリ	横木取り	内外面黒色	
W7	18 流路	漆器椀	ケヤキ	横木取り	内外面黒色 外面赤彩文様	
W8	18 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色 外面赤彩文様	
W9	18 流路	漆器椀	トネリコ属	横木取り	内外面黒色	
W10	18 流路	漆器椀	クリ	横木取り	内外面黒色	
W11	18 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色 外面赤彩文様	
W12	18 流路	漆器椀	クリ	横木取り	内外面黒色	
W13	18 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色 内面赤彩文様	
W28	36 流路	漆器小皿	ケヤキ	横木取り	内外面黒色	
W29	36 流路	漆器椀?	トチノキ	横木取り	内外面黒色	
W30	36 流路	漆器皿?	トチノキ	横木取り	内外面黒色 内面赤彩文様	
W31	36 流路	漆器椀	ケヤキ	横木取り	内外面黒色 内面赤彩文様	
W32	36 流路	漆器椀	クリ	横木取り	内外面黒色 外面赤彩文様	
W33	36 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色 外面赤彩文様	
W34	36 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色 外面赤彩文様	
W35	36 流路	漆器椀	ケヤキ	横木取り	内外面黒色 内外面赤彩文様	
W36	36 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色 内外面赤彩文様	
W41	163 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色	
W42	163 流路	不明漆器	クスノキ科	縦木取り?	外面黒色	



第 92 図 下坂本清合遺跡出土漆器の光学顕微鏡写真

1a-1c. クリ (W10)、2a-2c. ケヤキ (W31)、3a-3c. クスノキ科 (W42)、4a-4c. トチノキ (W34)、
5b. トチノキ (W8)、6a-6c. トネリコ属 (W5) a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=1、2、5、6:100 μm 、3:50 μm)

第2節 下坂本清合遺跡出土漆器の塗膜分析

竹原弘展・藤根 久・米田恭子・小林克也（パレオ・ラボ）

はじめに

下坂本清合遺跡より出土した漆器について、塗膜薄片を作製し、塗膜構造と材料について検討した。

(1) 試料と方法

分析対象は、流路より出土した11世紀後半～12世紀の漆器椀24点である（第12表）。塗膜片を少量採取し、分析試料とした。なお、分析にあたって、小林・藤根が試料採取、藤根が赤外分光分析、米田・竹原が薄片作製、竹原が顕微鏡観察・X線分析を行い、竹原がまとめた。また、椀本体の樹種および木取りについての詳細は、前節を参照されたい。

第12表 塗膜分析対象一覧

分析No.	遺物No.	出土遺構	器種	樹種	木取り	特徴	塗膜分析面
1	W10	18 流路	漆器椀	クリ	横木取り	内外面黒色	内面
2	W7	18 流路	漆器椀	ケヤキ	横木取り	内外面黒色 外面赤彩文様	外面
3	W9	18 流路	漆器椀	トネリコ属	横木取り	内外面黒色	外面
4	W6	18 流路	漆器皿?	クリ	横木取り	内外面黒色	内面
5	W4	18 流路	漆器椀?	トチノキ	横木取り	内外面黒色	外面
6	W3	18 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色	内面
7	W5	18 流路	漆器椀	トネリコ属	横木取り	内外面黒色	内面
8	W8	18 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色 外面赤彩文様	外面
9	W13	18 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色 内面赤彩文様	内面
10	W1	18 流路	漆器小皿	トチノキ	横木取り	外面黒色 内面赤色	内面
11	W12	18 流路	漆器椀	クリ	横木取り	内外面黒色	内面
12	W11	18 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色 外面赤彩文様	外面
13	W34	36 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色 外面赤彩文様	外面
14	W33	36 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色 外面赤彩文様	外面
15	W2	18 流路	漆器小皿	クリ	横木取り	内外面黒色	内面
16	W29	36 流路	漆器椀?	トチノキ	横木取り	内外面黒色	内面
17	W28	36 流路	漆器小皿	ケヤキ	横木取り	内外面黒色 内面赤彩文様	内面
18	W35	36 流路	漆器椀	ケヤキ	横木取り	内外面黒色 内外面赤彩文様	外面
19	W32	36 流路	漆器椀	クリ	横木取り	内外面黒色 外面赤彩文様	外面
20	W30	36 流路	漆器皿?	トチノキ	横木取り	内外面黒色 内面赤彩文様	内面
21	W31	36 流路	漆器椀	ケヤキ	横木取り	内外面黒色 内面赤彩文様	内面
22	W36	36 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色 内外面赤彩文様	両面
23	W41	163 流路	漆器椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色	外面
24	W42	163 流路	不明漆器	クスノキ科	縦木取り?	外面黒色	外面

分析は、表面の漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察、およびX線分析を行った。

赤外分光分析は、手術用メスを用いて塗膜の表面部分から一部削り取った試料を、押し潰して厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加压整形し、測定試料とした。分析装置は日本分光(株)製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計FT/IR-410、IRT-30-16を使用し、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム

(#1000) を用いて厚さ約 50 μm 前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-5900LV）による反射電子像観察を行った。さらに、主に赤色塗膜層を対象として、電子顕微鏡に付属するエネルギー分散型 X 線分析装置（同 JED-2200）による定性・簡易定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム（#1000）を用いて厚さ約 20 μm 前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

(2) 結果および考察

以下に、塗膜分析結果について述べる。なお、第 93、94 図の赤外吸収スペクトルは、縦軸は透過率 (%R)、横軸が波数 (Wavenumber (cm⁻¹); カイザー) である。吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す (第 13 表)。各塗膜の特徴は第 15 表にまとめた。

[分析 No.1 (W10 椀内面黒色塗膜)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c 層が観察された (第 95 図-1a、1b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められ、漆と同定された (第 93 図-1)。

[分析 No.2 (W 7 椀外面黒色塗膜 + 赤文様)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c1 層、および文様部の赤色漆層 c2 層が観察された (第 95- 図 2a、2b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められ、漆と同定された (第 93 図-2)。赤色漆層 c2 層からは、X 線分析で水銀 (HgO)、硫黄 (SO₃) が検出され (第 14 表)、水銀朱の使用が確認された。

[分析 No.3 (W 9 椀外面黒色塗膜)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c 層が観察された (第 95 図-3a、3b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7, No.8) が認められ、漆と同定された (第 93 図-3)。

[分析 No.4 (W 6 皿? 内面黒色塗膜)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c 層が観察された (第 95 図-4a、4b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められ、漆と同定された (第 93 図-4)。

[分析 No.5 (W 4 椀? 外面黒色塗膜)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c 層が観察された (第 96 図-1a、1b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収 (吸収 No.6 ~ No.8) は認められなかったが、炭化水素の吸収 (吸収 No.1, No.2) が認められ、漆と考えられる (第 93 図-5)。

[分析 No.6 (W 3 椀内面黒色塗膜)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層が観察された (第 96 図-2a、2b)。なお、塗膜薄片の採取試料には漆層が残っていなかったものの、赤外分光分析の採取試料からは生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められており、漆が検出された (第 93 図-6)。

第 13 表 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収 No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.534	
2	2854.13	36.217	
3	1710.55	42.035	
4	1633.41	48.833	
5	1454.06	47.195	
6	1351.86	50.803	ウルシオール
7	1270.86	46.334	ウルシオール
8	1218.79	47.536	ウルシオール
9	1087.66	53.843	
10	727.03	75.389	

[分析 No.7 (W 5 椀内面黒色塗膜)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c 層が観察された (第 96 図 -3a、3b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められ、漆と同定された (第 93 図 -7)。

[分析 No.8 (W 8 椀外面黒色塗膜 + 赤文様)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c1 層、および文様部の赤色漆層 c2 層が観察された (第 96 図 -4a、4b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7、No.8) が認められ、漆と同定された (第 93 図 -8)。赤色漆層 c2 層からは、X 線分析で水銀 (HgO)、硫黄 (SO₃) が検出され (第 14 表)、水銀朱の使用が確認された。

[分析 No.9 (W13 椀内面黒色塗膜 + 赤文様)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c1 層、および文様部の赤色漆層 c2 層が観察された (第 97 図 -1a、1b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7、No.8) が認められ、漆と同定された (第 93 図 -9)。赤色漆層 c2 層からは、X 線分析で水銀 (HgO)、硫黄 (SO₃) が検出され (第 14 表)、水銀朱の使用が確認された。

[分析 No.10 (W 1 小皿内面赤色塗膜)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c1 層、赤色漆層 c2 層が観察された (第 97 図 -2a、2b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められ、漆と同定された (第 93 図 -10)。赤色漆層 c2 層からは、X 線分析で水銀 (HgO)、硫黄 (SO₃) が検出され (第 14 表)、水銀朱の使用が確認された。

[分析 No.11 (W12 椀内面黒色塗膜)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b 層、透明漆層 c 層が観察された (第 97 図 -3a、3b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収 (吸収 No.6 ~ No.8) が認められ、漆と同定された (第 93 図 -11)。

[分析 No.12 (W11 椀外面黒色塗膜 + 赤文様)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c1 層、および文様部の赤色漆層 c2 層が観察された (第 97 図 -4a、4b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7、No.8) が認められ、漆と同定された (第 93 図 -12)。赤色漆層 c2 層からは、X 線分析で水銀 (HgO)、硫黄 (SO₃) が検出され (第 14 表)、水銀朱の使用が確認された。

[分析 No.13 (W34 椀外面黒色塗膜 + 赤文様)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c1 層、および文様部の赤色漆層 c2 層が観察された (第 98 図 -1a、1b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収 (吸収 No.6 ~ No.8) が認められ、漆と同定された (第 94 図 -1)。赤色漆層 c2 層からは、X 線分析で水銀 (HgO)、硫黄 (SO₃) が検出され (第 14 表)、水銀朱の使用が確認された。

[分析 No.14 (W33 椀外面黒色塗膜)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c 層が観察された (第 98 図 -2a、2b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められ、漆と同定された (第 94 図 -2)。

[分析 No.15 (W 2小皿内面黒色塗膜)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c 層が観察された (第 98 図 -3a、3b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められ、漆と同定された (第 94 図 -2)。

[分析 No.16 (W29 椀? 内面黒色塗膜)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c 層が観察された (第 98 図 -4a、4b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められ、漆と同定された (第 94 図 -4)。

[分析 No.17 (W28 小皿内面黒色塗膜)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c 層が観察された (第 99 図 -1a、1b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められ、漆と同定された (第 94 図 -5)。

[分析 No.18 (W35 椀外面黒色塗膜 + 赤文様)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c1 層、および文様部の赤色漆層 c2 層が観察された (第 99 図 -2a、2b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収 (吸収 No.6 ~ No.8) は認められなかったが、炭化水素の吸収 (吸収 No.1、No.2) が認められ、漆と考えられる (第 94 図 -6)。赤色漆層 c2 層からは、X 線分析で水銀 (HgO)、硫黄 (SO₃) が検出され (第 14 表)、水銀朱の使用が確認された。

[分析 No.19 (W32 椀外面黒色塗膜 + 赤文様)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c1 層、および文様部の赤色漆層 c2 層が観察された (第 99 図 -3a、3b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7、No.8) が認められ、漆と同定された (第 94 図 -7)。赤色漆層 c2 層からは、X 線分析で水銀 (HgO)、硫黄 (SO₃) が検出され (第 14 表)、水銀朱の使用が確認された。

[分析 No.20 (W30 皿? 内面黒色塗膜 + 赤文様)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c1 層、および文様部の赤色漆層 c2 層が観察された (第 99 図 -4a、4b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められ、漆と同定された (第 94 図 -8)。赤色漆層 c2 層からは、X 線分析で水銀 (HgO)、硫黄 (SO₃) が検出され (第 14 表)、水銀朱の使用が確認された。

[分析 No.21 (W31 椀内面黒色塗膜 + 赤文様)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c1 層、および文様部の赤色漆層 c2 層が観察された (第 100 図 -1a、1b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められ、漆と同定された (第 94 図 -9)。赤色漆層 c2 層からは、X 線分析で水銀 (HgO)、硫黄 (SO₃) が検出され (第 14 表)、水銀朱の使用が確認された。

第 14 表 赤色塗膜層の X 線分析結果 (mass%)

分析 No.	塗膜層	C	Na ₂ O	SiO ₂	SO ₃	Fe ₂ O ₃	HgO
2	c2 層	62.97	—	3.08	7.81	3.85	22.28
8	c2 層	78.80	—	2.12	6.53	—	12.55
9	c2 層	56.09	—	3.31	11.15	—	29.44
10	c2 層	59.46	—	1.71	10.31	11.15	17.37
12	c2 層	69.40	—	8.15	7.08	4.60	10.77
13	c2 層	71.48	—	1.88	7.55	—	19.10
18	c2 層	57.34	3.39	2.17	10.47	7.57	19.06
19	c2 層	61.94	—	1.13	10.29	—	26.64
20	c2 層	62.63	—	1.43	13.26	—	22.68
21	c2 層	57.13	—	8.55	7.51	3.64	23.17
22	外面 c2 層	60.89	—	1.09	13.45	—	24.57

[分析 No.22 (W36 椀外面黒色塗膜 + 赤文様、内面黒色塗膜)]

外面の塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c1 層、および文様部の赤色漆層 c2 層が観察された (第 100 図 -2a、2b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められ、漆と同定された (第 94 図 -10)。赤色漆層 c2 層からは、X 線分析で水銀 (HgO)、硫黄 (SO₃) が検出され (第 14 表)、水銀朱の使用が確認された。

内面の塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c 層が観察された (第 100 図 -3a、3b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められ、漆と同定された (第 94 図 -10)。

[分析 No.23 (W41 椀外面黒色塗膜)]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c 層が観察された (第 100 図 -4a、4b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収 (吸収 No.6 ~ No.8) は認められなかったが、炭化水素の吸収 (吸収 No.1、No.2) が認められ、漆と考えられる (第 94 図 -11)。

[分析 No.24 (W42 器種不明外面黒色塗膜)]

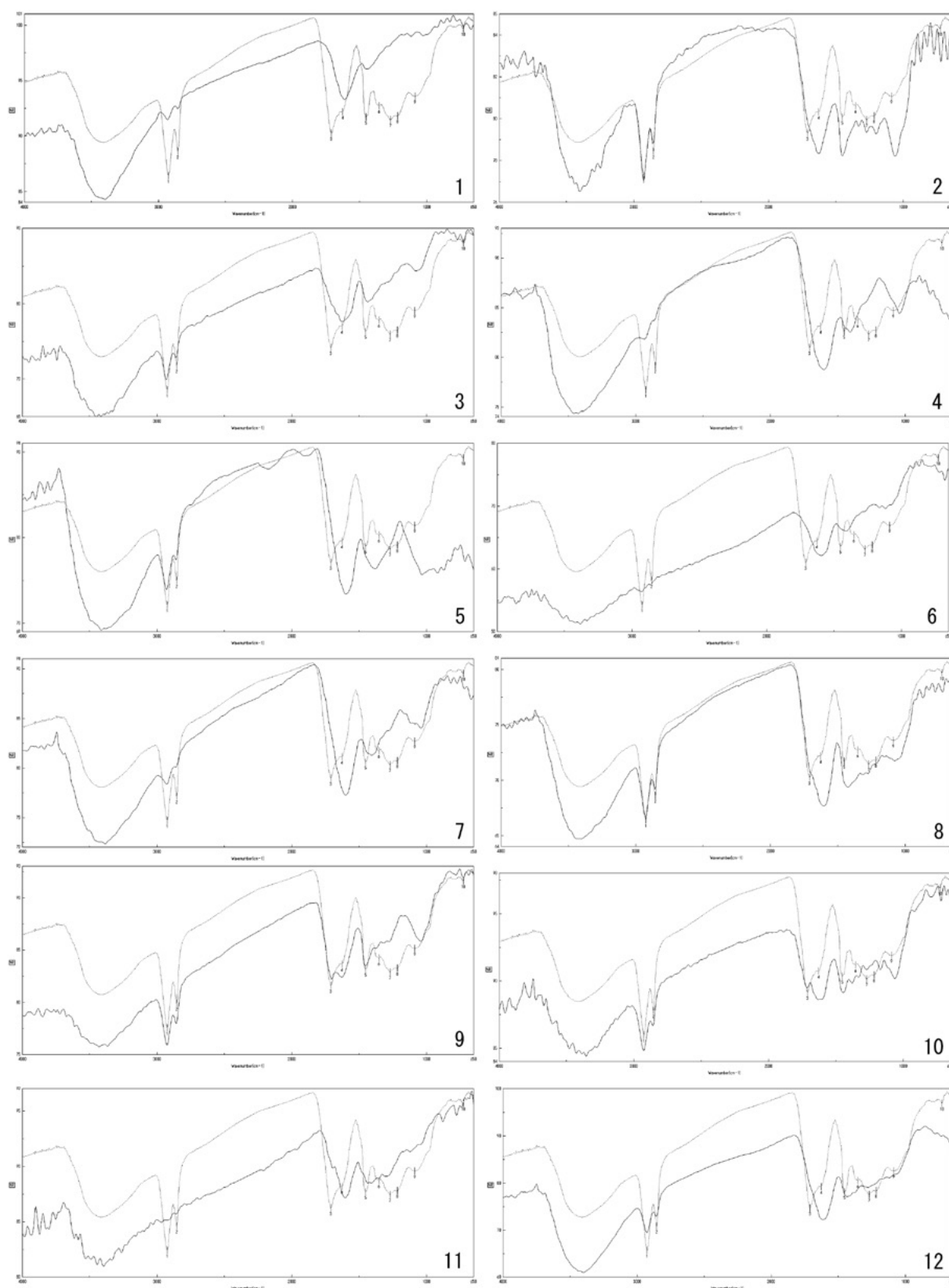
塗膜薄片では、木胎 a 層と、わずかながら炭粉らしき下地 b? 層が観察されるのみであった (第 101 図 -1a、1b)。塗膜薄片の採取試料からは漆層が検出できなかったものの、赤外分光分析の採取試料には生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収 (吸収 No.7) が認められ、漆が検出できたことから (第 94 図 -12)、漆塗膜は存在したと考えられる。

(3) おわりに

下坂本清合遺跡の流路から出土した 11 世紀後半 ~ 12 世紀の漆器について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、分析 No.24 (W42) は下地の炭粉らしき層が観察されるのみであったが、分析 No.24 以外はいずれも炭粉渋下地が観察され、その上に透明漆層が 1 層塗られる構造と考えられた。さらに、赤色部分は透明漆層の上に水銀朱を用いた赤色漆層が 1 層塗られていた。

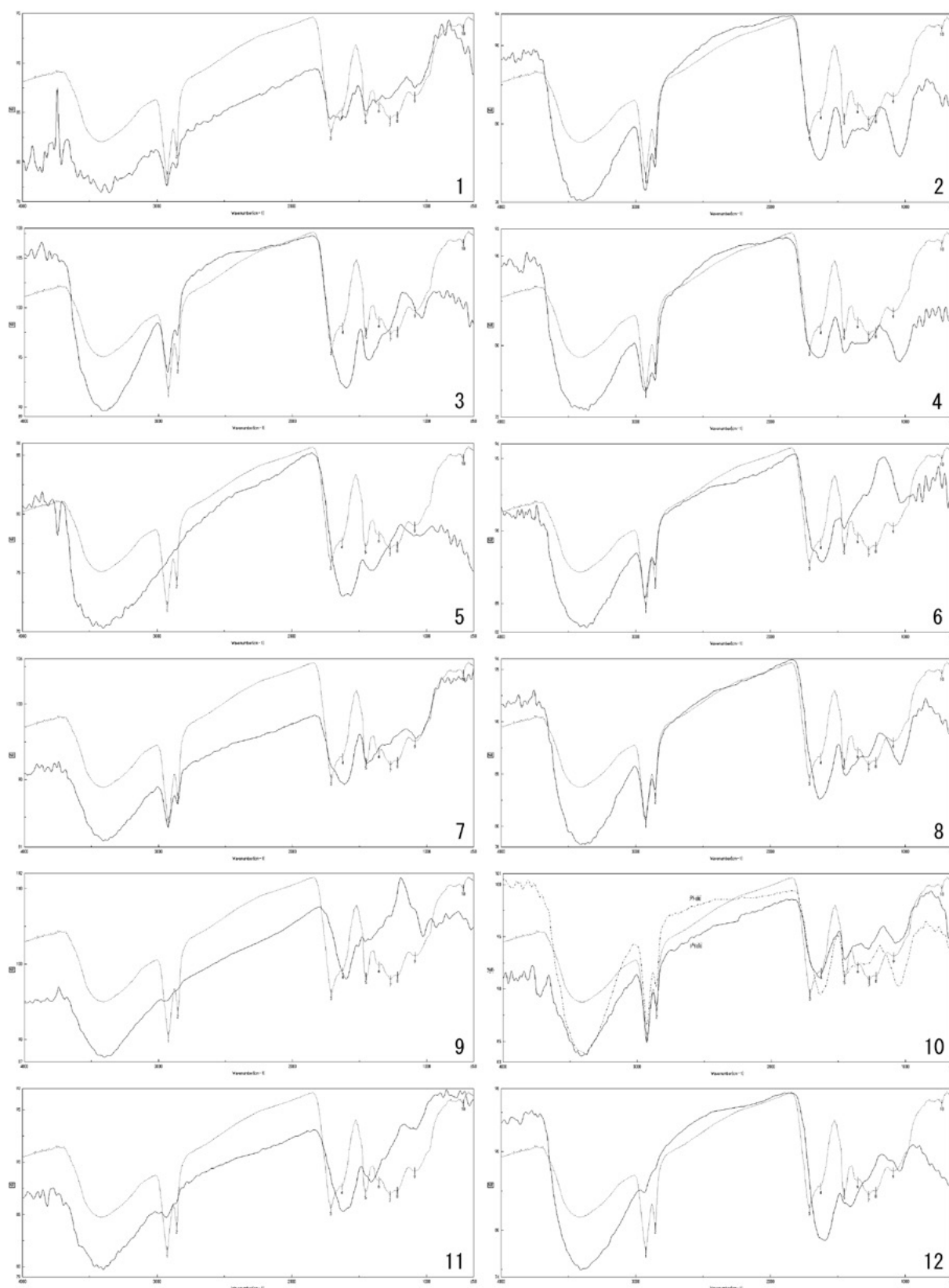
第 15 表 塗膜分析結果

分析 No.	遺物 No.	採取塗膜	下地	塗膜層	
1	W10	内面黒色塗膜	炭粉渋下地	1 層	透明漆層
2	W7	外面黒色塗膜 + 赤文様	炭粉渋下地	2 層	透明漆層、赤色漆層 (水銀朱)
3	W9	外面黒色塗膜	炭粉渋下地	1 層	透明漆層
4	W6	内面黒色塗膜	炭粉渋下地	1 層	透明漆層
5	W4	外面黒色塗膜	炭粉渋下地	1 層	透明漆層
6	W3	内面黒色塗膜	炭粉渋下地		
7	W5	内面黒色塗膜	炭粉渋下地	1 層	透明漆層
8	W8	外面黒色塗膜 + 赤文様	炭粉渋下地	2 層	透明漆層、赤色漆層 (水銀朱)
9	W13	内面黒色塗膜 + 赤文様	炭粉渋下地	2 層	透明漆層、赤色漆層 (水銀朱)
10	W 1	内面赤色塗膜	炭粉渋下地	2 層	透明漆層、赤色漆層 (水銀朱)
11	W12	内面黒色塗膜	炭粉渋下地	1 層	透明漆層
12	W11	外面黒色塗膜 + 赤文様	炭粉渋下地	2 層	透明漆層、赤色漆層 (水銀朱)
13	W34	外面黒色塗膜 + 赤文様	炭粉渋下地	2 層	透明漆層、赤色漆層 (水銀朱)
14	W33	外面黒色塗膜	炭粉渋下地	1 層	透明漆層
15	W2	内面黒色塗膜	炭粉渋下地	1 層	透明漆層
16	W29	内面黒色塗膜	炭粉渋下地	1 層	透明漆層
17	W28	内面黒色塗膜	炭粉渋下地	1 層	透明漆層
18	W35	外面黒色塗膜 + 赤文様	炭粉渋下地	2 層	透明漆層、赤色漆層 (水銀朱)
19	W32	外面黒色塗膜 + 赤文様	炭粉渋下地	2 層	透明漆層、赤色漆層 (水銀朱)
20	W30	内面黒色塗膜 + 赤文様	炭粉渋下地	2 層	透明漆層、赤色漆層 (水銀朱)
21	W31	内面黒色塗膜 + 赤文様	炭粉渋下地	2 層	透明漆層、赤色漆層 (水銀朱)
22	W36	外面黒色塗膜 + 赤文様	炭粉渋下地	2 層	透明漆層、赤色漆層 (水銀朱)
		内面黒色塗膜	炭粉渋下地	1 層	透明漆層
23	W41	外面黒色塗膜	炭粉渋下地	1 層	透明漆層
24	W42	外面黒色塗膜	炭粉?		



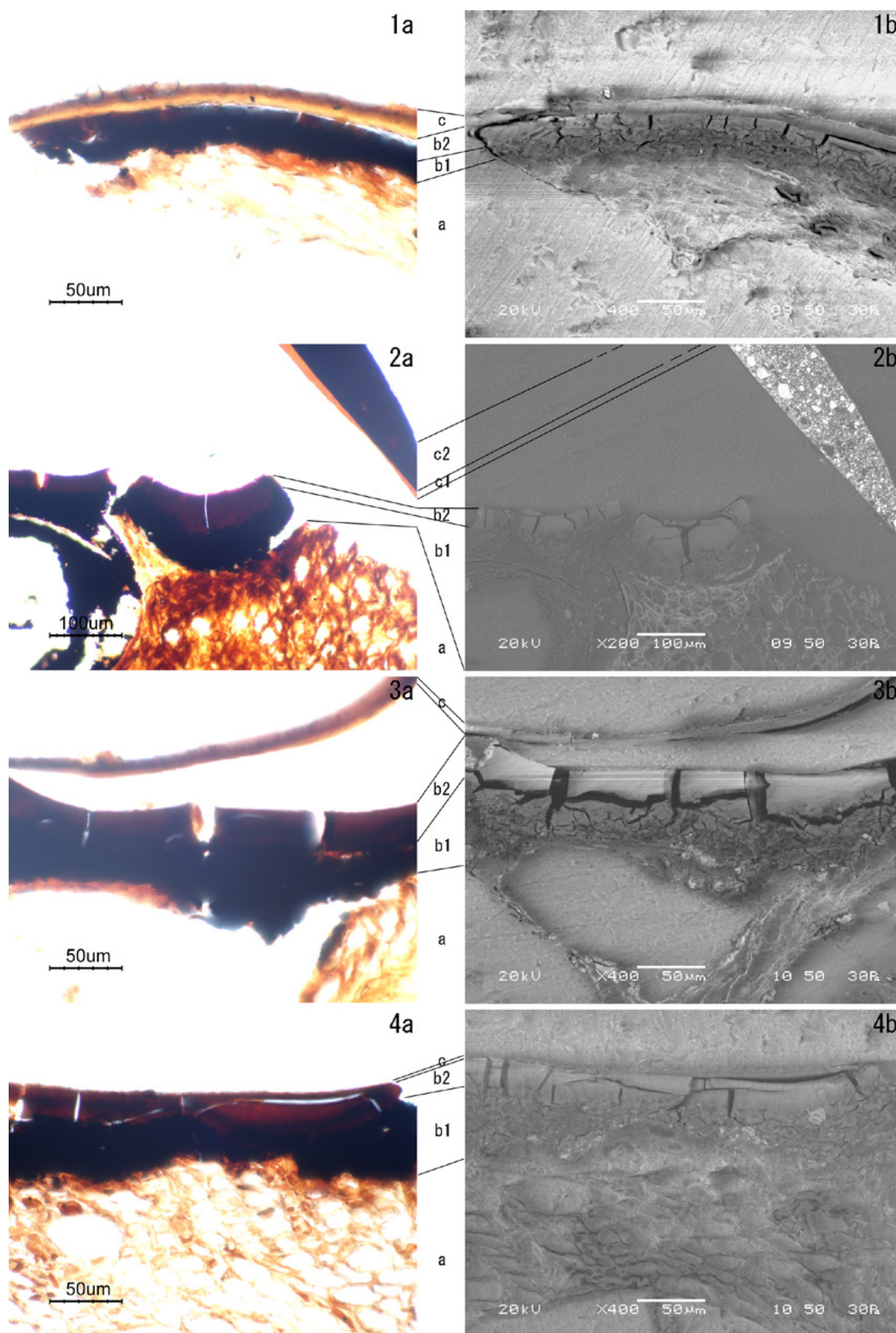
第93図 漆器塗膜の赤外分光スペクトル（1）（実線：塗膜、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置）

- | | | | |
|-------------|---------------|---------------|---------------|
| 1. 分析 No. 1 | 2. 分析 No. 2 | 3. 分析 No. 3 | 4. 分析 No. 4 |
| 5. 分析 No. 5 | 6. 分析 No. 6 | 7. 分析 No. 7 | 8. 分析 No. 8 |
| 9. 分析 No. 9 | 10. 分析 No. 10 | 11. 分析 No. 11 | 12. 分析 No. 12 |



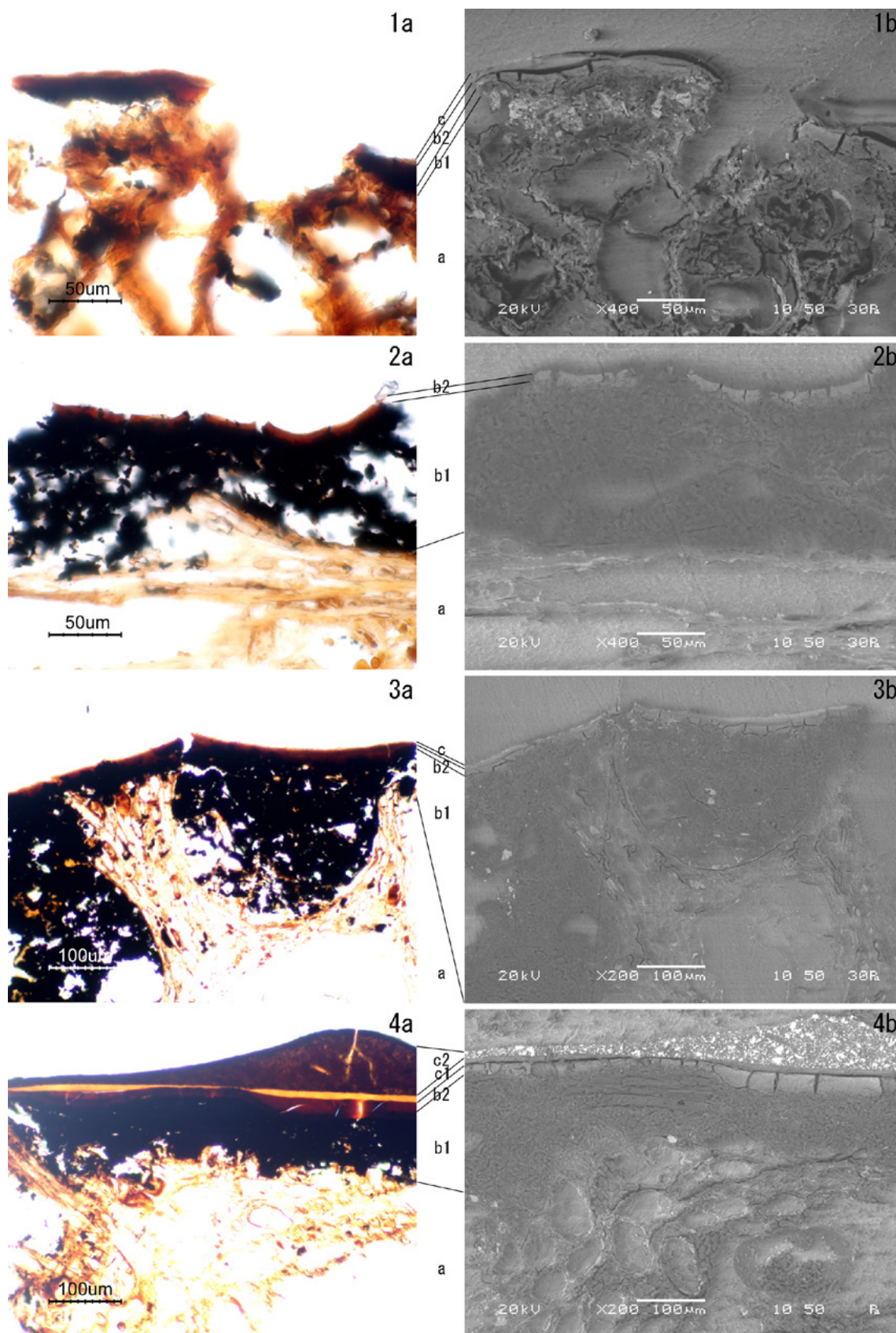
第94図 漆器塗膜の赤外分光スペクトル(2) (実線：塗膜、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置)

- | | | | |
|--------------|---------------|---------------|---------------|
| 1. 分析 No. 13 | 2. 分析 No. 14 | 3. 分析 No. 15 | 4. 分析 No. 16 |
| 5. 分析 No. 17 | 6. 分析 No. 18 | 7. 分析 No. 19 | 8. 分析 No. 20 |
| 9. 分析 No. 21 | 10. 分析 No. 22 | 11. 分析 No. 23 | 12. 分析 No. 24 |



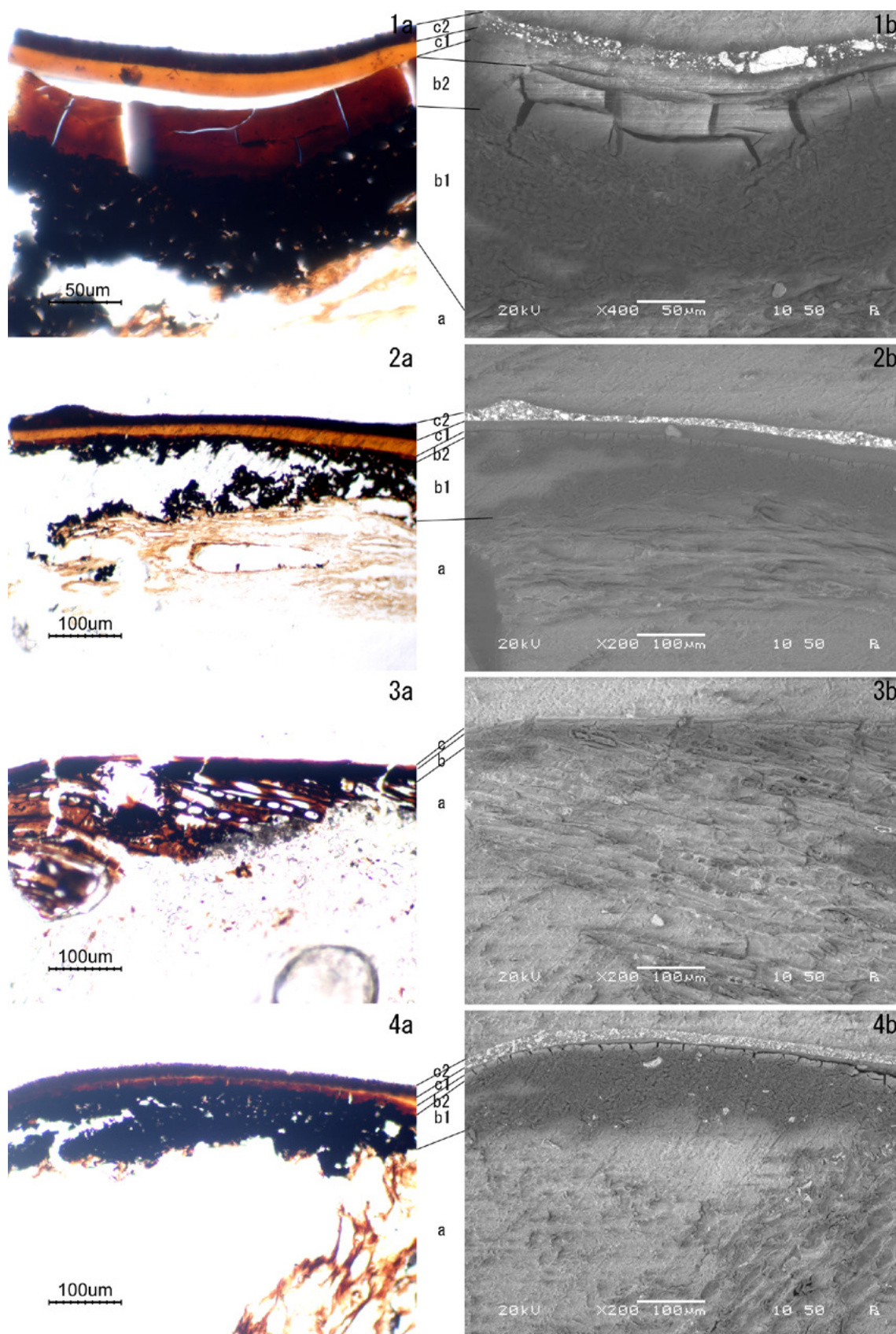
第95図 漆製品の塗膜構造 (a) と反射電子像 (b) (1)

- | | |
|---------------------|-------------------------|
| 1. 分析 No. 1 椀内面黒色塗膜 | 2. 分析 No. 2 椀外面黒色塗膜+赤文様 |
| 3. 分析 No. 3 椀外面黒色塗膜 | 4. 分析 No. 4 皿?内面黒色塗膜 |



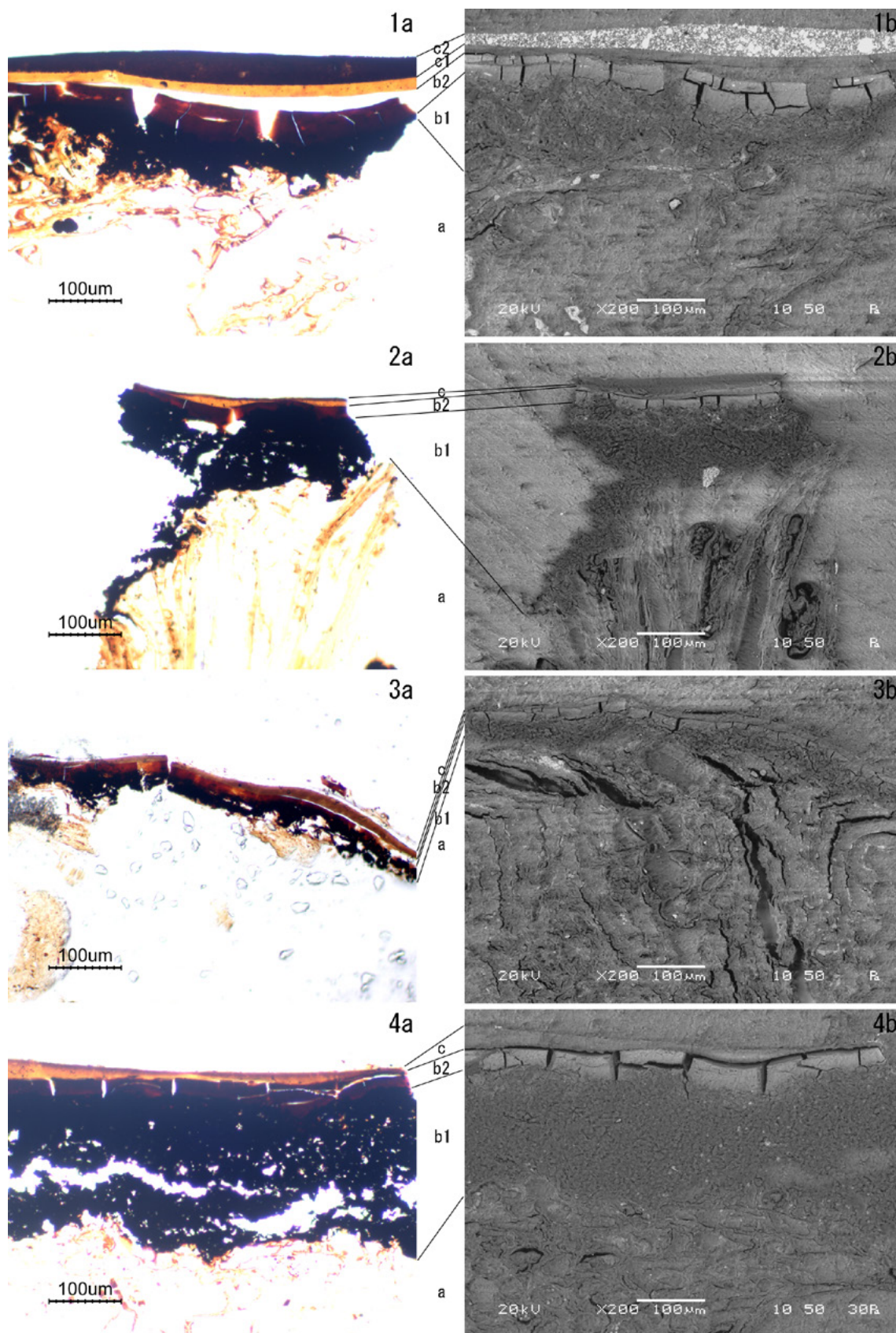
第 96 図 漆製品の塗膜構造 (a) と反射電子像 (b) (2)

- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| 1. 分析 No. 5 椀? 外面黒色塗膜 | 2. 分析 No. 6 椀内面黒色塗膜 |
| 3. 分析 No. 7 椀内面黒色塗膜 | 4. 分析 No. 8 椀外面黒色塗膜 + 赤文様 |



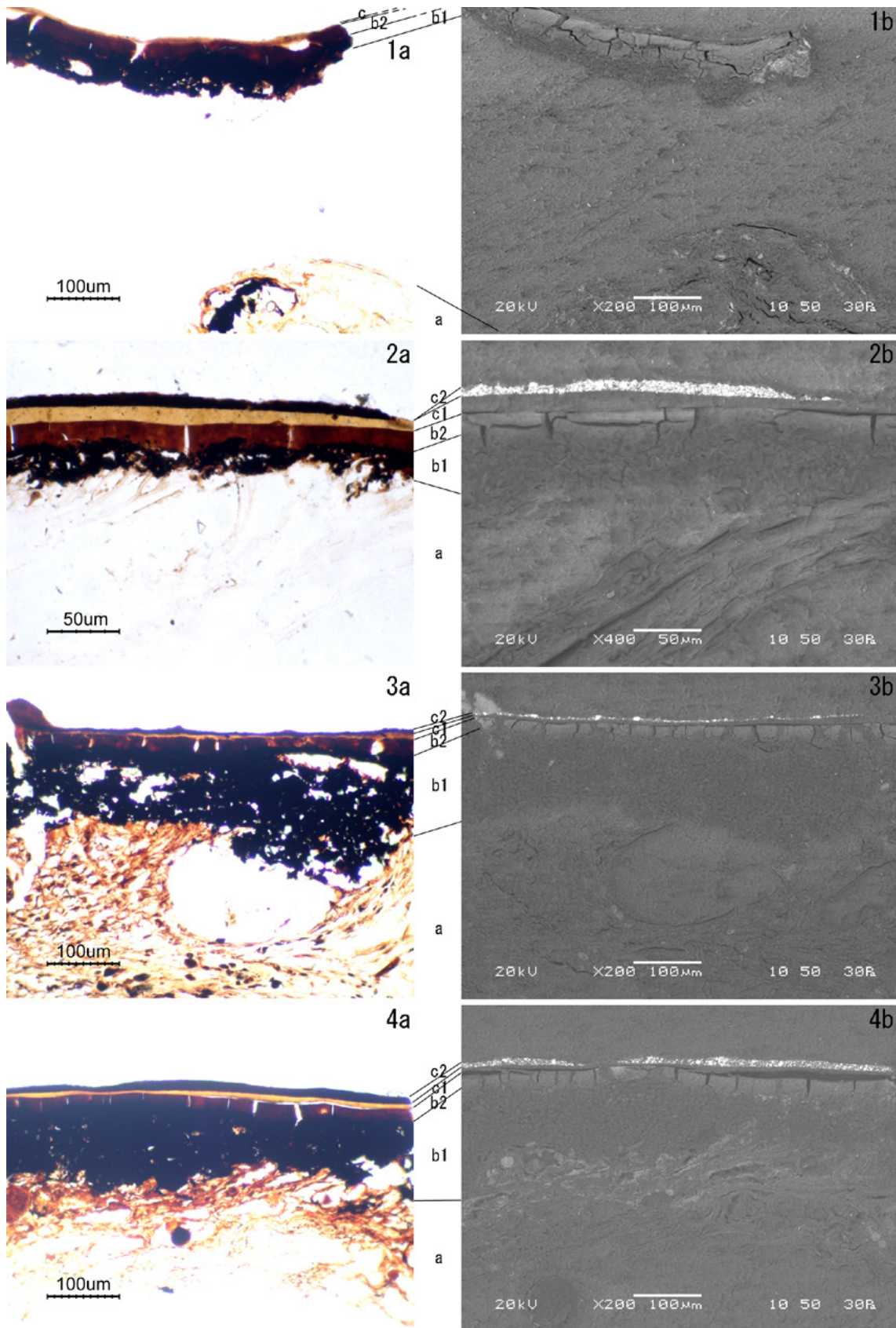
第 97 図 漆製品の塗膜構造 (a) と反射電子像 (b) (3)

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1. 分析 No. 9 碗内面黒色塗膜+赤文様 | 2. 分析 No. 10 小皿内面赤色塗膜 |
| 3. 分析 No. 11 碗内面黒色塗膜 | 4. 分析 No. 12 碗外面黒色塗膜+赤文様 |



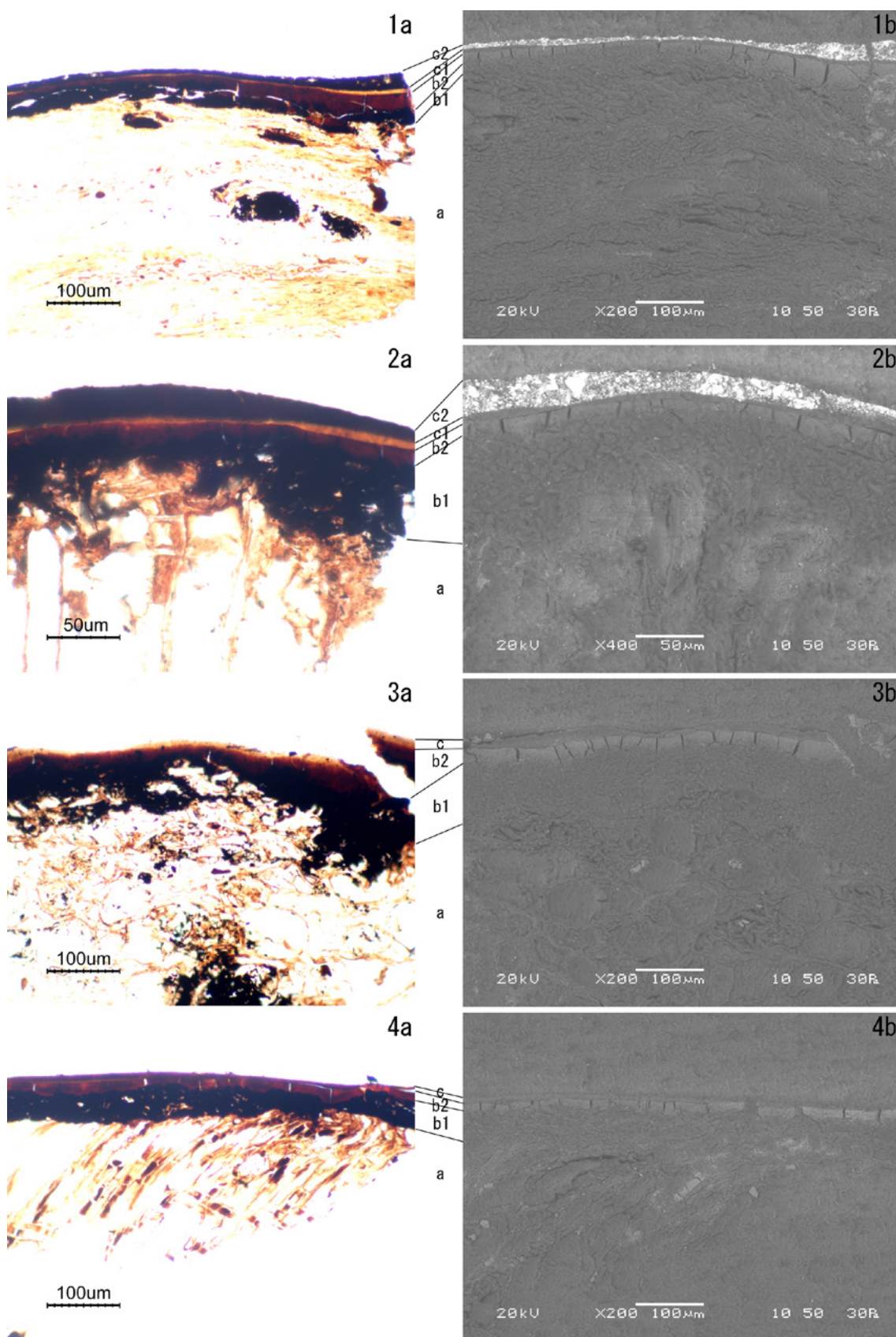
第98図 漆製品の塗膜構造 (a) と反射電子像 (b) (4)

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1. 分析 No. 13 椀外面黒色塗膜 + 赤文様 | 2. 分析 No. 14 椀外面黒色塗膜 |
| 3. 分析 No. 15 小皿内面黒色塗膜 | 4. 分析 No. 16 椀? 内面黒色塗膜 |



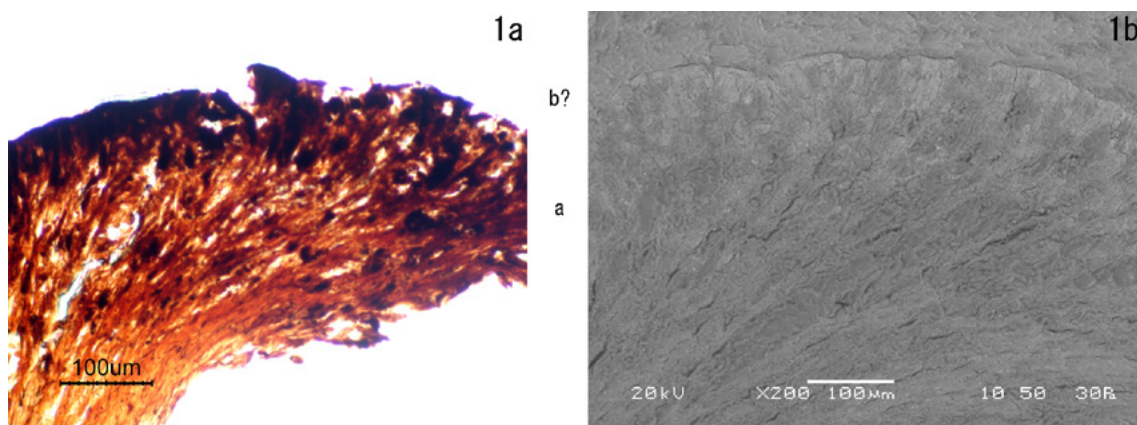
第99図 漆製品の塗膜構造 (a) と反射電子像 (b) (5)

- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| 1. 分析 No. 17 小皿内面黒色塗膜 | 2. 分析 No. 18 椀外面黒色塗膜 + 赤文様 |
| 3. 分析 No. 19 椀外面黒色塗膜 + 赤文様 | 4. 分析 No. 20 皿? 内面黒色塗膜 + 赤文様 |



第 100 図 漆製品の塗膜構造 (a) と反射電子像 (b) (6)

1. 分析 No. 21 椀内面黒色塗膜 + 赤文様 2. 分析 No. 22 椀外面黒色塗膜 + 赤文様
 3. 分析 No. 22 椀内面黒色塗膜 4. 分析 No. 23 椀外面黒色塗膜



第 101 図 漆製品の塗膜構造 (a) と反射電子像 (b) (7)

1. 分析 No. 24 器種不明外面黒色塗膜

第3節 下坂本清合遺跡における自然科学分析（大型植物遺体分析）

株式会社古環境研究所

はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

下坂本清合遺跡では、古代終わりから中世の作土上面において、長径1m、短径0.5mの楕円形を呈する炭化物の広がりが出土した。そこで、当時の植物利用や古環境について検討する目的で大型植物遺体分析を行うことになった。

(1) 試料

試料は、古代終わりから中世の作土上面より出土した3炭化物範囲（T30-6d-3G-7a、取上No.414）から採取された炭化物約1000cm³である。

(2) 方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

- 1) 試料1000cm³に水を加え放置し、泥化
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

(3) 結果

ア. 分類群

草本6分類群が同定された。学名、和名および粒数を第16表に示す。イネに関しては形状の計測値を第17表に、粒形とその大きさを第18表に示す。主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴と写真に示したものの計測値を記載する。

第16表 下坂本清合遺跡における炭化種実同定結果

分類群		部位	T30-6d-3G-7a	備考
学名	和名		No.414	
Herb	草本			
<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	炭化穎（破片）	(+++)	
<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	炭化果実	269	穎付の固体も確認、未成熟の固体も有
		（破片）	143	
<i>Echinochloa Beauv.</i>	イヌビエ属	炭化果実	146	穎付の固体も確認
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	炭化果実	26	
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実（破片）	1	未炭化
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	1	未炭化
<i>Vigna</i>	ササゲ属	炭化種子	2	
		（破片）	1	
Total	合計		589	

1000cm³中0.25mm篩

〔草本〕

イネ *Oryza sativa* L. 炭化穎（破片）・炭化果実（完形・破片） イネ科

穎は炭化しているため黒色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残るものも観察できる。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものではなく、破片である。

果実は炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。穎の破片が表面に残存するものも観察できた。未成熟の個体も観察できた。無作為にイネのサイ

第17表 下坂本清合遺跡イネ炭化果実計測値

試料	長さ (mm)	幅 (mm)	試料	長さ (mm)	幅 (mm)	試料	長さ (mm)	幅 (mm)	試料	長さ (mm)	幅 (mm)
1	5.00	2.73	51	5.48	2.87	101	5.47	2.49	151	5.02	3.05
2	4.40	2.30	52	4.69	2.11	102	3.99	2.01	152	3.81	2.04
3	5.04	2.13	53	4.16	2.34	103	4.01	2.26	153	4.26	1.82
4	4.43	2.10	54	5.47	2.99	104	5.01	2.47	154	4.72	2.66
5	5.15	2.39	55	5.31	2.42	105	4.18	1.80	155	4.57	1.71
6	4.16	2.24	56	5.34	2.18	106	6.31	3.45	156	4.95	2.70
7	4.44	2.11	57	5.10	3.16	107	4.41	2.10	157	5.50	2.42
8	4.55	2.56	58	4.80	2.45	108	4.90	3.44	158	4.38	2.35
9	4.54	2.22	59	5.15	3.28	109	4.86	1.80	159	4.57	2.26
10	4.41	1.83	60	5.03	2.68	110	5.38	2.43	160	4.82	1.98
11	5.17	2.50	61	5.46	2.42	111	5.84	2.77	161	4.94	3.07
12	3.78	2.01	62	6.30	2.58	112	4.51	2.86	162	4.66	2.79
13	4.12	2.24	63	5.46	2.80	113	5.13	2.25	163	4.39	2.94
14	4.51	1.89	64	5.06	2.88	114	4.96	2.42	164	4.54	2.24
15	3.55	1.94	65	5.33	3.66	115	4.30	2.69	165	4.46	2.64
16	4.22	2.22	66	5.46	2.46	116	4.66	1.89	166	5.07	2.51
17	4.29	1.98	67	5.11	2.47	117	4.75	2.70	167	4.96	2.88
18	6.49	2.51	68	4.93	2.43	118	4.79	3.10	168	4.67	2.81
19	5.00	3.29	69	4.62	2.94	119	4.93	4.93	169	4.39	2.83
20	6.19	2.37	70	4.11	2.14	120	4.03	2.53	170	4.78	2.11
21	4.89	2.48	71	5.49	2.50	121	4.94	2.21	171	4.99	2.63
22	5.21	2.56	72	3.54	2.39	122	5.04	2.97	172	4.22	2.12
23	6.63	2.56	73	3.99	2.07	123	4.60	2.33	173	3.98	3.98
24	4.84	2.96	74	4.79	2.53	124	4.39	2.46	174	4.61	1.78
25	5.08	2.70	75	4.71	2.22	125	4.49	2.86	175	5.16	2.42
26	4.68	2.60	76	4.15	2.66	126	5.22	2.77	176	4.57	1.78
27	4.97	2.51	77	4.53	2.42	127	5.97	2.43	177	4.57	2.45
28	5.19	3.37	78	5.24	2.79	128	5.07	2.62	178	4.17	2.14
29	4.93	2.90	79	4.52	2.77	129	4.88	2.68	179	4.09	1.98
30	5.09	2.64	80	5.02	2.06	130	5.08	2.38	180	4.16	2.15
31	4.97	2.51	81	5.82	2.21	131	4.39	2.24	181	4.20	2.01
32	5.52	3.46	82	4.85	3.09	132	4.22	2.19	182	4.40	1.79
33	5.33	3.33	83	5.37	2.62	133	4.87	1.99	183	3.73	2.07
34	4.79	2.72	84	4.67	1.59	134	5.36	2.54	184	3.49	2.25
35	4.76	2.76	85	4.50	1.68	135	4.31	2.06	185	3.58	2.10
36	6.53	3.29	86	5.26	2.35	136	5.50	2.54	186	4.46	1.90
37	5.34	3.11	87	4.70	2.97	137	4.96	1.92	187	4.51	2.62
38	4.38	2.37	88	5.74	2.57	138	4.15	1.66	188	4.46	1.89
39	5.21	3.18	89	4.58	2.35	139	3.67	1.88	189	4.40	2.38
40	5.31	2.79	90	4.69	1.76	140	4.36	1.96	190	4.22	1.99
41	4.89	2.48	91	4.66	2.63	141	4.40	4.40	191	4.60	1.81
42	4.58	3.40	92	5.84	2.36	142	5.17	2.16	192	3.99	2.41
43	5.24	2.73	93	4.52	1.91	143	4.91	3.16	193	4.68	2.25
44	4.80	2.35	94	4.46	1.64	144	5.34	2.88	194	4.25	2.84
45	5.03	2.42	95	4.08	1.65	145	4.77	2.58	195	4.47	1.89
46	4.76	3.15	96	4.45	3.03	146	5.93	2.98	196	4.60	1.96
47	4.49	2.24	97	4.96	1.94	147	4.91	3.14	197	4.08	2.86
48	5.22	2.77	98	4.64	2.32	148	4.40	3.03	198	4.70	2.20
49	5.04	2.58	99	4.09	1.72	149	6.14	3.07	199	3.65	2.18
50	4.91	3.23	100	3.92	1.76	150	5.21	2.73	200	4.78	2.59

	長さ (mm)	幅 (mm)
平均値	4.78	2.49
最大値	6.63	4.93
最小値	3.49	1.59

ズを計測したところ（第17表）、平均値長さ×幅：4.78mm×2.49mm、最大値長さ×幅：6.63mm×4.93mm、最小値長さ×幅：3.49mm×1.59mmであった。

イヌビエ属 *Echinochloa* 炭化穎 イネ科 長さ×幅：2.85mm×1.68mm、2.81mm×1.62mm、1.68mm×2.02mm。

茶褐色で楕円形を呈す。表面には微細な縦方向の模様がある。穎の破片が表面に残存するものも観察できる。

ホタルイ属 *Scirpus* 炭化果実 カヤツリグサ科 長さ×幅：1.98mm×1.52mm、1.95mm×1.66mm。

黒色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4～8本の針状の付属物を持つ。

タデ属 *Polygonum* 果実（破片） タデ科

黒褐色で卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。未炭化である。

アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科 長さ×幅：1.25mm×1.22mm。

黒色で光沢があり円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。未炭化である。

ササゲ属 *Vigna* 炭化種子（破片） マメ科 長さ×幅×厚さ：4.83mm×3.08mm×3.18mm。

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。

ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、大きさとへその形態からアズキに最も類似する。

イ. 種実群集の特徴

T30-6d-3G-7a, No.414の種実類は、全て草本種実であり炭化したものがほとんどで、イネ穎（破片）が多数を占め、イネ果実269、破片143となる。次いでイヌビエ属146が多く、ホタルイ属26、ササゲ属2、タデ属破片1、アカザ属1が伴う。タデ属、アカザ属は未炭化である。

(4) 考察

イネ穎（破片）およびその果実（破片を含む）が最も多いがいずれも炭化している。未成熟の個体もあることから、廃棄するものを燃やし投棄したと考えられる。栽培植物ではほかにササゲ属が検出されている。ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどが含まれる。イヌビエ属、ホタルイ属はいずれも水田雑草であり、イネとともに燃やされ廃棄されたと考えられる。未炭化のタデ属、アカザ属は畑や集落のやや乾燥した人為地に生育し、周囲に生育したものが反映されたとみなされよう。こうしたことから、調査地もしくは近傍に水田および畑が分布していたと

第18表 下坂本清合遺跡イネの粒形と大きさ

粒形	粒大	極々小	極小	小	中	合計	%
	2.6-3.0 Ll	~ 8	~ 12	~ 16	~		
長粒 L	2.6-3.0 Ll	4	2	4		10	41
	2.3-2.6 Lm	6	19	2	3	30	
	2.0-2.3 Ls	1	21	19	1	42	
短粒 S	1.8-2.0 Sl	4	22	25	5	56	57
	1.6-1.8 Sm	3	7	17	3	30	
	1.4-1.6 Ss	1	5	16	6	28	
円粒 R	1.2-1.4 Rl			1		1	2
	1.0-1.2 Rm			1	2	3	
合計		19	76	85	20	200	
%		9.5	38	42.5	10		100

※計測は表2にそって行う。粒長/粒幅で粒形を表し、粒長/粒幅で粒の大きさを表す。

推定される。

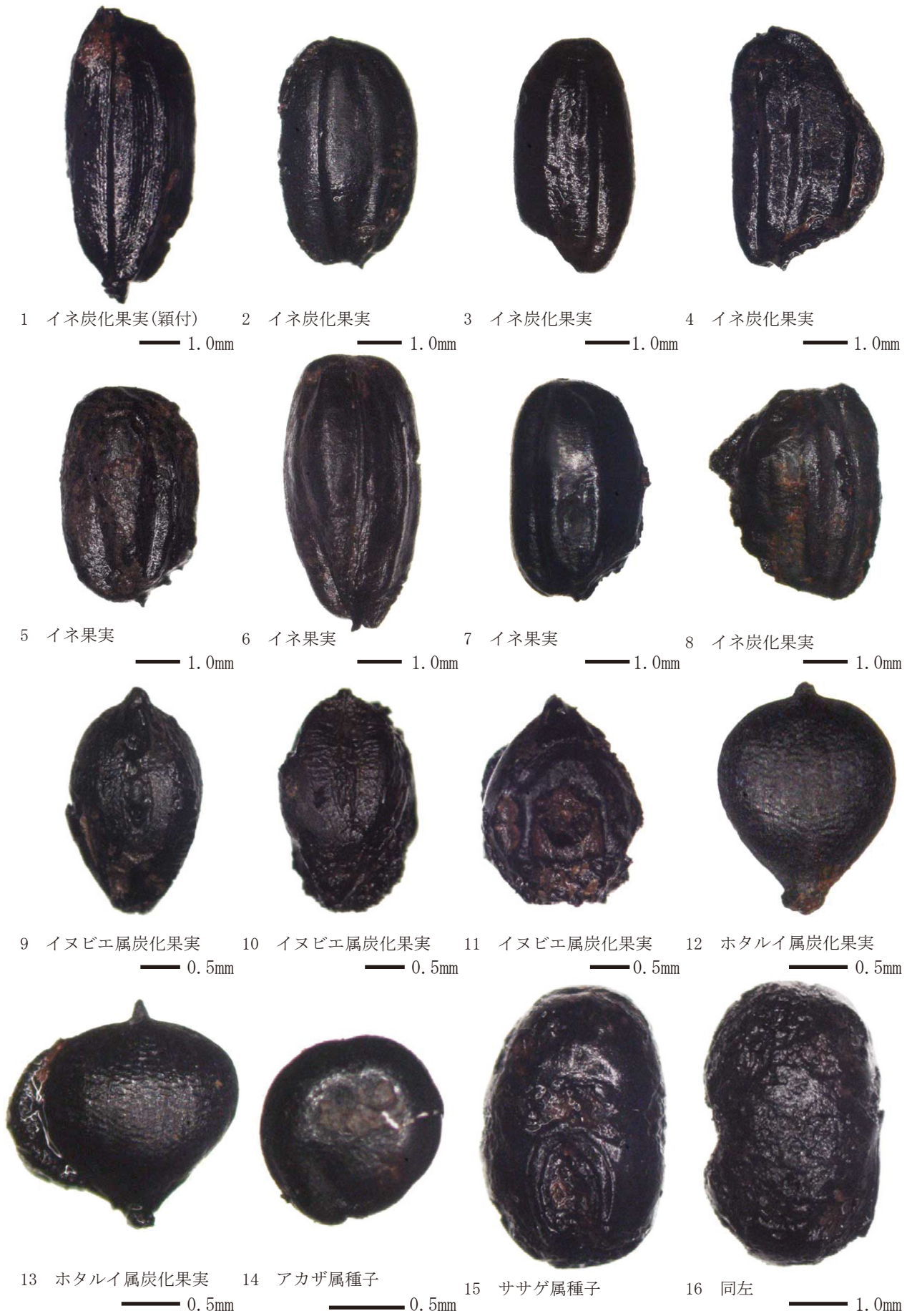
イネの粒形とその大きさは佐藤（1988）に従い計測し統計を行った（第17表、第18表）。かなりばらつきがあるが、粒形は短粒（S）を中心にやや長粒（L）に偏り、粒大では小から極小が多い。これらの変異は日本における古墳時代以降のイネの粒径と大きさと同様の傾向である。

（5）まとめ

下坂本清合遺跡において出土した炭化物を対象に大型植物遺体分析を行った。その結果、抽出された植物遺体は炭化種実および未炭化の種実と同等困難な微細炭化物片であった。炭化種実では、草本種実であるイネ、イヌビエ属、ホタルイ属、ササゲ属、未炭化の種実では、タデ属とアカザ属が検出された。イネ類の破片とイネの果実が多く、次いでイヌビエ属、ホタルイ属が多かった。これらは廃棄され燃やされ投棄されたとみなされた。他に栽培植物としてはササゲ属が検出された。なお、イネ果実の粒径と大きさは短粒で小から極小の大きさを示した。

【参考文献】

- 佐藤敏也（1971）日本の古代米，雄山閣出版株式会社，346p.
- 笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.
- 笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣 出版，p.131-139.
- 佐藤敏也（1988）弥生のイネ．弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣出版株式会社，p.97-111.
- 南木陸彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第4巻生産と流通I，雄山閣出版株式会社，p.165-174.
- 吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル No.355，ニューサイエンス社，p.2-14.



第102図 下坂本清合遺跡の種実

第6章 総括

第1節 鳥取県東部における平安時代中期から中世前期の土師器について

第4章で述べてきたように、下坂本清合遺跡2区の出土遺物は、一部ピット内からの出土はみられたものの、大半は自然流路内（18流路、36流路、163流路）からの出土である。

これらの遺物は自然流路内出土という性格上、ある程度様々な時期の遺物が入り混じっている可能性は避けられない。よって遺物それぞれの年代を検討するにあたっては、その地域における他遺跡出土の遺物から導き出された編年に頼らざるを得ない。

下坂本清合遺跡2区で検出した遺構の中心となる時期は平安時代中期から中世前期（およそ10世紀～13世紀）と考えられる。因幡における該期の土器変遷については、谷口恭子氏により鳥取市山ヶ鼻遺跡SK14出土遺物について出土層位別に6段階（Ⅰ～Ⅵ期）の変遷案（谷口1996）が示されて以降、諸氏により様々な変遷案が示されている（八峠1998・2000・2004、筒井他2004、中森2012、岡田・八峠2014）。

第19表は、鳥取県東部における当該期の土師器出土遺構について、それぞれの研究者における変遷及び年代観をまとめたものである。良好な出土状態での遺物が限られるためもあるが、この表にみるように、変遷案が示される毎に基準となる遺物が入り替わり、年代観も前後している状況である。特に八峠変遷案については、数次にわたる改訂がおこなわれているが、（八峠1998・2000・2004、岡田・八峠2014）、改訂の都度それまでの変遷案との変更点及びその変更理由が明確に示されていないため、変遷案の妥当性を検証する上で課題があるといえる。また中森変遷案（中森2012）については、土師器杯・皿について器種・器形毎の変遷案が明示されているが、年代観を示すことについては慎重な姿勢であり、具体的な年代観が示されていない。鳥取県東部における当該期の土師器編年について第19表のように様々な意見がある中で、基軸となし得る具体的な年代観が提示されるに至っていない点は惜しまれる。

そこで本節では、下坂本清合遺跡2区で検出された各遺構の存続年代を明らかにするため、鳥取県

第19表 鳥取県東部における10～13世紀の土器変遷案比較

		谷口1996	八峠1998	八峠2000	筒井ほか2004	八峠2004	中森2010	中森2012	岡田2014	八峠2014
9世紀	後葉	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅰ期		岩吉ⅣSX01			山ヶ鼻ⅡSE01 花原窯3号窯		岩吉ⅣSD05 大井聖坂Ⅳ区 SK06	
	末葉									
10世紀	初頭	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅱ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅱ期 (一部)	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅰ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅰ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅱ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅱ期 山田窯12号窯 岩吉ⅣSD-X(一部) 岩吉ⅣSD-05	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅱ期	岩吉ⅣSDZ 古市ⅠC区SE03 山田窯10・12号窯	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅲ期 山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅳ期 古市ⅡSE-B01 古市ⅡSE-B03
	前葉			山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅱ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅱ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅱ期				
	中葉			山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅲ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅲ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅲ期				
	後葉			山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅲ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅲ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅲ期				
11世紀	末葉	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅲ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅲ期 (一部) 岩吉ⅣSDX 秋里Ⅱ区遺構外	山ヶ鼻SD20		山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅲ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅲ期 山ヶ鼻SD20 岩吉ⅣSD-X(一部)	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅳ期	菅蒲B区SK01 秋里(土地区画) SRC-01	秋里(マシヨ)SB01P3 内海中寺ノ谷SXA01
	初頭			山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅳ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅳ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅳ期				
	前葉			山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅳ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅳ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅳ期				
	中葉			山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅳ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅳ期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅳ期				
12世紀	後葉	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅳ期	秋里(マシヨ)SB01 秋里(マシヨ)SK16	山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期 秋里(マシヨ)SB-01P3 秋里(マシヨ)SK16(一部) 秋里(マシヨ)B区第5・6層 秋里Ⅱ区交差点SK02	本高円ノ前SK10 菅蒲遺跡SD03	秋里(マシヨ)SK15 西大路土居SK49 山ヶ鼻ⅡSE02	山ヶ鼻ⅡSK14-V期 秋里(マシヨ)SK15・16 菅蒲B区SK01 卯垣ギットリSK14・15
	初頭			山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期				
	前葉			山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期				
	中葉			山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期				
13世紀	後葉	山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-Ⅳ期 菅蒲B区SK01 秋里Ⅱ区交差点 SK02	山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期 秋里(マシヨ)SK16(一部) 菅蒲B区SK01 大井家ノ下モ遺構外	秋里(マシヨ)SK15 西大路土居SK49 山ヶ鼻ⅡSE02	秋里(マシヨ)SK15 西大路土居SK49 山ヶ鼻ⅡSE02	山ヶ鼻ⅡSE02 大井家ノ下モ遺構外
	初頭			山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期				
	前葉			山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期				
	中葉			山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期	山ヶ鼻ⅡSK14-V期				

※編年内で前後の時期が重複するものは、前の時期を優先して示した。

東部における当該期の土師器の変遷及び年代観について整理を試み、当遺跡2区出土の遺物の年代観の明確化を図るものとする。対象地域の鳥取県東部とは現在の鳥取市以東とする^(註1)。

(1) 検討対象遺構の抽出

まず検討対象遺構の抽出を行った。抽出の基準を条件①：一括性が高いもの。条件②：複数の器種が供伴していること。条件③：貿易陶磁など時期の推定できる遺物が伴っていること、とした。ただし当該期の因幡においては良好な出土状況を示す資料が少ないため、条件①は絶対条件としつつも、これに条件②、③のうち少なくとも一方を満たすことを条件として抽出した。そのため溝や自然流路など、複数時期に亘って機能したと考えられる遺構からの出土遺物は基本的に対象外とした。

(2) 検討方法

まず検討対象期間全般に亘って存続し、帰属時期による形態的特徴が最も発現すると考えられる坏について、同一遺構内から出土したものを検討し、各時期の法量及び形態的特徴をもとに分類案を作成した。

次に貿易陶磁器などで帰属時期の想定できる遺構を時間軸毎に並べ、坏の各分類の時間的変遷について把握するとともに、その妥当性を検証した。

最後に坏で確認した形態的変遷をもとに、共伴する皿・鍋・甕について出土遺構毎に並べ、形態的分類及び器種構成を加味した変遷を検討・把握した。次項にその結果を整理して示す。

(3) 分類

土師器の坏と皿について、形態的特徴を基に以下のように分類した。

【土師器坏】(第103図)

坏ア：底部から口縁部まで直線的、あるいはやや内湾しつつ外傾するもの。

法量に特大・大・中・小が認められる。

坏イ：体部が明瞭に内湾し、口縁部やや外傾するもの。

坏ウ：体部中位がくびれ、口縁部外反するもの。

坏エ：広い平底から直線的に外傾するもの。

高台付坏

足高高台付坏

【土師器皿】(第104図)

皿ア：体部が外湾しつつ外傾するもの。皿部の浅いものと深いものがある。

皿イ：底部が高台状に突出し、体部が内湾しつつ外傾するもの。

皿ウ：底部平底で、体部が緩く内湾しつつ外傾するもの。

皿エ：平底の底部が口径に比して広く、体部が緩く外湾しつつ外傾するもの。

高台付皿：皿部の浅いものと深いものがある。

柱状高台：坏の可能性もあるが、今回は皿に含めた。

皿ウについては、さらに細分できる可能性があるが、今回は細分までは至らなかった。また煮炊具については、今回対象となるものが少なく、分類も甕・鍋・瓦質鍋・瓦質羽釜とするに留めざる得なかった(第105図)。

S=1/8

		高台付坏	特大	大	中	小	坏イ	坏ウ	足高高台付坏
900	坏工	1 山ケ鼻 SK14 I期-157	4	5	6	7			
		2 山ケ鼻 SK14 II期-128	3	4	5	6			
	I期		3 山ケ鼻 SK14 II期-117	4 山ケ鼻 SK14 II期-114	5 山ケ鼻 SK14 II期-115	6 山ケ鼻 SK14 II期-116			
1000	1段階		8 山ケ鼻 SK14 III期-41	9 山ケ鼻 SK14 III期-43	10 山ケ鼻 SK14 III期-46				
	2段階		11 山ケ鼻 SK14 III期-37	12 山ケ鼻 SK14 III期-38	13 山ケ鼻 SK14 III期-49		21 山ケ鼻 SK14 III期-50		28 山ケ鼻 SK14 III期 63
	3段階		14 内海中寺/谷 SKA01-4	15 山ケ鼻 SK14 IV期-17		22 内海中寺/谷 SKA01-6			29 山ケ鼻 SK14 III期 65
1100	1段階		16 菅蒲 B区 SK01-33	17 菅蒲 B区 SK01-41	18 菅蒲 B区 SK01-37			24 菅蒲 B区 SK01-39	
	2段階			19 秋里 (F773) SK16-5	20 本高円/前 SK10-2				
1200	1段階							(参考) 供伴皿 25 秋里 (F773) SK15-5	58 秋里 (F773) SK15-2
	2段階							26 仰里* (F773) SK14-3	45 仰里* (F773) SK14-4
IV期								27 仰里* (F773) SK15-7	44 仰里* (F773) SK15-9

凡例
 ◎：底部回転糸切り
 □：底部回転へら切り
 ※遺物下部キャプションの内容は以下のとおり
 (遺跡名) - (掲載番号)
 【例】 菅蒲 B区 SK01 - 77

第103図 鳥取県東部における10～13世紀の土師器坏の変遷

(4) 変遷

これらの土器類を、以下のⅣ期8段階の変遷で捉えることができる（第103～105図）。

【Ⅰ期】

土師器主体となる時期で、谷口変遷案（谷口1996）で山ヶ鼻遺跡SK14Ⅱ期とされる土器群が該当する^(註2)。

坏の一部には回転ヘラ切りの坏エ（2）がみられるが、土師器において回転糸切りが主体となる。大型の高台付坏（3）のほか、坏アは特大・大・中・小と法量分化が認められる。このうち特大とした4は高台付坏とほぼ同法量、同形状である。坏アの体部は直線的に立ち上がるものからやや内湾する傾向になる。

皿は皿ア、皿エ、高台付皿が認められる。皿エ（31）は前代の底部回転ヘラ切りのもの（30）から回転糸切りへと切り替わる。高台付皿及び皿アは浅いもの（32・36）と深いもの（33・37）がある。

【Ⅱ期】

皿イ、皿ウが登場し、皿の器種分化が認められる時期としてⅡ期を設定した。また主に坏の形態変化によってⅡ期を3段階に分けた。いわゆる足高高台付坏及び柱状高台（橋本1994）の出現もこの時期であり、土師器の器種が多様化する時期であると評価できる。

（Ⅱ期1・2段階）

山ヶ鼻遺跡SK14Ⅲ期とされる坏アは体部の外傾度合によってやや外傾するもの（8・9・10）と強く外傾するもの（11・12・13）が認められ、法量も前段階のⅠ期と同じくそれぞれ大・中・小と揃っている。そのため、これらの形態差は時期差を反映したものと考え、Ⅰ期坏アの形状との比較から、前者が古く後者が新しい特徴であると判断し、それぞれⅡ期1段階、Ⅱ期2段階と把握した。従って他の坏イ（21）、足高高台付坏（28・29）及び皿、甕も2時期に分けられると考えられるが、資料不足で分類に至らなかった。そのため、これらについてはⅡ期1・2段階と一括した。前述したように、この時期に皿イ（46）、皿ウ（49・54）、足高高台付坏（28・29）が加わる。坏イとした21については、次項でⅡ期3段階に位置づけた22のプロトタイプと捉えたが、系譜を異にする可能性もあり、更なる検討が必要と考える。

（Ⅱ期3段階）

大きな傾向として、Ⅱ期2段階に体部外傾度が最大となった坏アは、Ⅱ期3段階になって11から14への変化のように器高を減じ始める可能性があるが、資料不足で判別は難しい。坏イ（22）はⅡ期1・2段階の21に比して大型化しているが、法量が分化している可能性もある。そのほかこの段階の特徴としては、Ⅱ期2段階に比して皿の法量が縮小し、柱状高台（61・62）が出現する点が挙げられよう。内海中寺ノ谷遺跡SXA01（財団法人鳥取市文化財団2005）出土土器及び山ヶ鼻遺跡SK14Ⅳ期とされる土器群がこの段階に相当する。

【Ⅲ期】

皿が明瞭に小型化（口径8cm前後）して、いわゆる小皿となり、土師器鍋が出現する時期をⅢ期とした。Ⅲ期は坏の形態及び瓦質鍋の有無により2段階に分けた。

（Ⅲ期1段階）

坏アは前段階のⅡ期3段階と法量、形態とも類似しており明確に分類することはできない。Ⅱ期には認められなかった特大の坏アは、大型に位置づけられる17よりも底径の大きな16が認められるこ

S=1/8

900	1000	1100	1200	高台付皿		皿7		皿イ	皿ウ	柱状高台
				浅	深	浅	深			
I期	1段階	30 山ヶ鼻 SK14 I期-155								
	2段階	31 山ヶ鼻 SK14 II期-125	32 山ヶ鼻 SK14 II期-118	33 山ヶ鼻 SK14 II期-119	36 山ヶ鼻 SK14 II期-123	37 山ヶ鼻 SK14 II期-124				
II期	1段階		34 山ヶ鼻 SK14 III期-60	35 山ヶ鼻 SK14 III期-59	38 山ヶ鼻 SK14 III期-53	39 山ヶ鼻 SK14 III期-52	46 山ヶ鼻 SK14 III期-51	49 山ヶ鼻 SK14 III期-54	54 山ヶ鼻 SK14 III期-56	
	2段階							50 秋里 B II区 SRo01-1	55 内浦中寺ノ谷 SXA01-1	61 内浦中寺ノ谷 SXA01-8
	3段階									62 内浦中寺ノ谷 SXA01-9
III期	1段階		40 高瀬 B 区 SK01-4	41 高瀬 B 区 SK01-22	47 高瀬 B 区 SK01-17	51 高瀬 B 区 SK01-2	56 高瀬 B 区 SK01-9	59 高瀬 B 区 SK01-18		
	2段階					52 山ヶ鼻 SK14 VI期-3	57 秋里 (T2723) SK16-1	63 秋里 (T2723) SK16-3	64 秋里 (T2723) SK16-2	
IV期	1段階		42 山ヶ鼻 SE02-1	43 山ヶ鼻 SE02-2	48 秋里 (T2723) SK15-1	53 秋里 (T2723) SK15-3	58 秋里 (T2723) SK15-2			
	2段階		44 仰里ノ谷 SK15-9	45 仰里ノ谷 SK14-4				60 秋里 D III区交差点 SK02-2	65 仰里ノ谷 SK14-6	66 仰里ノ谷 SK15-12

凡例
 ※運物下部キャプションの内容は以下のとおり
 (遺跡名) (遺構名) (遺構番号)
 【例】 高瀬 B 区 SK01 - 77
 ◎: 底部回転承切り
 □: 底部回転へら切り

第104図 鳥取県東部における10～13世紀の土師器皿の変遷

とから、Ⅰ期以降当該期まで特大の坏アが存続していた可能性がある。Ⅲ期Ⅰ段階の特徴は、皿の明瞭な小型化と土師器鍋の出現であろう。また後に坏の主たる器種となっていくと考えられる坏ウ(24)もここで出現している。坏イも前段階に比して大型の23が認められる。鳥取市菖蒲遺跡B区SK01出土土器(財団法人鳥取市教育福祉振興会1994)のほか、山ヶ鼻遺跡SK14Ⅴ期とされる土器群が当該期に相当する。

(Ⅲ期Ⅱ段階)

瓦質の鍋(75)及び羽釜(77)が確認できるのは当該期からである。坏アの器壁が厚くなる(19・20)ことから、Ⅲ期をⅡ段階に分離してみた。また当該期とした皿は、厚めの底部で、口縁端部が細く尖る特徴をもつ(52・57)ことなども年代的指標としうる可能性もあるが、型式差として捉え得るかどうか現段階では判断しかねる。今後の資料の増加を待ちたい。Ⅱ期Ⅲ段階に引き続き柱状高台(63・64)が認められる。秋里遺跡SK16(財団法人鳥取市教育福祉振興会1996)、本高円ノ前遺跡SK10(財団法人鳥取市文化財団2004)出土土器及び山ヶ鼻遺跡SK14Ⅵ期とされる土器群が当該期に相当する。

【Ⅳ期】

坏アがみられなくなり、坏ウが主流となる。皿の形態変化からⅡ段階に分けた。

(Ⅳ期Ⅰ段階)

類例が乏しいため即断できないが、鳥取県東部では、この段階に坏アに替わって坏ウが坏の主体となるものと考えられる。皿はア～ウまで認められ、法量の縮小化が頂点に達し、口径7cm前後と最も小さくなる(42・43・48・53・58)。

煮炊具については、前段階に引き続き瓦質の鍋及び羽釜が認められる(76・78・79)。

そのほか、当該期と考えられる山ヶ鼻遺跡SE02(財団法人鳥取市教育福祉振興会1996)の出土遺物中に、土師器甕の口縁部(72)が認められる。土師器の器種変遷における全体的な流れから、土師器甕はⅡ期に消滅し、Ⅲ期には土師器鍋に替わるものと見込まれ、72は古い時期の遺物が混入したものと解釈したいが、例外的に扱ってよいものかどうか現段階では判断しかねる。今後土師器甕の存続期間についても改めて検討する必要があるのではないだろうか。

当該期の土器群としては、山ヶ鼻遺跡SE02のほか、秋里遺跡SK15(財団法人鳥取市教育福祉振興会1996)及び山ヶ鼻遺跡SK14Ⅵ期とされるものが相当する。

(Ⅳ期Ⅱ段階)

これまで小型化の一途を辿っていた皿に、やや大型化が認められる(44・45・60)ことからⅥ期Ⅰ段階と分離しⅥ期Ⅱ段階とした。Ⅵ期の皿は、これまでの皿アや皿ウの系譜で捉えられるが、供伴する坏ウ(25～27)との形態的類似性が高く(第103図)、何らかの意図で坏ウをスケールダウンさせたものを作製したの可能性も考慮すべきかもしれない。

煮炊具は、土師器鍋(74)が認められる。底部まで残存していないが、丸底を指向する形態をしており、平底気味であるⅢ期Ⅰ段階の73との形態差をみせる。また瓦質の鍋及び羽釜は当該期に良好な資料を見いだせないが、14世紀以降も存続していることが確認できる(加藤2007)。

秋里遺跡DⅢ区SK02(財団法人鳥取市教育福祉振興会1996)、卯垣ギットリ遺跡SK14・15(財団法人鳥取市文化財団2013)出土土器が当該期に相当する。

		甕	鍋	瓦質鍋	瓦質羽釜
900		 山ヶ鼻 SK14 I期-158 67			
	I期	 山ヶ鼻 SK14 II期-130 68			
1000	1段階	 山ヶ鼻 SK14 III期-72 69			
	2段階				
	3段階	 山ヶ鼻 SK14 IV期-18 70	 内海中寺ノ谷 SXA01-7 71		
1100	1段階	!	 山ヶ鼻 SK14 V期-10 73		
	2段階			 山ヶ鼻 SK14 VI期-4 ■ 75	 本高円ノ前 SK10-3 ■ 77
1200	1段階	 山ヶ鼻 SE02-3 72		 山ヶ鼻 SE02-5 ■ 76	 山ヶ鼻 SK14 VI期-8 ■ 78
	2段階		 秋里 D III区交差点 SK02-3 74		 山ヶ鼻 SE02-4 ■ 79

凡例
 ■：瓦質土器
 ※遺物下部キャプションの内容は以下のとおり
 (遺跡名) (遺構名) - (掲載番号)
 【例】 菖蒲 B区 SK01 - 77

第105図 鳥取県東部における10～13世紀の甕・鍋の変遷

(5) 年代

次に、各段階の想定される実年代について述べる。

まず実年代を想定できる遺物について述べる。I期の前段階にあたる山ヶ鼻遺跡 SK14 I期土器(1・30・67)を包含する層中より検出した炭化物の放射性炭素年代測定結果の歴年代交点(AD895)から山ヶ鼻遺跡 SK14 I期が9世紀末を前後する時期と想定できることから、続くI期の上限は10世紀初頭と考えられる。

次に年代が想定できるのは、11世紀後半から12世紀後半に比定される白磁碗IV類(太宰府市教育委員会2000)が出土しているII期3段階とした内海中寺ノ谷遺跡 SXA01と、III期1段階とした菖蒲遺跡 B区 SK01である。

そしてⅣ期1段階の山ヶ鼻遺跡 SK14 Ⅵ期土器群には12世紀後半から13世紀前半に比定される東播系須恵器鉢Ⅱ B2類（佐藤 2013）が、同じくⅣ期1段階の山ヶ鼻遺跡 SE02 からは、13世紀前半に比定される龍泉窯系青磁碗Ⅱ -b類（太宰府市教育委員会 2000）が出土している。続くⅣ期2段階の秋里遺跡 D Ⅲ区 SK02 から13世紀中頃と考えられる三足羽釜（鳥取市教育福祉振興会 1996）が出土している。

以上をまとめると、以下のようなになる（※は年代推定遺物のない段階）。

- 9世紀末（山ヶ鼻遺跡 SK14 Ⅰ期：放射性炭素年代測定）
- 10世紀初頭～ …………… Ⅰ期
 - ※Ⅱ期1段階
 - ※Ⅱ期2段階
- 11世紀後半～12世紀後半 …… Ⅱ期3段階（白磁碗Ⅳ類）
- 11世紀後半～12世紀後半 …… Ⅲ期1段階（白磁碗Ⅳ類）
 - ※Ⅲ期2段階
- 12世紀後半～13世紀前半 …… Ⅳ期1段階（東播系須恵器鉢Ⅱ B2類）
- 13世紀前半 …………… Ⅳ期1段階（龍泉窯系青磁碗Ⅱ -b類）
- 13世紀中頃 …………… Ⅳ期2段階（三足羽釜）

以上の実年代想定資料を踏まえ、各段階の年代観を以下のように示しておく。

- Ⅰ期 …………… 10世紀前半
- Ⅱ期1段階 …… 10世紀後半
- Ⅱ期2段階 …… 11世紀前半
- Ⅱ期3段階 …… 11世紀後半
- Ⅲ期1段階 …… 12世紀前半
- Ⅲ期2段階 …… 12世紀後半
- Ⅳ期1段階 …… 13世紀前半
- Ⅳ期2段階 …… 13世紀中頃～

Ⅰ期からⅡ期2段階は10世紀～11世紀前半を半世紀毎に按分した。併に白磁碗Ⅳ類を供伴するⅡ期3段階とⅢ期1段階は、白磁碗Ⅳ類以前である12世紀後半以前の時期が想定されるⅢ期2段階の存在を考慮し、白磁碗Ⅳ類の基準年代である11世紀後半～12世紀前半を按分し、それぞれ11世紀後半（Ⅱ期3段階）、12世紀前半（Ⅲ期1段階）とし、Ⅲ期2段階を12世紀後半とした。

（6）下坂本清合遺跡2区出土土師器坏・皿について

以上の検討を踏まえて、下坂本清合遺跡2区で検出された遺構内出土の土師器坏・皿の時期をみると第106図のようになる。

下坂本清合遺跡出土の土師器のひとつの特徴として、底部回転ヘラ切りによる坏・皿が一定量含まれる点がある。これについては、鳥取県内では底部回転糸切りが主体となる10～12世紀にあって回転ヘラ切りの皿が多く出土している米子市錦町第1遺跡の土器溜り出土資料（米子市教育文化事業団 1996）のように、岡山県の美作地方との係わりを想定する見解（八峠 1998）などがあり、当遺跡出土の底部回転ヘラ切りの土師器も、他地域との関連性のなかで捉えるべきものである可能性もあるが、今回は一先ず前記の分類案のなかで捉えることとした。

163 流路はⅠ期からⅢ期までの土器が認められる。これらの出土位置をみると、Ⅰ期からⅡ期 2 段階 (Po65・66・71・72) までは 36 流路と重複しない箇所から、Ⅱ期 3 段階からⅢ期にかけて (Po52 ~ 60・62 ~ 64・68・69) は 36 流路と重複する箇所を中心に出土していることがわかる。第 1 遺構面 18 流路、第 2 遺構面 36 流路、第 3 遺構面 163 流路の各段階の調査にあたっては、それぞれの流路の識別にかなりの難渋を伴っており、163 流路出土のⅡ期 3 段階からⅢ期の遺物あるいは 36 流路の埋土中出土遺物として分離される可能性がある。

この可能性に依拠すれば、出土土器が土師器鍋と瓦質鍋のみであった 36 流路の機能した年代はⅡ期 3 段階からⅢ期にかけての時期 (11 世紀後半～12 世紀) である、36 流路前段階の 163 流路の機能した段階はⅠ段階からⅡ期 2 段階 (10 世紀～11 世紀前半) と整理しうる。なお、湿地状堆積となった段階である 18 流路からの出土土器 (Po6・7) は、36 流路と重複する地点から出土したことから、これらも前段階の流路から混入した可能性があり、18 流路の堆積は 13 世紀以降に降る可能性も考えておきたい。また 178 流路 (第 84 図) の埋没最終段階に残存した流路の痕跡と考えられる 135 流路 (第 74 図) から出土した土師器 (Po48・49) は、Ⅱ期 2 段階から 3 段階のものが認められるため、163 流路機能段階から 36 流路が機能し始める時期に埋没したものと判断される。

続いて、流路以外の遺構出土土師器をみる。133 落ち込み出土の坏ア (Po44) は、内海中寺ノ谷遺跡 SXA01 出土の土師器坏 (第 103 図 14) に胎土及び形状が酷似することからⅠ期 3 段階に、皿イ (Po45) は法量から、第 104 図皿イのⅡ期 1・2 段階 (46) とⅢ期 1 段階 (47) を繋ぐⅡ期 3 段階に相当すると考えられ、133 落ち込みの年代は、概ねⅡ期 3 段階 (11 世紀後半) に当てられよう。

掘立柱建物 3 を構成する 140 ピットからも、坏ア (Po28) と皿イ (Po27) が出土している。Po27 はやや小型化しており 133 落ち込み出土のものより新しい様相を呈するが、Ⅱ期 3 段階 (11 世紀後半) の範疇で捉えられると考えられる。また Po28 は、体部の外傾度からⅡ期 3 段階～Ⅲ期Ⅰ段階 (11 世紀後半～12 世紀前半) と判断されるが、Po27 と共伴することから、Ⅱ期 3 段階と捉えることができる。よって掘立柱建物 3 は 11 世紀後半の時期が充てられよう。掘立柱建物 6 を構成する 146 ピット出土 Po38 はⅡ期 3 段階からⅢ期 1 段階 (11 世紀後半～12 世紀前半) であろう。掘立柱建物 1 を構成する 23 ピット出土の皿ウ (Po24・25) 及び柵列 1 周辺ピット群の 81 ピット出土皿ア (Po29) は、その法量からⅢ期 (12 世紀代) と考えられる。

2 耕作痕出土皿ウ (Po1) は底部のみの破片で判断は難しいが、Ⅱ期 3 段階からⅢ期 1 段階 (11 世紀後半～12 世紀前半)、4 耕作痕中出土坏ア (Po39) も体部の外傾度が最大となり、やや器高が低くなるという特徴を有することから、同時期と考えられる。同じく 147 土坑出土の Po46 は、全体の器形がわからないため判断は難しいが、器壁が厚くなる特徴から、Ⅲ期 2 段階 (12 世紀後半) にあたるか。4 耕作痕出土の坏ア (Po40) も同様にⅢ期 2 段階と捉えておく。

このようにみえてくると、調査区北半部に展開する遺構群は、Ⅱ期 3 段階からⅢ期 2 段階 (11 世紀後半～12 世紀) のものであり、36 流路の機能時期と重複するといえる。

また、13 世紀代 (Ⅳ期) 以降については、163 流路中より出土した貿易陶磁器 (Po81・82) や瓦質鍋、三足羽釜 (Po73) などが確認できるが、前代に比して希薄である。次に確認できるのは近世の遺物であるというのも特徴的であり、2 耕作痕の新段階及び 29 畦畔が近世段階と考えられることと併せて、13 世紀以降の当該地の姿が不明瞭である。

S=1/8

	900		1000		1100		1200		
	I期	II期	III期	IV期	1段階	2段階	1段階	2段階	
坏ア		133 罫 Po44 133 罫 Po45 罫立 3(140P)Po28	4 耕作痕 Po39 罫立 6(146P)Po38		147 土坑 Po46 4 耕作痕 Po40				
坏イ			18 流路 Po9 18 流路 Po10						
足高台 付坏	163 流路 Po72	163 流路 Po71							
皿ア	163 流路 Po66		163 流路 Po52 163 流路 Po53 163 流路 Po54 163 流路 Po55 163 流路 Po56 163 流路 Po57 163 流路 Po58 163 流路 Po59 163 流路 Po60 163 流路 Po61 163 流路 Po62 163 流路 Po63 163 流路 Po64 163 流路 Po65 163 流路 Po66 163 流路 Po67 163 流路 Po68 163 流路 Po69 163 流路 Po70 163 流路 Po71 163 流路 Po72 163 流路 Po73 163 流路 Po74 163 流路 Po75 163 流路 Po76 163 流路 Po77 163 流路 Po78 163 流路 Po79 163 流路 Po80 163 流路 Po81 163 流路 Po82 163 流路 Po83 163 流路 Po84 163 流路 Po85 163 流路 Po86 163 流路 Po87 163 流路 Po88 163 流路 Po89 163 流路 Po90 163 流路 Po91 163 流路 Po92 163 流路 Po93 163 流路 Po94 163 流路 Po95 163 流路 Po96 163 流路 Po97 163 流路 Po98 163 流路 Po99 163 流路 Po100						
皿イ	135 流路 Po48 18 流路 Po68 163 流路 Po65								
皿ウ									
柱状 高台									

凡例
 ◎: 底部回転係切り (遺構名) (編號番号)
 □: 底部回転係へラ切り 【例】 18 流路 Po9

※遺物下部キャプションの内容は以下のとおり

第 106 図 下坂本清合遺跡 2 区 遺構内出土土器坏・皿 時期別対応図

第2節 下坂本清合遺跡2区の調査における成果と課題

(1) 調査成果からみる下坂本清合遺跡の土地利用変遷 (第107図)

前節までの検討を踏まえ、調査地の変遷を示したものが第107図であり、5段階の変遷で理解できる。

【第①段階】(～10世紀前半)

河川の氾濫原であり、178流路→179流路→180流路→181流路→176流路と、大きく西から東へ河川が移り変わっていく様子が確認できた。調査地内は人が利用していない時期と考えられるが181流路出土緑釉陶器(Po148)などの出土は、周辺地でなんらかの公的施設もしくは当地域の有力者層に関連する施設が存在した可能性を示唆している。

【第②段階】(10世紀後半～11世紀前半)

163流路機能段階と考えられる。流路西岸には人為的な遺構は認められず、確認できたのは181流路の痕跡である135流路が窪地状に残存していた状況である。第①段階に引き続き、当該地での積極的な土地利用はなされていない段階と捉えることができる。

【第③段階】(11世紀後半～12世紀)

当該地が耕作地として開発され、岸部に杭が打たれ人為的に管理されたと考えられる36流路に沿って掘立柱建物が建てられる。木製祭祀具を用いた祭祀が行われ、多量の漆器が使用されるなど、一般集落とは異なった性格も窺われ、遺跡の最盛期と捉えられる段階である。

【第④段階】(13世紀～近世)

163流路以来流れていた河川が湿地状堆積(18流路)として埋没した段階である。18流路の西岸には、人の活動した痕跡がみられなくなる。

【第⑤段階】(近世)

耕作のための導水施設と考えられるかく乱流路(第84図)の西側を再び耕作地として利用し始める。畠地としてだけではなく、水田も営まれるようになる。

以上のようにみても、第③段階である11世紀後半において、それまで利用されてこなかった低湿地を積極的に開発・利用していった人々の様子を覗うことができる。

ではなぜ11世紀後半に至って低湿地の開発が行われたのか。この点については、木村茂光氏の文献史学の立場からの指摘が示唆的である。木村氏は、11世紀中頃から国衙領の開発所領である別名・保が成立し、平安時代後期にピークを迎えること、これらを背景に12世紀前半から中頃には寄進地系荘園が成立すること、また少なくとも12世紀中頃には畠地の二毛作がはじまっており、生産性の向上が図られていたことなどを根拠に、平安時代後期を「大開発の時代」と位置づけている(木村2000)。今回の調査で明らかになった11世紀後半～12世紀における土地開発の様相も、この文脈の中で捉えられるのではないかと考える。

下坂本清合遺跡の所在する下坂本地区については、荘園や国衙領と関連するような記録は見られない。しかし河内川を挟んで対岸の常松地区には、17世紀末に成立したとされる『因幡民談記』『郡郷ノ部』に「恒末保」が存在したことが記されており、当時国衙による管理が及んでいた地が近隣に存在していた可能性がある。想像を逞しくすれば、保における土地開発の影響をなんらかの形で下坂本地区が受けた可能性も考えられる。

(2) 今後の課題

最後に、今回明らかにできなかった点について明記し、今後の課題としたい。

掘立柱建物の性格

今回の調査で確認された6棟の掘立柱建物について、その性格を明らかにし得なかった。当遺跡で確認された掘立柱建物はいずれも柱筋の通らない歪な形状をしており、このような建物を集落のうちの住居としてよいのか、耕作地に付随する道具小屋のようなものとしてよいのか判断できなかった。

今後当該期の掘立柱建物について、総合的な検討が必要であろう。

漆器群の性格

36流路を中心に出土した漆器群については十分に検討できなかった。これらの漆器群は、人形や舟形などの木製祭祀具とともに、本遺跡の性格を位置付ける重要な遺物であると考えられ、形態的な特徴のほか、その用途についても検討すべきであると考えていたが、今回はそこまで至らなかった。2区の東西に隣接する下坂本清遺跡1・3区は平成26・27年度に調査を行っており、今回と同じく多量の漆器が出土している。1・3区報告時に合わせて検討したい。

13世紀以降の土地利用

今回、13世紀以降近世にかけての人々の活動痕跡を確認することができず、当該期には人が積極的に利用していない土地であったと解釈した。この要因について検討を加えることができなかった。この点についても1・3区報告時に目途をつけることができればと考えている。

平安時代後期の土地開発状況

前項で述べたように、今回の調査でみられた11世紀後半から12世紀にかけての土地開発の様子は、平安時代後期にみられる農業技術の進歩などを背景とした「大開発時代」の一様相ではないかと考えた。しかし、周辺地域がどのような様相であったのかを検討することはできなかった。今後発掘調査成果の丹念な再検討が必要であろう。加えて文献史学における国衙領の研究などの進展が図られれば、これまでの発掘調査成果に新たな光をあてることのできるのではないだろうか。研究の進展を待ちたい。

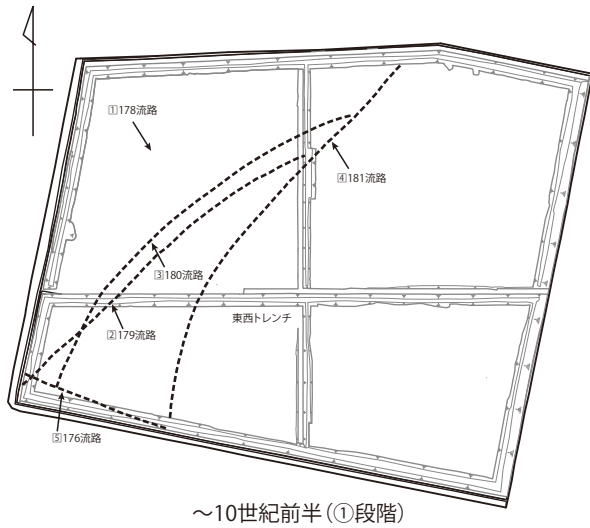
以上、雑駁ではあるが、今回の報告で検討できなかった点を列挙した。改めてみると課題の積み残しが多い。しかし、同じく鳥取西道路の改築事業に伴い発掘調査を実施している河内川東岸の常松菅田遺跡、常松大谷遺跡の成果とともに、これまであまり発掘調査がなされておらず、不明であった河内川周辺の歴史が、おぼろげながら明らかになってきた点に、今回の発掘調査の意義が見いだせよう。

【註】

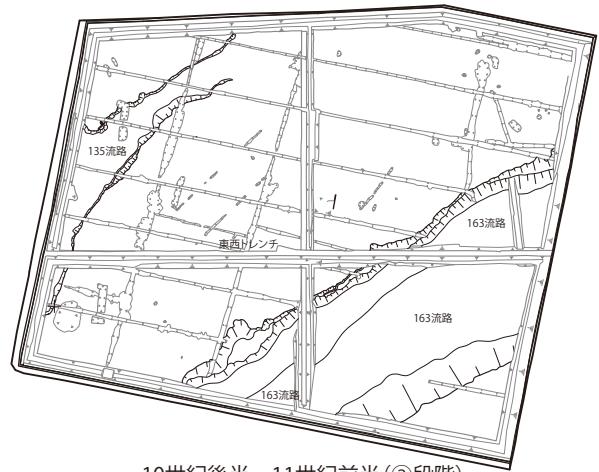
- 1) 今回検討に使用した遺物の実見に際して、鳥取市教育委員会文化財課、公益財団法人鳥取市文化財団にお世話になった。
- 2) 今回I期としたものは、それぞれの器種の系譜など、前代の土器と併せて検討し、改めて分類する必要があると考える。

【参考文献】

加藤裕一 2007「因幡・伯耆の調理具」『山陰における中世の調理具』第6回山陰中世土器検討会資料集



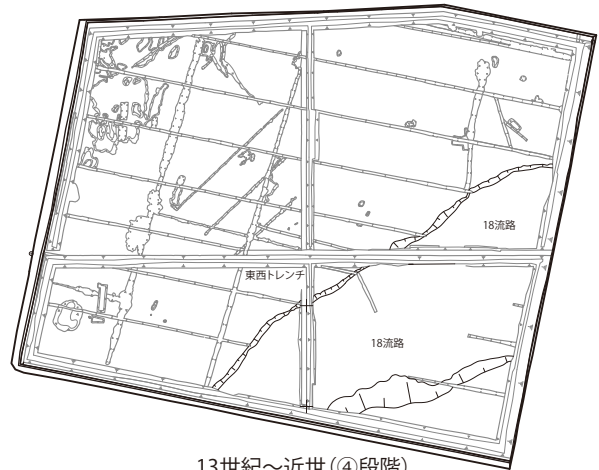
～10世紀前半(①段階)



10世紀後半～11世紀前半(②段階)



11世紀後半～12世紀代(③段階)



13世紀～近世(④段階)



近世(⑤段階)



第107図 下坂本清合遺跡2区の土地利用変遷

木村茂光 2000 『中世の民衆生活史』 青木書店

財団法人鳥取市教育福祉振興会 1994 『菖蒲遺跡 中小河川改修事業 大井手川改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査』

財団法人鳥取市教育福祉振興会 1996 『秋里遺跡 鳥取都市計画事業秋里土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査』

財団法人鳥取市教育福祉振興会 1996 『秋里遺跡 マンション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査』

財団法人鳥取市教育福祉振興会 1996 『山ヶ鼻遺跡Ⅱ』

財団法人鳥取市教育文化財団 2004 『本高円ノ前遺跡 中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』

財団法人鳥取市文化財団 2005 『内海中寺ノ谷遺跡 県営内海中地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (第1冊)』

財団法人鳥取市文化財団 2013 『卯垣ギットリ遺跡 都市計画道路滝山桜谷線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

佐藤亜聖 2013 「東播系須恵器研究の現状と課題－鉢の編年を中心に－」 『山陰地方における東播系須恵器』 第13回 山陰中世土器検討会資料

太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』 太宰府市の文化財第49集

谷口恭子 1996 「遺物について」 『山ヶ鼻遺跡Ⅱ』 財団法人鳥取市教育福祉振興会

筒井崇史・村田和弘・松尾史子 2004 「古代日本海沿岸地域における土器様相の比較検討」(上) 『京都府埋蔵文化財情報』 第93号

中森祥 2010 「因幡・伯耆における古代土器の編年とその様相」 『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』 鳥根県古代文化センター

中森祥 2012 「山陰地方における古代末～中世前期の土師器」 『土器・陶磁器から見た中世前半期の山陰－検討会10年のあゆみ－』 第11回山陰中世土器検討会資料集

橋本久和 1994 「山陰」 『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社

八峠興 1998 「山陰における中世土器の変遷について－供膳具・煮炊具を中心として－」 『中近世土器の基礎研究』 XIII

八峠興 2000 「山陰における平安時代の土器・陶磁器について」 『中近世土器の基礎研究』 XV

八峠興 2001 「柱状高台考」 『中世土器研究論集－中世土器研究会20周年記念論集－』 中世土器研究会

八峠興 2004 「山陰の中世土器に関する覚書」 『中近世土器の基礎研究』 XIII

岡田裕之・八峠興 2014 「鳥取における古代から中世前期の土器編年－須恵器と回転台土師器を基に－」 『鳥取県埋蔵文化財センター紀要』 5

米子市教育文化事業団 1996 『錦町第1遺跡』



写真図版



1. 調査前航空写真撮影（南から）



2. 第3遺構面完掘状況航空写真撮影（南から）

図版 2



1. 東西トレンチ土層断面(1) (Y=-23,630~-23,660間 南西から)



2. 東西トレンチ土層断面(2) (Y=-23,610~-23,630間 南西から)



1. 東西トレンチ土層断面(3) (Y=-23,590~-23,600間 南西から)



2. 東西トレンチ土層断面(4) (Y=-23,570~-23,590間 南西から)

図版 4



1. 東西トレンチ土層断面(5) (Y=-23,570~-23,550間 南西から)



2. 北壁土層断面(1) (Y=-23,620~-23,650間 南西から)



1. 北壁土層断面(2) (Y=-23,600~-23,620間 南西から)



2. 北壁土層断面(3) (Y=-23,580~-23,600間 南西から)



1. 北壁土層断面(4) (Y=-23,560~-23,580間 南西から)



2. 北壁土層断面(5) (Y=-23,540~-23,560間 南西から)



1. 南壁土層断面(1) (Y=-23,640~-23,655間 北西から)



2. 南壁土層断面(2) (Y=-23,620~-23,640間 北西から)



1. 南壁土層断面(3) (Y=-23,600~-23,620間 北西から)



2. 南壁土層断面(4) (Y=-23,580~-23,600間 北西から)



1. 南壁土層断面(5) (Y=-23,560~-23,580間 北西から)



2. 西壁土層断面(1) (X=-55,300~-55,322間 南東から)



1. 西壁土層断面(2) (X=-55,280~-55,300間 南東から)



2. 西壁土層断面(3) (X=-55,255~-55,280間 南東から)



1. 調査区南西部 表土除去後遺構検出状況 (29畦畔 西から)



2. 調査区南東部 表土除去後遺構検出状況 (18流路 南東から)



1. 調査区北西部 2 耕作痕完掘状況 (西から)



2. 調査区南西部 2 耕作痕、29擬似畦畔完掘状況 (西から)

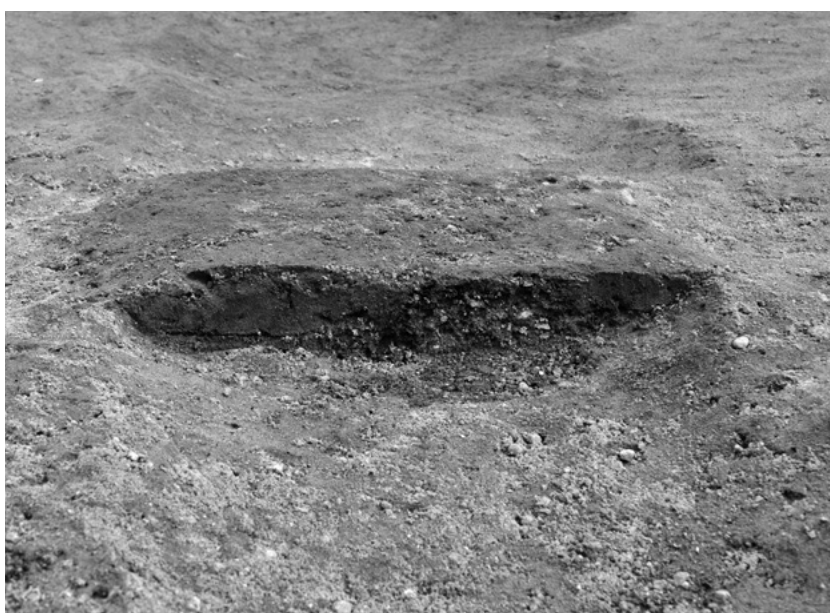
1. 西壁 29擬似畦畔土層断面
(東から)



2. 169溝完掘状況 (南西から)



3. 169溝土層断面 (南西から)





1. 18流路、36流路完掘状況 (南西から)



2. 18流路、36流路、163流路土層断面 (東から)



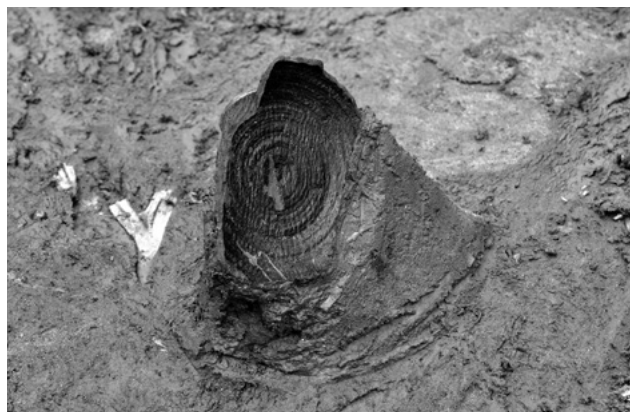
1. 18流路 土器(Po16~18)出土状況 (北西から)



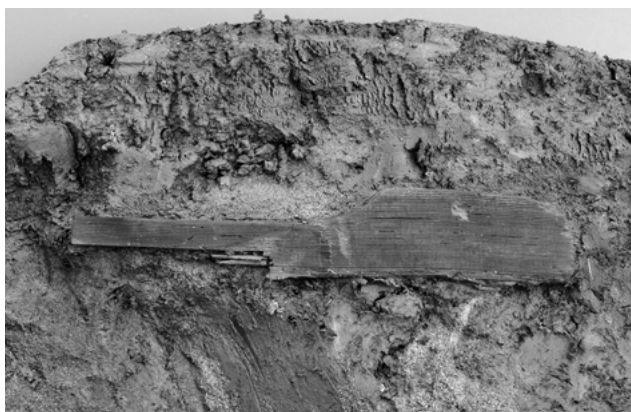
2. 18流路 漆器(W1)出土状況 (北から)



3. 18流路 漆器(W2)出土状況 (南から)



4. 18流路 漆器(W5)出土状況 (南から)



5. 18流路 木製品(W17)出土状況 (南西から)



6. 18流路 下駄(W22)出土状況 (北西から)



7. 18流路 木製品(W23)出土状況 (北東から)



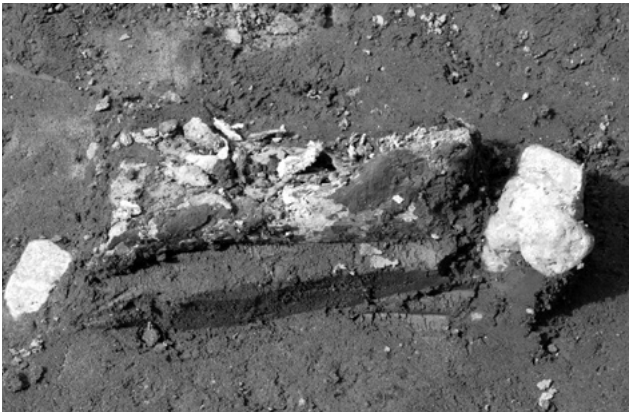
8. 18流路 下駄(W24)出土状況 (西から)



1. 18流路 獣骨(B 1)出土状況 (北から)



2. 18流路 獣骨(B 2)出土状況 (北西から)



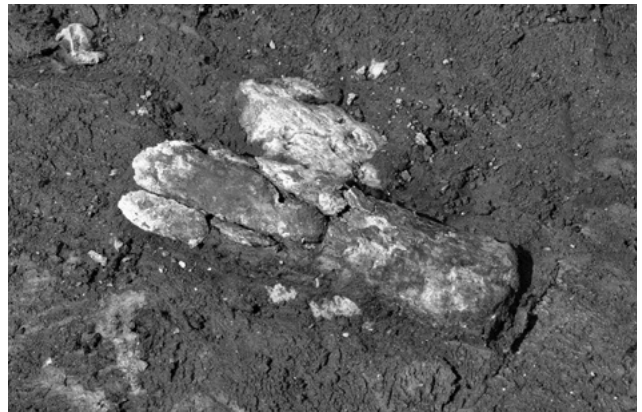
3. 18流路 獣骨(B 3)出土状況 (南から)



4. 18流路 獣骨(B 5)出土状況 (南西から)



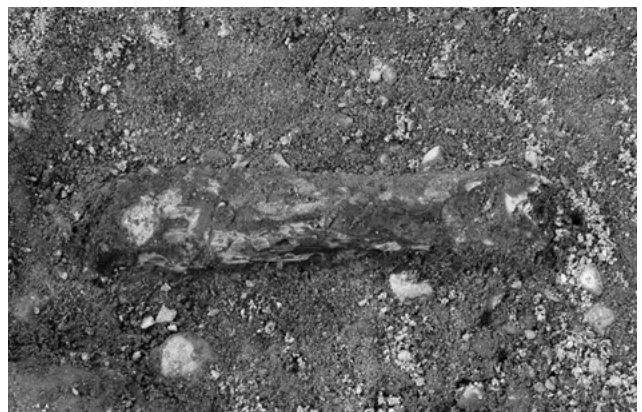
5. 18流路 獣骨(B 6)出土状況 (北東から)



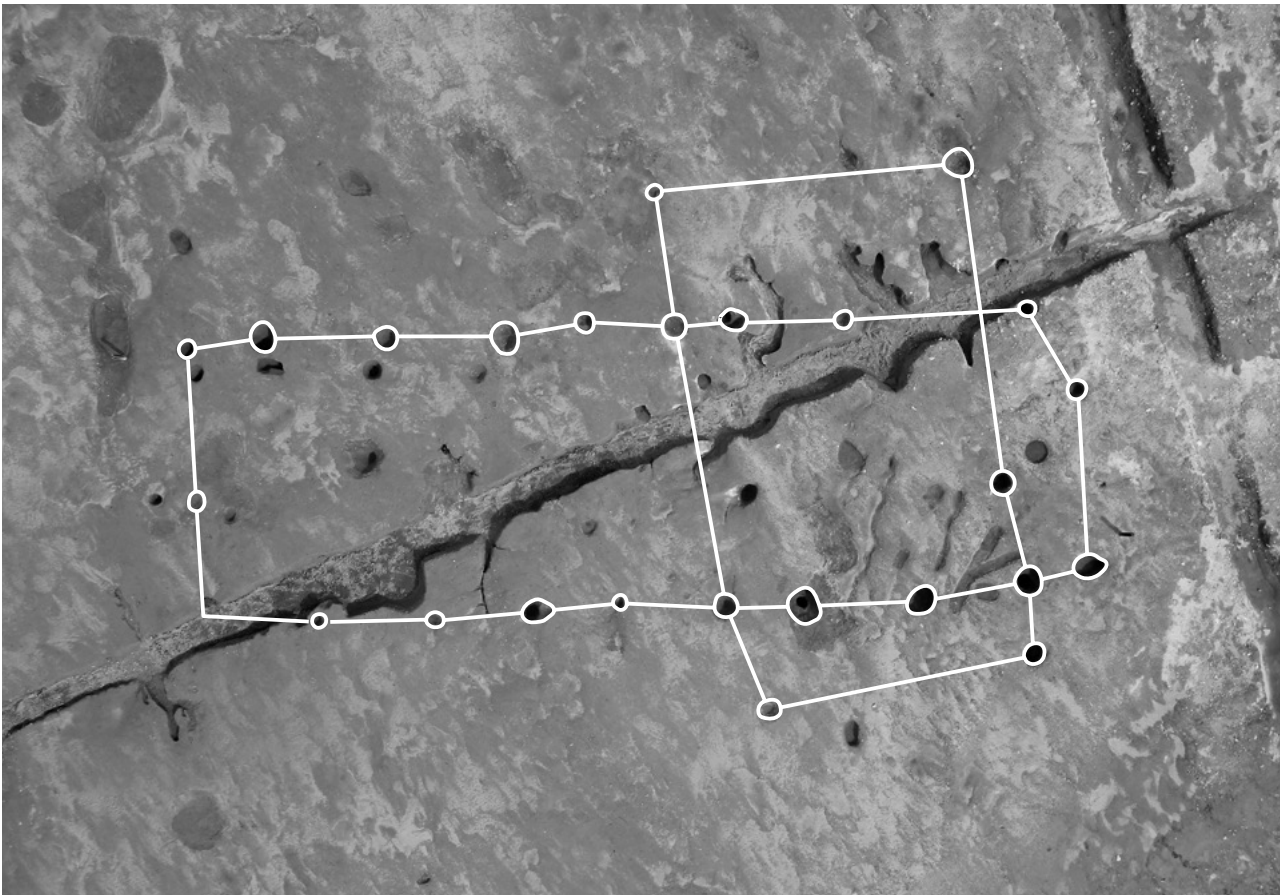
6. 18流路 獣骨(B 7)出土状況 (南西から)



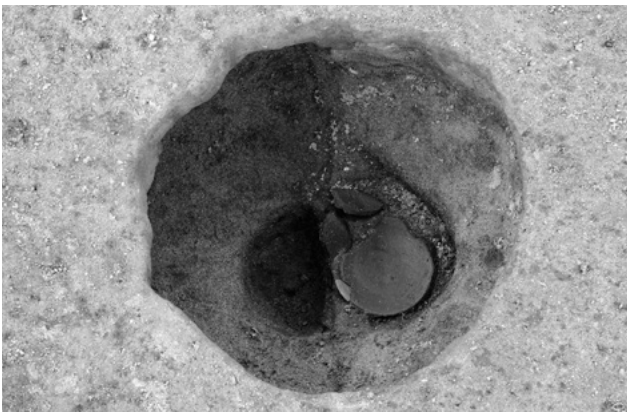
7. 18流路 獣骨(B 8)出土状況 (北東から)



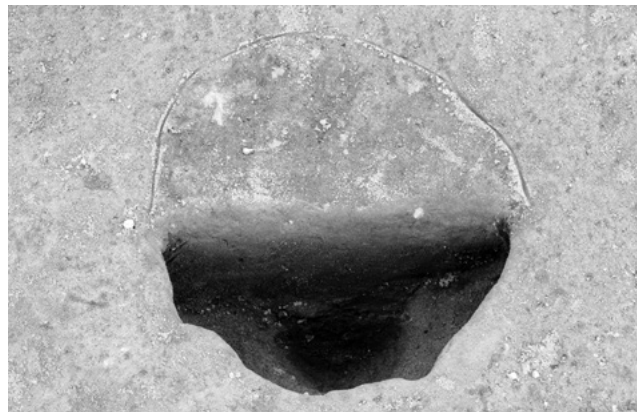
8. 18流路 獣骨(B 9)出土状況 (南から)



1. 掘立柱建物1・2 (上空から)



2. 23ピット遺物出土状況 (北東から)



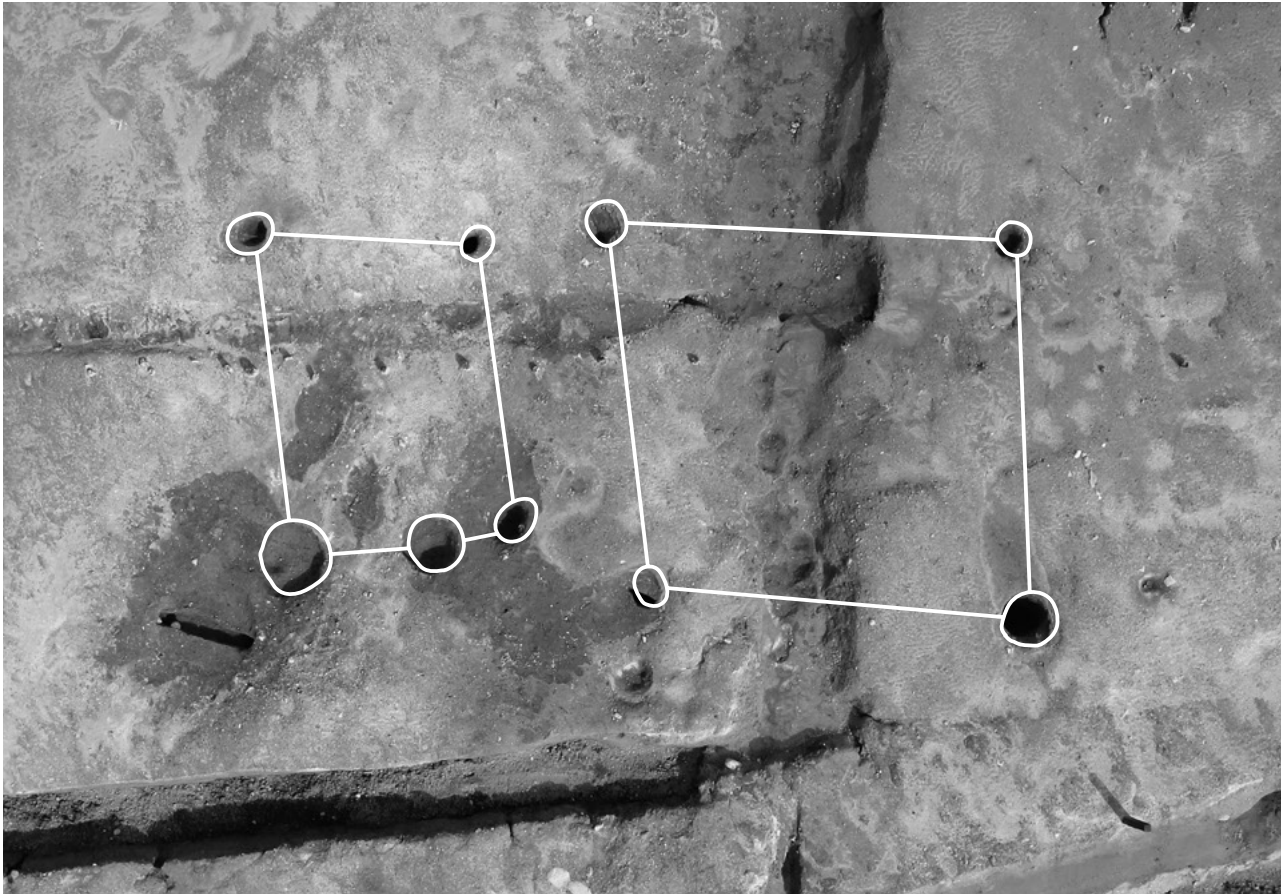
3. 23ピット土層断面 (南東から)



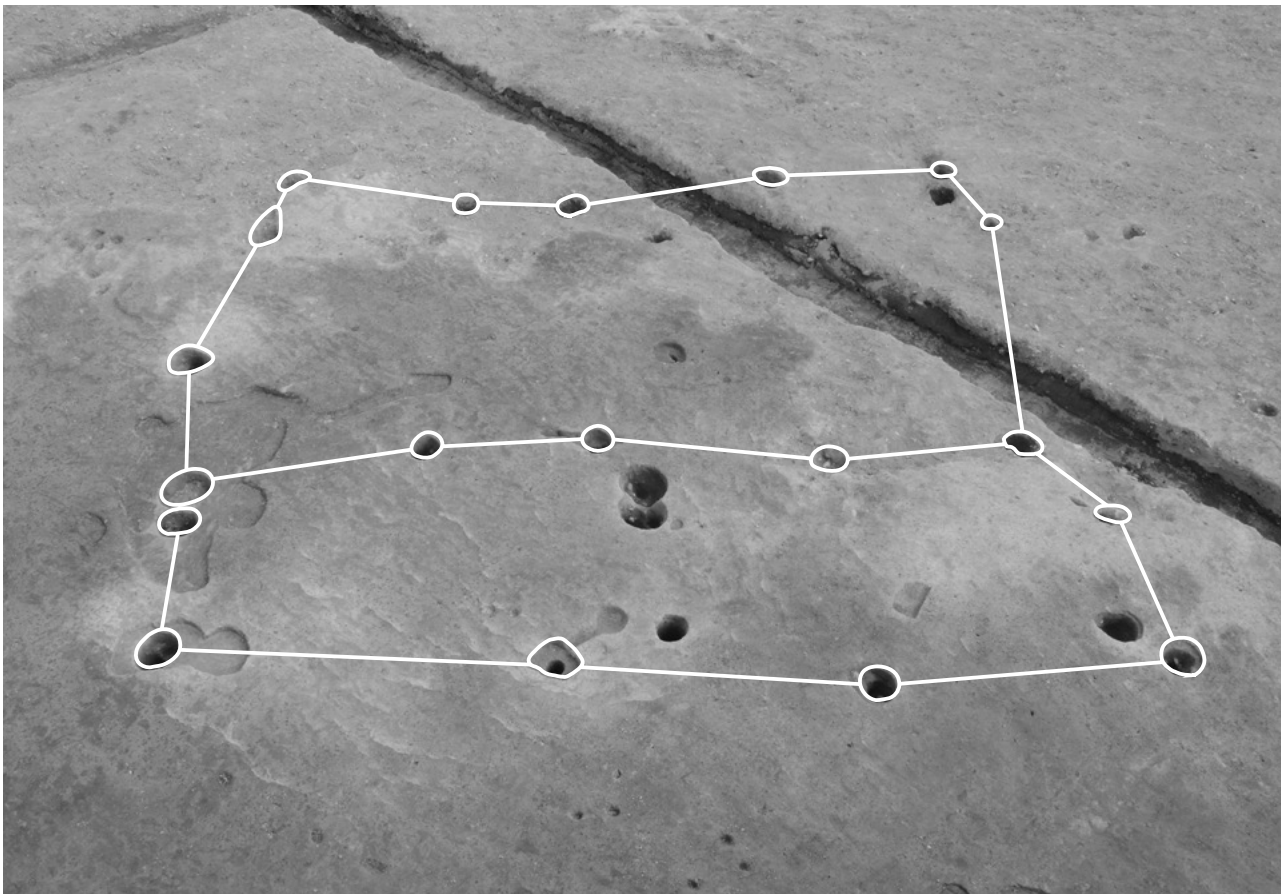
4. 27ピット土層断面 (北東から)



5. 28ピット根石検出状況 (南東から)



1. 掘立柱建物 3・4 (上空から)



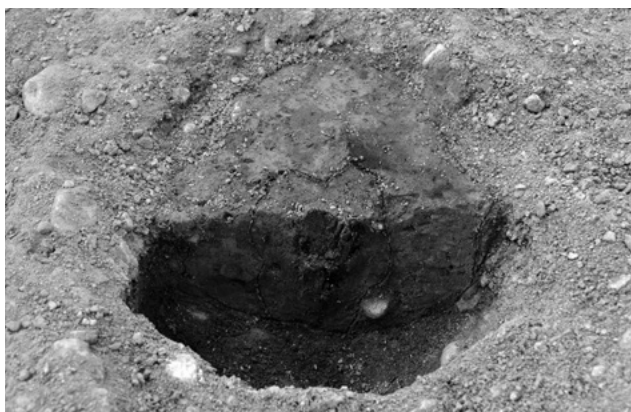
2. 掘立柱建物 5 (北西から)



1. 140ピット土層断面 (東から)



2. 140ピット遺物出土状況 (東から)



3. 93ピット土層断面 (南東から)



4. 105ピット土層断面 (南東から)



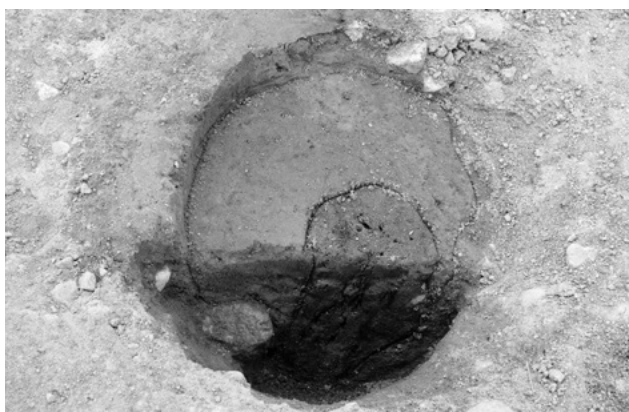
5. 99ピット土層断面 (南から)



6. 111ピット土層断面 (南東から)



7. 113ピット土層断面 (南から)



8. 115ピット土層断面 (南から)



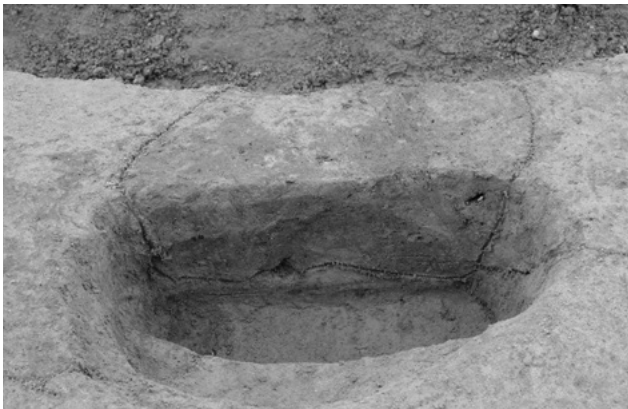
1. 柵列1 (上空から)



2. 47ピット土層断面 (南から)



3. 117ピット土層断面 (南東から)



4. 73ピット土層断面 (南から)



5. 85ピット土層断面 (東から)

1. 90土坑完掘状況（北から）



2. 90土坑土層断面（北東から）



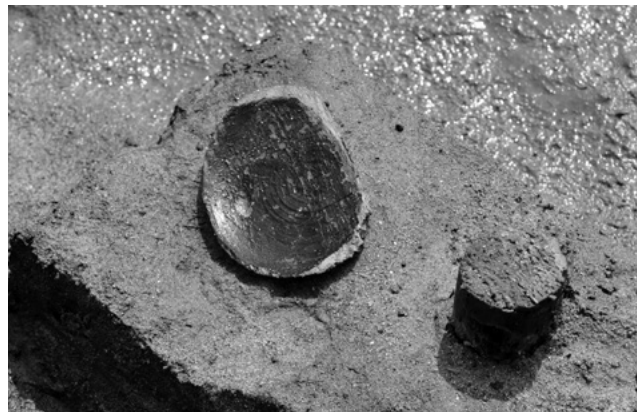
3. 第2遺構面掘立柱建物（上空から）



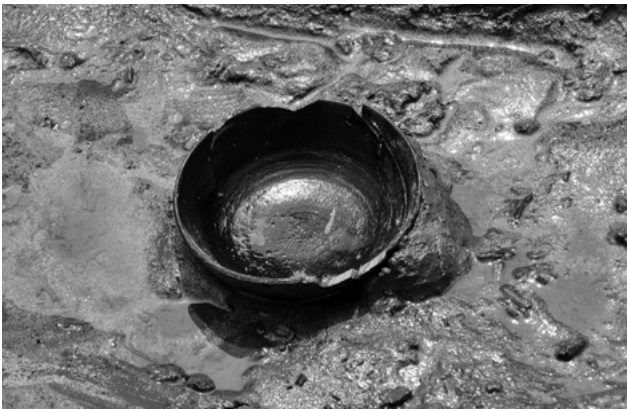
1. 36流路完掘状況 (南西から)



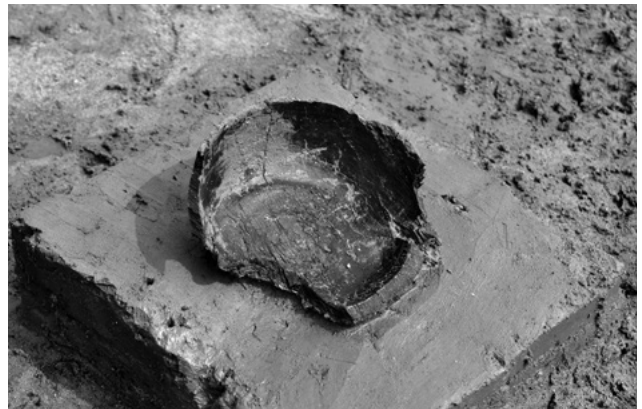
2. 36流路漆器(W33)出土状況 (北から)



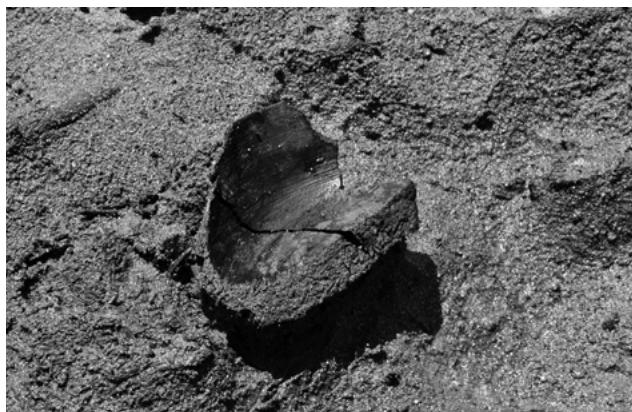
3. 36流路漆器(W28)出土状況 (西から)



4. 36流路漆器(W35)出土状況 (北から)



5. 36流路漆器(W32)出土状況 (北西から)



1. 36流路漆器(W36)出土状況 (北西から)



2. 36流路舟形(W40)出土状況 (南東から)



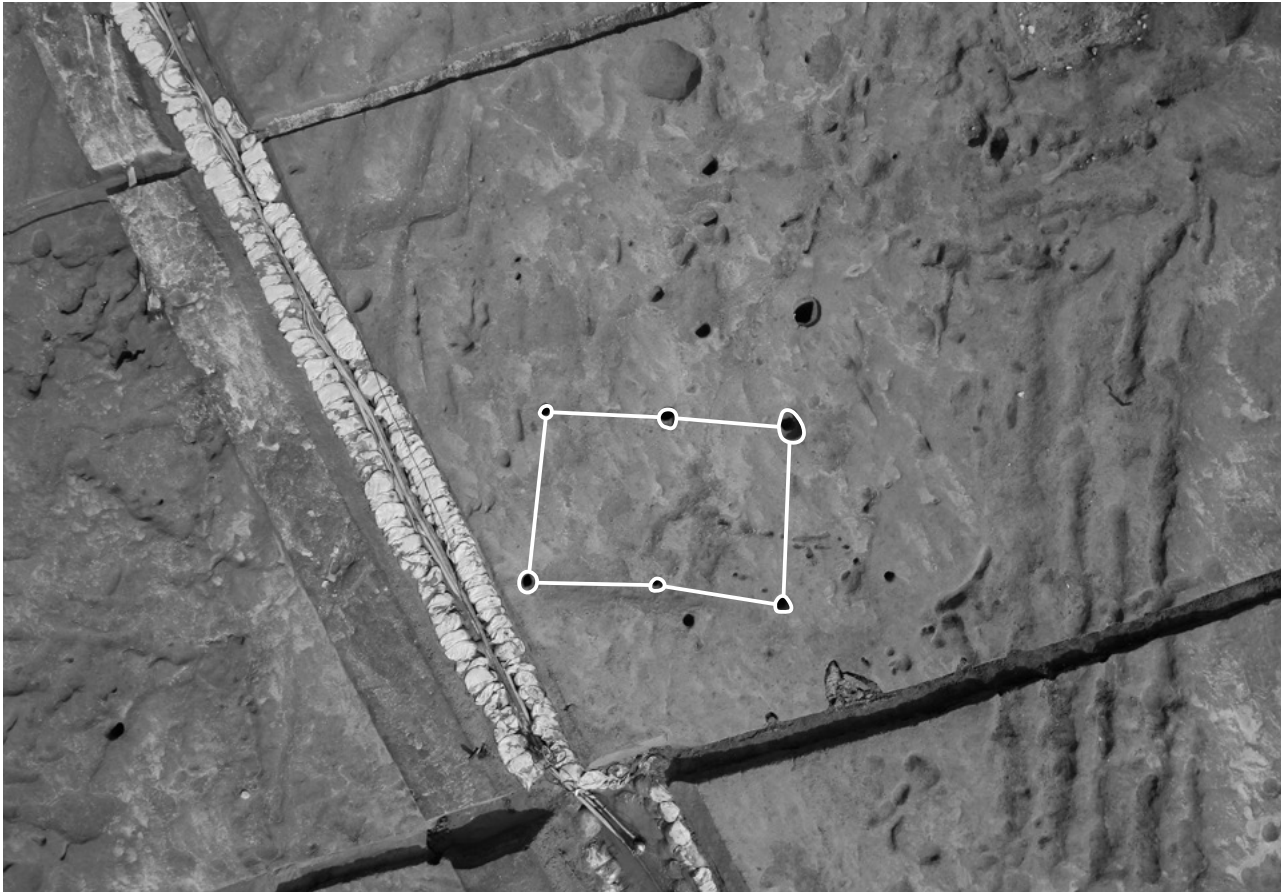
3. 36流路人形(W38)出土状況 (南東から)



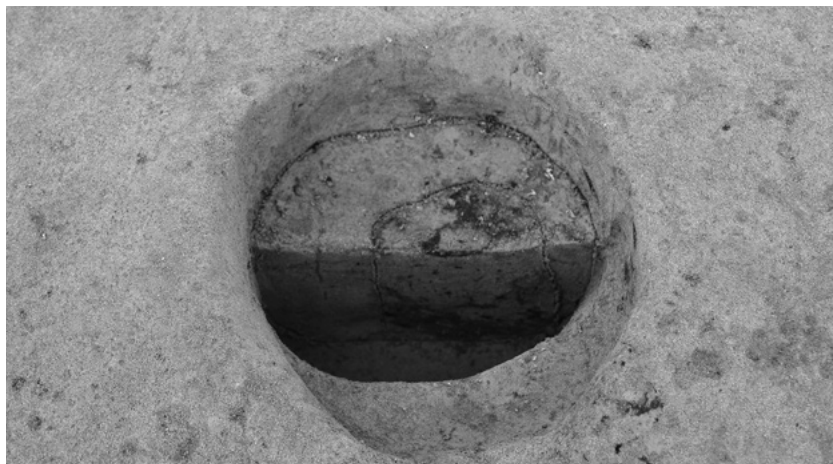
4. 36流路獣骨(B14)出土状況 (西から)



5. 104集石検出状況 (北から)



1. 掘立柱建物6及び周辺ピット（上空から）



2. 141ピット土層断面(南から)



3. 142ピット土層断面
(北東から)



1. 4 耕作痕全体 (上空から)



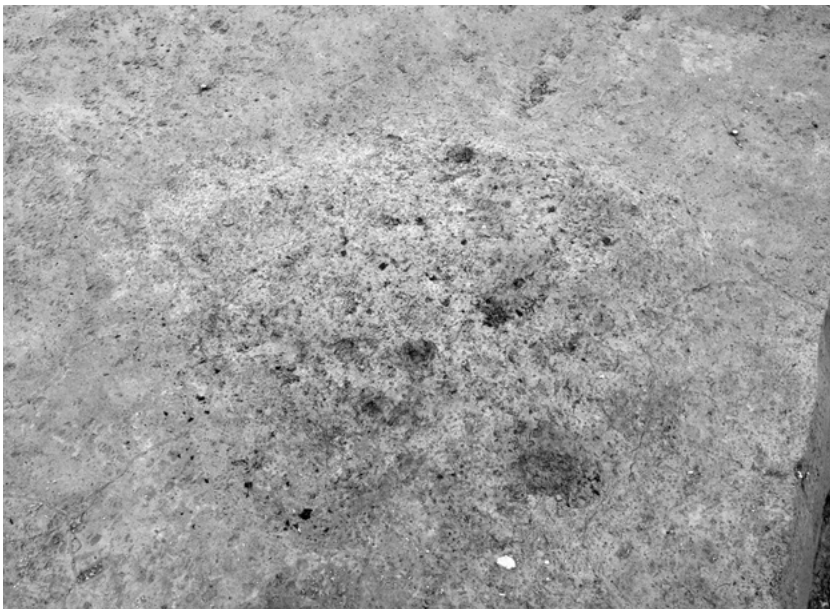
2. 4 耕作痕土層断面A-A'
ライン(東から)



3. 4 耕作痕土層断面C-C'
ライン(南東から)



1. 1 炭化物範囲 (南東から)

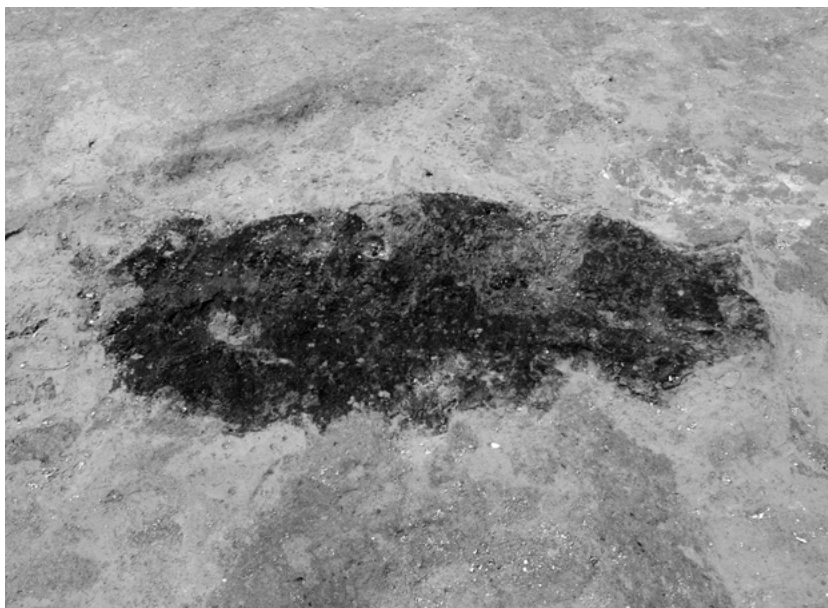


2. 1 炭化物範囲完掘状況
(南東から)



3. 1 炭化物範囲土層断面
A-A'ライン (南西から)

1. 3炭化物範囲 (南東から)



2. 3炭化物範囲近景 (南東から)



3. 3炭化物範囲土層断面 (南東から)

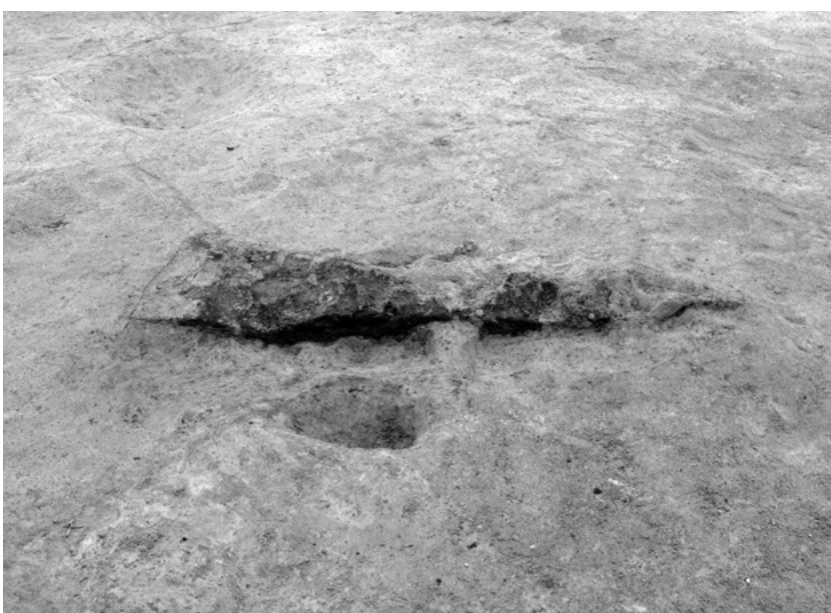




1. 175炭化物範囲検出状況
(南西から)

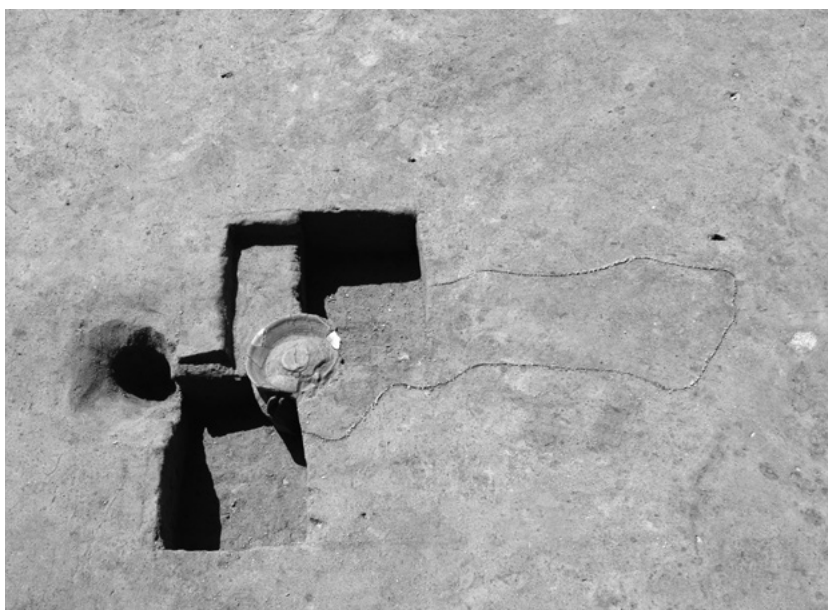


2. 175炭化物範囲完掘状況
(南西から)



3. 175炭化物範囲土層断面
(南西から)

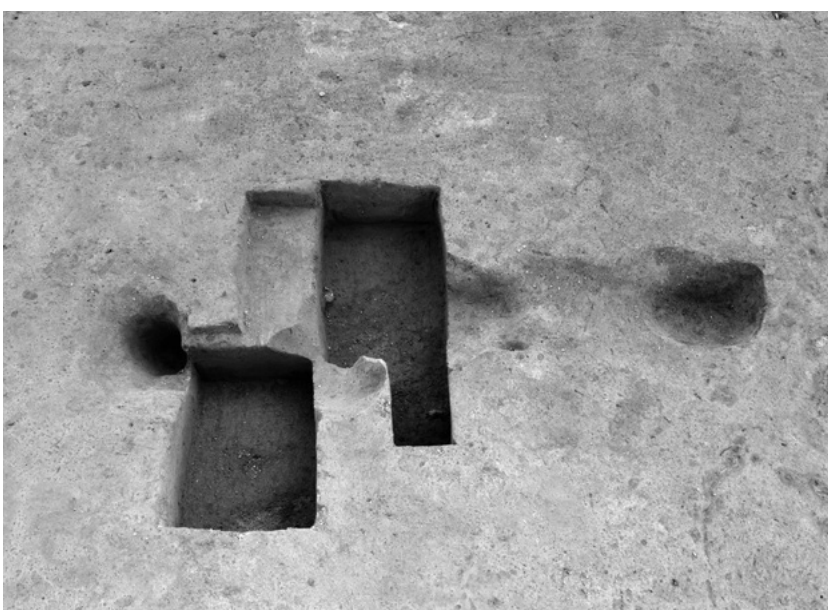
1. 133落ち込み検出状況
(北東から)

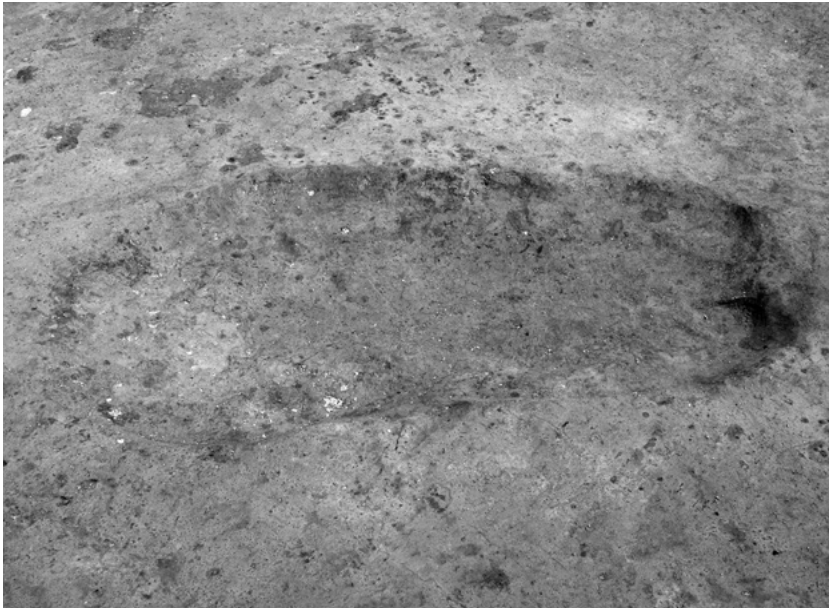


2. 133落ち込み土層断面
(南東から)



3. 133落ち込み完掘状況
(北東から)

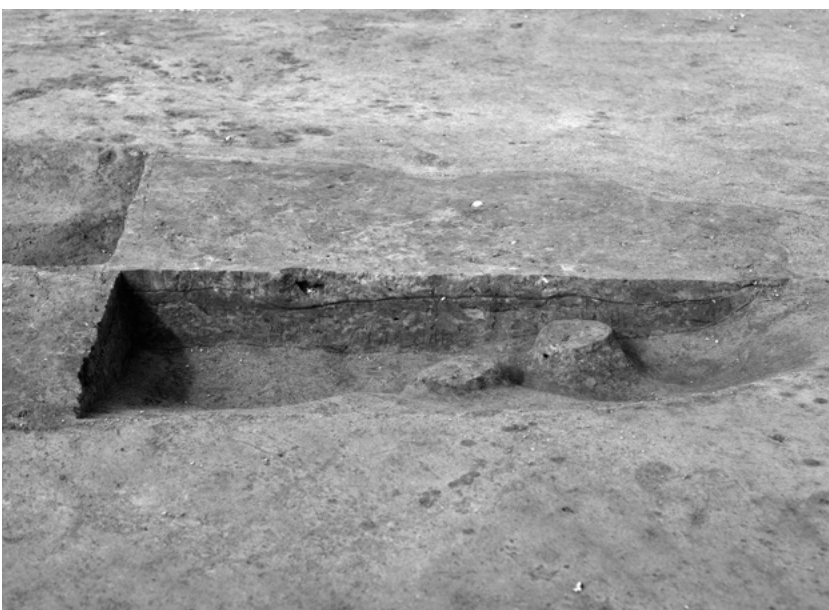




1. 131土坑完掘状況（南西から）



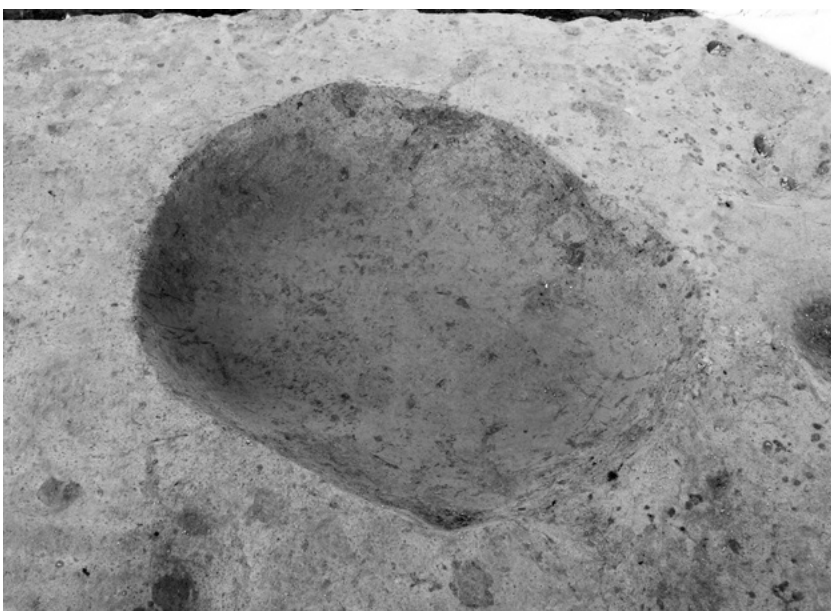
2. 131土坑炭化物検出状況
（南西から）



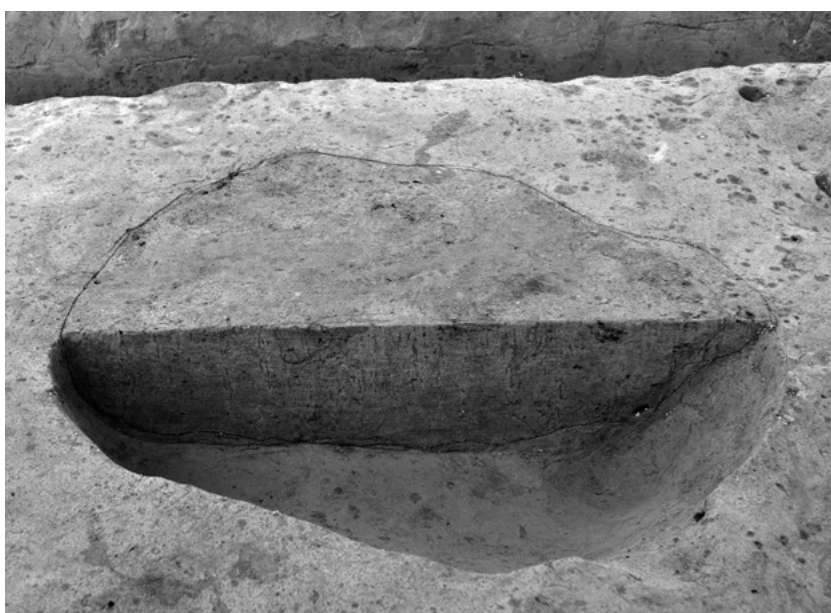
3. 131土坑東西（東側）土層
断面南東半部（南西から）



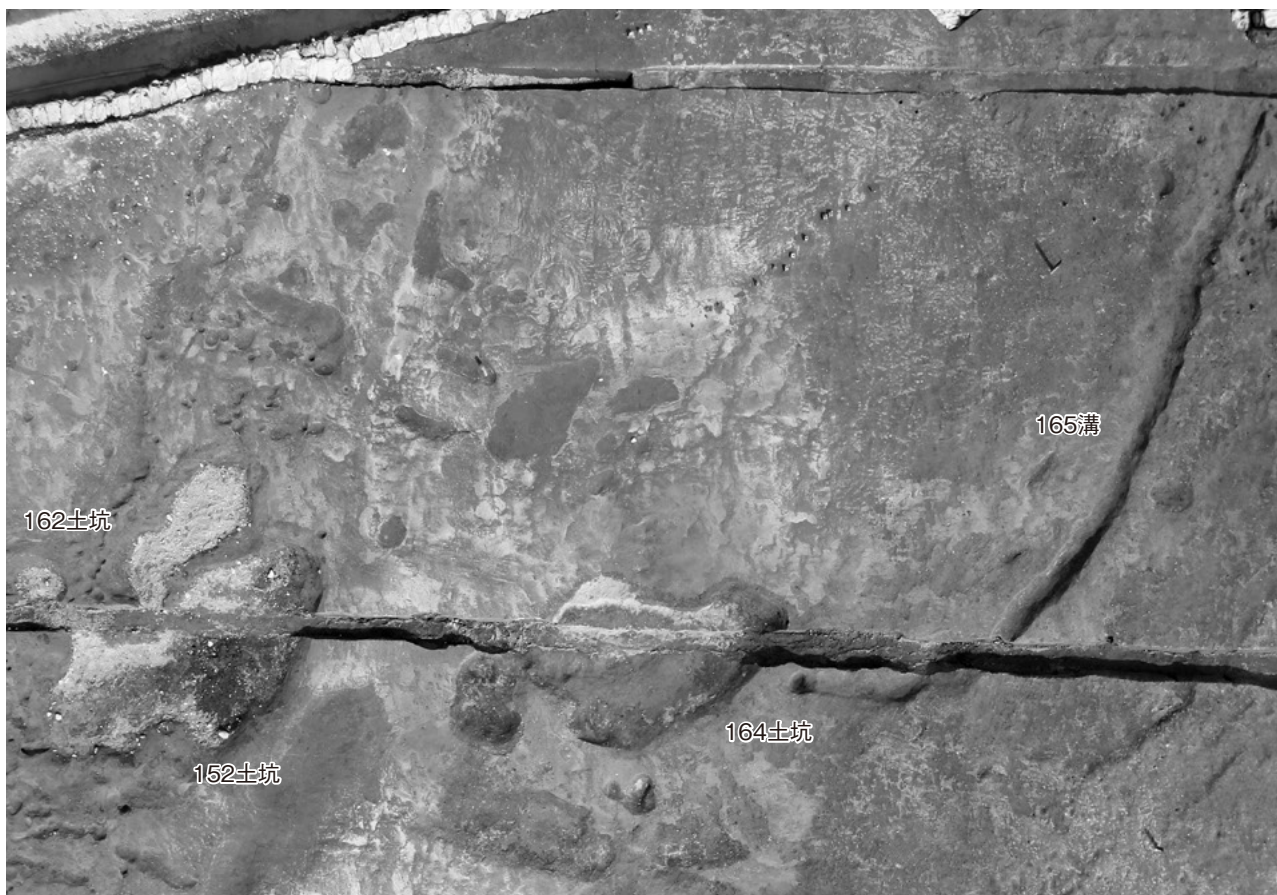
1. 136土坑完掘状況（南西から）



2. 147土坑完掘状況（南から）



3. 147土坑土層断面（南から）



2. 162・164・152土坑、165溝完掘状況(上空から)



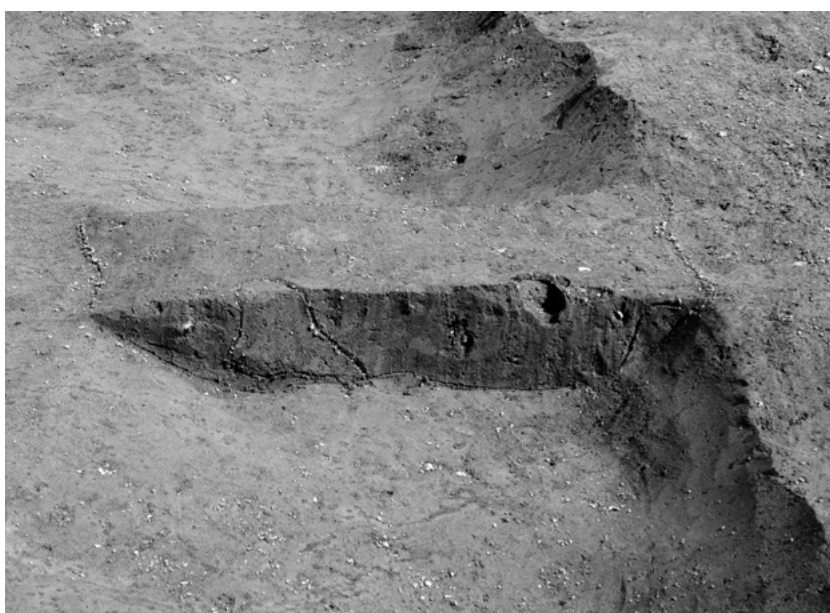
2. 152土坑土層断面(南西から)



1. 162土坑土層断面（北から）



2. 164土坑土層断面（南から）



3. 165溝土層断面（南西から）



1. 170土坑完掘状況（南東から）



2. 170土坑土層断面（南東から）



3. 135流路完掘状況（南西から）



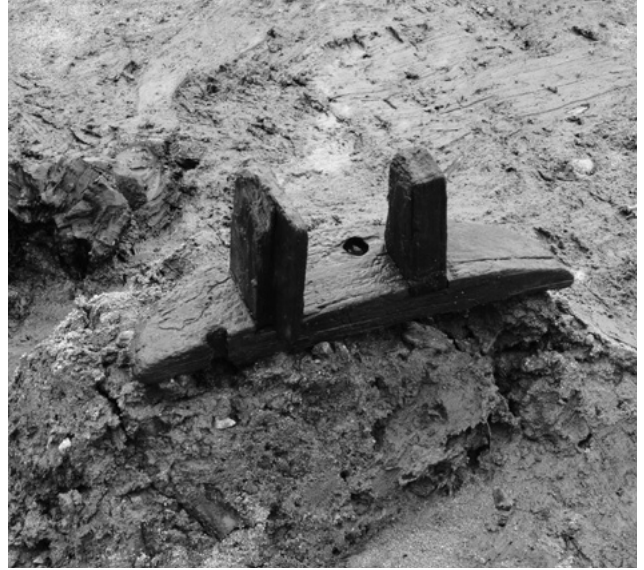
1. 163流路完掘状況(南西から)



2. 136・163流路B-B`ライン北半部土層断面(西から)



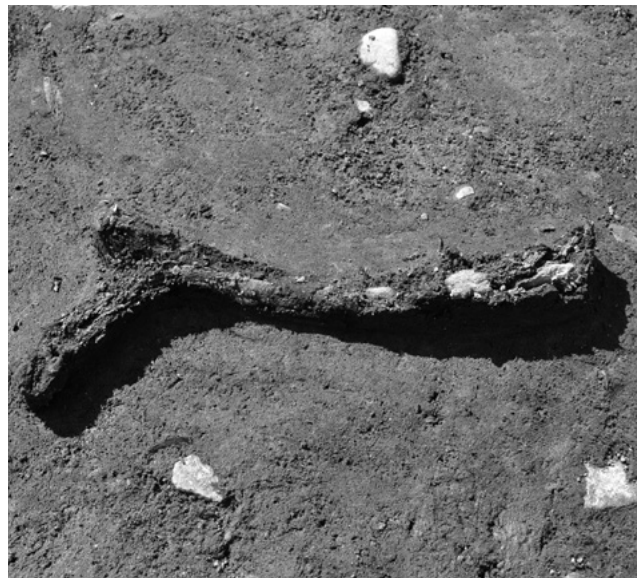
1. 163流路桶底(W43)出土状況(南から)



2. 163流路下駄(W44)出土状況



3. 163流路弓(W46)出土状況(南東から)



4. 163流路獣骨(B15)出土状況(東から)



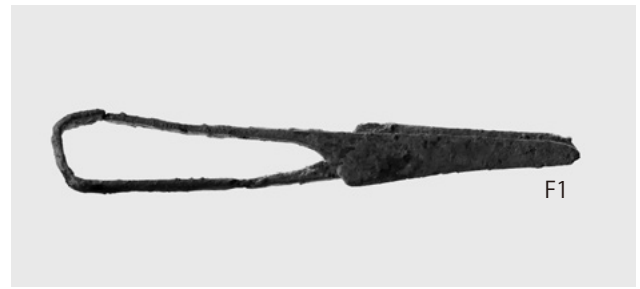
5. 163流路人形(W48)出土状況(北西から)



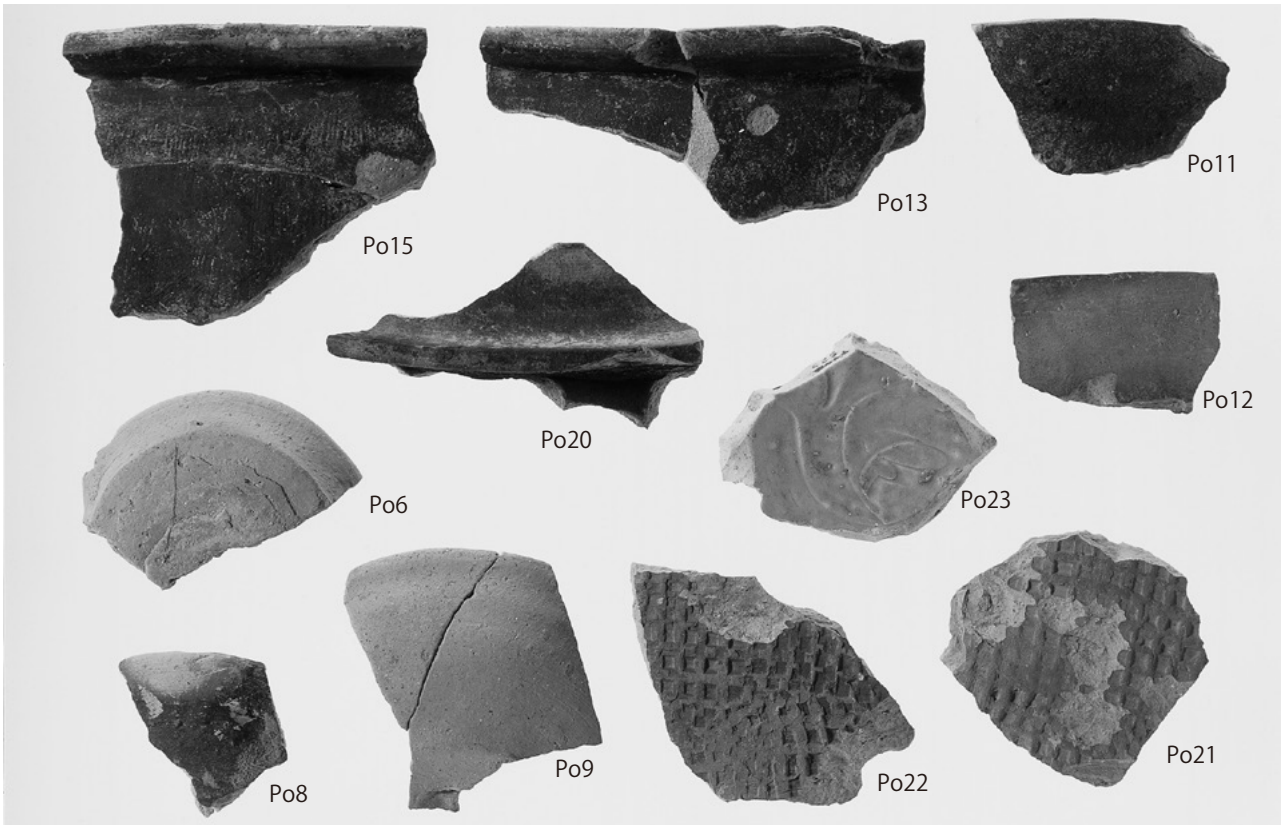
6. 163流路土師器鍋(Po95)出土状況(南西から)



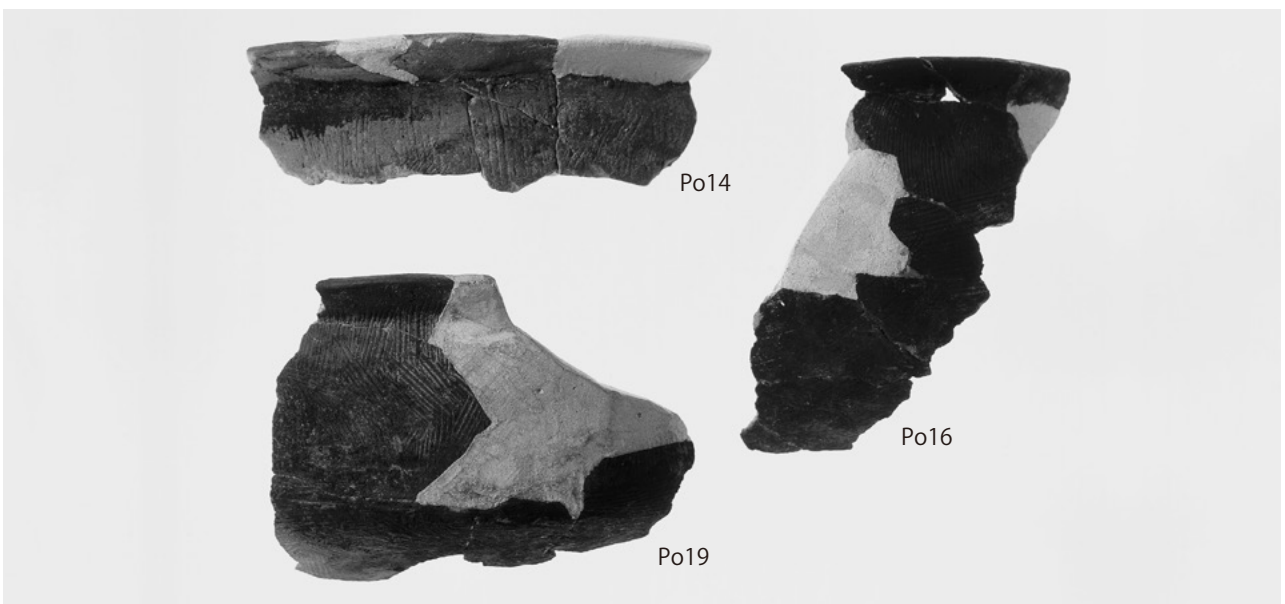
1. 2耕作痕出土遺物



2. 18流路出土遺物(1)



3. 18流路出土遺物(2)



4. 18流路出土遺物(3)



1. 18流路出土遺物(4)



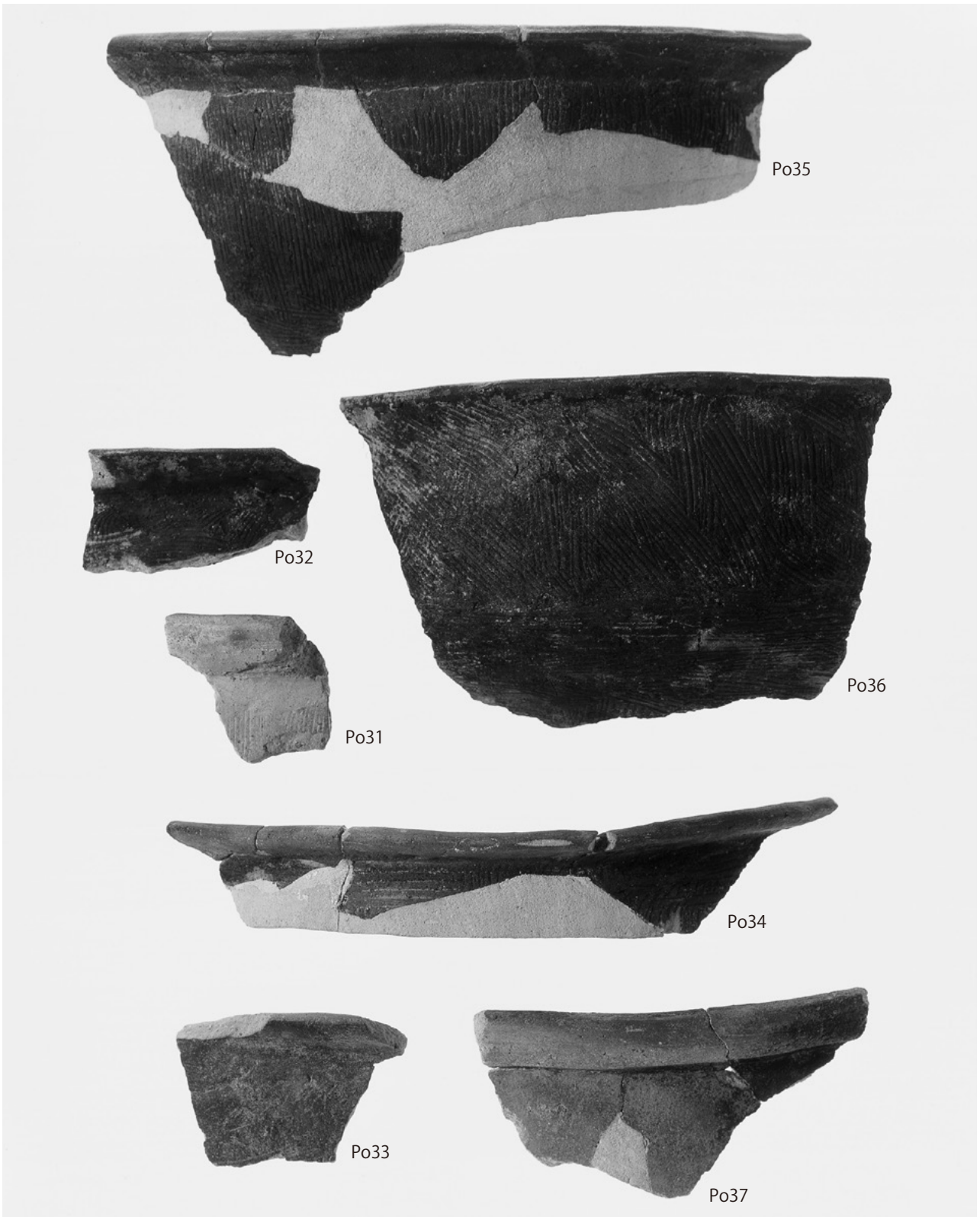
3. 掘立柱建物 3 (140ピット) 出土遺物



2. 掘立柱建物 1 (23ピット) 出土遺物



4. 柵列1周辺ピット群(81ピット)出土遺物



1. 36流路出土遺物



1. 4 耕作出土遺物



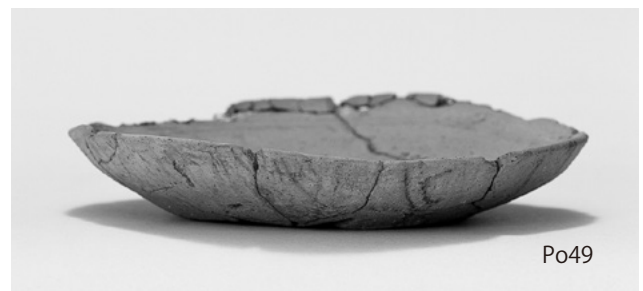
2. 1 炭化物範囲出土遺物



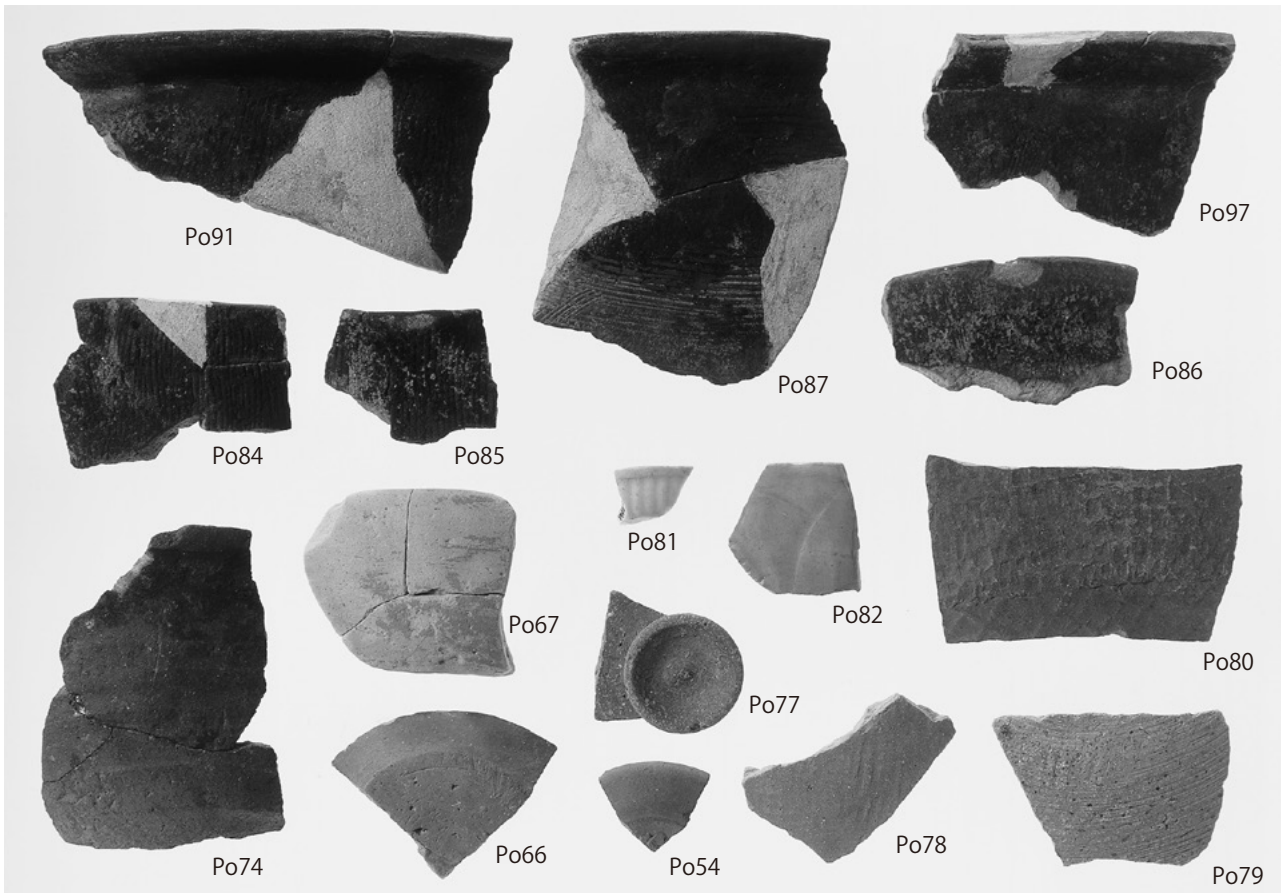
3. 133 落ち込み出土遺物



4. 147 土坑出土遺物



5. 135 流路出土遺物



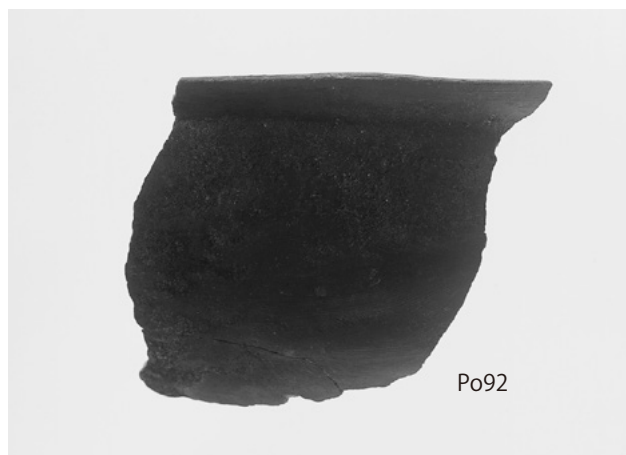
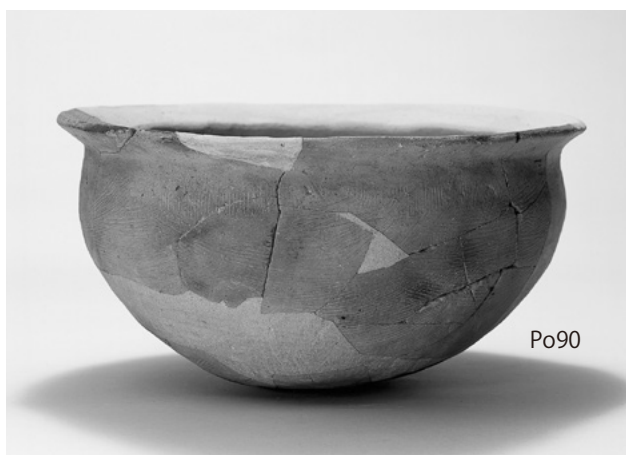
1. 163流路出土遺物(1)



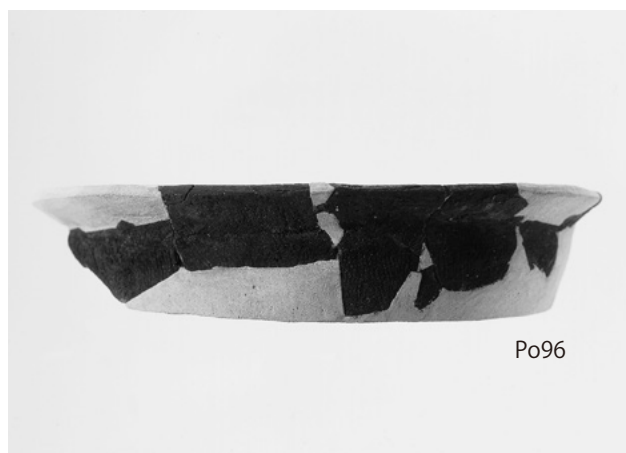
2. 163流路出土遺物(2)



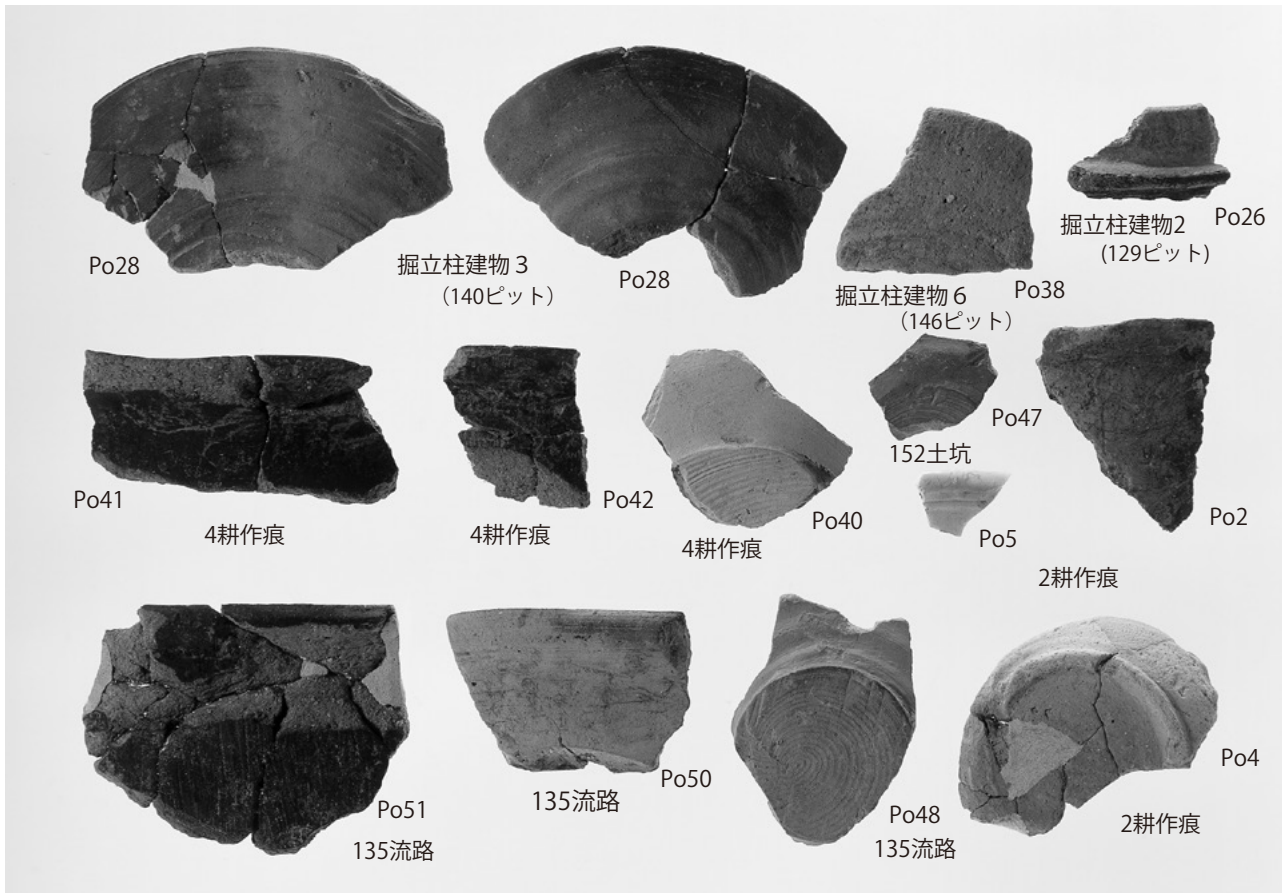
1. 163流路出土遺物(3)



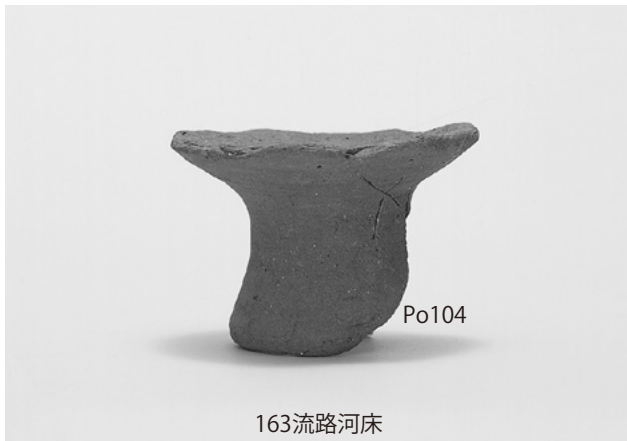
1. 163流路出土遺物(4)



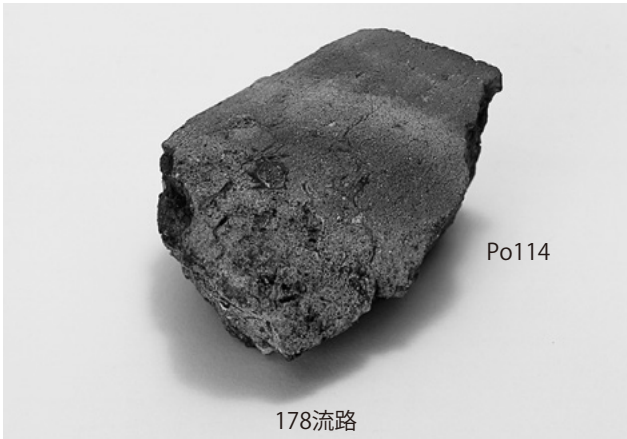
1. 163流路出土遺物(5)



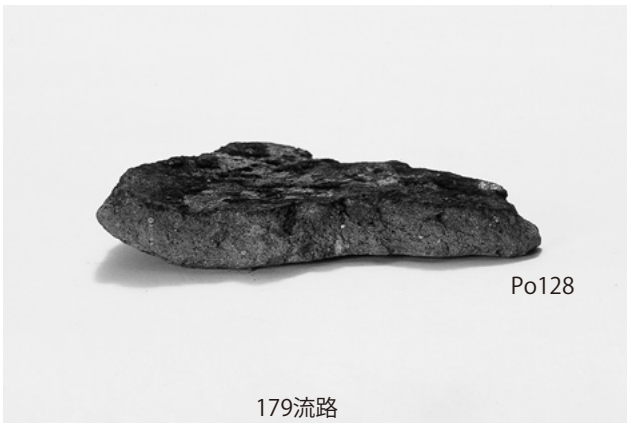
1. 遺構内出土遺物



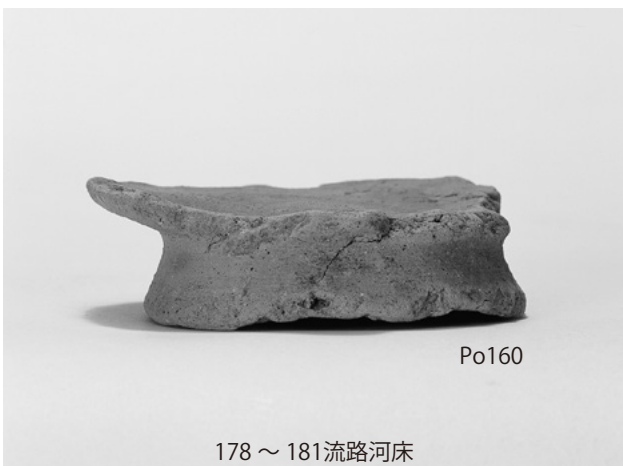
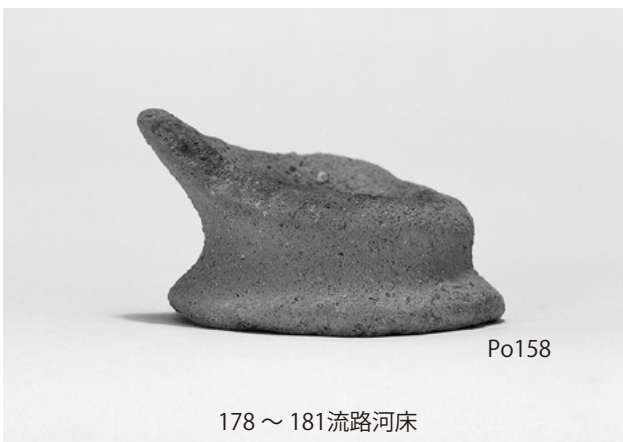
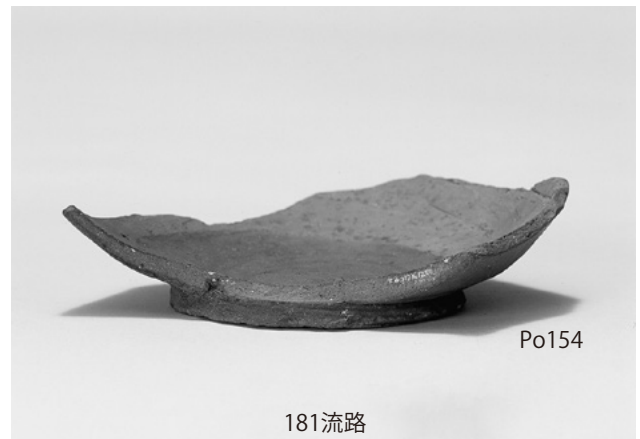
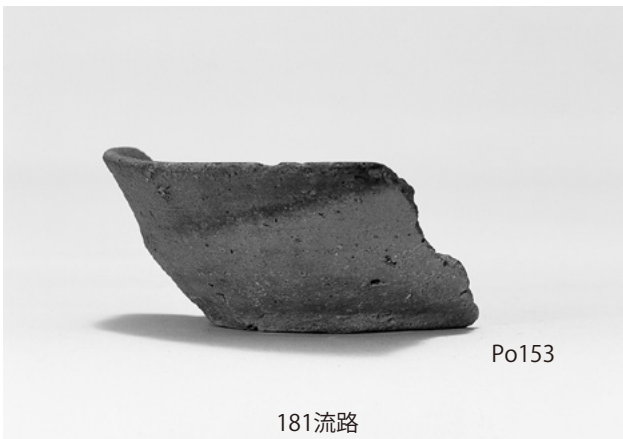
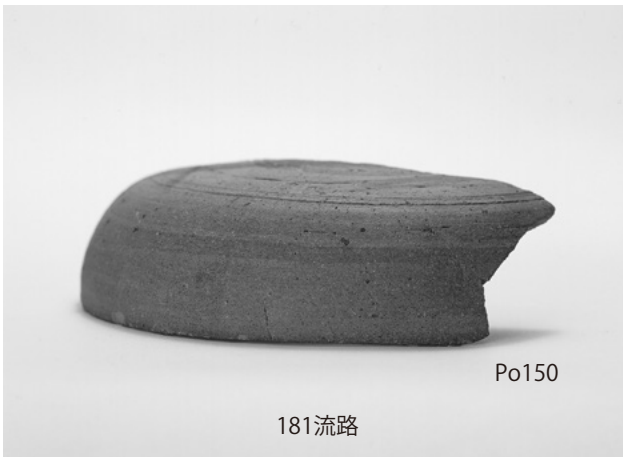
2. 163・178流路河床出土遺物



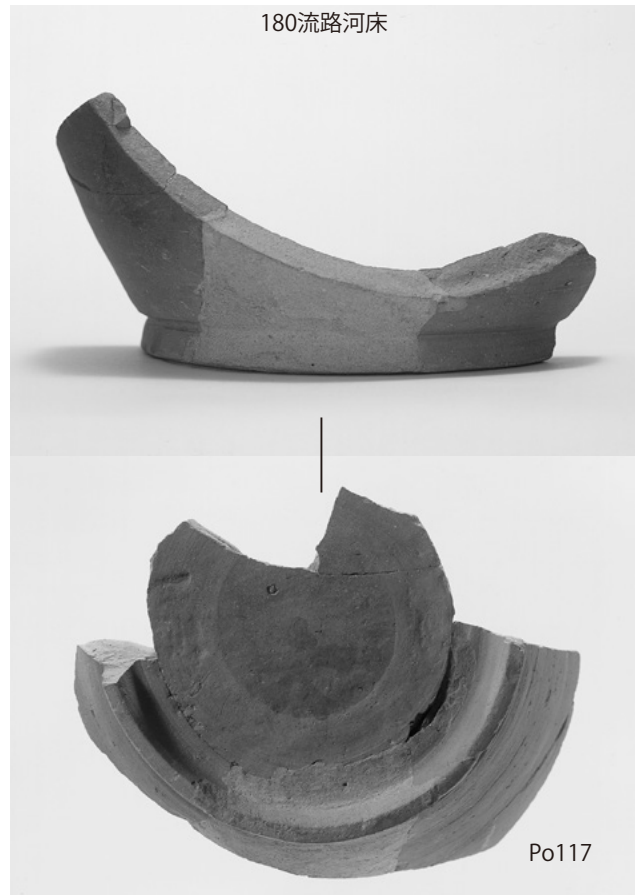
1. 178流路、180流路河床出土遺物



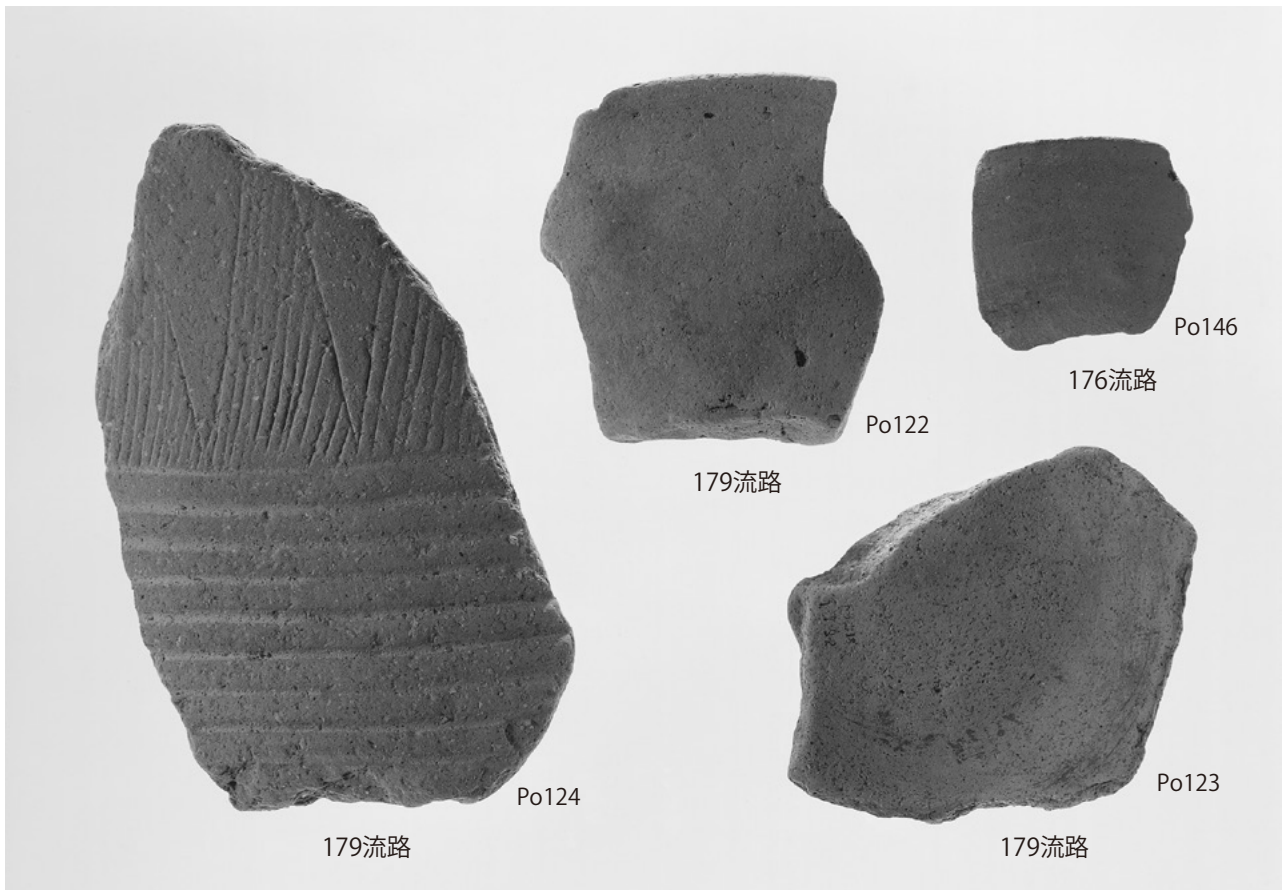
2. 179・180流路出土遺物



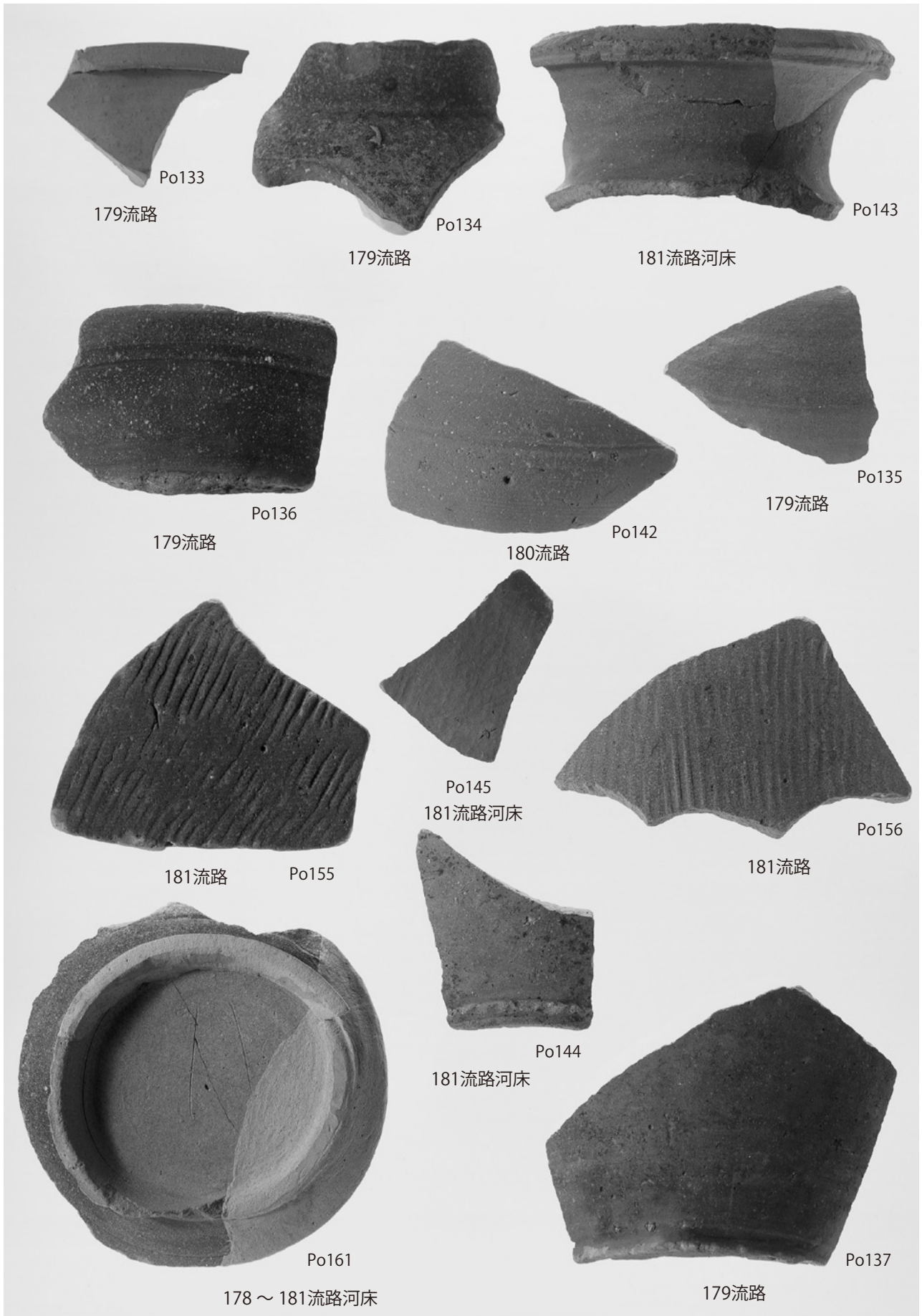
1. 181流路、178 ~ 181流路河床出土遺物



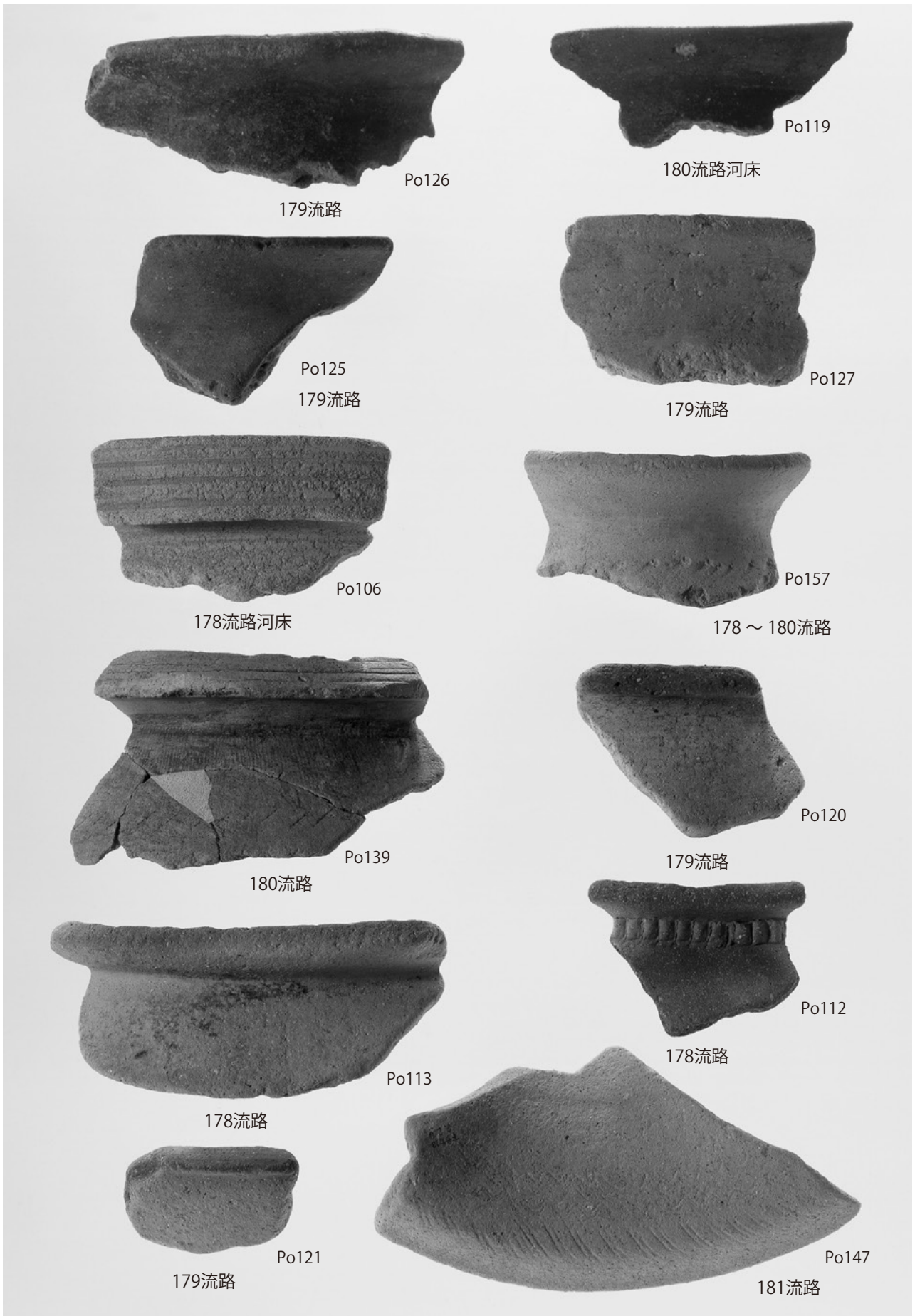
1. 河川性堆積層内出土墨書土器



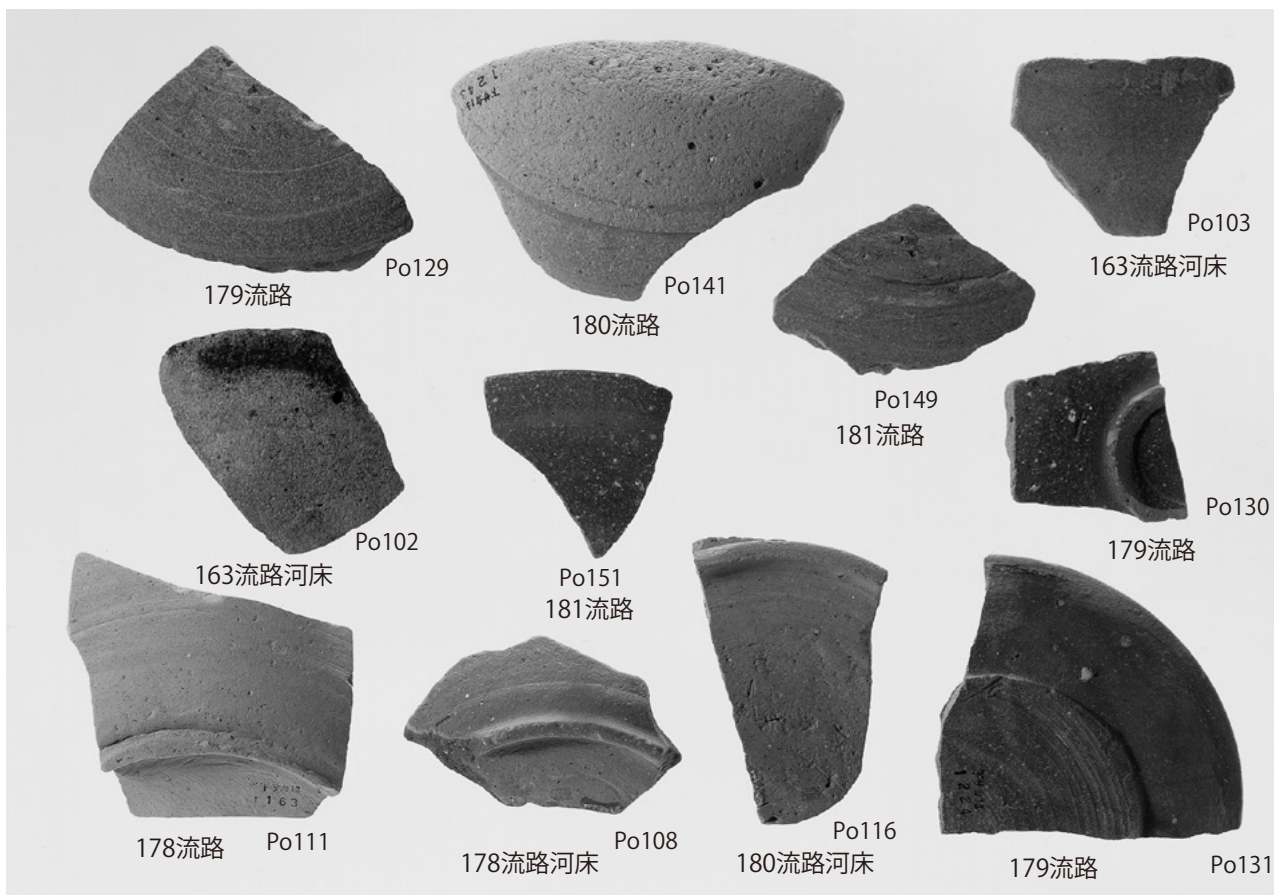
2. 河川性堆積内出土遺物(1)



1. 河川性堆積内出土遺物(2)



1. 河川性堆積内出土遺物(3)



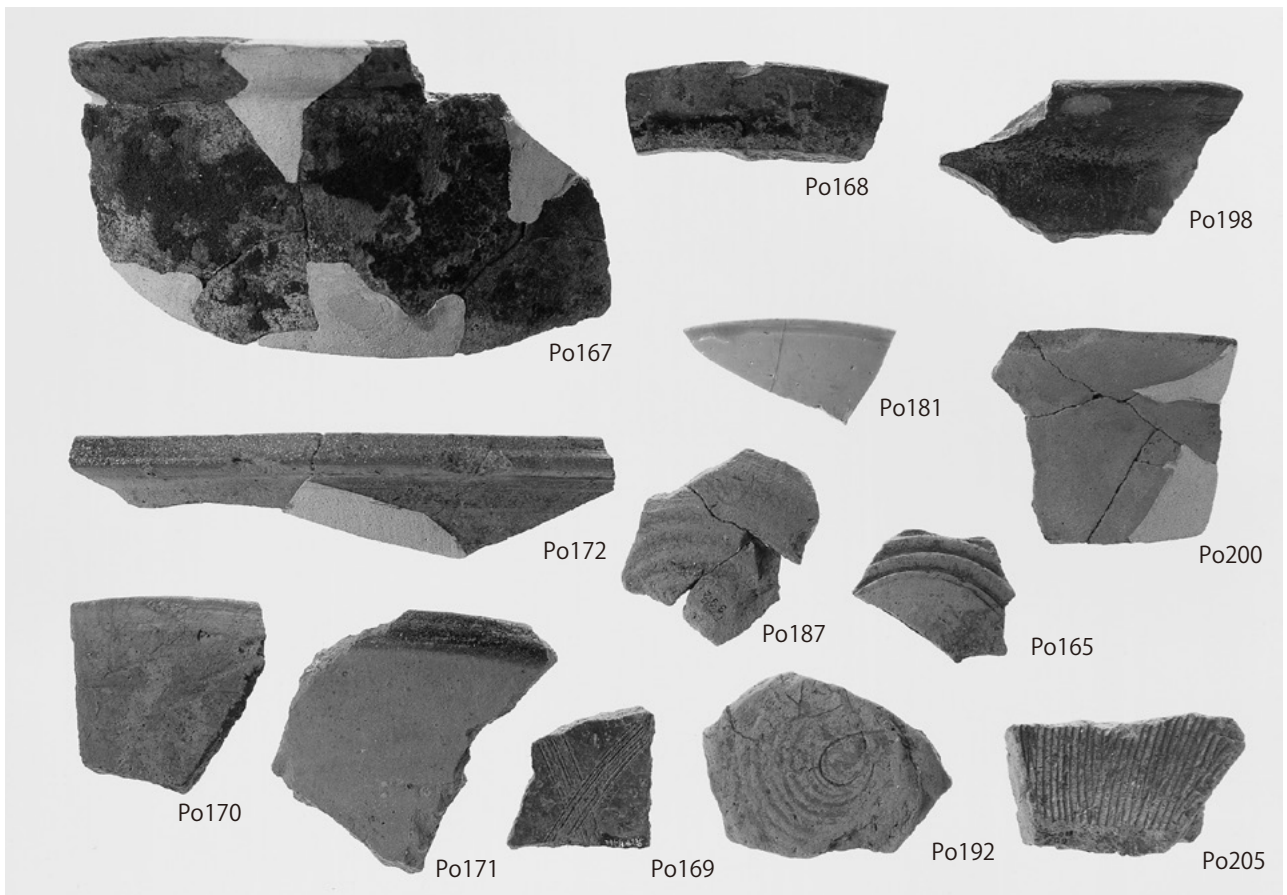
1. 河川性堆積内出土遺物(4)



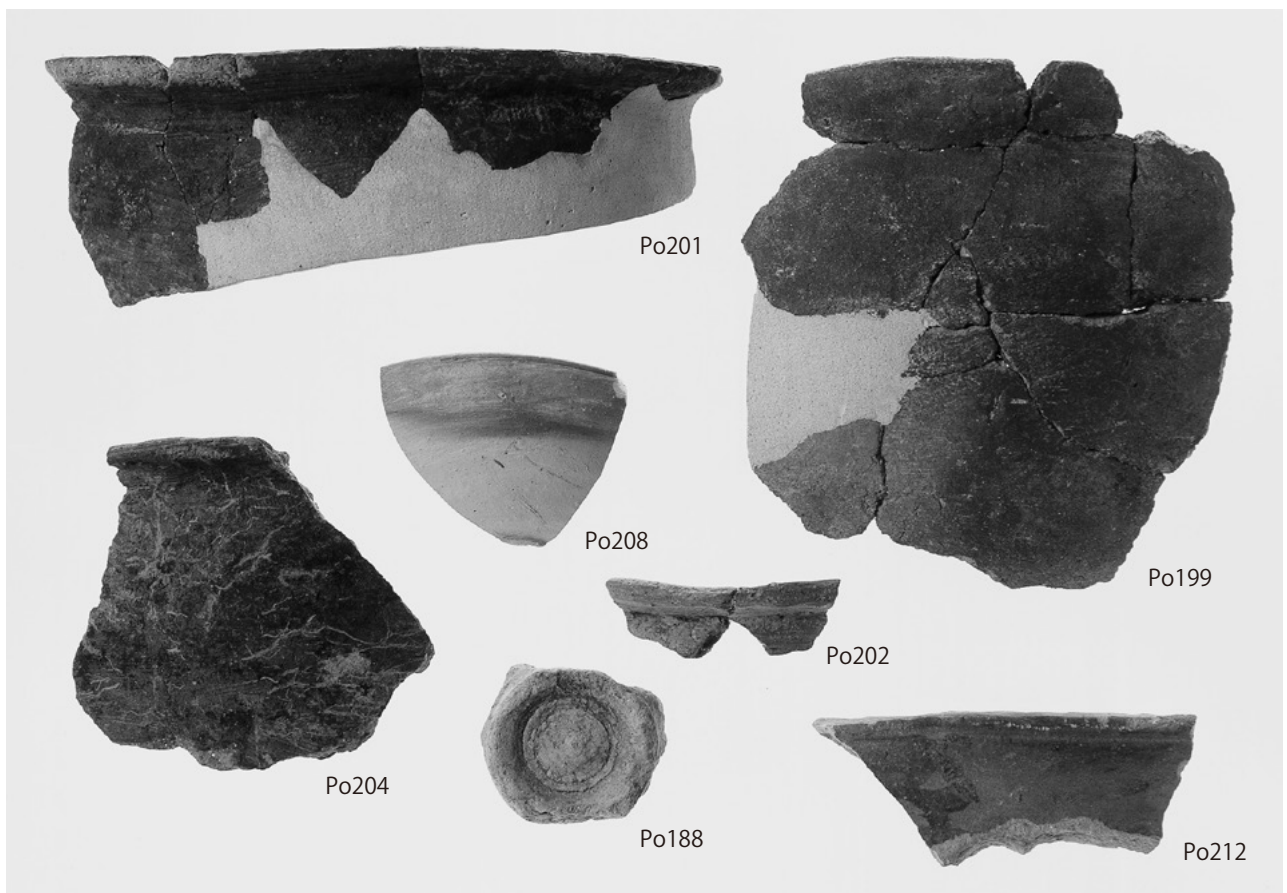
2. 第1・2遺構面検出中出土遺物



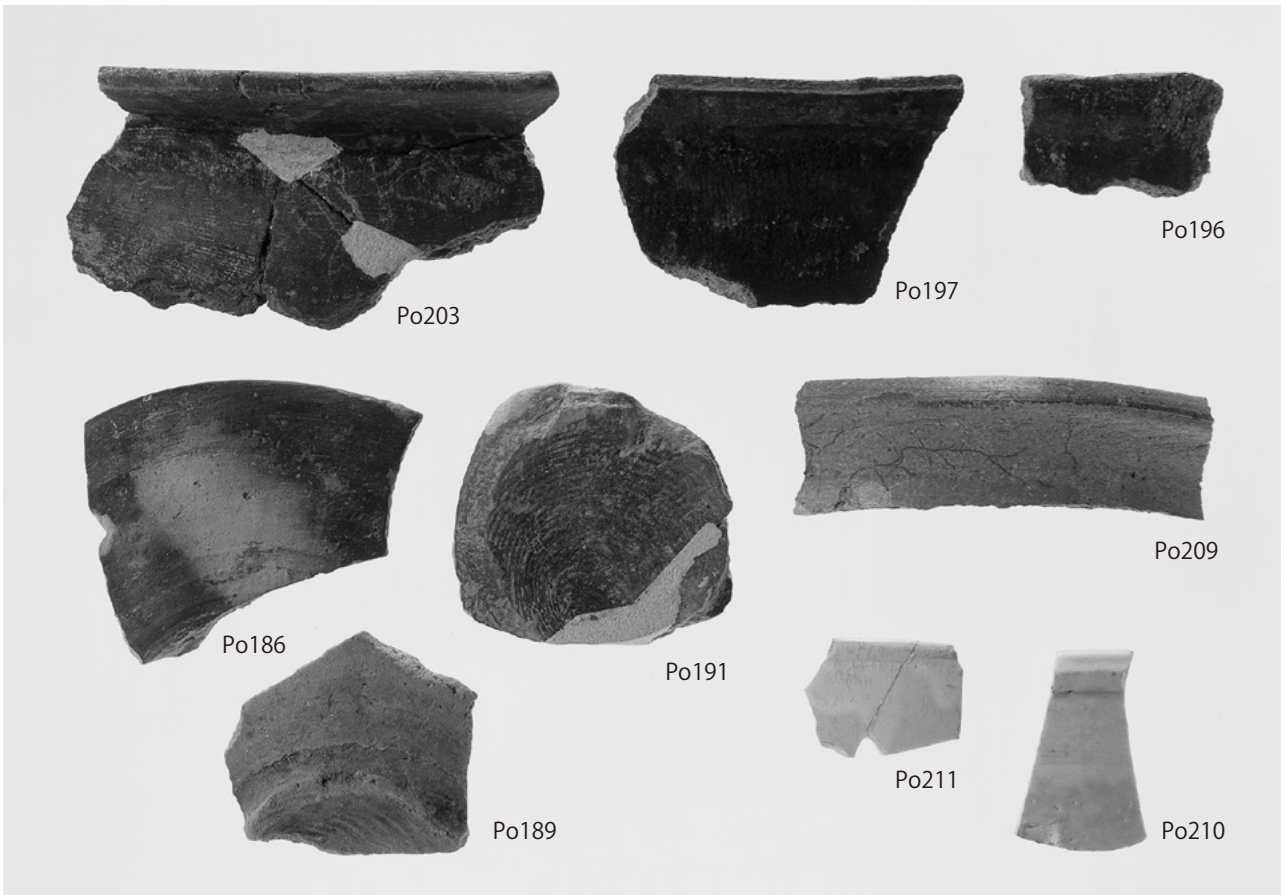
1. 第3遺構面検出中出土遺物



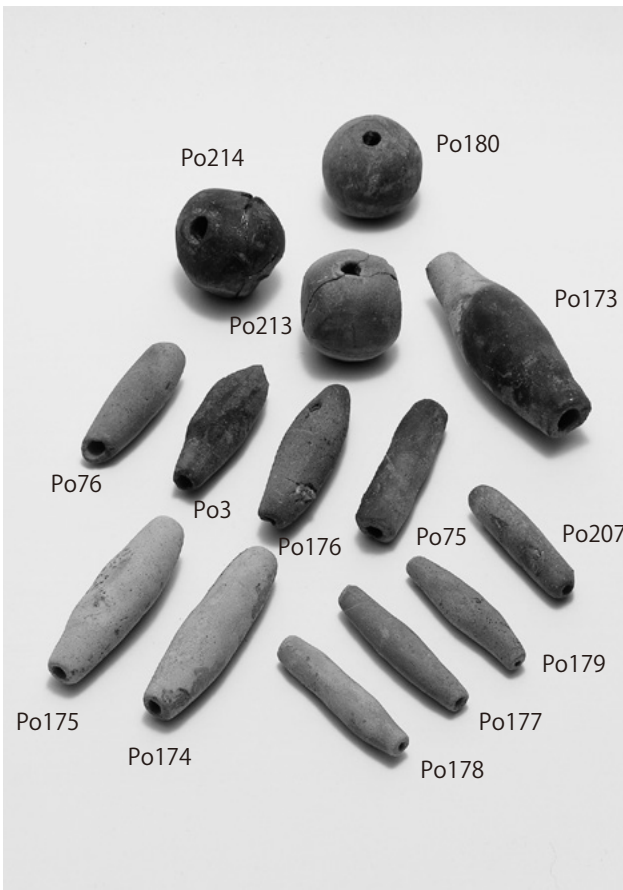
1. 遺構外出土遺物(1)



2. 遺構外出土遺物(2)



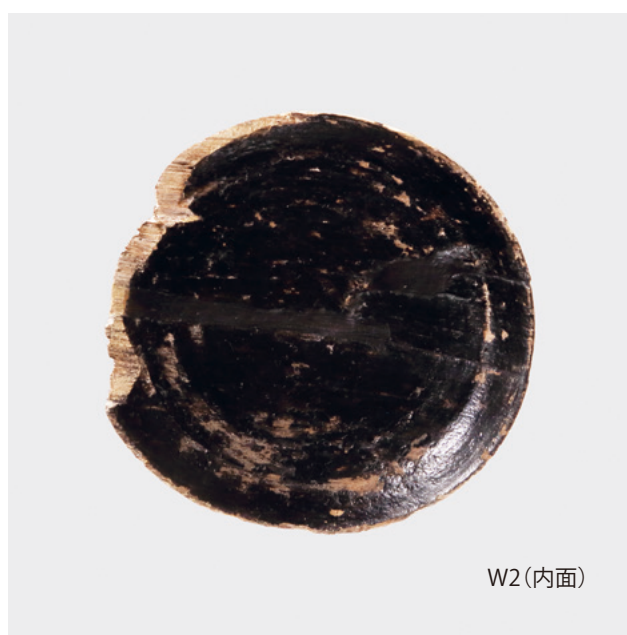
1. 遺構外出土遺物(3)



2. 土玉・土錘



3. 砥石・硯



1. 18流路出土漆器(1)



1. 18流路出土漆器(2)



W5



W6



W5(内面)



W6(内面)



W5(外面)



W6(外面)



W7 (内面)



W7 (外面)



W8 (内面)



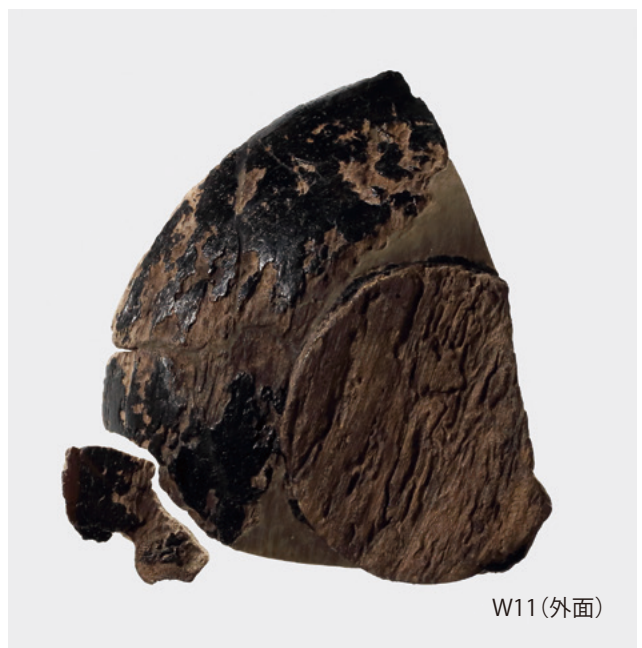
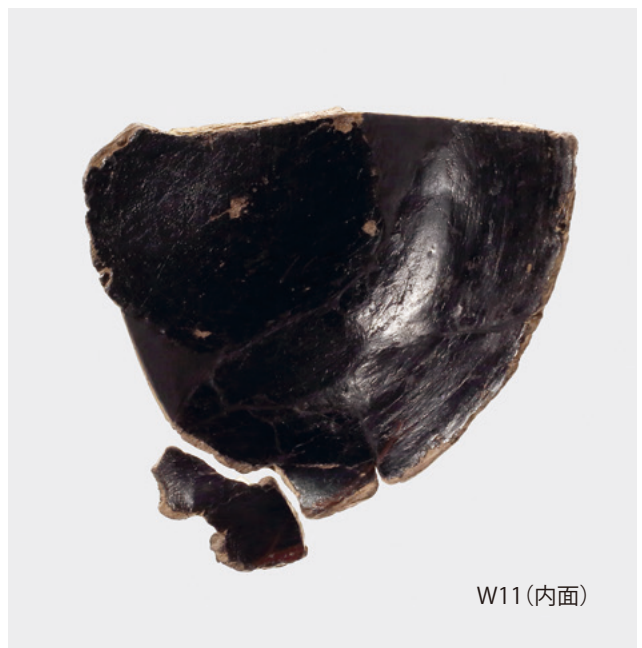
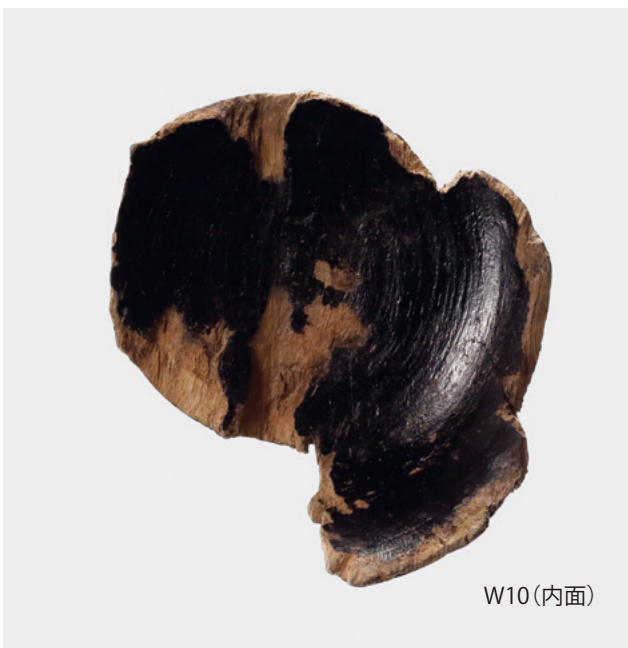
W8 (外面)



W9 (内面)



W9 (外面)



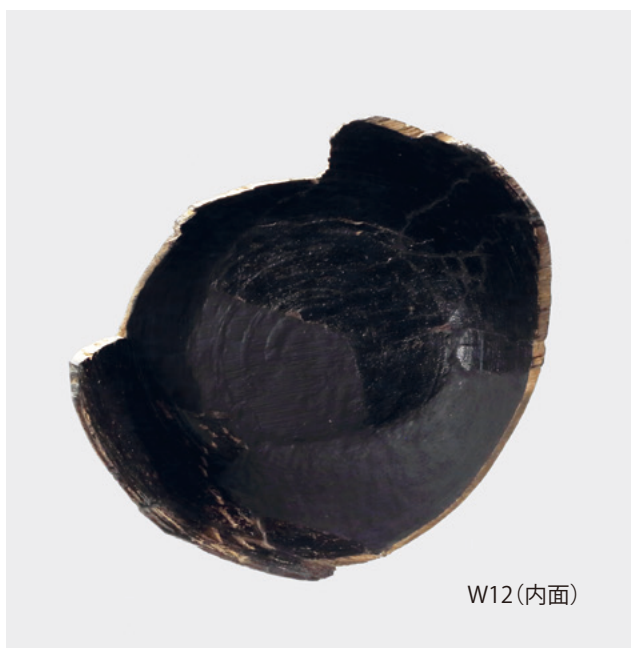
1. 18流路出土漆器(5)



W12



W13



W12(内面)



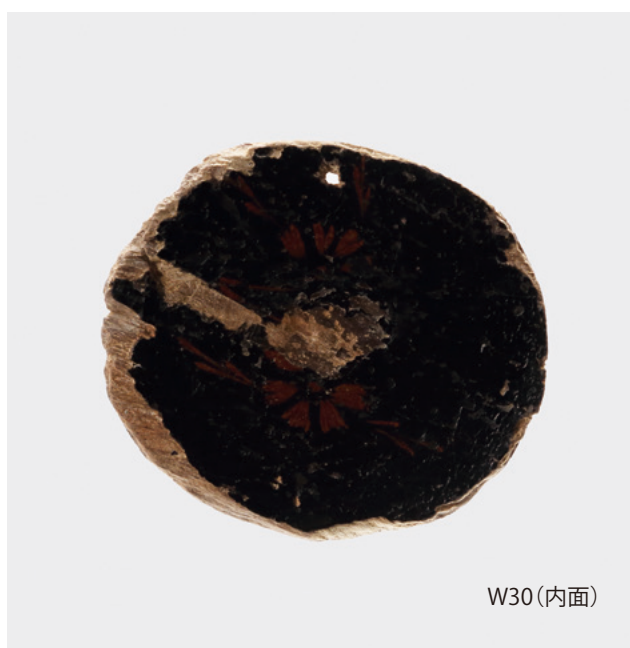
W13(内面)



W12(外面)



W13(外面)



1. 36流路出土漆器(1)



W31



W32



W31 (内面)



W32 (内面)



W31 (外面)



W32 (外面)



W33



W29



W33 (内面)



W34 (内面)



W33 (外面)



W34 (外面)



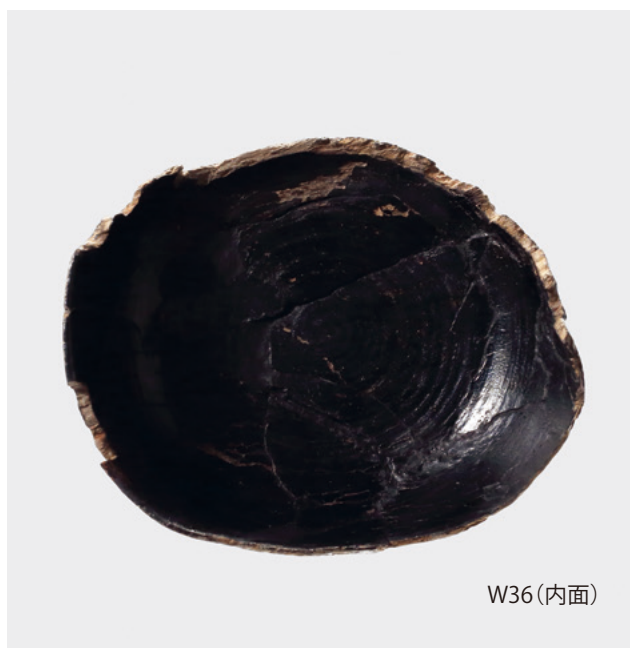
W35



W36



W35(内面)



W36(内面)



W35(外面)



W36(外面)



W41



W42 (外面)



W42 (内面)

1. 163流路出土漆器



Po148 (内面)



Po148 (外面)

1. 河川性堆積内出土遺物(緑釉陶器)





1. 18流路出土木製品(2)



2. 掘立柱建物5(105ピット)出土木製品



3. 36流路出土木製品(1)



1. 36流路出土木製品(2)



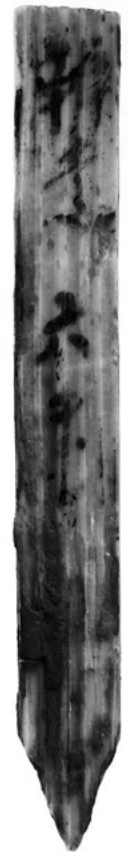
2. 163流路出土木製品(1)



1. 163流路出土木製品(2)



W55(表面)



W55(表面)
赤外線写真

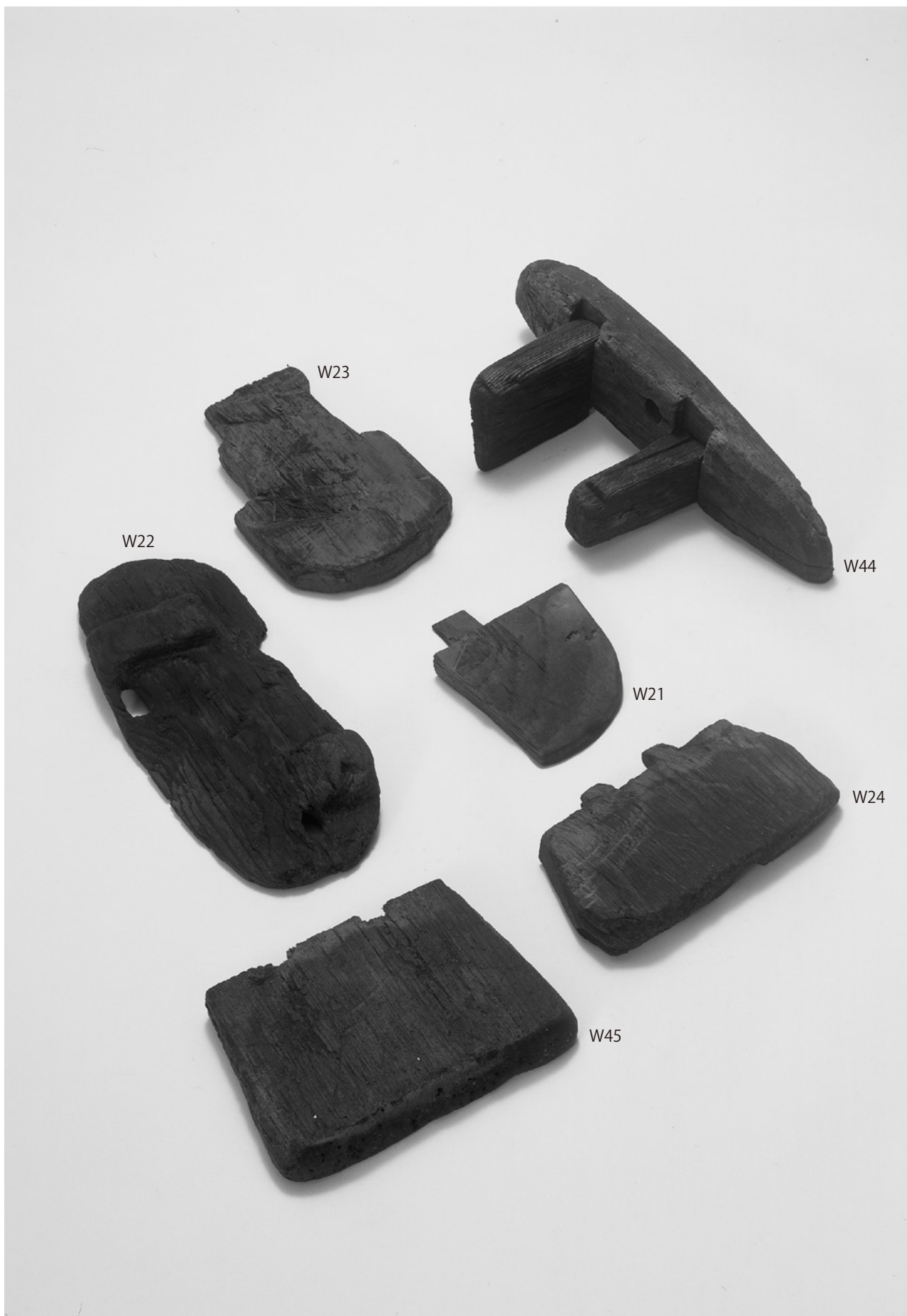


W55(裏面)



W55(裏面)
赤外線写真

2. 表土及び攪乱出土木製品



1. 履物



1. 羽子板状木製品



1. 底板



2. 簪串



3. 部材

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもさかもとせいごういせき いち							
書名	下坂本清合遺跡 I							
副書名	一般国道 9 号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XXI							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	大野哲二、家塚英詞、横山 聖、片岡啓介							
編集機関	公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室							
所在地	〒 680-1133 鳥取県鳥取市源太 12 番地 電話 (0857) 51-7553							
発行年月日	2016（平成 28）年 3 月 22 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもさかもとせいごういせき 下坂本清合遺跡	とっとりけん とっとりし 鳥取県鳥取市 けたちょうしもさかもと 気高町下坂本	31201	15-585	35° 30' 05"	134° 04' 22"	20130415) 20131204	8,230㎡	国道 9 号（鳥取西道路）道路改築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物、特記事項			
下坂本清合遺跡	集落産	平安時代～ 鎌倉時代	掘立柱建物跡 耕作痕 土坑 自然流路		土師器、瓦質土器、須恵器、緑釉陶器、白磁、青磁、漆器、人形、舟形、刀形、斎串、弓、下駄			
		近世～	疑似畦畔 耕作痕		陶磁器等			
要約	<p>下坂本清合遺跡は、瑞穂谷と宝木谷の合流部、河内川西岸に位置する低湿地遺跡である。</p> <p>今回の調査（2区）では、平安時代後期から鎌倉時代初頭の様相、特に平安時代後期における低湿地開発の様子が明らかとなった。</p> <p>10 世紀前半以前は、調査区内は河川の氾濫原であり、複数の洪水等のイベントによってもたらされた河川性堆積物が西から東へ堆積していき、徐々に陸地化していったものと想定された。このうち 10 世紀前半の自然流路である 181 流路中より、緑釉陶器が出土しており、上流部に有力者層が存在していた可能性が窺われる。</p> <p>その後 11 世紀後半から 12 世紀にかけて陸地化していた調査区西側部分が畠地として開発され、東側に流れる自然流路沿いに掘立柱建物が築かれるなど、積極的な土地開発が行われた様子が確認できた。当該期の自然流路中より、土器や下駄などの日用品のほか、人形・舟形・刀形などの木製祭祀具も出土しており、当地周辺で日常生活のみでなく祭祀行為が行われていたことがわかった。また、同流路中より、当時貴重であったと考えられる漆器椀・漆器小皿が合わせて 42 点以上出土した。漆器の用途などは明らかにできなかったが、当該期にも近隣に有力者層が存在していた可能性がある。</p> <p>その後 13 世紀以降は、明確な遺構が検出できなかったことから、調査地内では人々の活動が途絶えたものと考えられる。</p> <p>近世に至って、再び耕作地及び水田として利用されることとなり、現代に至る。</p>							

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ

鳥取県鳥取市気高町

下坂本清合遺跡Ⅰ

発行 平成28（2016）年3月22日
編集 公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室
発行者 鳥取県教育委員会
〒680-8570 鳥取県鳥取市東町一丁目271番地
電話（0857）26-7932
印刷 総合印刷出版株式会社
